

一般図説
10号

豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第7集

金居塚遺跡

Ⅱ

福岡県築上郡大平村所在金居塚遺跡の調査2

1997

福岡県教育委員会

一般国道
10号

豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第7集

か な い づ か

金居塚遺跡

Ⅱ

福岡県築上郡大平村所在金居塚遺跡の調査2

1997

福岡県教育委員会



金居塚遺跡全景（西上空から）



石蓋土墳墓・土墳墓群（上空から）



3号墳下層出土石器

序

福岡県教育委員会は、建設省九州地方建設局の委託を受けて、一般国道10号豊前バイパスの建設に係る発掘調査を昭和62年度から実施し、平成6年度に現場作業を終了したところであります。引き続き整理・報告書の作成を行い、この度第7冊目が刊行の運びとなりました。

金居塚遺跡の報告書としては、昨年度に行った古墳・横穴墓に関する報告に続く2冊目のものであり、ここでは旧石器時代・縄文時代・弥生時代・近世の遺構・遺物などをおさめました。

発掘調査そして整理・報告にいたる間には、大平村教育委員会をはじめとして地元有志、そして実に多くの方々のご指導・ご協力を得ることができ、無事にすべてを終了することができました。深く感謝申し上げる次第です。

最後に、本書が地域史解明の資料としてだけでなく、文化財愛護思想の普及にわずかなりとも貢献できれば、望外の喜びとするところであります。

平成9年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 光安常喜

例 言

1. 本書は、福岡県教育委員会が建設省九州地方建設局の委託を受けて実施した、一般国道10号豊前バイパス建設に係る埋蔵文化財の発掘調査報告である。
2. 本書は、平成2・3年度に発掘調査を実施した金居塚遺跡の第2番目の報告である。金居塚遺跡は内容が多岐にわたり、本書には旧石器・縄文・弥生時代と近世の遺構・遺物、そして時期不明の遺構などを収録した。古墳時代の遺構と遺物については昨年度刊行の「金居塚遺跡Ⅰ」で報告した。
3. 出土遺物は福岡県立九州歴史資料館において、土器類を文化課岩瀬正信氏、金属器を同館横田義章氏が、それぞれ指導してその整理を行った。また、古墳下層の遺物については横田義章氏のほか、豊前市教育委員会栗焼憲児氏の多大な協力を得た。
4. 本書に使用した図面は、遺構を柳田康雄・小川泰樹・日高正幸（現小石原村教育委員会）・大塚カヲル・木下秀子・植山智保子・友田鈴香・高畑由美子・村上智文・飛野が、遺物を若松三枝子・江口幸子・堀江圭子・山本千鶴美・田中典子・堀ノ内久美子・藤原さとみ・坂田順子・久富美智子・棚町陽子・平田晴美・星野恵美・小川・飛野が作成し、製図を豊福弥生・原カヨ子が行った。
また、石器については横田義章・栗焼憲児氏がそれぞれ実測・製図を行ったものである。
5. 本書に使用した写真は、遺構の一部を柳田・小川が、他の大部分を飛野が撮影し、遺物については九州歴史資料館において、同館石丸洋氏の指導の下で北岡伸一がこれを行った。
なお、空中写真は（有）空中写真企画に委託した。
6. 本書に使用した方位は、基本的に地形図・遺構配置図は座標北（T.N.）を、個別遺構図では磁北（M.N.）を使用した。
7. 本書は、横田義章・栗焼憲児氏より石器についての寄稿を得て、その他の執筆・編集を飛野が行った。

本文目次

	頁
I. はじめに	1
II. 古墳下層の遺構と遺物	7
1) 石組炉	7
2) 古墳下層の出土遺物	8
3) 表採および関連資料	21
III. 弥生時代の遺構と遺物	23
1) 銅 剣	23
2) 古墳下層出土土器	24
3) 竪穴式住居跡	24
4) 墓 地	27
5) 小 結	53
IV. 近世の遺構と遺物	57
1) 墓 地	57
2) 溝状遺構	137
3) 野 壺	141
4) 石材採取跡	141
5) 小 結	142
V. その他の遺構	147
1) 掘立柱建物跡	147
2) 土墳墓	149
3) 土 坑	151
4) 焼土坑	165
5) 小 結	170
VI. まとめ	173

図版目次

巻頭図版1 金居塚遺跡全景(西上空から)

巻頭図版2 石蓋土墳墓・土塚墓群全景(上空から)

巻頭図版3 古墳下層出土石器

- 図版1 上;調査区東半全景(西上空から) 下;近世墓群全景(上空から)
- 図版2 上;石組炉(南東から) 下;石組炉(南東から)
- 図版3 上;3号墳北畦土層(東から) 下;3号墳Ⅱ区下層遺物出土状態(東から)
- 図版4 上;3号墳Ⅳ区下層遺物出土状態(南から) 下;3号墳Ⅲ区下層遺物出土状態(南西から)
- 図版5 上;3号墳Ⅱ区下層遺物出土状態(北西から) 下;竪穴式住居跡(東から)
- 図版6 上;2~4号石蓋土墳墓検出状態(西から) 下;2~4号石蓋土墳墓発掘後(西から)
- 図版7 上;1号石蓋土墳墓検出状態(南西から) 下;1号石蓋土墳墓発掘後(南東から)
- 図版8 上;2号石蓋土墳墓検出状態(南東から) 下;2号石蓋土墳墓発掘後(南西から)
- 図版9 上;3~4号石蓋土墳墓検出状態(西から) 下;3~4号石蓋土墳墓発掘後(東から)
- 図版10 上;5号石蓋土墳墓検出状態(南西から) 下;5号石蓋土墳墓発掘後(北東から)
- 図版11 上;方形区西墓地群検出状態(北から) 下;方形区西墓地群発掘後(北から)
- 図版12 上;10・11号石蓋土墳墓検出状態(南から) 下;10・11号石蓋土墳墓発掘後(南から)
- 図版13 上;12号石蓋土墳墓検出状態(南から) 中;12号石蓋土墳墓埋葬部検出状態(西から)
下;12号石蓋土墳墓埋葬部発掘後(西から)
- 図版14 上;13号石蓋土墳墓切合状況(北東から) 中;13号石蓋土墳墓発掘後(北東から)
下;13号石蓋土墳墓埋葬部発掘後(北東から)
- 図版15 上;14~17号石蓋土墳墓周辺(北東から) 中;14~17号石蓋土墳墓周辺(南東から)
下;14~16号石蓋土墳墓(北東から)
- 図版16 上;14号石蓋土墳墓検出状態(南東から) 下;14号石蓋土墳墓発掘後(南西から)
- 図版17 上;15号石蓋土墳墓検出状態(北東から) 下;14号石蓋土墳墓発掘後(北東から)
- 図版18 上;16号石蓋土墳墓発掘後(南東から) 下;17号石蓋土墳墓発掘後(南東から)
- 図版19 上;18号石蓋土墳墓検出状態(北西から) 下;18号石蓋土墳墓発掘後(北西から)
- 図版20 上;19号石蓋土墳墓周辺(北から) 中;19号石蓋土墳墓検出状態(西から)
下;19号石蓋土墳墓発掘後(北から)
- 図版21 上;20号石蓋土墳墓周辺(北西から) 中;120号石蓋土墳墓発掘後(北西から)
下;20号石蓋土墳墓断ち割り後(北西から)
- 図版22 上;10号土墳墓検出状態(南から) 下;10号土墳墓発掘後(東から)

- | | |
|--------------------------------------|-------------------------|
| 図版23 上; 11号土墳墓検出状態 (北東から) | 下; 11号土墳墓発掘後 (南東から) |
| 図版24 上; 12号土墳墓発掘後 (東から) | 中; 13号土墳墓検出状態 (北から) |
| 下; 13号土墳墓発掘後 (西から) | |
| 図版25 上; 14号土墳墓発掘後 (西から) | 下; 14号土墳墓断ち割り後 (東から) |
| 図版26 上; 14・15号土墳墓周辺 (北から) | 下; 17号土墳墓発掘後 (西から) |
| 図版27 上; 13号土墳墓遺物出土状態 (北東から) | 中; 10号石蓋土墳墓遺物出土状態 (北から) |
| 下; 12号土墳墓南辺、20号石蓋土墳墓蓋石を覆う黄褐色粘土 (西から) | |
| 図版28 上; 近世墓A群現況 (南東から) | 下; 近世A群墓発掘後 (南東から) |
| 図版29 上; 近世墓A群現況 (東から) | 下; 近世A群石塔群 (東から) |
| 図版30 上; 3号墓 (西から) | 下; 7号墓 (西から) |
| 図版31 上; 10号墓 (東から) | 中; 17号墓 (西から) |
| 下; 17号墓遺物出土状況 (西から) | |
| 図版32 上; 21・24号墓 (東から) | 下; 29号墓 (南から) |
| 図版33 上; 70号墓 (西から) | 下; 80号墓 (東から) |
| 図版34 上; 86号墓 (東から) | 下; 89号墓 (東から) |
| 図版35 上; 97号墓 (西から) | 中; 97号墓遺物出土状態 (西から) |
| 下; 115号墓 (東から) | |
| 図版36 上; 118号墓 (東から) | 下; 140~142号墓 (西から) |
| 図版37 上; 144号墓 (東から) | 下; 147号墓 (東から) |
| 図版38 上; 151号墓 (東から) | 下; 152号墓 (北から) |
| 図版39 上; 154号墓 (南西から) | 下; 155号墓 (東から) |
| 図版40 上; 161号墓 (北東から) | 下; 162号墓 (南から) |
| 図版41 上; B群墓地 (北西から) | 下; B群墓地 (南西から) (西から) |
| 図版42 上; 167 (右)・168号墓 (南から) | 下; 170号墓 (東から) |
| 図版43 上; 178 (左)・179号墓 (北から) | 下; 9号墓土層断ち割り状況 (北東から) |
| 図版44 上; 3号墓周辺 (北から) | 下; 3号墓瓦除去後 (北東から) |
| 図版45 上; 3号墓火鉢清掃後 (西から) | 中; 火鉢下の蔵骨器 (西から) |
| 下; 蔵骨器検出状態 (西から) | |
| 図版46 上; 40 (右)・114号墓 (南から) | 下; 41号墓 (東から) |
| 図版47 上; 42号墓 (東から) | 下; 43号墓 (東から) |
| 図版48 上; 44号墓 (西から) | 下; 52 (右)・53号墓 (南から) |
| 図版49 上; 54号墓 (東から) | 下; 55 (左)・56号墓 (南西から) |
| 図版50 上; 57号 | 下; 58号墓 |

- 図版51 上; 59号墓 (北東から)
 図版52 上; 85号墓 (北東から)
 図版53 上; 74号墓 (南東から)
 図版54 上; 100号墓 (北から)
 図版55 上; 106号墓 (南西から)
 図版56 上; 111号墓 (北東から)
 図版57 上; 112号墓 (北東から)
 図版58 上; 143号墓 (西から)
 図版59 上; 165号墓 (南東から)
 図版60 上; 180号墓 (北西から)
 図版61 上; 181号墓 (南東から)
 図版62 上; 183号墓 (西から)
 図版63 上; I-3号溝状遺構 (西から)
 下; I-4号溝状遺構 (北東から)
 図版64 上; II-1号溝状遺構 (北から)
 図版65 II-2・3号溝状遺構 (北東から)
 図版66 上; 野査 (北西から)
 下; 石材採取跡 (南東から)
 図版67 上; 1号掘立柱建物跡 (北西から)
 図版68 上; 1号土壇墓 (北から)
 図版69 上; I-1号土坑土層 (北から)
 図版70 上; I-2号土坑土層 (南西から)
 図版71 上; I-3号土坑土層 (西から)
 図版72 上; I-4号土坑 (北東から)
 図版73 上; I-6号土坑 (北から)
 図版74 上; I-8号土坑 (南東から)
 図版75 上; I-10号土坑 (東から)
 図版76 上; I-12号土坑 (北東から)
 図版77 上; I-14号土坑 (北東から)
 図版78 上; I-16号土坑 (西から)
 図版79 上; I-18号土坑 (南西から)
 図版80 上; II-2号土坑土層 (北西から)
 図版81 上; II-3号土坑土層 (北西から)
 下; 62号墓 (西から)
 下; 85号墓
 下; 91 (右)・92号墓 (南東から)
 下; 105号墓 (東から)
 下; 107号墓 (南から)
 下; 111号墓 (西から)
 下; 117号墓 (東から)
 下; 143号墓 (南東から)
 下; 175号墓 (東から)
 下; 181 (右)・182号墓 (南東から)
 下; 182号墓 (南東から)
 下; 184号墓 (東から)
 中; I-4号溝状遺構 (北西から)
 下; II-1号溝状遺構 (北西から)
 下; II-2号溝状遺構小礫出土状態 (北東から)
 中; 野査発掘後 (北西から)
 下; 2号掘立柱建物跡 (西から)
 下; 2号土壇墓 (北から)
 下; I-1号土坑 (北から)
 下; I-2号土坑 (南西から)
 下; I-3号土坑 (北から)
 下; I-5号土坑 (北西から)
 下; I-7号土坑 (南東から)
 下; I-9号土坑 (東から)
 下; I-11号土坑 (北西から)
 下; I-13号土坑 (北東から)
 下; I-15号土坑 (西から)
 下; I-17号土坑 (北から)
 下; II-1号土坑 (西から)
 下; II-2号土坑 (北西から)
 下; II-4号土坑 (東から)

- 図版82 上；I-1号焼土坑（北西から） 下；I-2号焼土坑（北西から）
 図版83 上；I-3号焼土坑（南西から） 下；I-4号焼土坑（北から）
 図版84 上；I-5（左）・6号焼土坑（南から） 下；I-7号焼土坑（南東から）
 図版85 上；I-11・12（左）・13号焼土坑 下；I-1号焼土坑
 図版86 上；II-2号焼土坑検出状態（南から） 中；II-2号焼土坑土層（南から）
 下；II-2号焼土坑発掘後
 図版87 上；II-3号焼土坑土層（南から） 下；II-2号焼土坑土層（南から）
 図版88 出土遺物1；古墳下層出土石器
 図版89 出土遺物2；表採および関連遺物
 図版90 出土遺物3；弥生～近世の金属製品・ガラス玉
 図版91 出土遺物4；蔵骨器（3・24・40・43号）
 図版92 出土遺物5；蔵骨器（41・42・44・45・46・48・49号）
 図版93 出土遺物6；蔵骨器（53・66・91・92・94・105・175・180号）
 図版94 出土遺物7；蔵骨器（106・107号）・近世墓関連土器
 図版95 出土遺物8；近世墓関連土器・石製品等、弥生土器

挿 図 目 次

	頁
第1図 豊前バイパス路線図（1/500,000、道路施設協会「九州自動車道」1996を改定）	1
第2図 豊前バイパス東部周辺の地形と路線内の遺跡（1/20,000）	2
第3図 周辺遺跡分布図（1/50,000）	6
第4図 周辺地形図（1/2,000）	折込
第5図 石組炉実測図（1/20）	8
第6図 3号墳下層土層図（1/60）	8
第7図 古墳下層出土石器分布図（1/400）	10
第8図 1号墳下層出土石器分布図（1/150）	11
第9図 2号墳下層出土石器分布図（1/150）	12
第10図 3号墳下層出土石器分布図（1/150）	13
第11図 3号墳下層出土石器実測図1（2/3）	15
第12図 3号墳下層出土石器実測図2（2/3）	16
第13図 3号墳下層出土石器実測図3（2/3）	17
第14図 3号墳下層出土石器実測図4（2/3）	18

第15図	表採および関連遺物実測図 (1/2)	22
第16図	銅剣実測図 (1/2)	23
第17図	3号墳下層出土弥生土器実測図 (1/4)	24
第18図	竪穴式住居跡実測図 (1/60)	25
第19図	竪穴式住居跡および関連遺物実測図 (1/4)	25
第20図	石蓋土墳墓群配置図 1 (1/100)	26
第21図	石蓋土墳墓群周辺表採遺物実測図 (1/4)	27
第22図	1・2号石蓋土墳墓実測図 (1/30)	28
第23図	石蓋土墳墓・土墳墓出土遺物実測図 (1/3)	29
第24図	3・4号石蓋土墳墓実測図 (1/30)	30
第25図	5号石蓋土墳墓実測図 (1/30)	32
第26図	石蓋土墳墓群配置図 2 (1/100)	33
第27図	10号石蓋土墳墓実測図 (1/30)	34
第28図	11号石蓋土墳墓実測図 (1/30)	36
第29図	12号石蓋土墳墓実測図 (1/30)	37
第30図	13号石蓋土墳墓実測図 (1/30)	38
第31図	14号石蓋土墳墓実測図 (1/30)	40
第32図	15号石蓋土墳墓実測図 (1/30)	41
第33図	16号石蓋土墳墓実測図 (1/30)	42
第34図	17号石蓋土墳墓実測図 (1/30)	43
第35図	18号石蓋土墳墓実測図 (1/30)	44
第36図	19号石蓋土墳墓実測図 (1/30)	46
第37図	20号石蓋土墳墓実測図 (1/30)	47
第38図	10・11号土墳墓実測図 (1/30)	48
第39図	12号土墳墓実測図 (1/30)	50
第40図	13・14号土墳墓実測図 (1/30)	52
第41図	15・17号土墳墓実測図 (1/30)	54
第42図	近世墓配置図 1 (1/100)	56
第43図	近世墓実測図 1 (1~3号) (1/20)	58
第44図	近世墓出土鉄釘実測図 (1/2)	60
第45図	近世墓実測図 2 (4~8号) (1/20)	61
第46図	近世墓実測図 3 (9・10号) (1/10、1/20)	62

第47圖	近世嘉実測圖4 (11~15号) (1/20)	64
第48圖	近世嘉実測圖5 (16·17号) (1/20)	65
第49圖	近世嘉実測圖6 (18~20·146号) (1/20)	66
第50圖	近世嘉実測圖7 (21~23号) (1/20)	68
第51圖	近世嘉実測圖8 (25~28·64·65号) (1/20)	70
第52圖	近世嘉実測圖9 (29~31号) (1/20)	71
第53圖	近世嘉実測圖10 (32~36·119号) (1/20)	72
第54圖	近世嘉実測圖11 (37~39·67·70号) (1/20)	74
第55圖	近世嘉出土金属製品実測圖 (1/2)	76
第56圖	近世嘉実測圖12 (51·73·75·76号) (1/20)	77
第57圖	近世嘉実測圖13 (77~80号) (1/20)	78
第58圖	近世嘉実測圖14 (81·82·143号) (1/20)	80
第59圖	近世嘉実測圖15 (86~89号) (1/6、1/20)	81
第60圖	近世嘉実測圖16 (90·93~95号) (1/20)	82
第61圖	近世嘉実測圖17 (96~98号) (1/20)	84
第62圖	近世嘉実測圖18 (99·131号) (1/20)	86
第63圖	近世嘉実測圖19 (108~110号) (1/20)	88
第64圖	近世嘉実測圖20 (113·115·118·119号) (1/20)	89
第65圖	近世嘉実測圖21 (121~123·129·130号) (1/20)	92
第66圖	近世嘉実測圖22 (132·134·137·138号) (1/20)	93
第67圖	近世嘉実測圖23 (140~142·144号) (1/20)	94
第68圖	近世嘉実測圖24 (14·147·149·150号) (1/20)	96
第69圖	近世嘉実測圖25 (151~154号) (1/20)	98
第70圖	151号嘉出土遺物実測圖 (1/1)	99
第71圖	152号嘉出土刻線磔実測圖 (1/3)	99
第72圖	近世嘉実測圖26 (155~157号) (1/20)	100
第73圖	155号墓石塔実測圖 (1/6)	101
第74圖	近世嘉実測圖27 (158·160~162号) (1/20)	102
第75圖	近世嘉配置圖2 (1/100)	105
第76圖	近世嘉実測圖28 (164·167~171号) (1/20)	106
第77圖	近世嘉配置圖29 (172·173·178·179·185号) (1/20)	107
第78圖	近世嘉配置圖30 (藏骨器1) (1/20)	109

第79図	藏骨器実測図 1 (1/4)	110
第80図	藏骨器実測図 2 (1/4)	111
第81図	近世墓配置図31 (藏骨器 2) (1/20)	113
第82図	藏骨器実測図 3 (1/4)	115
第83図	近世墓配置図32 (藏骨器 3) (1/20)	116
第84図	藏骨器実測図 4 (1/4)	118
第85図	近世墓配置図33 (藏骨器 4) (1/20)	121
第86図	85号墓石塔実測図 (1/6)	122
第87図	藏骨器実測図 5 (1/4)	123
第88図	近世墓配置図34 (火葬墓 1) (1/20)	125
第89図	111号墓石塔実測図 (1/6)	126
第90図	112号墓石塔実測図 (1/6)	127
第91図	近世墓配置図35 (火葬墓 2) (1/20)	129
第92図	126号墓石塔実測図 (1/6)	130
第93図	近世墓配置図36 (火葬墓 3) (1/20)	133
第94図	藏骨器実測図 6 (1/4)	134
第95図	近世墓および周辺出土土器実測図 (1/3)	135
第96図	I - 4号溝状遺構出土石製品実測図 (1/3)	136
第97図	近世石組実測図 (1/600、1/60)	折込
第98図	溝状遺構出土遺物実測図 (1/3)	138
第99図	II区溝状遺構実測図 (1/600、1/60)	140
第100図	野壺実測図 (1/20)	141
第101図	石材採取跡実測図 (1/30)	142
第102図	近世土壌墓法量分布図	144
第103図	掘立柱建物跡実測図 (1/60)	146
第104図	土壌墓実測図 (1/30)	148
第105図	土壌墓出土遺物実測図 (1/3)	149
第106図	土坑実測図 1 (I - 1号) (1/30)	150
第107図	土坑実測図 2 (I - 2号) (1/30)	152
第108図	I - 1号土坑出土遺物実測図 (1/1、1/3)	153
第109図	土坑実測図 3 (I - 3号) (1/30)	154
第110図	I - 3号土坑出土遺物実測図 (1/1)	155

	頁
第111図 土坑実測図4 (I-4~6号) (1/30)	156
第112図 土坑実測図5 (I-7~8号) (1/30)	157
第113図 土坑実測図6 (I-10~13号) (1/30)	159
第114図 土坑実測図7 (I-14~17号) (1/30)	161
第115図 土坑実測図9 (I-18号) (1/30)	162
第116図 土坑実測図8 (II-1~4号) (1/30)	163
第117図 焼土坑実測図1 (I-1~8号) (1/30)	164
第118図 焼土坑実測図2 (I-9~16号) (1/30)	167
第119図 焼土坑実測図3 (II-1~3号) (1/30)	168
第120図 II-2号焼土坑出土遺物実測図 (1/4)	169

表 目 次

	頁
第1表 一般国道10号 豊前バイパス関係遺跡一覧表	4
第2表 古墳下層出土石器観察表	19・20
第3表 石室土墳墓・土墳墓一覧表	174
第4表 近世墓一覧表	175~178

付 図

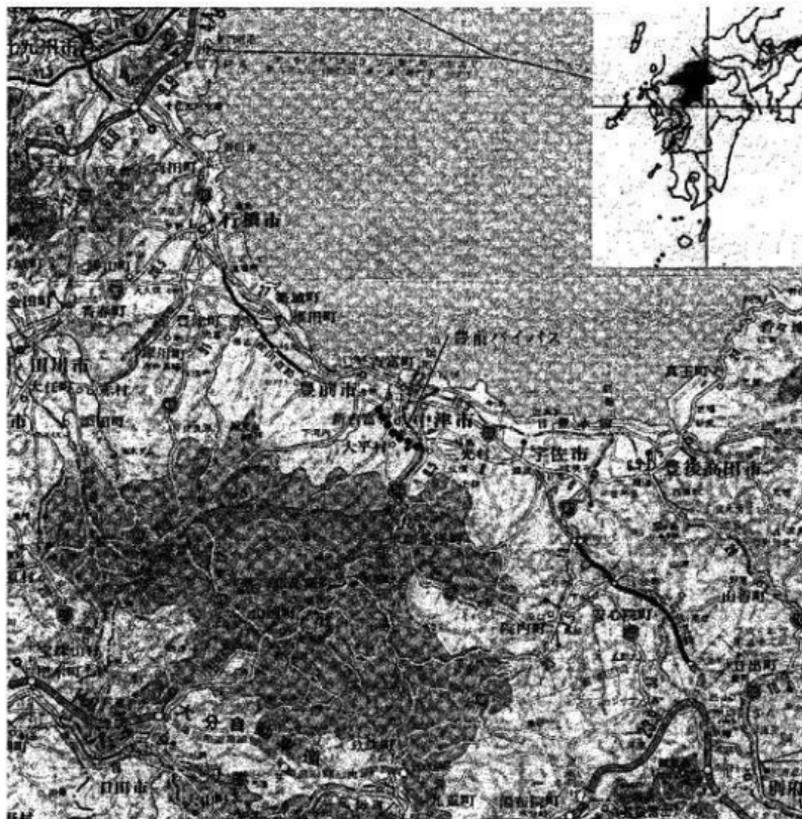
金居塚遺跡遺構配置図(1/500)

I. はじめに

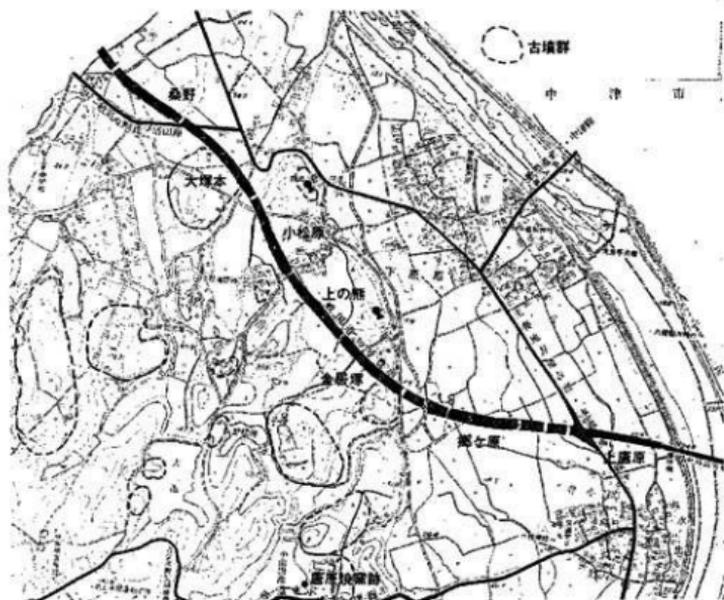
1) はじめに

この遺跡は、行政的には福岡県築上郡大平村大字下唐原1816-9他にあって、地形的には山国川が形成した河岸段丘の縁辺に位置する。

発掘調査は、平成2年4月～同3年4月までのほぼ1年間を費やして実施し、整理・報告書



第1図 豊前バイパス路線図(1/500,000、道路施設協会「九州自動車道」1996を改変)



第2図 豊前バイパス東部周辺の地形と路線内の遺跡 (1/20,000)

作製作業は同7・8年度に行った。ただし、担当者の不手際から、出土人骨についての分析依頼ができなかったため、本報告には掲載していない。次年度の豊前バイパス関係報告書に掲載する予定である。

調査にいたる経過、地理的・歴史的環境等については昨年度報告の「金居塚遺跡I」、今年度報告の第6集等に記しており、ここでは省略する。

2 調査の組織と関係者

発掘調査を実施した平成2・3年、および本報告書を作成した8年度の関係者は以下の通り。

	2年度	3年度	8年度
建設省九州地方建設局北九州国道工事事務所			
所 長	森 久	竹中 幸生	徳永 和幸
副 所 長	久谷 秀明	中山 高虎	高崎 寿男
建設専門官	田中 謙宏	田中 聡憲	入部 秀信
建設監督官	田中 常美	百田 国広	宮本 仁・児玉 敏幸

工務課長	溝上 利毅	溝上 利毅	田中 常美
同係長		浅田 敏光	徳重 栄紀
調査課長	松崎 安則	松崎 安則	大塚 法晴
同係長	田中 敏則	荒瀬 美和	竹下 卓宏
建設技官	井上 敏彦	香掛 孝	田邊 稔
用地課長		竜口 登	加藤 彌

福岡県教育委員会

総 括

教 育 長	御手洗 康	御手洗 康	光安 常喜
教 育 次 長	浜地 甫伯	光安 常喜	松枝 功
指導第二部長	月森清三郎	月森清三郎	竹若 幸二
文 化 課 長	六本木聖久	森山 良一	松尾 正俊・石松 好雄 (前任)
参 事	森本 精造	森本 精造	安野 義勝
		石松 好雄 (兼文化財保護室長)	柳田 康雄 (兼文化財保護室長)
課 長 補 佐	安野 義勝	岡武 康友	元永 浩士
		松尾 正俊	

課長技術補佐	石松 好雄		井上 裕弘 (兼文化財保護室長補佐)
参 事 補 佐	中矢 真人	柳田 康雄 (調査班総括)	橋口 達也 (調査班総括)
	大塚 健	井上 裕弘 (総括補佐)	川途 昭人 (兼文化財保護係長)
	松尾 正俊	石山 勲	木下 修
	柳田 康雄 (調査班総括)	清水 圭輔	児玉 真一
	井上 裕弘 (総括補佐)	濱田 信也	中間 研志
	石山 勲	副島 邦弘	小池 史哲
	濱田 信也		
	副島 邦弘		

庶 務

管理係長	池原	岸本 実	黒田 一治
事務主査	東 勇治	東 勇治	東 健二
調査担当			
主任技師	飛野 博文	飛野 博文	飛野 博文 (京華教育事務所技術主査)

地点	遺跡名	所在地	内 容	分布面積(m ²)	調査面積 (km ²)						報告書		
					62年度	63年度	平成元	2	3	4		5	6
1-A		新吉富村垂水	弥生~古墳 集落								3,500	2,000	3
1-B	池ノ口遺跡	新吉富村垂水	弥生~古墳 集落					4,000			1,800		3
1-C		新吉富村垂水	弥生~古墳 集落					3,200					3
1-D	三ツ溝遺跡	新吉富村垂水	古墳~平安 集落	40,000									6
1-E	長田遺跡	新吉富村垂水	古墳~ 集落								5,000	1,900	6
1-F	宇野懸水遺跡	新吉富村垂水	古墳~ 集落								4,000	500	6
1-G	竹ノ下遺跡	新吉富村垂水	古墳~ 集落							3,000		500	6
1-H	宇野代遺跡	新吉富村垂水	縄文~平安 集落・墓域他					2,000	5,000				1
2-A	上桑野遺跡	新吉富村垂水	弥生~古墳 集落・墓域	4,000						700			
2-B	上桑野遺跡	新吉富村垂水	近世	1,600						1,600			
3	桑野遺跡	大平村下階原	弥生 集落	4,800						4,800			6
4	大塚本遺跡	大平村下階原	縄文~江戸 集落・墓域他	16,000						18,000			
5	小松原遺跡	大平村下階原	縄文~近世	11,200						10,000			6
6	上の熊遺跡	大平村下階原	旧石器~古墳 集落域	4,500						4,500			6
7	金原遺跡 (田カネツキ)	大平村下階原	縄文~江戸 集落・墓域他	14,000				13,000					4・7
8-A	上階原遺跡	大平村下階原	縄文・弥生~奈良 集落	18,000	10,000	2,000							2・5
8-B	郷ヶ原遺跡	大平村下階原	弥生~古墳 集落	6,500				6,500					
計				120,600	10,000	2,000	6,500	13,000	39,600	21,700	14,300	4,900	

第1表 一般国道10号 豊海バイパス関係遺跡一覧表

技 師 小川 泰樹

小川 泰樹
(九州歴史資料館主任技師)

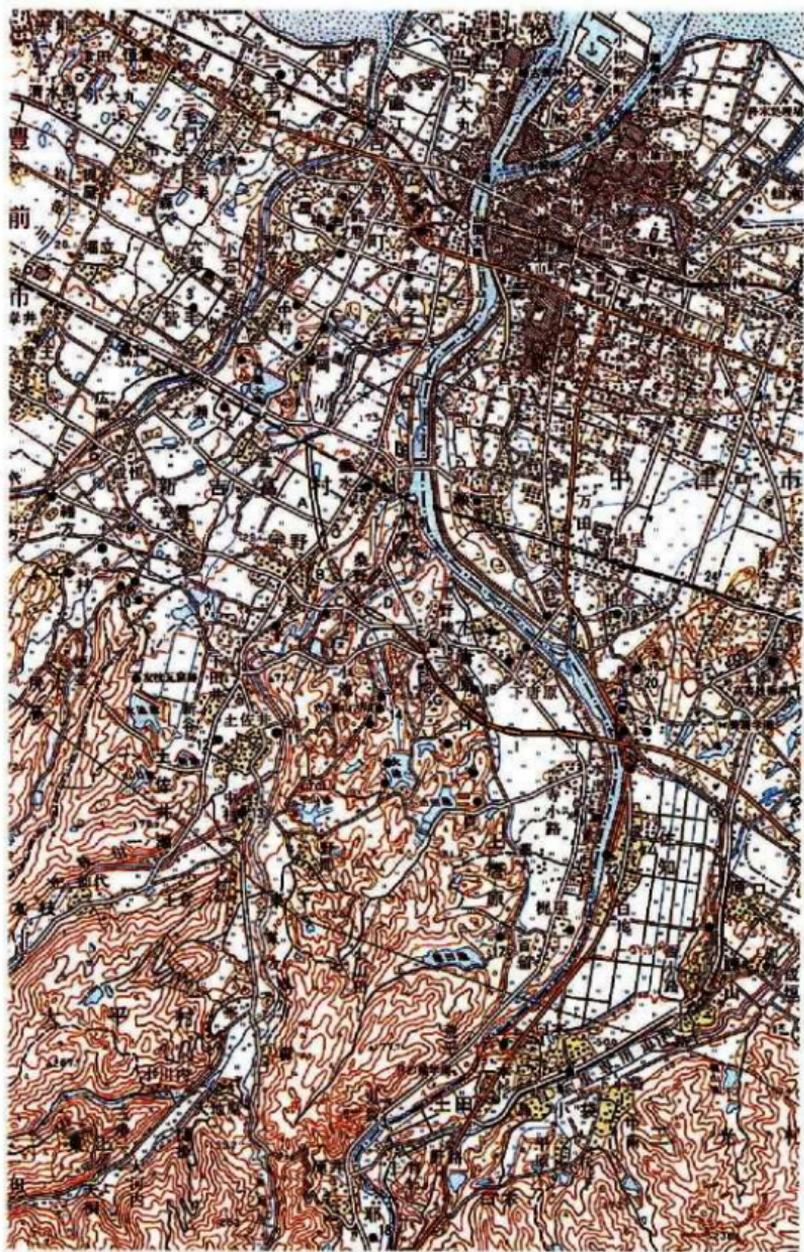
平成7年度整理関係者

整理指導員	岩瀬 正信 (接合復原)	平田 春美 (土器実測)
	北岡 伸一 (写真撮影)	豊福 弥生 (製図)
整理作業員	原カヨ子 関久江	土山真弓美 岡由美子
	田中典子 堀江圭子	棚町陽子 久富美智子
	坂田順子 藤原さとみ	江口幸子 堀之内久美子
	山本千鶴美 辻清子	山田知子 安住 美代子
	穴見裕子 小国みどり	高島妙子 坂本恵津子
	安永啓子 近藤京子	森紀子 安武道子
	若松 三枝子	

また、調査には長期間を要し、多くの方々のご協力・ご指導を得た。記して謝意を表します。福岡県文化財保護指導委員宮本工・浜島三司・川本義維・一川淳江、福岡県立求菩提資料館長重松敏美、福岡県京築教育事務所伊崎俊秋・緒方泉(平成2・3年度)、同西弘・宮部順治・中谷秀俊・土屋健一(平成7年度)、同薬石博明・大貫久美子(同8年度)、吉永真砂子、木村康子、中原三枝子、大平村教育委員会(田島保伸教育長・峯達見前教育長)、同藤井教一氏、大分県教育委員会坂本嘉弘、大分県中津市教育委員会栗焼志晃(現福岡県豊前市教育委員会)、同三光村教育委員会平田(旧姓植田)由美、立命館大学和田晴吾、大平村・豊前市・推田町の方々。



Fig. 1 福岡県教育長の安全パトロール



第3圖 周辺遺跡分布圖 (1/50,000)

- 1.三毛門放生田遺跡 2.養生山古墳 3.小石原泉遺跡 4.巨石塚古墳 5.大蔵下大坪遺跡 6.垂水庵寺 7.垂水縄文遺跡 8.牛頭天王(中桑野遺跡) 9.尻高畑田遺跡 10.照日・山田御跡群 11.土佐井遺跡 12.土佐井ミソナヅ遺跡 13.今藏遺跡 14.穴ヶ栗山古墳・穴ヶ栗山遺跡 15.於調寺古墳群 16.西方古墳 17.百留横穴墓群 18.原井三ツ江遺跡 19.相原寺 20.水活遺跡 21.上ノ原横穴墓群・堀助野地遺跡・曾波部古墳群 22.佐知遺跡 23.長者屋敷遺跡 24.古代官道推定線
 A.垂水地区遺跡群 B.宇野代遺跡 C.上桑野遺跡 D.桑野遺跡 E.大塚本遺跡 F.小松原遺跡 G.上ノ総遺跡 H.金屋塚遺跡 I.那ヶ原遺跡 J.上野原遺跡

II. 古墳下層の遺構と遺物

この金居塚遺跡は地質学上、「中津面」と呼ばれる低位段丘上の縁辺に位置する。この段丘の形成は7.5万年以前の下末吉期（6～13万年前）に遡るとい⁵¹う。したがって、理論的にはそれ以降に刻まれた祖先の足跡が残っていたのであろうが、実際には長年にわたる開発によって多くが破壊されたようである。しかし、幸いにも後世の開発を最小限にとどめた古墳の下層から、この遺跡の最も古い時期の人々の生活跡を確認できたのは、当時の大規模開発であったはずの古墳の下にそれ以前の遺跡が保存されたという皮肉な現象であった。

この遺跡でも通常のように、重機を使用して急傾斜の段丘法面掘まで表土を掘削した。しかし、表土に石材が露出していた近世墓周辺、そして1～3号墳の墳丘盛土の残存していた部分については人力でその除去を行い、その際に黒曜石でない石材の剥片や製品を採集したことから、古墳下層の発掘を念頭に置いて調査を進めた。

結果は以下に報告するように、石組炉の他には遺構を検出できず、また、旧石器時代から縄文・弥生、そして古墳築造以前にいたる長い期間の遺物が混在して出土しており、必ずしも良好な保存状態とはいえないものであった。しかし、この地域で旧石器時代の遺物がまとめて発掘されたのはほとんど始めてのことであり、貴重な報告となるのではないかと思う。

1) 石組炉（図版2、第5図）

上記したように、古墳（3号墳）下層で確認した縄文時代以前の唯一の遺構である。下層といっても、墓道掘削時に一部が破壊され、古墳発掘時にその石材の一部が現れた。

炉の本体は河原石で構成され、底石の上に花崗岩が置かれていた。この花崗岩は墓道掘削に際して現れた炉の上に置かれたものかとも思われたが、間層を噛みずら底石に接していることから炉を遺棄する際に置かれたものと考えている。花崗岩を覆う土層の確認を行っていないが、古墳地山検出時にまったく掘形に気付かなかったことからその可能性が高い。

底石には拳大よりやや大きな2点の石材が残り、1点は熱のために割れたようである。

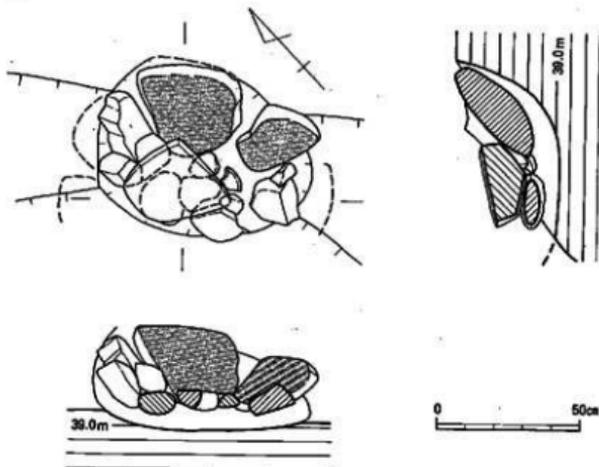
底石の外側に斜めに建てた石材は4点が残る。うち、2点は表面が赤色に焼けてはじけており、他の2点は焼けて割れ、一部が失われていた。

図のような掘形を発掘したが、粗土は判別が容易でなく、完全なものとの確信はない。ただ、掘土は周辺の地山土に比べ締まりにける軟質の土であった。

内部や掘形内からの出土遺物はない。また、周辺には、遺構とは思えない不定形のシミ状の



第4図 周辺地形図 (1/2,000)

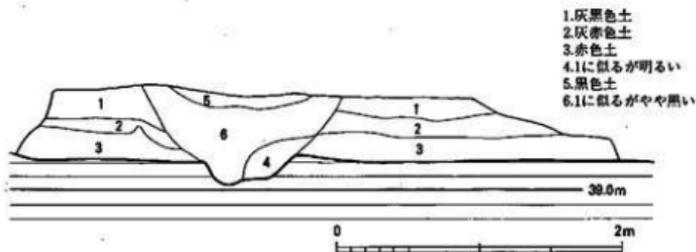


第5図 石組炉実測図 (1/20)

落ち込みが数カ所があったが、柱穴や竪穴式住居の掘り込みはまったく検出していない。したがって、この炉跡も日常的に屋内で使用されたというよりは、一時的なキャンプ地に設置されたものであろう。

2) 古墳下層の出土遺物

先述したように、墳丘が遺存する1~3号墳の盛土を剥いだ後に、地山土、そしてその下層の風化土層（赤褐色土）を掘り下げた。深さは遺物が出土しなくなるまでで、およそ30cmであった（図版3、第6図）。



第6図 3号墳下層土層図 (1/60)

概要

今回報告の対象とする石器資料等は、総数481点に及ぶ。その内140点は土器資料であり、その多くが弥生時代以降に属する小片で具体的な時期をも特定しがたいものであったことから、石器群との積極的な関係を指摘できないため、除外した。また資料整理段階の不幸で、石器資料についても一部資料の所在が不明となっており、これらについても今回の報告の対象となっていない。したがって今回報告するのは、こうした資料を除外した石器資料314点についてであることを明記しておく(第2表)。

遺物出土状況(図版3~5、第8~10図)

金居塚遺跡では都合5基の円墳が調査されたが、このうち墳丘直下(下層)から石器群が検出されたのは1号~3号墳である。これらはいずれも調査区南側に位置しており、本石器群の分布状況を示している。本石器群の遺存状況の特徴は、古墳の構築といういわば古代における一種の開発行為の結果として、たまたま石器群が保存されたという点にあり古墳周辺ではその分布は認められない。つまり、本来はもっと広範囲に一定の集中分布を示していたと考えられるが、現状では古墳間に存在したであろう資料は失われており、本来的な石器群の在り方を知ることではできない。ただそうした制約を受けた資料ではあるが、全体の中で3号墳下層が最も集中した分布を見せ、石器群の中心をこの部分に想定できるかもしれない。

なお、検出された石器群は時代的な統一性を欠くものであるが、大まかに後期旧石器時代の一群と縄文時代後期のそれとに分けることが可能で、それぞれの特徴を有している。

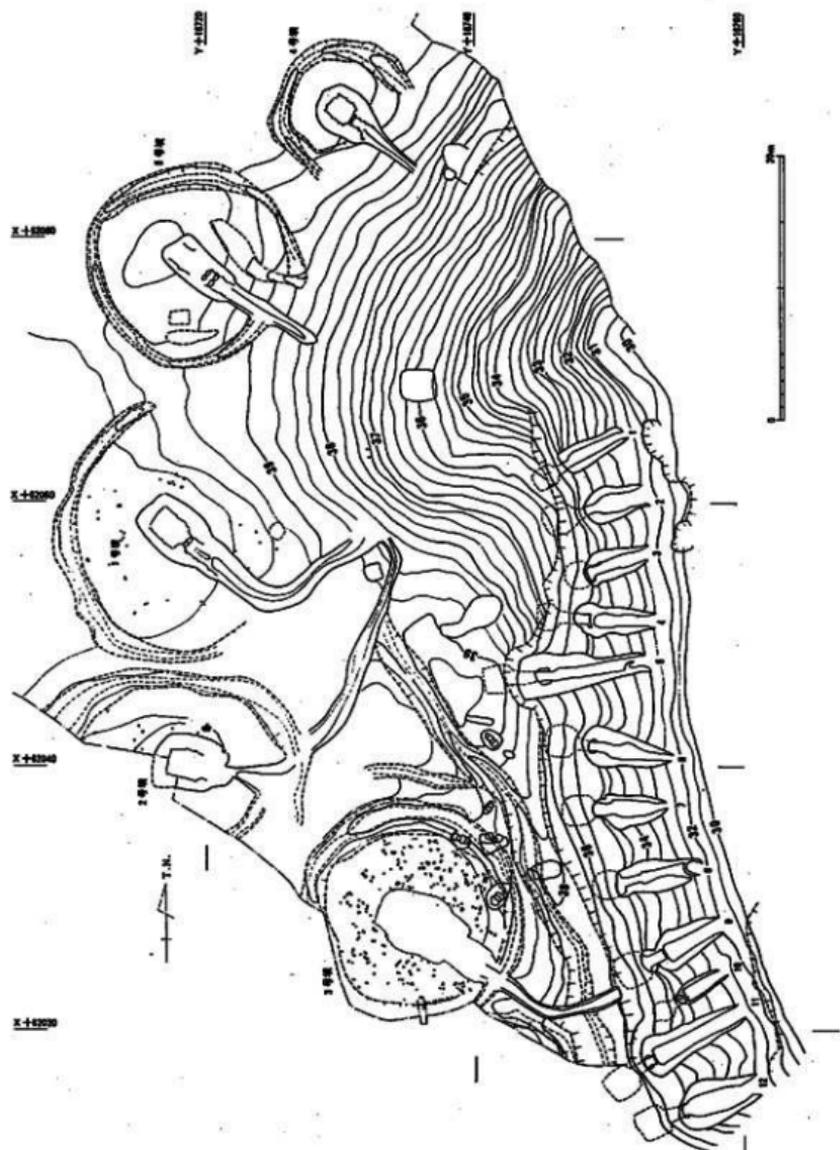
遺物(図版88、第11~14図)

前述の如く出土した遺物は、器種と使用される石材の違いから、後期旧石器時代と縄文時代後期のものとに大別される。以下その特徴を記す。

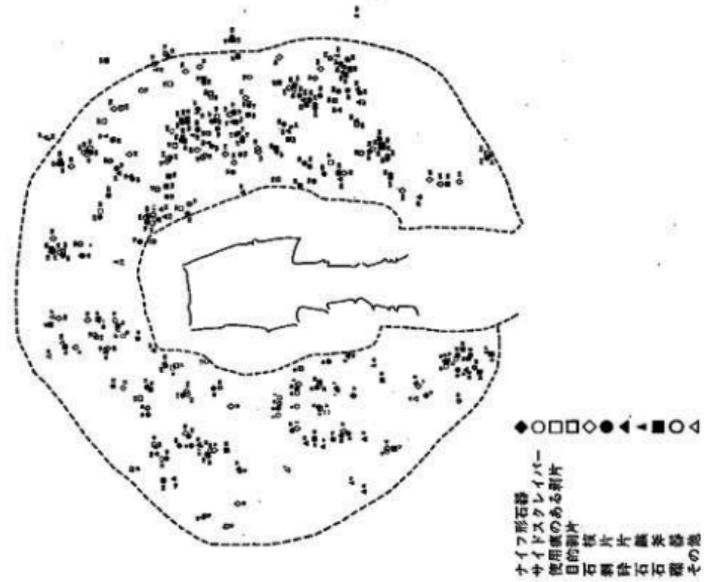
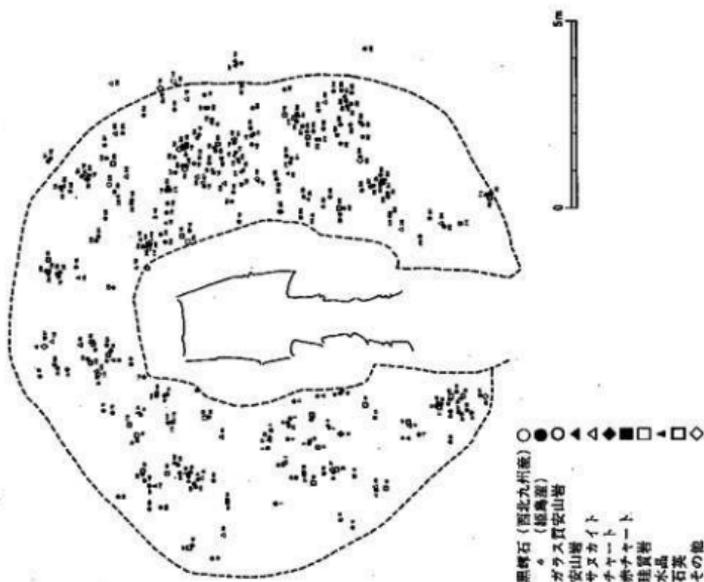
旧石器時代の石器群

旧石器時代の資料と考えられるのは、都合102点を数えることができる。特徴的な石材としては赤チャート(36.3%)を上げることができ、次いで珪質岩(21.6%)、水晶(18.6%)、サヌカイト(9.8%)等が続く。

1~5はナイフ形石器で、1・2・3は縦長状剥片を、また4・5は横長状剥片をそれぞれ素材とし、いずれも一側面にブランディング加工を施し、ナイフ形石器としている。10は尖頭状石器で、欠損により全体の形状は知り得ないが、表面の風化は著しい。7は使用痕のある剥片で、6・8・9・11・12・13は石器用目的剥片と考えられる。ここでいう目的剥片とは、予め石器への加工を目的として一定の剥片剥離技術の下に得られたもので、調整剥片等とは異なる。



第7圖 古墳下層出土石器分布圖(1/400)



第10図 3号墳下層出土石器分布図 (1/150)

るものである。14~17は石核で、いずれも角礫を素材とし、分割後、側縁調整を施し調整断面を構成した後、剥片状剥離を行う。特に14・15は縦長剥片を剥出しており、定型化された剥片剥離技術を認めることができる。18は軟質な石材を用いていることと、全体に風化が著しいため明瞭ではないが、明らかに人為的な加工を施しており、礫器と考えられた。

縄文時代の石器群

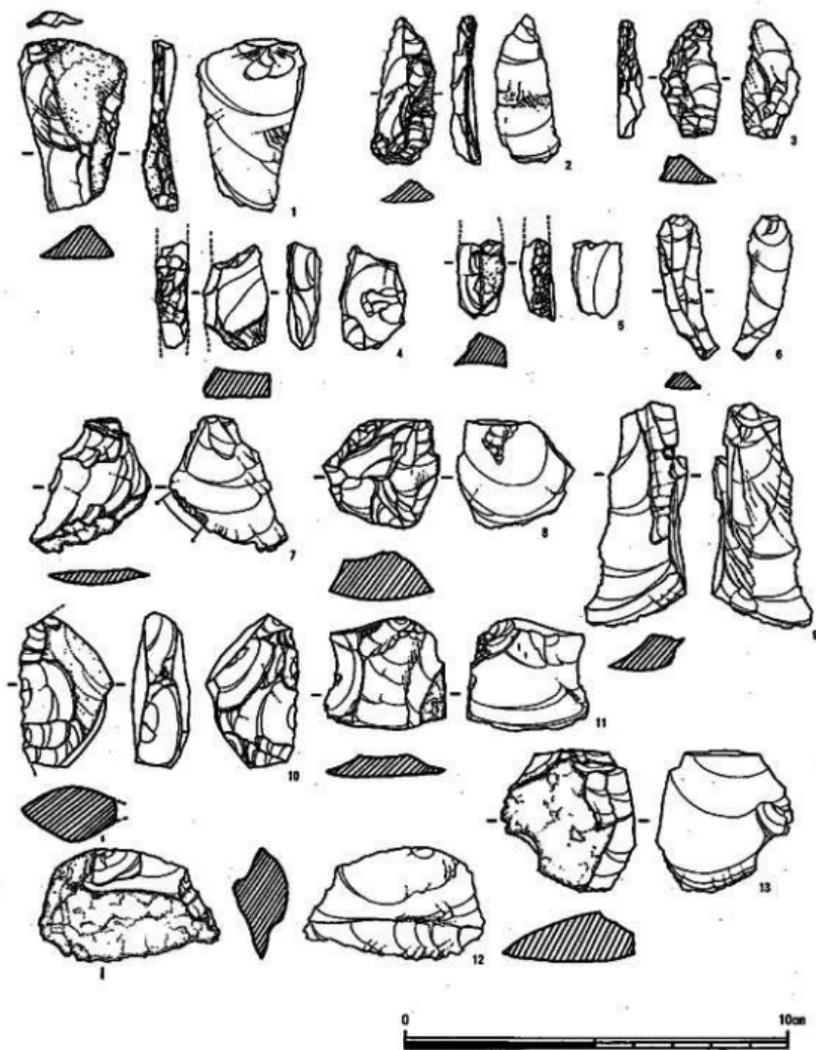
都合170点を数え、姫島産黒曜石が全体の50.6%、腰岳及び西北九州産と思われる黒曜石が3種で18.2%、ガラス質安山岩10.0%、安山岩21.2%の石材比率を見せる。19~29は石籤で、19は大型で側辺が屈曲する。23・24は左側辺が直線的で精緻な仕上げを行うのに対し、右側辺は鉤の手状を呈する特徴を有する。意図的なものなのか偶然かは即断できないが、意図的であるとすれば矢柄への装着にかかわる特徴かも知れない。30は石匙と思われる断片で、横長タイプのものである。31~34は使用痕のある剥片で、総じて不定形の剥片を素材とする。35・36はサイドスクレイパーで、35は不定形剥片の側辺に簡単な二次加工を施し刃部としたもの、36は多くの部分を欠失するため全体を知ることはできないが、かなり入念な二次加工を両サイドに施している。37は磨製石斧の刃部で、緑泥片岩を用いる。緑泥片岩は当地方では扁平打製石斧の石材として用いられるのが一般的で、比較的軟質な石器素材である。したがって本資料には使用の痕跡が明確に認められるものの、一方では強度はさほどでもなかったと考えられ、そのことがこうした破損状況の要因と推察される。

まとめ

前述の如く、本石器群は良好な状態で遺存していたとは言いが、古墳の墳丘直下という言わばタイムバックされた状況であったため、少なくともプライマリーな状態は保たれていたと考えられる。そうした意味では、京築地域発見の石器群としては極めて貴重な資料であり、一定の分析も可能ということができる。以下、若干の知見を記しまとめとしたい。

まず、時代の異なる二つの石器群が同一平面内に併存するため、この分離を行うことが第一に必要な作業となった。一般的な方法としては出土レベルによる分離があるが、石器群が遺存していた地点が台地の縁辺部（傾斜地形）であったため、資料操作によってこれを分離することは不可能であった。また分層による方法も考えられるが、調査時の所見がなく、さらに京築地域の土壌を考えた場合有効な手段となり得ないと思われた。したがって、残された方法は石材及び器種による分離であった。

石材による分離でポイントとなったのは姫島産の黒曜石と、ナイフ型石器に用いられている石材であった。姫島産黒曜石は旧石器時代には一般に使用されておらず、これは縄文時代後期として妥当であり、他方、ナイフ型石器に用いられている赤チャートは、この石材を用いてい



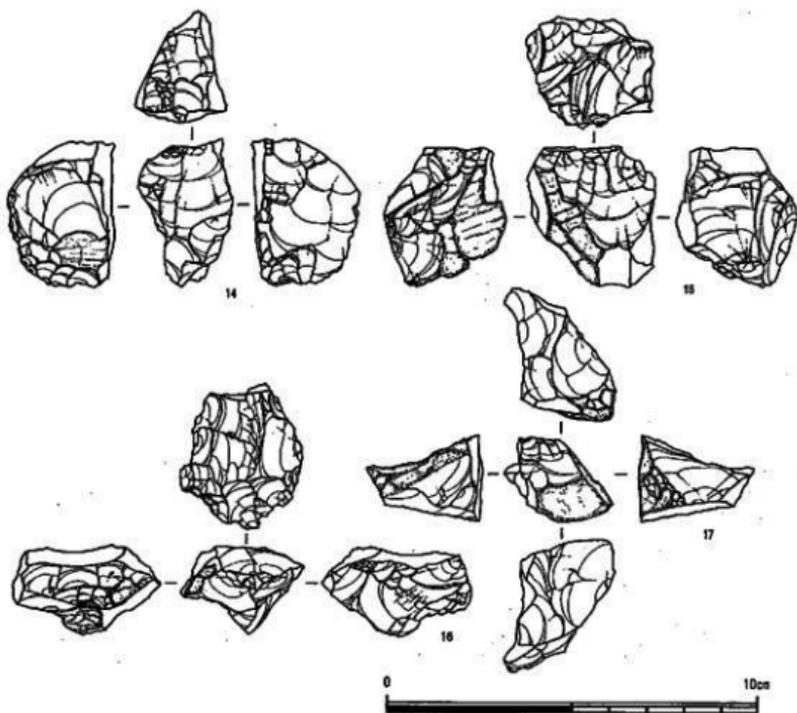
第11图 3号墳下層出土石器実測図(1) (2/3)

る石核が古い要素をもつことを考慮し、旧石器時代と考えられた。さらに、珪質岩は赤チャートと同質の要素をもつこと、また水晶・石英は京築地域で旧石器時代の石材としての使用例があること、サヌカイトは風化の状況等からみて旧石器時代資料と考えられることから、以上を旧石器時代の石器群と考えた。

一方、この他の西北九州産の黒曜石・ガラス質安山岩・安山岩は縄文時代の製品に用いられていることから縄文時代後期の石器群とし、この他の石材については不明とした(42点)。

こうした予想の下に、平面分布により石材別、器種別の状況を分析したが、残念ながら分離は不可能で、混在する状況を示した。

しかし分離した石器群をみると、旧石器時代のものについては石核や目的剥片・製品な

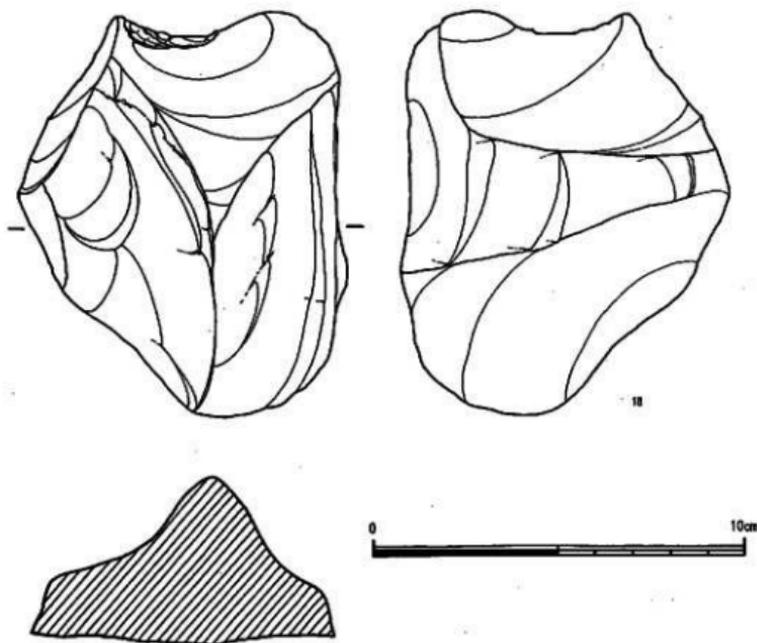


第12図 3号墳下層出土石器実測図(2)(2/3)

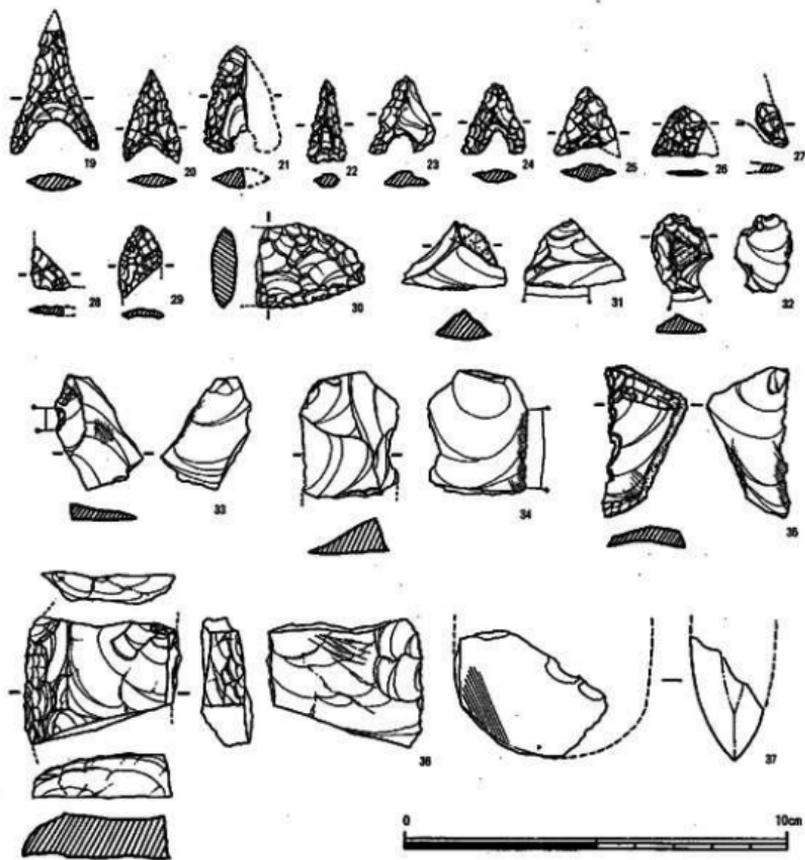
どの観察から、縦長剥片の剥離技術をもつことが知られ、これに横長の不定形剥片を得る技術（多面体石核）を併せ持つという、所謂、東九州の後期旧石器時代の特徴を見ることが出来る。

また、縄文時代後期の石器群をみると石鏃、サイドスクレイパー、使用痕のある剥片、石匙、磨製石斧といった一般的な石器組成を示しており、さらに剥片類にしても小型のものが多く、この時期に特徴的な小型の多面体石核の存在を予想させる。こうした在り方を見るとき、石材、器種による石器群の分離結果はあながちの外れではないかもしれない。

いずれにせよ、京築地域において出土状況が明確で、しかもプライマリーな状態でこれだけ大量の石器群を検出できたことは特筆すべきであり、調査担当者の知見に深く敬意を表するものである。 (栗焼 憲児)



第13図 3号墳下層出土石器実測図(3) (2/3)



第14图 3号墳下層出土石器実測図(4) (2/3)

第2-1表 金居塚古墳1号墳下層出土石器観察表

No.	器種	石材	Level	備考	No.	器種	石材	Level	備考	No.	器種	石材	Level	備考
1	割片	水晶	30.674		16	割片	赤チャート	30.800		31	割片	ob	30.851	
2	割片	水晶	30.675	1個	17	割片	赤チャート	30.800		32	割片	Hob	30.850	
3	割片	石	30.621		18	割片	赤チャート	30.800		33	割片	ob	30.851	1個
4	割片	Hob	30.848		19	割片	Hob	30.800		34	割片	ob	30.851	1個
5	割片	石英	30.838		20	割片	安山岩	30.806	目的割片	35	割片	Hob	30.851	
6	割片	Hob	30.761		21	割片	Hob	30.888		36	割片	Hob	30.655	
7	割片	Hob	30.761		22	割片	Hob	30.882		37	割片	?	30.703	
8	割片	安山岩	30.734		23	割片	Hob	30.820	実測No.27	38	割片	水晶	30.611	
9	割片	安山岩	30.731		24	割片	Hob	30.870		39	割片	石	30.655	3個
10	割片	ob	30.811	3個	25	小石	赤チャート	30.870		40	割片	Hob	30.851	
11	割片	ob	30.925		26	割片	建賀岩	30.870		41	割片	-	30.654	
12	割片	Hob	30.854		27	割片	ob	30.870	2個	42	割片	Hob	30.800	
13	割片	Hob	30.865		28	割片	安山岩	30.870		43	割片	赤チャート	30.431	
14	割片	Hob	30.843		29	割片	ゴラス質安山岩	30.793						
15	割片	ob	30.867	2個	30	割片	?	30.914						

第2-2表 金居塚古墳2号墳下層出土石器観察表

No.	器種	石材	Level	備考	No.	器種	石材	Level	備考	No.	器種	石材	Level	備考
1	割片	ob	30.813	1個	13	割片	Hob	30.881		25	割片	Hob	30.881	
2	割片	ゴラス質安山岩	30.821		14	割片	Hob	30.881		26	割片	Hob	30.881	
3	割片	Hob	30.801		15	割片	Hob	30.881		27	割片	Hob	30.881	
4	割片	Hob	30.801		16	割片	Hob	30.881		28	割片	Hob	30.881	
5	割片	Hob	30.801		17	割片	Hob	30.881		29	割片	Hob	30.881	
6	割片	Hob	30.786		18	割片	Hob	30.881		30	割片	建賀岩	30.881	
7	割片	チャート	30.725		19	割片	Hob	30.881		31	割片	ob	30.881	1個
8	小割片	ob	30.639	1個	20	割片	Hob	30.881		32	小石	ob	30.881	1個
9	割片	ob	30.565		21	割片	Hob	30.881		33	割片	ob	30.878	
10	割片	Hob	30.711		22	割片	Hob	30.881		34	割片	石英	30.878	
11	割片	Hob	30.611		23	割片	Hob	30.881		35	割片	Hob	30.878	
12	割片	Hob	30.681		24	割片	Hob	30.881		36	割片	赤チャート	30.878	

第2-3表 金居塚古墳3号墳下層出土石器観察表(その1)

No.	器種	石材	Level	備考	No.	器種	石材	Level	備考	No.	器種	石材	Level	備考
1	割片	安山岩	30.406		56	石	Hob	30.122	実測No.24	111	割片	Hob	30.510	
2	割片	?	30.443		57	割片	安山岩	30.183		112	割片	?	30.410	
3	割片	ob	30.446	3個	58	割片	水晶	30.183		113	小石	建賀岩	30.522	2個
4	割片	ob	30.506	3個	59	割片	赤チャート	30.113		114	割片	ob	30.501	1個
5	割片	?	30.463		60	割片	ゴラス質安山岩	30.112		115	割片	ゴラス質安山岩	30.488	
6	割片	ob	30.438	1個	61	石	赤チャート	30.100	実測No.17	116	割片	安山岩	30.486	
7	割片	安山岩	30.450		62	石	ob	30.701		117	割片	安山岩	30.522	
8	割片	建賀岩	30.450		63	石	ob	30.722	実測No.26	118	割片	建賀岩	30.434	目的割片
9	割片	Hob	30.528		64	割片	赤チャート	30.696		119	スライパ	ob	30.555	1個 実測No.25
10	割片	Hob	30.528		65	割片	赤チャート	30.628	目的割片	120	小石	建賀岩	30.555	
11	割片	建賀岩	30.471	目的割片	66	小石	?	30.604		121	割片	安山岩	30.543	ナツバ目割片
12	割片	安山岩	30.493	目的割片 実測No.1	67	割片	安山岩	30.693		122	割片	ob	30.486	2個
13	割片	Hob	30.429		68	石	赤チャート	30.623	サマカイト	123	割片	ob	30.548	3個
14	割片	水晶	30.233		69	割片	安山岩	30.587	サマカイト	124	割片	ob	30.562	目的割片
15	割片	安山岩	30.286		70	割片	赤チャート	30.555		125	割片	安山岩	30.431	サマカイト
16	割片	安山岩	30.284		71	割片	?	30.616		126	割片	ob	30.477	
17	小石	ob	30.368		72	割片	Hob	30.768		127	割片	Hob	30.331	
18	割片	安山岩	30.236	サマカイト	73	割片	ob	30.763	3個	128	割片	Hob	30.377	
19	割片	Hob	30.228		74	石	Hob	30.778	実測No.30	129	割片	Hob	30.634	
20	割片	ゴラス質安山岩	30.284		75	割片	赤チャート	30.773		130	割片	Hob	30.634	
21	割片	水晶	30.282		76	割片	建賀岩	30.576		131	割片	安山岩	30.634	
22	割片	Hob	30.282	目的割片	77	割片	建賀岩	30.578		132	炭化物	-	30.634	
23	割片	安山岩	30.256		78	割片	ゴラス質安山岩	30.523		133	割片	Hob	30.690	
24	割片	ゴラス質安山岩	30.344		79	割片	Hob	30.753	目的割片	134	小石	?	30.730	
25	割片	ゴラス質安山岩	30.344		80	割片	?	30.621		135	小石	ob	30.730	
26	割片	ob	30.337		81	割片	ob	30.671	1個 目的割片	136	割片	?	30.741	
27	石	Hob	30.432	実測No.23	82	割片	Hob	30.607		137	小石	石英	30.741	
28	割片	ゴラス質安山岩	30.441		83	割片	赤チャート	30.641		138	割片	水晶	30.746	
29	割片	ob	30.426	1個	84	割片	ob	30.531	1個	139	割片	Hob	30.628	
30	割片	ob	30.436		85	石	Hob	30.728	実測No.34	140	割片	石英	30.722	
31	割片	石	30.883		86	小石	建賀岩	30.501		141	割片	建賀岩	30.722	目的割片
32	割片	Hob	30.410		87	炭化物	?	30.512		142	割片	Hob	30.734	
33	割片	赤チャート	30.417	目的割片	88	割片	水晶	30.587		143	石	チャート	30.773	実測No.28
34	割片	Hob	30.410		89	割片	建賀岩	30.597	目的割片 実測No.41	144	割片	赤チャート	30.783	
35	割片	ob	30.410	1個	90	割片	?	30.174		145	割片	赤チャート	30.708	
36	ナイフ(灰石)	チャート	30.390	実測No.2	91	割片	安山岩	30.226	ナツバ目割片	146	割片	緑色泥片	30.740	実測No.37
37	小石	Hob	30.256		92	割片	ゴラス質安山岩	30.233		147	割片	建賀岩	30.694	
38	割片	Hob	30.259		93	割片	ゴラス質安山岩	30.200		148	割片	建賀岩	30.661	
39	割片	Hob	30.256	目的割片	94	割片	安山岩	30.200		149	石	ob	30.658	実測No.29
40	小石	Hob	30.203		95	小石	建賀岩	30.462		150	割片	Hob	30.661	実測No.32
41	割片	ob	30.192		96	割片	ゴラス質安山岩	30.506		151	石	建賀岩	30.622	実測No.16
42	割片	赤チャート	30.192	目的割片 実測No.4	97	割片	建賀岩	30.465		152	割片	水晶	30.628	
43	割片	赤チャート	30.136		98	石	安山岩	30.462	実測No.25	153	割片	ob	30.601	1個
44	割片	水晶	30.212	目的割片	99	割片	ob	30.463	3個	154	割片	Hob	30.754	
45	割片	安山岩	30.256		100	割片	Hob	30.432	3個	155	割片	安山岩	30.734	
46	割片	安山岩	30.256		101	割片	Hob	30.432		156	割片	Hob	30.784	
47	割片	安山岩	30.126	目的割片	102	割片	Hob	30.496		157	割片	安山岩	30.768	目的割片
48	割片	安山岩	30.271		103	割片	Hob	30.488		158	割片	Hob	30.728	
49	割片	安山岩	30.271		104	割片	Hob	30.513	目的割片	159	割片	Hob	30.728	
50	割片	建賀岩	30.271		105	割片	安山岩	30.412		160	割片	Hob	30.728	
51	割片	ob	30.276	目的割片	106	割片	赤チャート	30.383		161	小石	?	30.663	
52	石	ob	30.228	1個 実測No.21	107	割片	ob	30.302		162	ナイフ(灰石)	建賀岩	30.611	実測No.1
53	石	Hob	30.229	実測No.31	108	割片	安山岩	30.426		163	割片	?	30.726	目的割片
54	割片	赤チャート	30.224		109	割片	安山岩	30.453		164	割片	Hob	30.783	
55	割片	Hob	30.206		110	石	Hob	30.421	実測No.19	165	石	チャート	30.683	実測No.22

第2-4表 金居塚古墳3号墳下層出土石器観察表(その2)

No.	品名	材質	Level	備考	No.	品名	材質	Level	備考	No.	品名	材質	Level	備考
166	剥片	石英	30.593		210	剥片	安山岩	30.674		268	ナイフ形石	チャート	37.744	実測No.3
167	剥片	赤チャート	30.590		211	剥片	安山岩	30.673		269	剥片	水晶	37.681	
168	剥片	ob	30.505	1類	212	剥片	ob	30.691		270	剥片	赤チャート	39.573	
169	剥片	赤チャート	30.438		219	剥片	水晶	30.547		279	剥片	赤チャート	39.532	
170	剥片	?	30.438		220	剥片	Hob	30.671		309	剥片	安山岩	39.495	サヌカイト
171	剥片	Hob	30.400		221	剥片	埴貫岩	30.633		310	剥片	水晶	39.406	
172	剥片	ob	30.400	1類	222	剥片	Hob	30.644		271	剥片	水晶	39.576	目的剥片
173	剥片	安山岩	30.527		223	剥片	安山岩	30.613		272	剥片	赤チャート	39.623	
174	剥片	Hob	30.527		224	剥片	赤チャート	30.259		273	剥片	Hob	39.623	
175	剥片	Hob	30.452		225	剥片	石英	30.325		274	剥片	赤チャート	39.516	
176	剥片	Hob	30.403		226	剥片	?	30.577		275	剥片	安山岩	39.492	
177	剥片	Hob	30.543		227	剥片	埴貫岩	30.518		276	剥片	Hob	39.636	
178	剥片	Hob	30.543		228	U字	赤チャート	26.500	実測No.7	277	剥片	安山岩	39.503	
179	剥片	?	30.573		229	スクリュー	ゴラス質安山岩	30.692	実測No.6	278	剥片	?	39.403	サヌカイト
180	剥片	Hob	30.543	1類	230	剥片	Hob	30.573		279	剥片	?	39.493	目的剥片
181	剥片	Hob	30.480		231	剥片	ob	30.593	1類	280	剥片	?	39.481	
182	剥片	Hob	30.641		232	剥片	?	30.564		281	剥片	ゴラス質安山岩	39.493	
183	剥片	水晶	30.595		233	剥片	赤チャート	30.564		282	剥片	Hob	39.483	
184	剥片	Hob	30.595		234	剥片	Hob	30.564		283	剥片	安山岩	39.616	
185	剥片	石英	30.485		235	剥片	Hob	30.391		284	剥片	チャート	39.603	
186	剥片	石英	30.588		236	剥片	埴貫岩	30.538		285	剥片	Hob	39.528	
187	剥片	Hob	30.538		237	剥片	埴貫岩	30.538		286	剥片	Hob	39.543	
188	剥片	Hob	30.538		238	剥片	赤チャート	30.531		287	剥片	安山岩	39.443	サヌカイト
189	剥片	埴貫岩	30.501	目的剥片	239	剥片	安山岩	30.531		288	剥片	水晶	38.543	
190	剥片	埴貫岩	30.593		240	剥片	安山岩	30.531		289	剥片	?	39.328	
191	剥片	ob	30.526	1類	241	剥片	水晶	30.342		290	剥片	赤チャート	39.494	目的剥片
192	剥片	赤チャート	30.514	目的剥片	242	剥片	水晶	30.342		291	剥片	ob	39.445	1類
193	剥片	Hob	30.514		243	燧土塊	?	30.50		292	剥片	ゴラス質安山岩	39.445	
194	剥片	?	30.553		244	剥片	水晶	30.465		293	剥片	Hob	39.228	
195	剥片	?	30.392		245	剥片	赤チャート	30.403		294	剥片	Hob	39.480	
196	剥片	水晶	30.608	目的剥片	246	剥片	?	30.379		295	剥片	石英	38.396	
197	剥片	Hob	30.608		247	剥片	?	30.437		296	剥片	Hob	38.334	
198	剥片	赤チャート	30.566		248	剥片	?	30.611		297	剥片	ゴラス質安山岩	39.334	
199	剥片	Hob	30.566		249	剥片	Hob	30.404		298	剥片	安山岩	39.298	
200	剥片	Hob	30.605		250	剥片	Hob	30.404		299	剥片	安山岩	39.441	
201	剥片	Hob	30.605		251	剥片	Hob	30.542		300	石積	埴貫岩	39.441	
202	剥片	Hob	30.605		252	剥片	Hob	30.542		301	剥片	Hob	39.341	
203	剥片	ob	30.433	1類	253	剥片	Hob	30.542		302	剥片	安山岩	39.341	
204	剥片	赤チャート	30.601	3類	254	剥片	Hob	30.542		303	剥片	赤チャート	39.273	
205	剥片	Hob	30.632	実測No.14	255	剥片	赤チャート	30.438		304	剥片	赤チャート	39.346	
206	剥片	赤チャート	30.632		256	剥片	ob	30.589	1類	305	剥片	安山岩	39.346	
207	剥片	埴貫岩	30.624		257	剥片	Hob	30.570		306	剥片	安山岩	39.178	
208	剥片	ob	30.631		258	剥片	安山岩	30.610		307	剥片	Hob	39.075	
209	剥片	Hob	30.631		259	剥片	赤チャート	30.663	目的剥片	308	剥片	赤チャート	39.280	
210	剥片	?	30.631		260	剥片	赤チャート	30.663		309	剥片	水晶	39.251	
211	剥片	石英	30.631		261	剥片	埴貫岩	30.553		310	剥片	ゴラス質安山岩	39.300	
212	剥片	埴貫岩	30.644		262	剥片	Hob	30.611		311	剥片	水晶	39.123	
213	剥片	埴貫岩	30.643		263	剥片	Hob	30.608		312	剥片	埴貫岩	39.123	目的剥片
214	剥片	ゴラス質安山岩	30.643		264	剥片	Hob	30.633		313	剥片	Hob	39.123	
215	U字	Hob	30.673	実測No.33	265	剥片	Hob	30.633		314	剥片	?	39.222	実測No.18

第2-5表 表採遺物等

No.	品名	材質	出所
1	ナイフ形石	チャート	目的剥片 実測No.6
2	ナイフ形石	ホルンフェルス	?
3	尖頭状石器	安山岩	サヌカイト, 埴貫岩, 実測No.9
4	石 籠	安山岩	古墳上層埋戻 実測No.30

※注 石器観察表中の略号は以下の通り

- ob → 腰岳及び、西北九州産黒輝石
- Hob → 姫島産黒輝石
- UF → 使用痕のある剥片

※備考の中でobは3種に分類した。

- 1類→漆黒で腰岳産と思われる。
- 2類→やや灰色をおびる。産地は特定できないが、西北九州と思われる。
- 3類→縞状模様がみられる。産地は特定できないが、西北九州と思われる。

3) 表採および関連資料(図版89、第15図)

第15図1は調査区内で採集したものであるが、採集地点の詳細は記録していない。旧石器時代の終末期から縄文時代の草創期にかけてのものではないかと考えられるものである。先に紹介した古墳下層から出土した資料群の一部と関連があるのか興味深い。

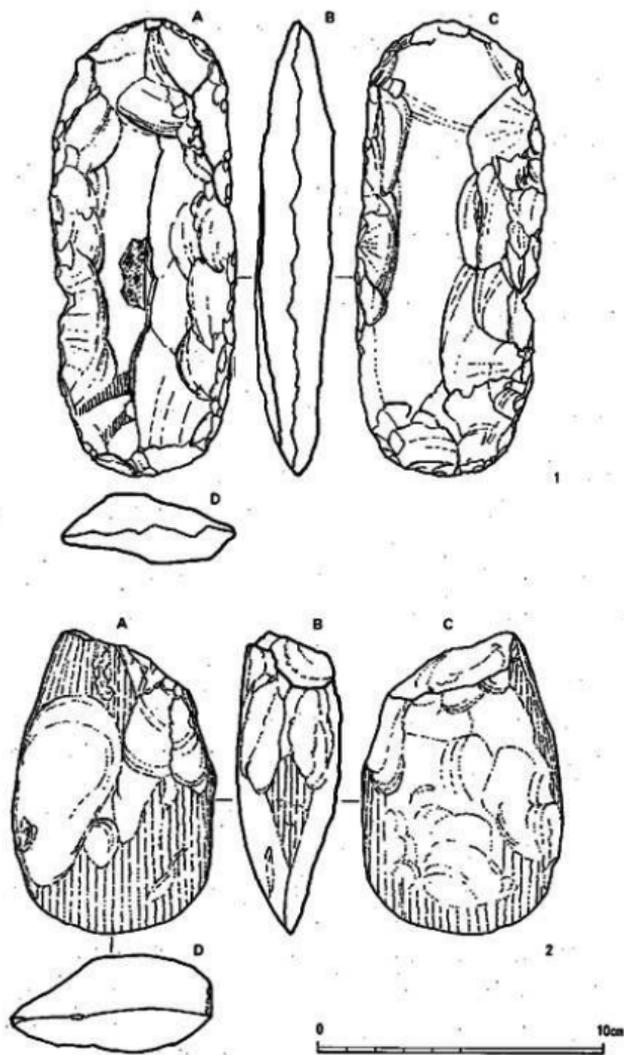
1は、長さ16.1cm、幅6.3cm、厚さ2.6cmで、現重量376gである。玄武岩製かと思われ、表面は白色状態に風化しているが、新しい破損部は黒色である。全体に粗い剥離のように見えるが、縦断面図Bに細かくは示さなかったものの、後部はあたかも敲打された如く鈍くされている。敲打というよりもむしろそれに近いかなり無理な小剥離を多数重ねた結果というのが正しいかもしれない。A面の左下部斜め下方からの剥離面(階段状剥離部)を2ヶ所磨いているものの、磨いた線状痕などは風化のためか観察できない。磨製面と推定される部分は、他にも可能性がある部分もあるが確定できない。

刃縁は断面図にみられるように屈曲はあるが全体的には直線的である。表裏のうち、C面に自然面(礫皮面)がかなり残り、また、A面(磨製のある面)には自然面というより、素材面(大きく割られたかと思われる面)が残ってる。

同2は推田バイパス関係埋蔵文化財の本格調査に先立って、1988年に実施された遺跡確認調査で、豊前市大字中村地区の「地山直上」から発見されたものであるが、これも出土地の特定は困難である。当地区では縄文後期の集落(中村石丸遺跡)や古代・中世の遺構(団後遺跡)などが調査されたが、この石斧に供伴または供伴すると推定される遺構・遺物は発見されていない。

表面全体がやや灰黒色気味に強く風化し、磨製したとしか考えられない部分を含めて風化して肌荒れのため、磨製の線状痕やリング等細部は観察できない。表裏・側面共かなりの面積が磨製と考えられ、刃先は丸のみとなり鋭い。一見、折れたごとく見えるが、その部分の剥離状況を見ると一概に断定できず、ショートアックス的な完形品との見方もできる。玄武岩製と考えられ、長さ10.7cm、幅7.0cm、厚さ3.5で、重量は353gである。

なお、この石斧2点については、後日、九州歴史資料館『研究論集』で再考の予定としている。
(横田義章)



第15圖 表採および関連遺物実測圖 (1/2)

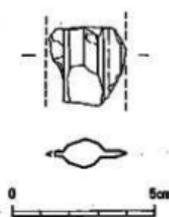
Ⅲ. 弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構としては、1号墳下層で検出した竪穴式住居跡1軒、3号墳周辺および村道東でまとまって検出した(石蓋)土墳墓群があり、時期比定については微妙な部分がある。その他、先にも記したように、3号墳下層で弥生土器を若干出土しており、また、11号横穴の墓道前端の斜面からも土器若干と銅剣片が出土した。ここではそれらについて記す。

1) 銅剣(図版90、第16図)

12号横穴墓道前端の段丘法面表土を重機を用いて除去したが、なお変色域があったために発掘したところ、古墳時代須恵器や弥生土器とともにこの細型銅剣片が出土した。

残存長2.7cm、最大幅2.7cmの剣身部分。背の部分は幅1.5cm、厚さ1cmの断面八面形となり、稜線はシャープである。刃部も鋭利に研ぎ出される。全体に銅質は良好のようであるが、破損が著しく、表面も荒れる。また、銚箔がずれていたのか、翼部付け根の位置が表裏で若干ずれる。いわゆる細型銅剣に相当するものであろうが、細部は小片のためによくわからない。



第16図 銅剣実測図
(1/2)

この銅剣片とともに斜面から出土した土器を第19図5・6に示した。

5は残存部が少ないが全体が窺える。外面には削りに似た調整痕が微かに見え、内面は丁寧な撫でるようである。長剣となり、底部は尖り気味の丸底。6は器表が非常に荒れるが、脚部が発達する高杯であろう。

これらの土器と銅剣片は従来の編年観では到底伴うものではない。この遺跡内ではこれらの土器より遅る時期の確かな弥生時代遺構を検出してないが、3号墳下層(地山中)で採集した遺物群および、I-1号土坑出土遺物の中にこの銅剣片と時的に符号しうる土器がある。

従来、周防灘沿岸地方は弥生時代青銅器の存在自体が希薄であり、考察の対象外であった。しかし、近辺、大分県三光村佐知遺跡でやはり細型銅剣の切先が包含層中から出土し、形態や遺跡の内容から中期初頭頃の古式なものとされた。また、平成8年度に豊前市河原田塔田遺跡の土墳墓から発見された銅剣切先は、やはり形態から国内でも最古式に属するものとの評価をえている。いずれも小片のうらみがあるが、少なくとも周防灘沿岸地域でも早い段階で青銅器を入手していたという意味で地域史の再考を迫るものである。

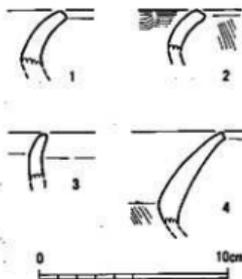
2) 古墳下層出土土器

金居塚3号墳下層で検出した弥生前期末～中期初頭を中心とする土器群で、ほかにはI区東端の大型土坑から若干の土器が出土したのみである。かつて、この金居塚遺跡の北約500mの段丘肩に所在する能満寺古墳群の発掘を行ったが、そこで検出した弥生時代前期末～中期の遺構も密度は非常に疎であった。同様のため、また、通有の大型袋状竪穴の不在がこうした状況を演出しているのであろう。本遺跡一帯も畑地化しており、かつ古墳群築造時の地形改変も相当なされたものと思われ、浅い遺構が畑滅したものであろう。

土器 (第17図)

1は壺口縁部の小片。外彎して端部に弱い面をもつ。内面は鈍磨きで、外面上半は縦方向の、頸部を横方向の撫でで仕上げられるようである。2は甕の口縁部小片。外彎し、端部に面を形成する。内面に横刷毛、外面に斜位の刷毛目が残る。3は口縁部が弱く屈曲し、短い、甕の口縁部小片である。頸部内面に弱い稜を有し、それ以下を丁寧に撫でるようである。

4は1号墳下層で検出した竪穴式住居跡や、12号墳穴前面斜面などから出土した土器と同時期のものであろう。口縁部は長く大きく開き、端部にシャープな面を作る。頸部内面にも鋭い稜をもち、それ以下を粗い刷毛目で、以上を鈍磨きで仕上げる。外面は磨滅する。



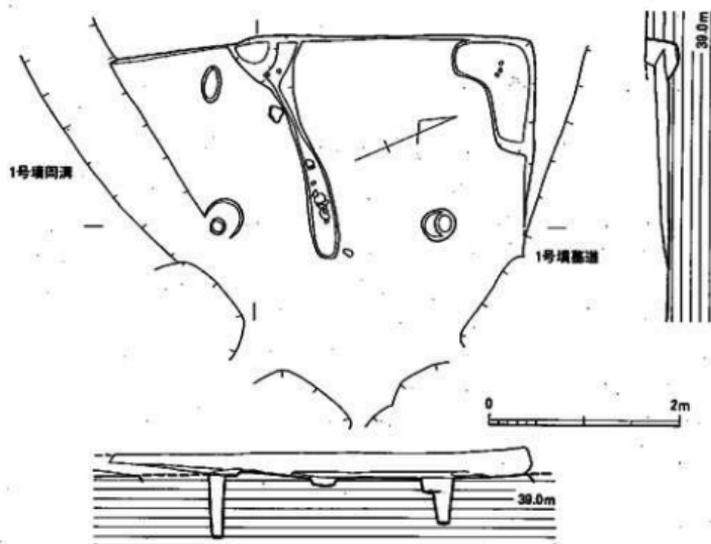
第17図 3号墳下層出土弥生土器実測図 (1/4)

3) 竪穴式住居跡 (図版5、第18図)

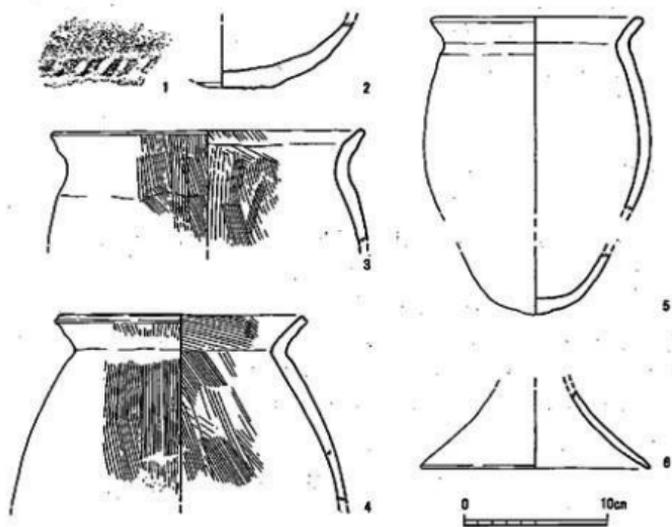
1号墳下層で、本遺跡中唯一の竪穴式住居跡を検出した。古墳築造時の地山整形および周溝の掘削、さらに近世墓によってかなり壊されているが、おおよその形は窺える。

確認できた規模は西辺約4.6m、北辺2m、深さ0.2mで、西辺壁際に屋内土坑があり、それから住居跡中央部へ向かって幅0.1～0.3m、深さ0.1mほどの浅い溝が掘られている。また、検出した2基の柱穴が主柱穴かと思われ、それらが住居跡中央部で対称の位置に配されたとすれば、住居跡の規模は東西長4mほどとなり、南北長はほぼ検出した長さとなる。

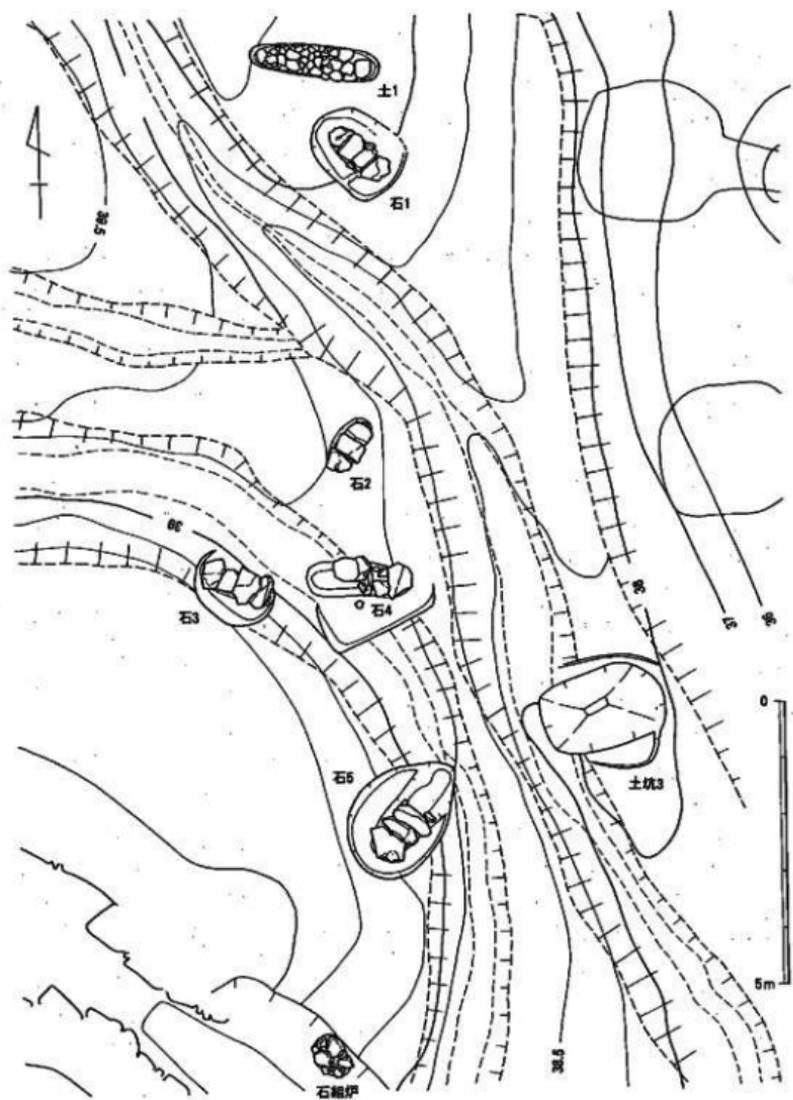
炉跡は確認できなかったが、中央部の小溝中に炭や焼土が多く入っていた。わずかに1軒だけが存在することと炉の不存在は注目すべきなのかも知れない。



第18圖 竪穴式住居跡実測図 (1/60)



第19圖 竪穴式住居跡および関連遺物実測図 (1/4)



第20圖 石蓋土坑墓群配置圖1 (1/100)

なお、北隅などで検出した落ち込みはいずれも浅い。

出土遺物

住居跡中央部で検出した溝などから若干の土器が出土している。なお、この住居跡とは数mの距離を有するが、近世墓の80号墓付近表土から出土した土器もおそらくこの住居跡に伴っていたものと思われるのでここに示す。また、銅剣などと近接して出土した土器もこの住居跡と関連するものと思っている。

土器（図版95、第19図1～4）

1・2は住居跡内部からの出土。1は今所在が不明で、断面図を示しえないが、拓本で大体の様子がわかる。体部に幅広い刻み目突帯を付す小片。2は九底に近いが、なお小さく突出する壺の底部。器表が非常に荒れる。

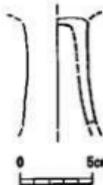
3・4は80号墓付近出土の土器。3は小片で、頸部が緩やかに反転する。4は1/2弱が残存。口縁部はく字形に外折し、口端部に面を持つ。両者ともに粗い刷毛目の使用が顕著である。

4) 墓地

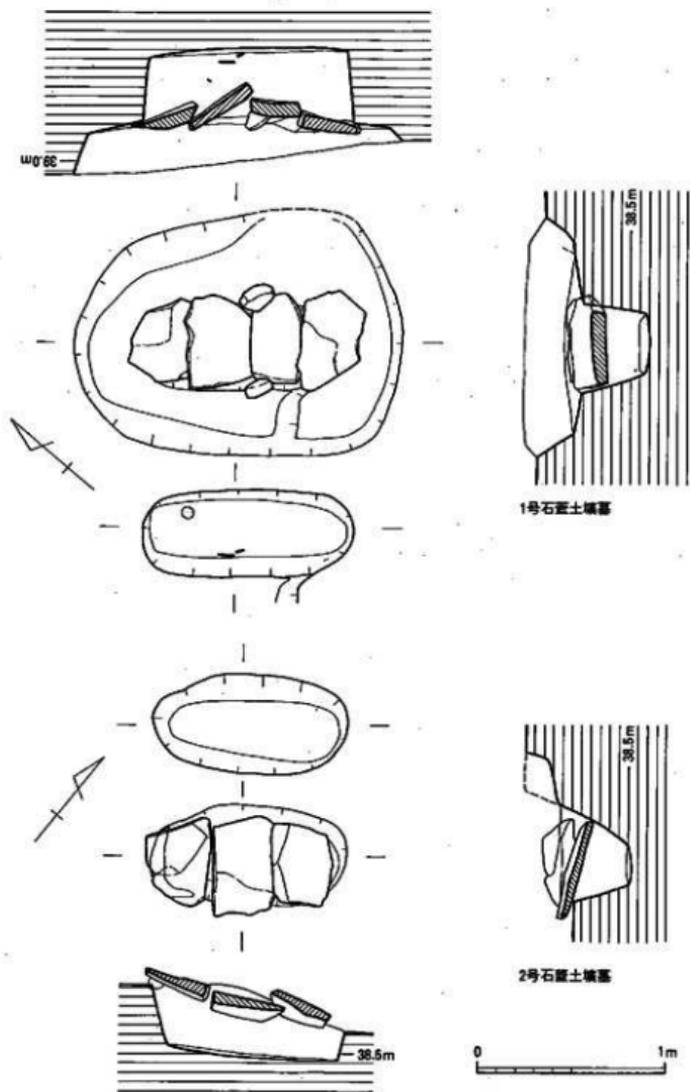
3号墳周辺の段丘肩付付近で5基の石蓋土壙墓を、そして調査区中央付近、農道東部分で群集する18基の土壙墓・石蓋土壙墓群を検出した。

3号墳周辺の石蓋土壙墓群は古墳築造時に一部が破壊されていたが、調査区中央付近の各遺構は非常に良好に保存されていた。それらはほぼ13～14mの範囲でほぼ方形に近い空間におさまり、かつ墓壕の一部が重複することから、本来的に方形墳丘を有していた可能性が高いものと思われる。ただ、その痕跡はつかめず、わずかに北東部で小溝を確認できたものの、一部の墓がそれを切っており、これらの土壙墓群全体に伴うとの確信は得られていない。また、当然ながら概して石蓋を伴わない土壙墓の保存状態が良好である。なお、この群集する土壙墓群の遺構番号は10号から始めているが、「16号土壙墓」はI-18号落とし穴状土坑の誤認であり、欠番としている。

10番台を付した石蓋土壙墓・土壙墓群の位置する周辺で土器片を採集しているのでここで紹介する（第21図）。柱状部の直径が4cm前後を測る高杯の残片で、図示部分は完周する。脚部が発達する、弥生時代終わり頃から古墳時代初めにかけて盛行する器形である。



第21図 石蓋土壙墓群周辺表採遺物実測図（1/4）



第22图 1·2号石室土槨墓实测图 (1/30)

石蓋土墳墓

1号石蓋土墳墓（図版7、第22図）

3号墳北側で検出した。墓墳の一部が雑木の株のために不明瞭で終わったが、この付近で検出した石蓋土墳墓群の中では良好に残存していたものである。

墓墳

長軸1.7m、短軸1.3mほどの不整の隅丸長方形に近い平面形をとる。深さは最大で0.2mを確認できた。

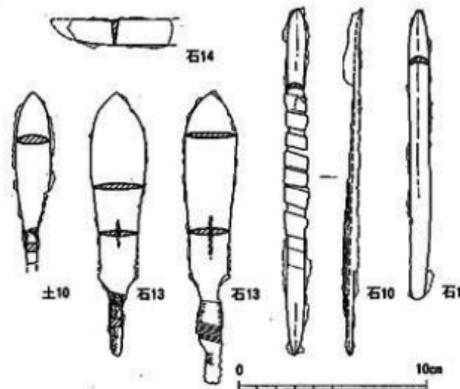
埋葬部

墓墳中央に位置し、それと並行に掘り込まれる。規模は長軸1.1m強、幅0.45m、深さ0.35～0.45mで、平面形は長円形に近い。墓墳底西小口付近で一部にベンガラ散布がみられ、中央付近南辺床面でヤリガンナを出土した。頭位は床面形状から西辺に求められ、ベンガラの散布はやはりそれを意識したものようである。

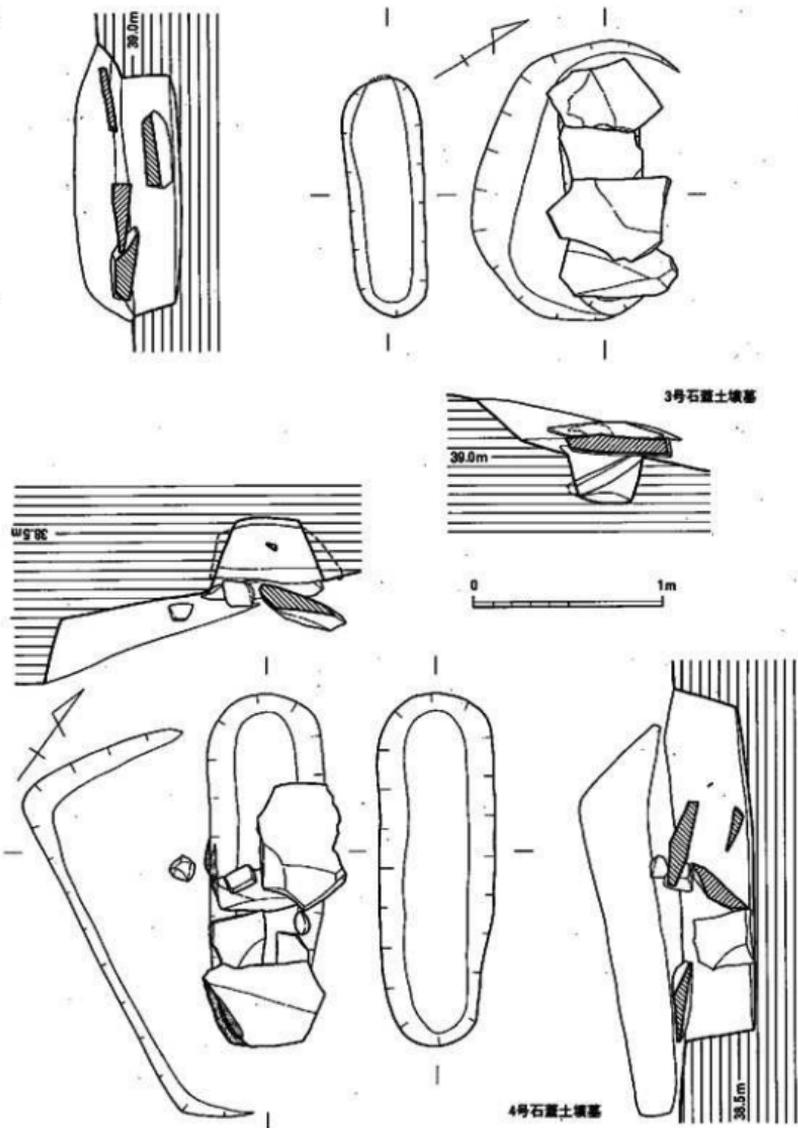
蓋石は4枚の花崗岩板石を主として用い、中央付近に2個の丸石をおくが、閉塞の用を果たしていない。また、花崗岩を使用する例はまだ村内では他に知られていないようである。蓋石は頭位から足位に向かって順次被せており、通常では頭位に最大の石材を用いるが、本例では石材の大きさにさほど差異がない。

出土遺物（図版90、第23図）

全長15.5cm、最大幅1.1cmの大きさと、完存する。刃部先端は鋭利に尖り、身中央部付近までは断面形がU字形となるが、そこから基部にかけての形状ははっきりしない。側面観も反りがなく、直線的である。布目等は見えない。



第23図 石蓋土墳墓・土墳墓出土遺物実測図（1/3）



第24图 3·4号石室土墳墓实测图 (1/30)

2号石蓋土墳墓（図版8、第22図）

1号石蓋土墳墓の南、3号墳周溝の北に位置する。他例と異なり、墓墳が二段とならない。

埋葬部

長軸1m、短軸0.5m強の長円形プランを呈し、深さは最大で0.3mを測る。西小口の蓋石下に粘土が一部使用されていた。床面には赤色顔料が散布されている。

蓋石は安山岩板石を3枚使用する。足位の墓墳が蓋石からはみ出しているが、本来の形状がオーバーハングしていたものであれば蓋石はこれで足りる。規模からみて小児墓であろう。

3号石蓋土墳墓（図版9、第24図）

2号石蓋土墳墓の南、3号墳北側の地山成形面法面中で検出した。古墳築造時の破壊は上段墓墳の前平に限られるようで、最小で留まる。

墓墳

長軸1.5m、短軸1.1m、最大で深さ0.2mが確認できる。現状では長円形に近いが、両小口部分が削平を受けていること、近隣の類似遺構の多くが（長）方形墓墳内の対角線上に埋葬部を配置することから推して、本例も同様の形態をとっていたものと思われる。

埋葬部

長軸1.3m、短軸0.45mの長円形平面をとる。深さは0.25m。断面形状は北西小口部が比較的良好に残存しており、オーバーハング気味に立ち上がる。これも床面に厚く赤色顔料が散布されていた。

蓋石は安山岩板石4枚を使用する。南東側から架構しており、かつその石材が北西小口のものより大型であることから頭位をそこに求められる。

4号石蓋土墳墓（図版9、第24図）

3号石蓋土墳墓の東に接して位置する。やはり古墳築造時に墓墳の多くが破壊され、かつ、蓋石が抜かれている。

墓墳

南東辺の一部がコ字形に検出されたのみである。形状から埋葬部は上段墓墳対角線上に位置していたことがわかる。埋葬部が墓墳の中心に配置すると仮定すればその規模は2.6mの対角線長を有したことになる。深さは最大で0.4m近くが残っていた。

埋葬部

長軸1.8m強、短軸0.6mの長円形平面プランを有する。深さは0.4m近い。壘体はすべて原状を留めないようである。床面は北西側小口が高くなっており、頭位はそこに求められる。また、床全面に薄くベンガラが塗布されていた。

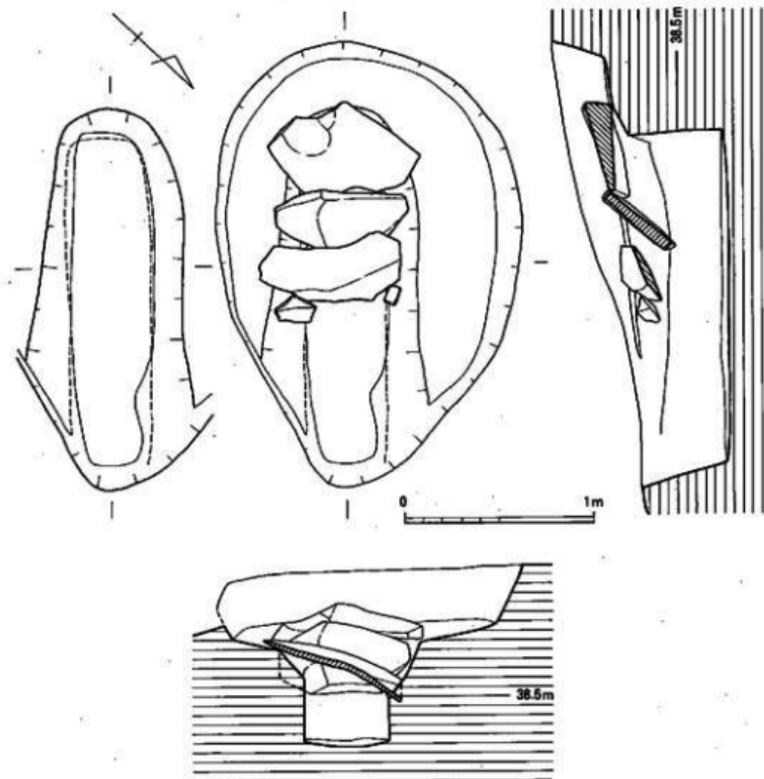
蓋石は安山岩板石4枚が残存するが、古墳築造時に動かされ、あるいは2枚ほどが抜き取られている。埋葬部屑の一部に粘土およびベンガラ散布がみられた。

5号石蓋土墳墓(図版10、第25図)

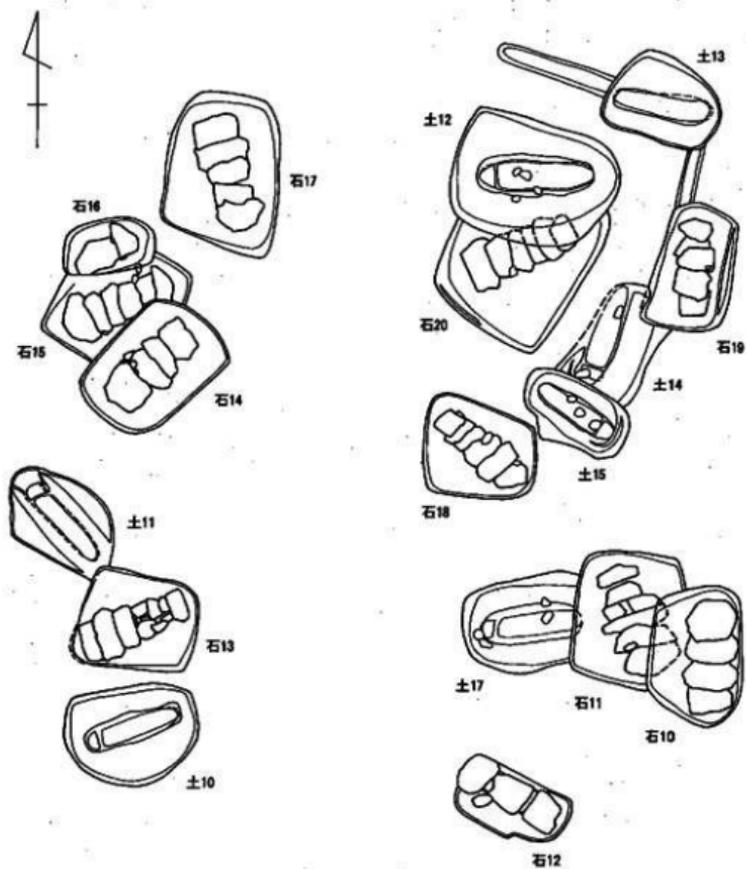
4号石蓋土墳墓の南に位置し、これもやはり古墳築造時に影響を受けている。

墓墳

検出した規模は長軸2.4m、短軸1.6mであるが、北東部分は古墳の周溝掘削で破壊されており、本来は長軸が3m近かったものと思われる。平面形は長円形に近く、深さは最大で0.3mほどが残る。



第25図 5号石蓋土墳墓実測図(1/30)

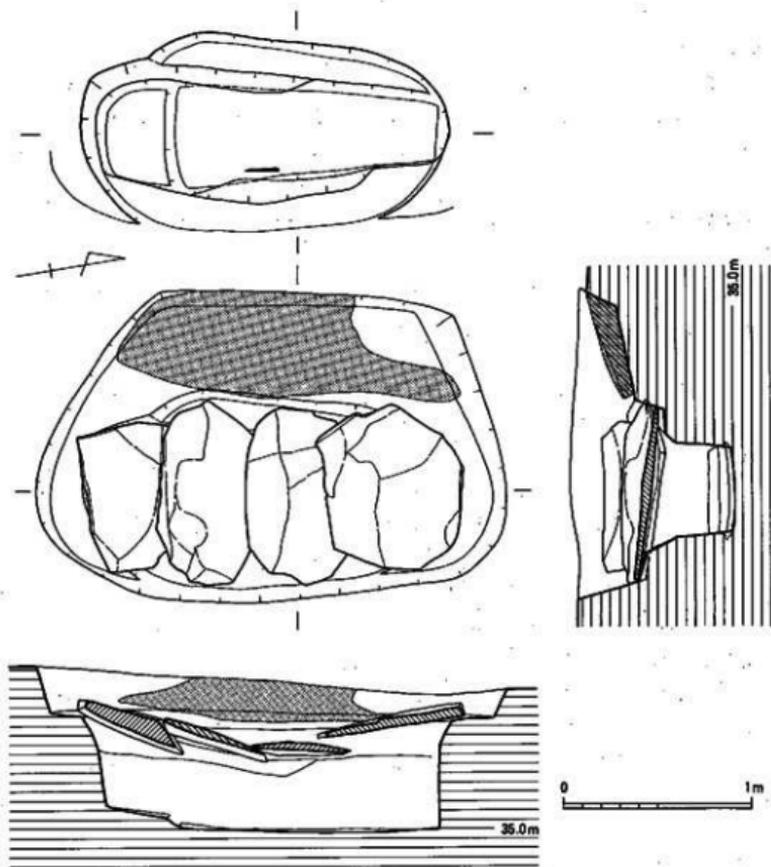


第26图 石蓋土墳墓群配置图2 (1/100)

埋葬部

床面規模で長軸1.8m、幅0.4m、深さ0.6mを測り、平面形は隅丸長方形に近いものとなる。形状も本来の姿をかなり留めるようで、全体の大部分がオーバーハングして立ち上がる。床や壁にベンガラはまったく認められない。

蓋石は3枚の安山岩板石が残存するが、本来はさらに3枚ほどが架構されていたのであろう。頭位は床面レベルや石材の被せ方からみて南西小口に求められる。



第27図 10号石蓋土墳墓実測図 (1/30)

10号石蓋土墳墓（図版12、第27図）

11号石蓋土墳墓を切って作られる。

墓塚

長軸2.5m、短軸1.65mの平面台形に近い変形プランをもつ。埋葬部はその東端に偏して配置し、西側は黄色粘土が敷かれていた。ちょうど粘土が置かれた部位は11号石蓋土墳墓の蓋石を覆うような格好となっている。おそらく10号石蓋土墳墓の墓塚掘削時に11号石蓋土墳墓の蓋石を露出したことから粘土で再度被覆したものと思われる。

埋葬部

床面で長軸1.8m、短軸0.5mほどの規模で、深さは0.6mを測る。平面形はほぼ隅丸長方形に近いが、頭位が幅広となる。また、頭位部分には長さ0.3m、高さ0.1m弱の枕が削り出されていた。床面には薄くベンガラが塗布されているが、四周の壁体には塗布されていない。

出土遺物（図版27・90、第23図）

図のような位置でヤリガンナが床面から出土した。細く尖った部分を南、頭位方向に、そして腹部を上方向にしていた。

全長18.5cm、幅1cmの大きさで、背（凸部）に樹皮がよく残っている。樹皮は腹部には遺存しない。断面形はほぼ全体がU字形となり、幅広部分が小さく反り上がる。

11号石蓋土墳墓（図版12、第28図）

17号土墳墓を切り、10号石蓋土墳墓に切られる。

墓塚

現状で長軸2.35m、短軸1.9mの長方形墓塚である。ただし、短軸は10号石蓋土墳墓に切られているために、本来は2m強の規模であったと思われる。深さは最大で0.3mほどが残る。

埋葬部

長円形に近い平面形を有し、床面の規模は長軸1.8m、短軸0.4m、深さは0.6mが残る。これも頭位に高さ0.1mほどの削出しの枕が付設される。また、床面には厚さ5cmほどの赤色顔料を交えた土が敷かれていた。

四周の壁体は上半が大きく崩落するが、下半は比較的良好に遺存している。それによれば断面形状はやはりフラスコ型にオーバーハングし、ここでは壁にも赤色顔料が塗られている。

蓋石は安山岩板石を6枚使用する。ここでは他と異なり、足位の方から順次蓋石を架構したようである。

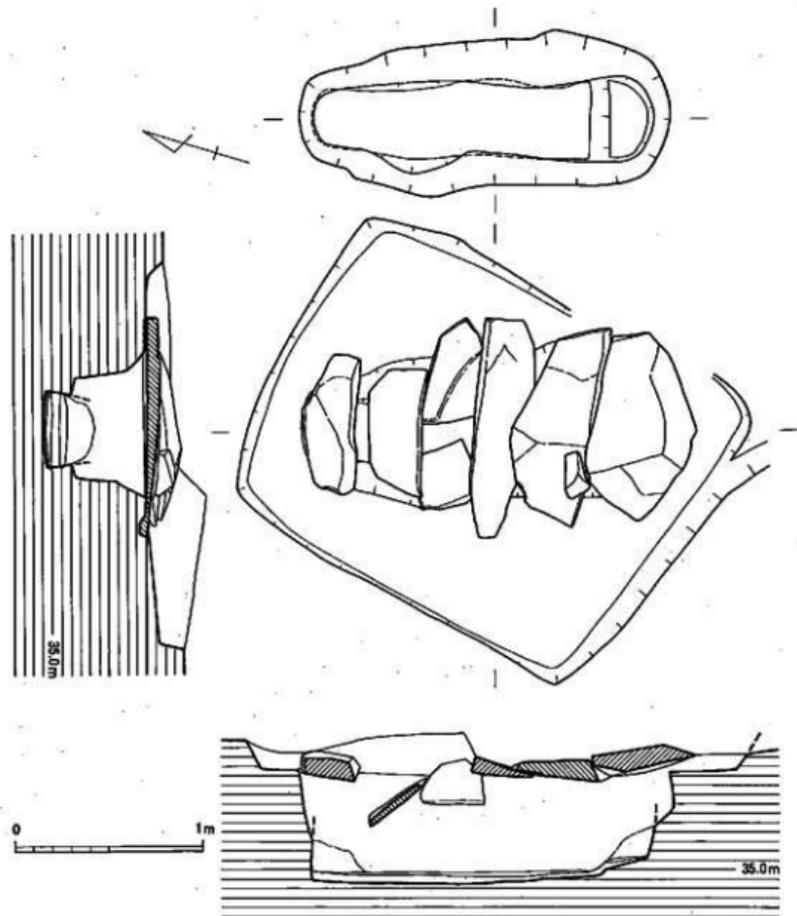
12号石蓋土墳墓（図版13、第29図）

この地区で検出した遺構がほとんど切合い、あるいは非常に近接して配置するのに対して、

唯一距離を置いて孤立するかのような位置にある。また、上段墓城がこれのみ非常に浅いため、重機で引っかけ、結果この地区の遺構発見の契機となったものである。

墓城

長軸2m強、短軸1.1mほどの不整隅丸長方形プランを有し、深さは最大で0.1mに過ぎない。この墓城の深さは、本来これらの遺構に墳丘が存在したことを示しているのであろう。



第28図 11号石蓋土墳墓実測図 (1/30)

埋葬部

墓坑の北東辺に偏して位置し、これは他の遺構と異なり、三段墓坑というべき形態となる。中段は上端で長軸1.7m、短軸0.6mほどの長円形プランを呈し、深さは0.3m強の規模である。その北西小口部分に接するように最下段の埋葬部が掘削される。その規模は長軸1.55m、短軸0.3m、深さ0.1m強で、平面形が狭長な長円形となる点で特異な形態を示す。これも床面に薄く赤色顔料を敷き、壁にも顔料を塗る。頭位は幅広となる部分であろう。

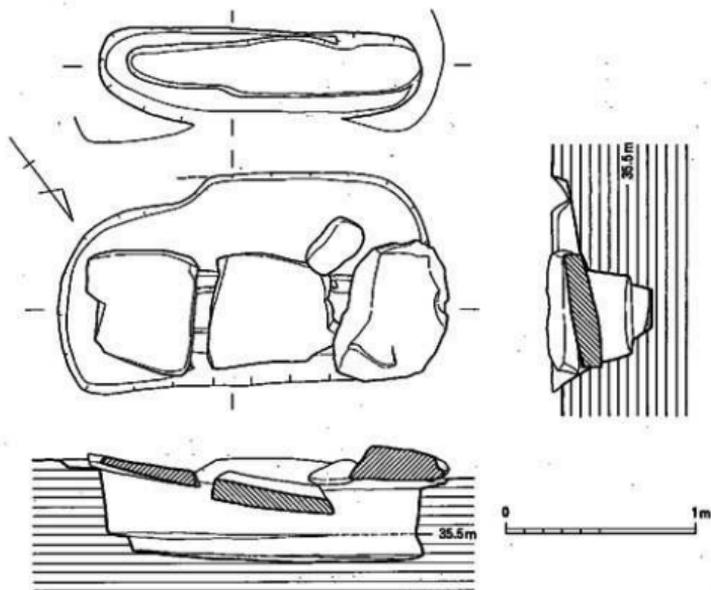
蓋石は安山岩板石を3枚使用している。上記したように重機で引っかけたために、図示した位置は第一次的なものではない。

13号石蓋土墳墓（図版14、第30図）

11号土墳墓の一端を切り、10号土墳墓に近接する。

墓坑

2.05×1.65mほどの不整長方形プランを呈する。深さは0.2~0.3m。この石蓋土墳墓で特徴的なことは、埋葬部周囲の墓坑底に黄色粘土が敷き詰められている点である。ことに北側では

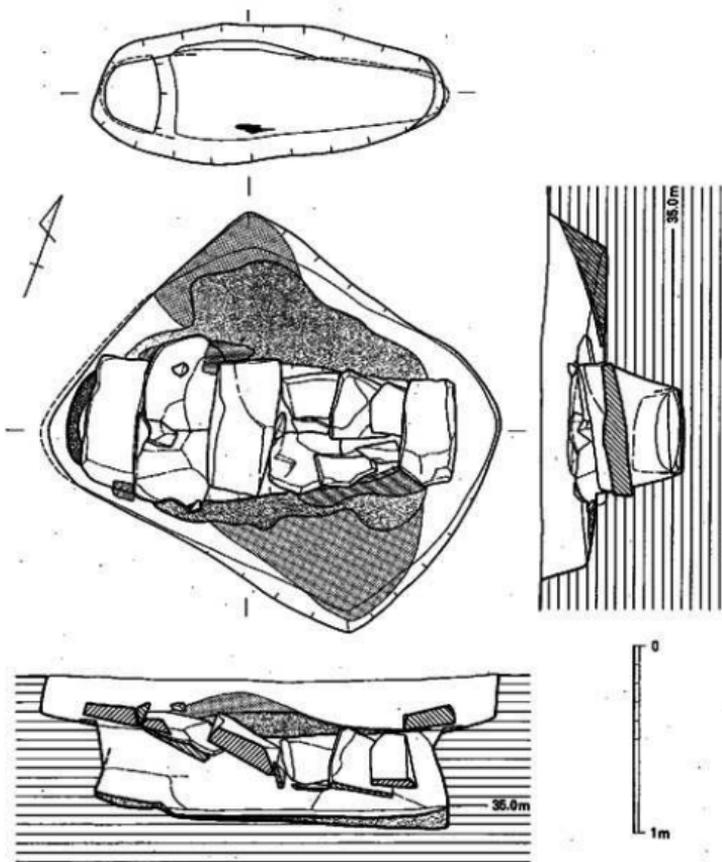


第29図 12号石蓋土墳墓実測図 (1/30)

墓壇肩付近から埋葬部に向かって傾斜するもの特に厚く施されていた。そして埋葬部に接する付近ではその上面に赤色顔料が塗布されるという入念ぶりである。

埋葬部

墓壇対角線上に配置され、床面規模は長軸約1.9m、短軸は最大で0.45m、深さは0.5mを測る。平面形は頭位付近では隅丸矩形を呈し、足位付近は丸くなる。また、両小口部分では一部で原状を残し、それによると断面形はフラスコ状にオーバーハングしていたようである。長側辺の壁体も同様である。



第30図 13号石蓋土壇墓実測図 (1/30)

頭位にはやはり削出し枕が付設され、床面には厚く赤色顔料を交えた土を敷き詰めていた。壁体も赤く塗られている。

石蓋は安山岩板石を7枚使用している。両小口の2点を除いてすべてが割れ、あるいは落ち込んでいるが、部分的に確認できる箇所では頭位から順次架構したようである。また、石蓋上や塚で検出した目張り粘土は、墓墳底に厚く敷かれた粘土と違って青白い精良なものを使用している。

出土遺物（図版90、第23図）

図のような状態で、ほぼ床面に近いところから鉄鏝2点が出土した。いずれもほぼ同形同大である。柳葉式有茎鏝で、最大幅は2.9cmで切先付近にある。同部の厚さは0.3cmである。鏝身長は約10cmで、刃に近い部分中央に鏝で彫り込んだような痕跡があるが、明瞭な透孔とはならないようである。いずれも茎に樹皮が残っている。

14号石蓋土墳墓（図版15・16、第31図）

15号石蓋土墳墓を切り、16・17号石蓋土墳墓と近接する。墓墳隅に15号石蓋土墳墓の蓋石の一部が覗く。

墓墳

長軸2.5m、短軸1.7m前後の隅丸長方形に近い平面形となるが、長辺が直線的であるのに対し、短辺は胴張りをもっている。深さは0.2m前後である。

埋葬部

墓墳中央部に位置し、床面規模は長軸1.75m、幅が0.2～0.35m、深さ0.5m弱である。平面形は胴張り隅丸長方形ともいべきもので、頭位・足位の幅は当然異なるが、小口部壁体に弱い稜線が入る。壁体の立ち上がりはオーバーハングする。これも床面には低い削出し枕が付設され、やはり赤色顔料が敷き詰められる。

蓋石は安山岩板石4枚を使用し、若干の小石を併用する。また、この例では頭位の石蓋が最初に架構されたものではない。

出土遺物（図版90、第23図）

頭位の石蓋の北隅付近で刀子を検出した。石蓋検出中のことであったために、不用意に破壊し、刃部が残るのみである。

残存長5.5cm、背幅0.3cmを測る。破断面はいずれも新しく、発掘時に失ったようである。

15号石蓋土墳墓（図版15・17、第32図）

14・16号石蓋土墳墓に切られる。

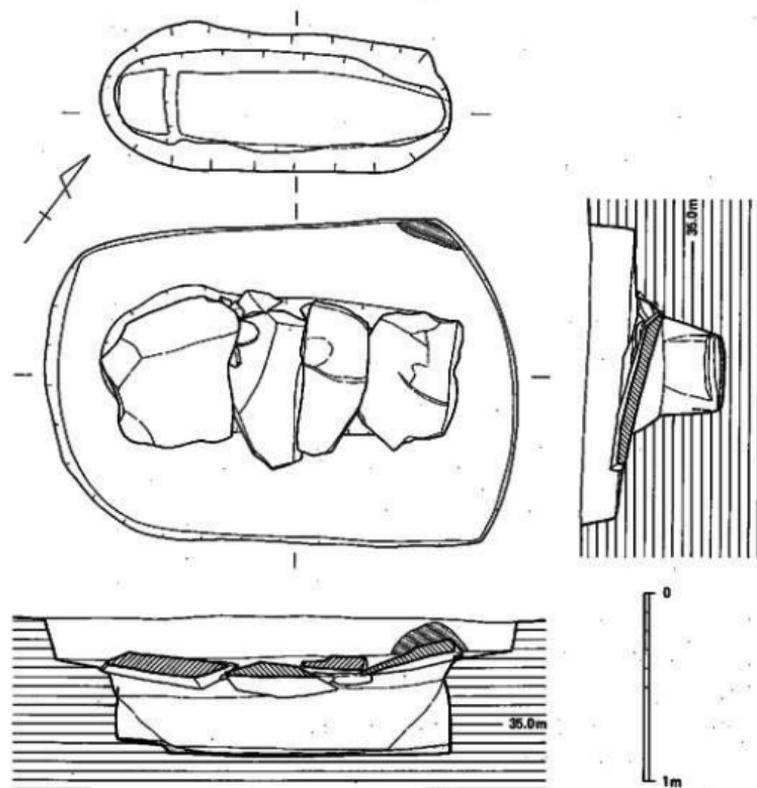
墓墳

両側をそれぞれ切られるために正確な数値は不明であるが、およそ一辺2.2mほどの方形プランであったようである。深さは0.15mほどであるが、埋葬部へ向かって傾斜するようで、検出面から埋葬部肩までの深さは0.3m近くなる。

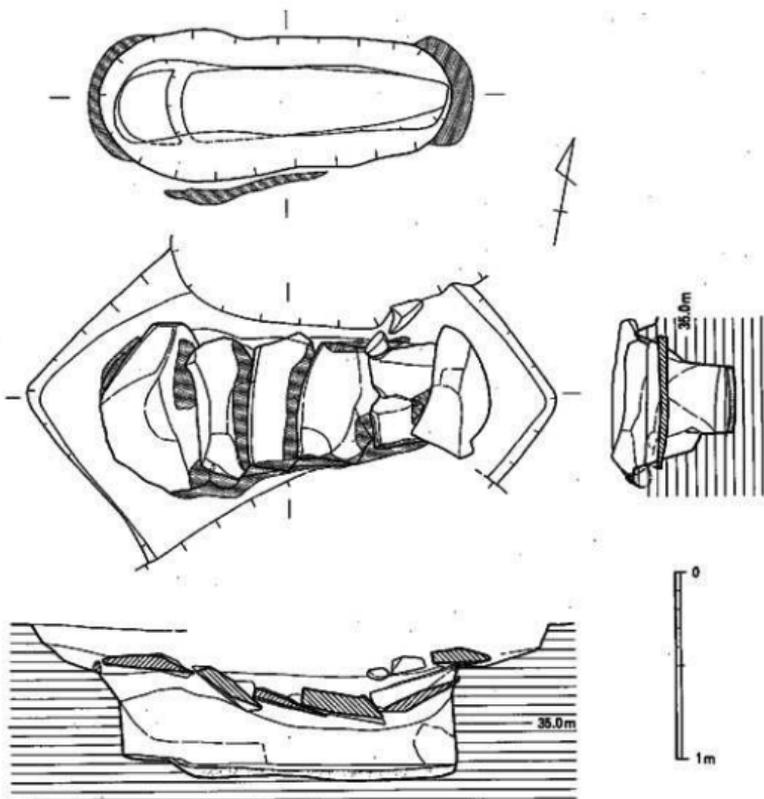
埋葬部

床面規模で長軸1.75m、最大幅0.4m、深さ0.6mを測る。平面形は頭位部分が幅広く、足位付近がすばまって楕円形に近い。壁体は両小口がとくに良好で、ほぼ垂直ないし若干オーバーハング気味に立ち上がる。周壁も同様である。

蓋石は6枚の安山岩板石を主とし、小石を若干併用する。蓋石の目罫りに青白色粘土を多用している。



第31図 14号石蓋土墳墓実測図 (1/30)



第32図 15号石蓋土墳墓実測図 (1/30)

16号石蓋土墳墓 (図版15・18、第33図)

15号石蓋土墳墓を切るが、蓋石には触れていない。

墓域

長軸1.6m、短軸0.9mの平行四辺形に近い不整隅丸長方形プランを有し、深さは約0.3m。この土墳墓群中最小のものである。

埋葬部

上面では長軸1.15m、短軸0.65mの長円形プランとなるが、床面は長軸1.15m、短軸0.35mで、両小口ともに丸くなる砲弾形に近い形状となる。深さは0.4m強で、これも両小口部分は良好に遺存する。床面にはやはり削出し枕を付し、赤色顔料を交えた土を厚く敷く。

蓋石は2枚の安山岩板石を用い、1枚は通常と異なって縦位に使用している。石下には青白色粘土を使用し、東小口部分ではベンガラの塗布もみられた。

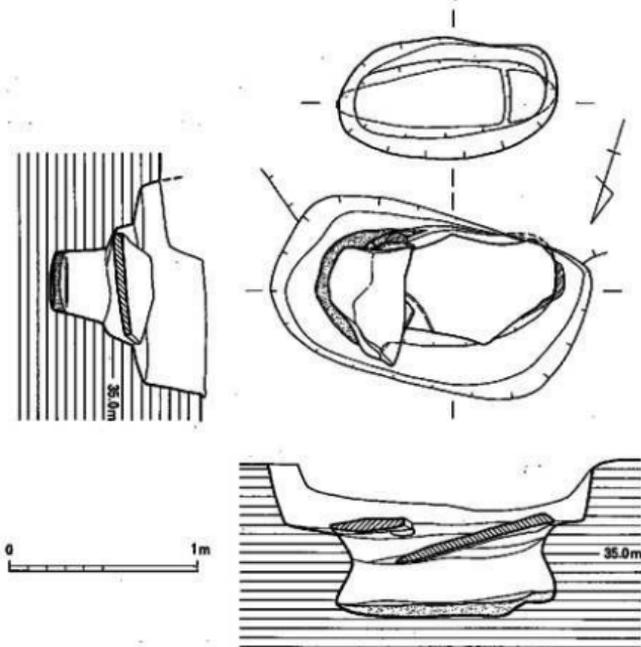
17号石蓋土墳墓（図版15・18、第34図）

14～16号石蓋土墳墓のすぐ北に隣接するが、切合はない。

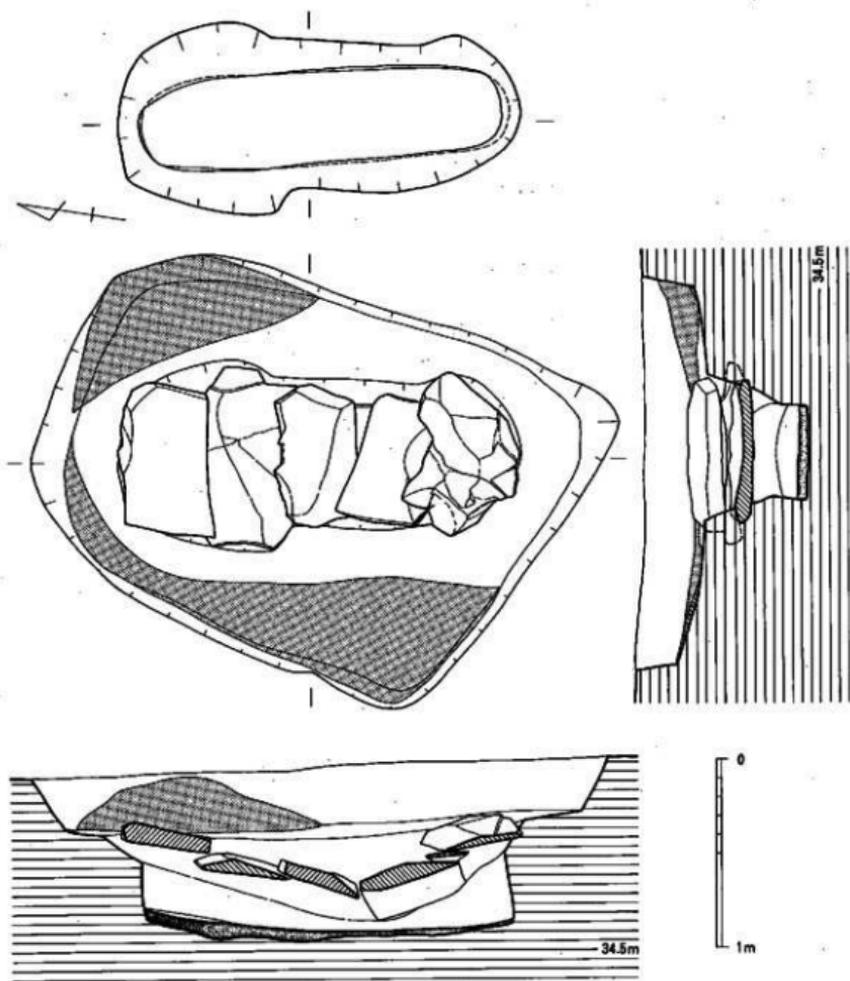
墓墳

長軸2.65m、短軸約2mの不整長方形プランを有し、深さは約0.3mを測る。

ここでも埋葬部の周囲に黄色粘土を多用していた。西隅では厚さが薄いものの、埋葬部外周の0.2mほどを除く墓墳底のほぼ全面に、東隅では北半部に集中して厚く敷かれている。東南から西南部にかけて見られないのは墓墳との間隙が乏しいからであろうか。



第33図 16号石蓋土墳墓実測図 (1/30)

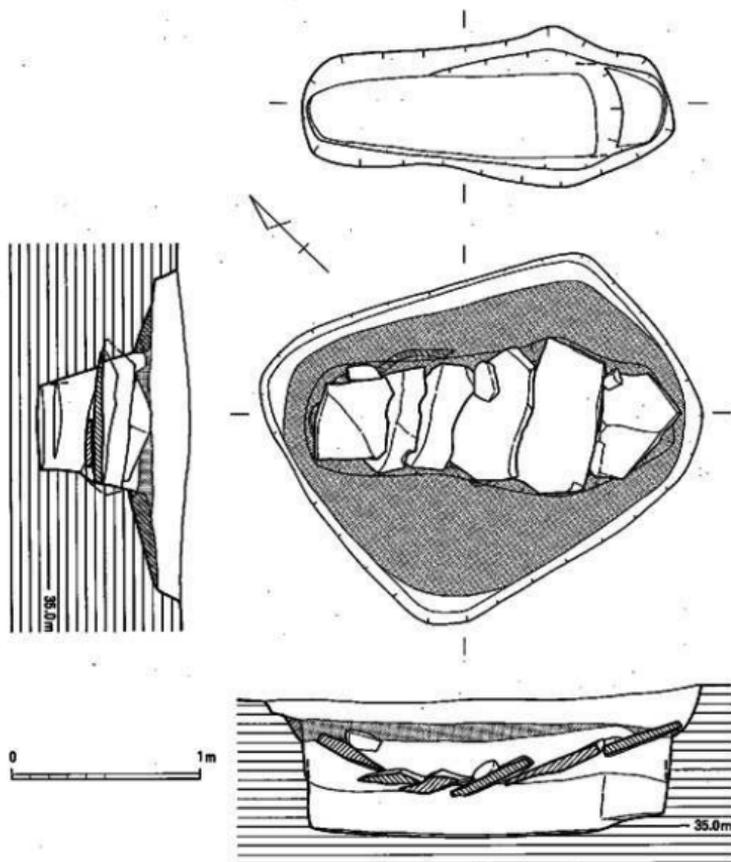


第34图 17号石舍利基实测图 (1/30)

埋葬部

墓壇の対角線上に配置され、床面長1.95m、幅0.5mの整った長円形平面を呈する。床面に厚くベンガラを交えた土を敷くことは他と同様であり、北小口に枕状のわずかな高まりも認められたが、これははっきりとしたものではなかった。壁体の立ち上がりも他と同様である。

蓋石は5枚の安山岩板石を使用するが、胸位付近を最初に被せ、その後に頭位あるいは足位



第35図 18号石蓋土壇墓実測図 (1/30)

に向かって順次覆う。通常の例と架構順が異なっている。

18号石蓋土墳墓（図版19、第35図）

11号石蓋土墳墓の北西に近接するが、それらの一群よりは後述する15号土墳墓などとの関係が強いような位置にある。

墓墳

長軸2m、短軸1.7mの不整長方形平面プランを有し、深さは最大で0.2m強を測る。墓墳床面の大部分に黄色粘土を敷くが、墓墳外周では途切れている。17号石蓋土墳墓の場合途切れていた埋葬部周辺までそれは及んでいた。墓墳底がかなりの傾斜を有しており、この場合は墓墳を略水平に保つために使用されたように見える。

埋葬部

床面長1.85m、最大幅0.45m、深さ0.5mを測る。平面プランは頭部が幅広となる長円形に近い。頭部の削出し枕の付設や壁体の断面形状は他と同様であるが、この墓の場合は床面にごく薄くベンガラを使用するのみである。蓋石は6枚の安山岩板石を使用し、頭位から足位に向かって順次架構する。やはり小石を3個添えているが、役割はわからない。下面に赤色顔料を塗っていない。

19号石蓋土墳墓（図版20、第36図）

18号石蓋土墳墓の北東に位置し、14号土墳墓と小溝を切る。

墓墳

長軸2.25m、短軸1.4mのやや歪んだ隅丸長方形プランを有し、深さは0.2mほどである。これも床面に黄色粘土を使用しているが、その詳細は記録していない。

埋葬部

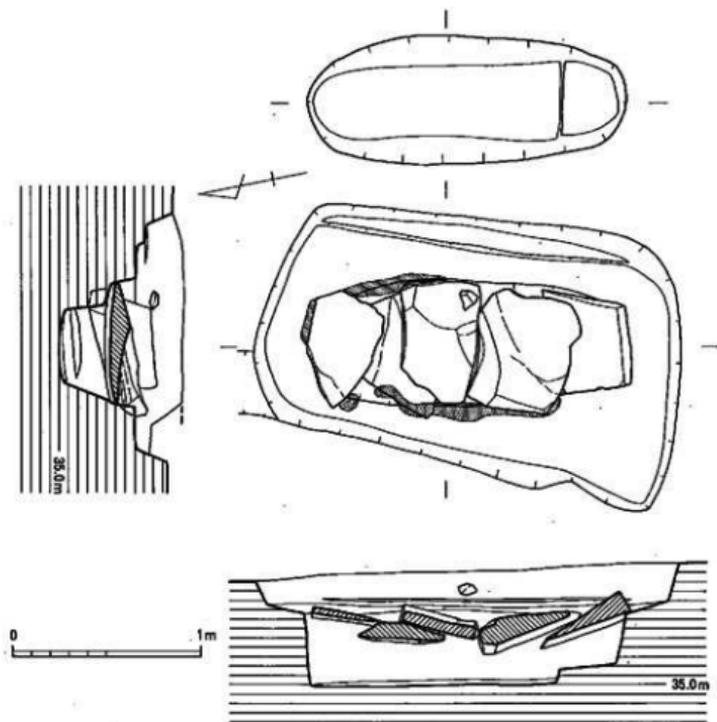
墓墳の幅が狭く、明瞭ではないが対角線上に配置しているようにも見える。

床面規模は長軸1.6m、幅0.4m、深さ0.4m規模で、形状は頭位・足位ともに同規模の幅を有する長円形となる。頭位には0.1m弱の高さの削出し枕を付設する。床面には薄くベンガラの層が観察できた。

蓋石はやはり安山岩板石を5枚使用するが、架構は順次なされていない。蓋石からやや浮いた位置で検出した小礫は標石であろうか。蓋石下面にはベンガラが付着していない。

20号石蓋土墳墓（図版21、第37図）

19号石蓋土墳墓の西に近接し、12号土墳墓に切られる。この石蓋土墳墓の北および東にある幅0.3mの浅い小溝は、方位が19号石蓋土墳墓の墓墳と並行であり、12号土墳墓の北辺とも平



第36図 19号石蓋土墳墓実測図 (1/30)

行な位置関係にあることから、この2基を画するものであるかも知れない。

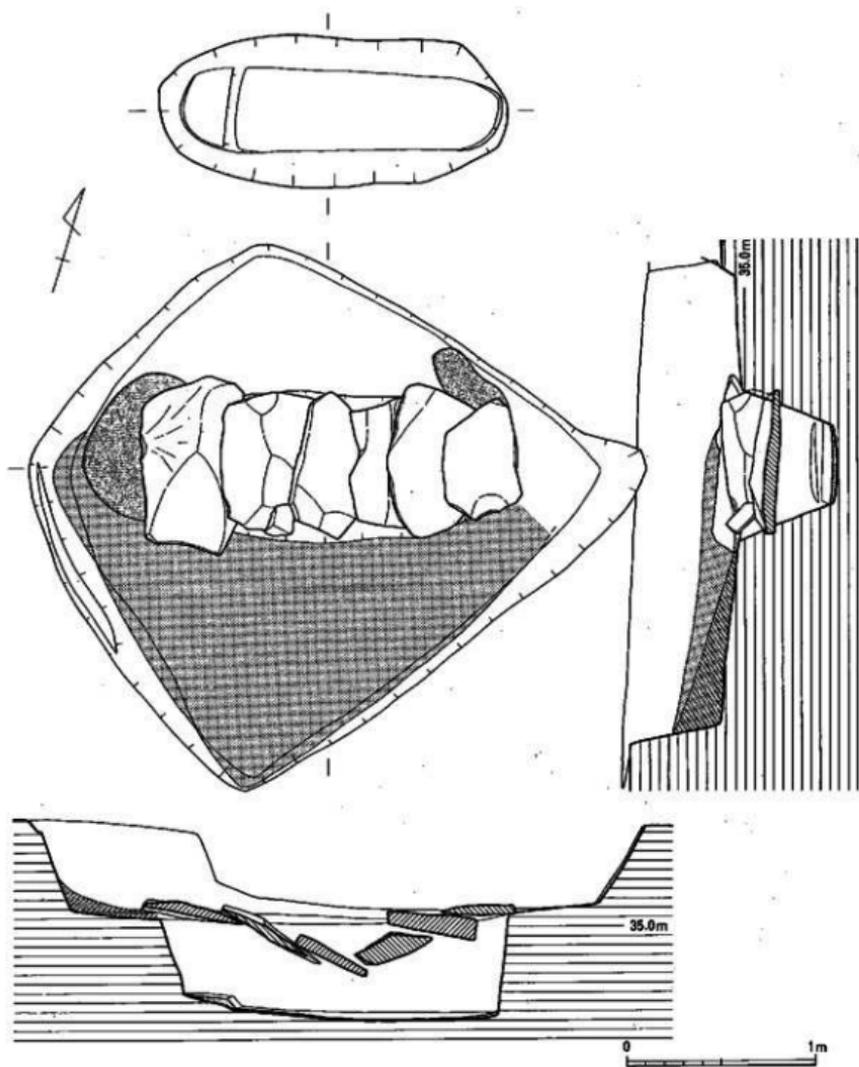
墓塚

一辺長2.1~2.8mの菱形に近い不整四辺形プランを呈し、深さは0.5m近い。規模では本遺跡中最大のものである。

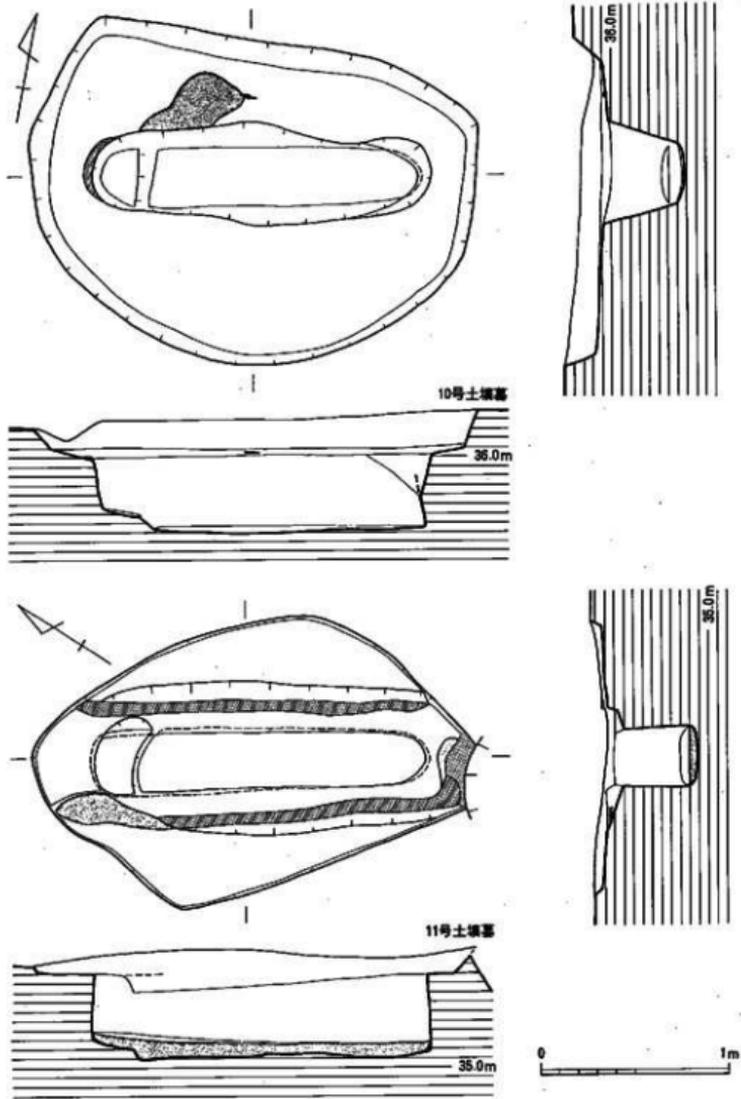
埋葬部南の墓塚底には一面に黄色粘土が敷き詰められ、それは壁体付近で厚く、埋葬部に向かって薄くなる。この黄色粘土は北側では観察できなかった。また、頭位付近および足位付近の墓塚底にはベンガラが薄く散布されていた。

埋葬部

墓塚対角線上に配置された石蓋土坑で、床面規模は長軸1.7m、幅0.45m、深さ0.55mを測り、



第37图 20号石室土坑墓实测图 (1/30)



第38图 10·11号土槨墓实测图 (1/30)

両小口の形状がほぼ同様な長円形プランとなる。

頭位には削出し枕が付設し、床面には厚くベンガラを交えた土を敷く。壙体は両小口で一部が遺存し、それによればやはりオーバーハング気味に立ち上がり、ベンガラを塗布する。

土墳墓

10号土墳墓（図版22、第38図）

13号石蓋土墳墓の南に近接して位置する。

墓墳

長軸2.35m、幅1.7m、深さ0.2mの規模を有し、平面的には北半が直線的、南半が弧を描く不整形プランとなる。

頭位付近の北側墓墳底にはベンガラが散布され、その近くから鉄鏝が出土している。

埋葬部

墓墳北辺のラインとほぼ並行に、その中央部に配置される。床面規模は長軸1.7m、短軸0.3m、深さ0.4mで、平面形は両小口の形状が似る長円形となる。

床面に削出し枕が付設されるが、ベンガラは使用されていない。

天井には木蓋があったようで、頭位小口に青白色粘土が一部遺存していた。

出土遺物（図版27・90、第23図）

茎先端を発掘時に欠損したが、残存長9.2cm、最大幅1.9cmの柳葉形の鉄鏝である。厚さは0.5cmを測る。関がなく、鏝身から茎へと連続的に移行する。また、茎に樹皮の一部が残る。

11号土墳墓（図版23、第38図）

13号石蓋土墳墓によって墓墳の一部が切られる。

墓墳

長軸1.8m、短軸1.4m、深さは最大で0.1m強の規模を有し、平面形は隅丸菱形に近い不整四辺形となる。墓墳が非常に浅い点は12号石蓋土墳墓と同様墳丘の存在を示すものであろう。

南隅に黄色粘土が置かれ、一部にベンガラが散布される。

埋葬部

墓墳対角線上に配置される土墳墓で、床面規模は長軸1.8m、短軸0.3mの長円形プランである。床面に削出し枕を付設し、厚く赤色顔料を交えた土を敷き詰める点は他の多くと同様である。また、この土墳墓は非常に壙体の遺存状況が良好であり、すべての壁がオーバーハングして立ち上がる様子がよくわかる。

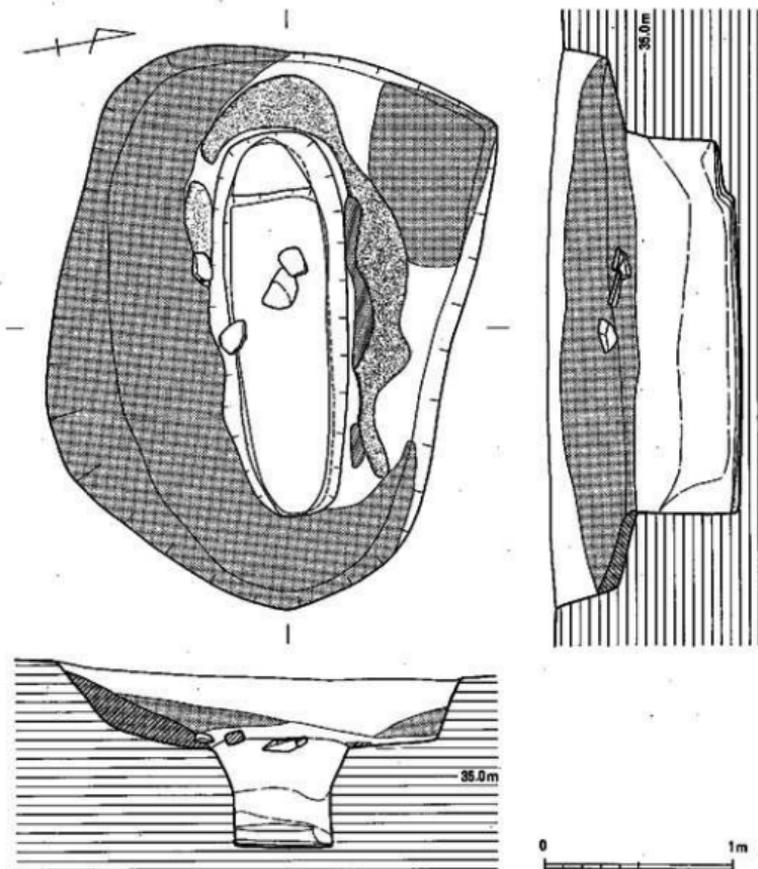
蓋には木蓋を用いたようで、目張りに用いられた青白色粘土がこれも良好に残存していた。

12号土墳墓 (図版24・27、第39図)

20号石室土墳墓を切っている。上記したように、この北および東をL字形に廻る小溝はこれら2基の墓を囲するものと思われる。

墓墳

長軸2.9m、短軸2.1m、深さ0.3m強の規模を有する。平面形は隅丸の不整四辺形といえるが、



第39図 12号土墳墓実測図 (1/30)

明瞭なコーナーは1ヶ所に過ぎず、他はいずれも丸みが強い。20号石蓋土墳墓と重複する付近では掘形の傾斜が緩くなっており、意識的に石蓋の露出を避けたものかと思われる。

床面にはほぼ全面に黄色粘土を敷くが、ここでもその上面は中央に向かって傾斜し、壁の近くで厚い。埋葬部に近い部分ではその上面に赤色顔料が散布されていた。

埋葬部

床面で長軸2m、短軸0.5mを測り、深さは0.5m強である。平面形は長円形に近く、両小口ともに幅が広がる。頭位に削出し枕、そして床面には厚く赤色顔料を交えた土を敷く。これも壁体の遺存が良好で、四周ともにオーバーハングしている。

蓋の目張りの粘土が若干検出できた。また、埋葬部上面で拳大の小礫4点が検出されている。埋葬部が陥没したことによって標石が転落したものであろう。

13号土墳墓(図版24、第40図)

12号土墳墓の北東に近接し、20号石蓋土墳墓・12号土墳墓を区画すると思われる小溝を切っ
て営まれる。

墓壇

長軸2.05m、短軸1.5m、深さ0.2m強の規模を有し、平面形は不整四辺形である。といって
も、南半は隅丸長方形の形状を留め、北半は隅丸三角形に近い。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

埋葬部

床面で長軸1.8m、幅0.4m、深さ0.4mを測る。平面形は両小口が尖り気味となる長円形を呈
し、壁体は良好に残る。

床面に削出し枕を有さず、かつベンガラも一部に散布するのみで、他の例に比して薄葬とい
える。頭位は床面の形状から見て東に求められよう。

14号土墳墓(図版25、第40図)

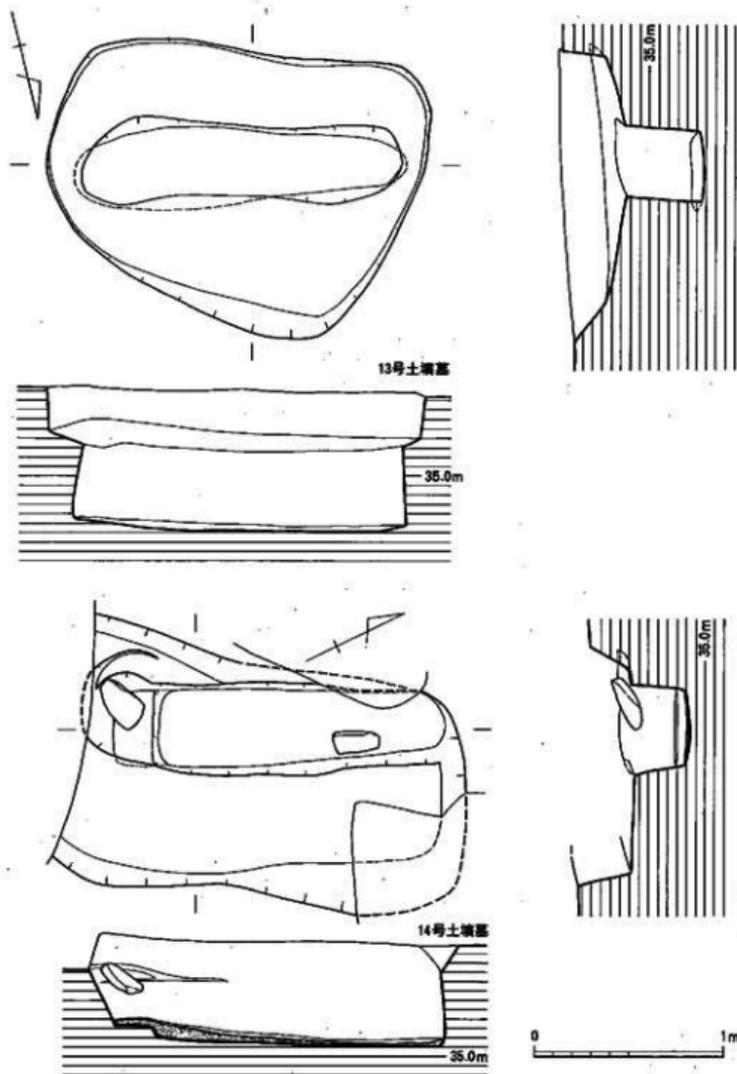
19号石蓋土墳墓および15号土墳墓に墓壇の一部を切られる。また、墓壇は意識したのか、20
号石蓋土墳墓の東辺に揃うようである。また、重複していたI-18号土墳との切合関係を誤り、
一部が不明瞭に終わった。

墓壇

15号土墳墓に南辺のすべてを切られるために長軸長は不明であるが、残存規模は長軸2.2m、
短軸1.4m、深さ0.3mを測る。平面形は不整四辺形のものである。

埋葬部

墓壇の西に偏して位置し、床面規模は長軸1.75m、幅0.4m、深さ0.3mを測る。平面形は隅
丸長方形に近い。床面には削出し枕を付設し、赤土を厚く敷き詰める。



第40图 13·14号土坑墓实测图 (1/30)

埋葬部上面付近で検出した礫は標石の転落したものである。この状態から推して埋葬部の両小口付近に置かれていたものであろう。

15号土墳墓（図版26、第41図）

14号土墳墓を切り、18号石蓋土墳墓に近接する。

墓墳

長軸2.1m、短軸1.05m、深さ0.2mほどの不整隅丸長方形プランを有する。南西側長辺の張り出し部は18号石蓋土墳墓の掘形を避けるような位置にあり、石蓋土墳墓に後出するのではと疑わせる。

埋葬部

床面で長軸1.65m、幅0.35m、深さ0.4mを測り、平面形は両小口の形状が似る長円形となる。南東小口に削出し枕が付設され、そこにベンガラが散布されているが、その他の床面や壁体には赤色顔料は見られない。壁体の遺存状態は非常に良好である。

床面近くまで石材が入り込むが、これも標石の転落したものであろう。

17号土墳墓（図版26、第41図）

11号石蓋土墳墓に切られる。

墓墳

東辺を11号石蓋土墳墓に切られるために長軸長は不明であるが、残存する長さは約2.2m、短軸1.7m、深さ0.2mを測り、平面形はややいびつな隅丸長方形となる。足位に近い部分の墓墳底に黄色粘土とベンガラの散布が見られた。

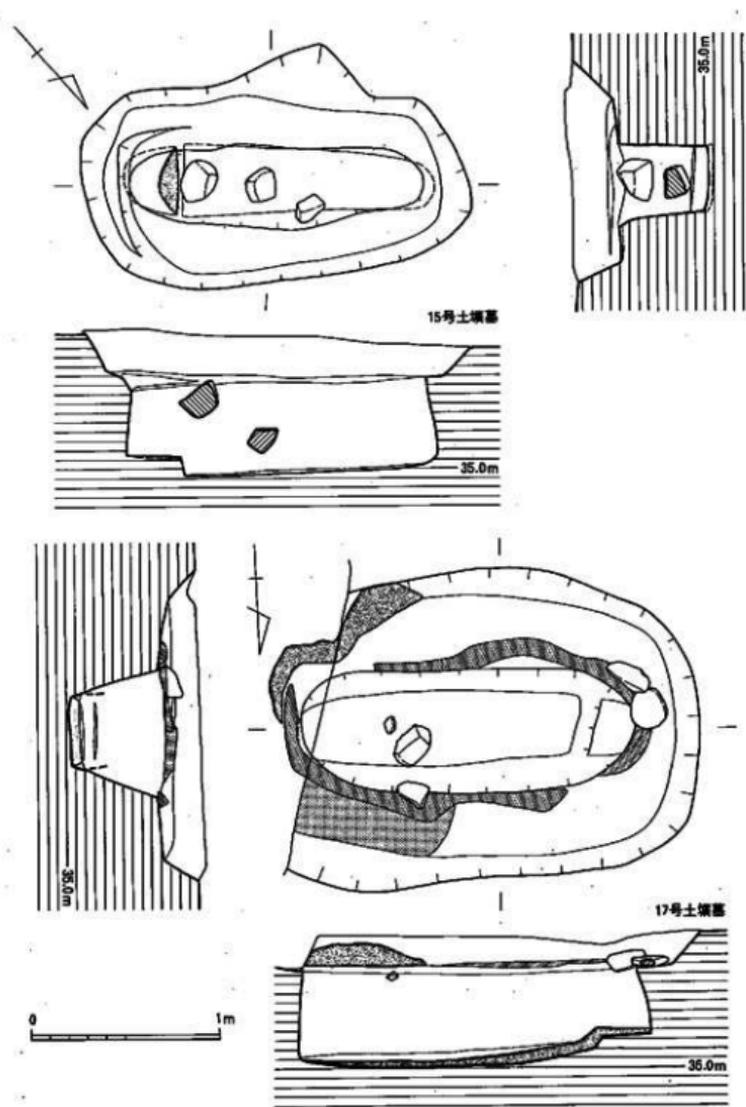
埋葬部

床面で長軸1.9m、幅0.4m、深さ0.5mを測り、平面形は長円形に近い。床面には枕を削出し、赤色顔料を交えた土を厚く敷き詰めている。

この肩部には青白色粘土がほぼ全周に薄く残っていた。また、埋葬部上面で検出した数点の礫はやはり転落したものであろうが、頭位の埋葬部肩にある2点の礫については本来的に置かれたものか、転落したものか確信できていない。

5) 小 結

以上に説明を加えた（石蓋）土墳墓群には祭祀土坑も伴わず、個別墓に供献された土器もまったくないが、わずかに出土した鉄製品や墓の内容、そして周辺で採集された土器などから見て弥生時代の終わり頃～古墳時代の初め頃の間に営まれたものと考えて大過なかならう。



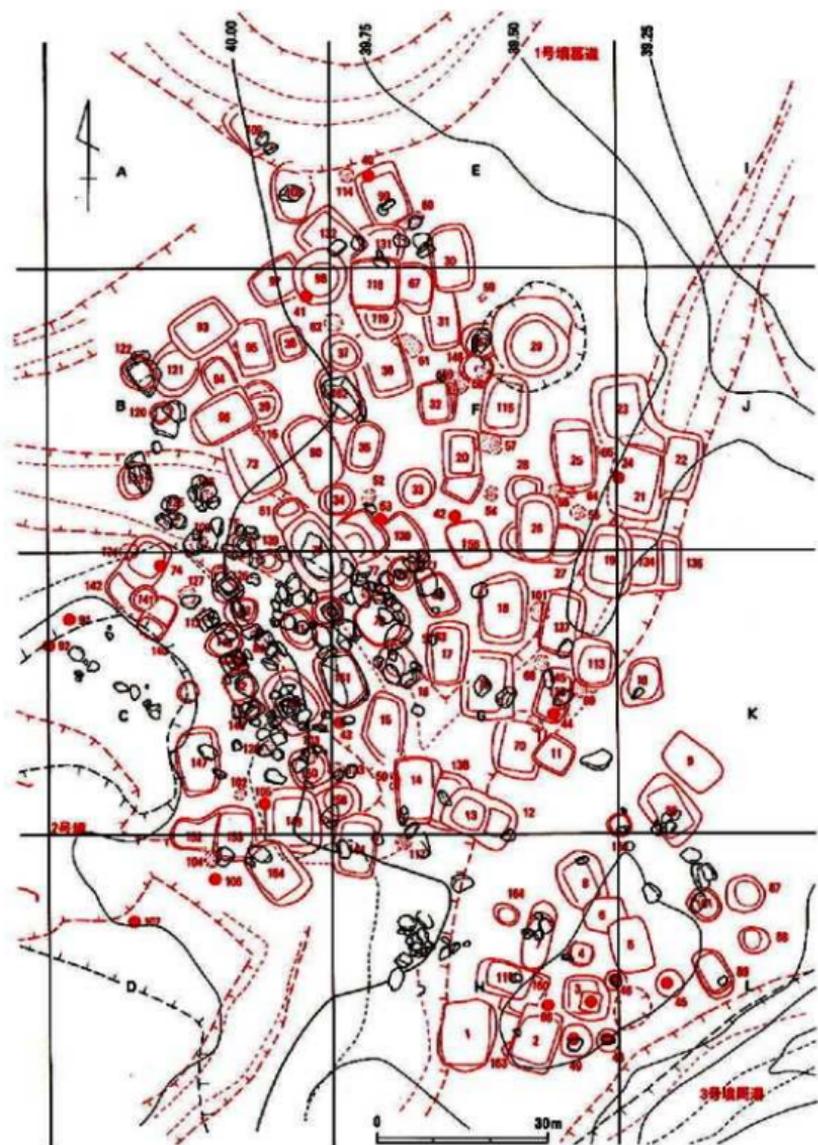
第41图 15·17号土墳墓实测图 (1/30)

古墳周辺に埋葬された5基の石蓋土墳墓は配置に規則性がなく、かつ3基までが小児墓と思われる規模である。また内容的にはベンガラを使用しても少量であり、枕も付設されていない。後述する方形区画におさまる墓群との差は大きくみえる。しかし、墓群の在り方としては先年調査を行った穴ヶ葉山遺跡のような稠密な群集ではなく、少数が独立的に墓域を占有しており、むしろ方形区画の在り方に近い。穴ヶ葉山遺跡では多数の遺構から船載内行花文鏡片や玉頸、複数の素環頭を含む刀子や棒などの豊富な副葬品が出土していて、内容的にはこの金厩塚遺跡で検出した2群の墓群よりはるかに優位な位置にある集団の墓地と考えられる。しかし、副葬品と墓域の在り方とを組み合わせた場合、両遺跡の相違は同時代における階層差というよりは弥生時代終末から古墳時代初頭頃という短期間での劇的な発展段階を示すものと考えられる。より優位な地位を占める家族が集団から離脱したことを示しているのであろう。その優位性は副葬品ではなく、独立した墓域によって象徴される。

18基の石蓋土墳墓・土墳墓が集中する墓域も非常に興味深いものである。以下では煩雑になるために10号石蓋土墳墓を石10、10号土墳墓を土10のように簡略化して続ける。まずこれらの18基の墓は、中央に幅3mほどの空間を開けて東西の2群に分けうる。西群では近接する土10と石13、やや距離があるが土11と石17、重複する石15～16のそれぞれの頭位が等しいかまたは非常に近い。さらに石13と土11が切合関係にあり、石14～16は土11と石17の間に位置するなど相互の関連性も窺える。東群でもやはり2基づつの単位が認められ、石10と石11、石12と土17、石18と土15、石19と土14、石20と土12の5組が見出せる。土13のみが組むべき相手を見出せない。ここではさらに南北に分けうるのかも知れない。南の2組は切合関係にある。北では、土12と石20に小溝がL字形に囲うらしいと先に記したが、その小溝を切って各組の墓が営まれ、ちょうど石20と土12を取り巻いているようである。ここにも強い関連性が窺える。

ここで検出した墓は石16を除いていずれも成人墓と思われるものであり、先のような2基の組合せは夫婦を示している可能性がある。ただ、石と土の組合せが6組存在するが、石だけの組合せも2組あって貫徹しておらず、副葬品が乏しいことなども災いして男女の特定は困難である。また、夫婦であれば、石16のような小児墓がもっと多く存在するのではないかという疑問もある。小児墓が少ないことは、指導者層の「優位性」がまだ世襲的なものとは認められていなかったことを示すのであろうか。その場合には、この墓域に埋葬された人々は必ずしも相互に血縁的な関係にあるのではなく、ある時期の集団の指導者グループの墓所であったと考えられよう。例えば先の穴ヶ葉山遺跡と同一時期に造営されたもの仮定とすれば、その集団の各分野を指導したリーダー達の墓域であったものと想像される。

この墓域の在り方は、時代が異なるものの近畿地方の方形周溝墓の内容と比べて小児墓が欠落する点を除き、相似た在り方を示す。今後、比較検討材料となろう。



第42图 近世基配置图1 (1/100)

IV. 近世の遺構と遺物

近世の遺構としては200基近い墓地と開墾による数条の溝状遺構・野壘などがある。無数の畝状遺構も存在したがここでは略する。

1) 墓地

大きく2群に分かれている。一つは1～3号墳の間にあって、検出した遺構の大部分が集中する(A群)。今一つは4号墳東の斜面にあり、調査区外へ続いている(B群)。この調査した2群以外にも測量調査のみを行った金居塚古墳群中に墓石が散乱しており、さらにいくつかの墓域が存在していたことがわかっている。

A群では現状で表土に無数の礎が露出し、また明らかな石塔も建っていたが、平面形を容易に確認できず、数10cm掘り下げてようやく判明するという有様であった。そのために露出している石材の平面図を作製し、おおむね石塔の軸に合わせてあらかじめ立面見通し図の図化を行ったが、中には立面図を作製していない石材の下部から墓蹟が現れたものもあり、多くの実測図に不備があることをお断りしておく。また、遺構数が多いので、データは一覧表に譲るとともに、すべての遺構の説明は略する。計測値のうち、深さについては上記したように数10cmを掘り下げた後の数値であり、本来はより深かったものである。

以下で個別の説明を加えて行くが、便宜上土墳(土葬)墓、火葬墓の順に記す。

土墳墓

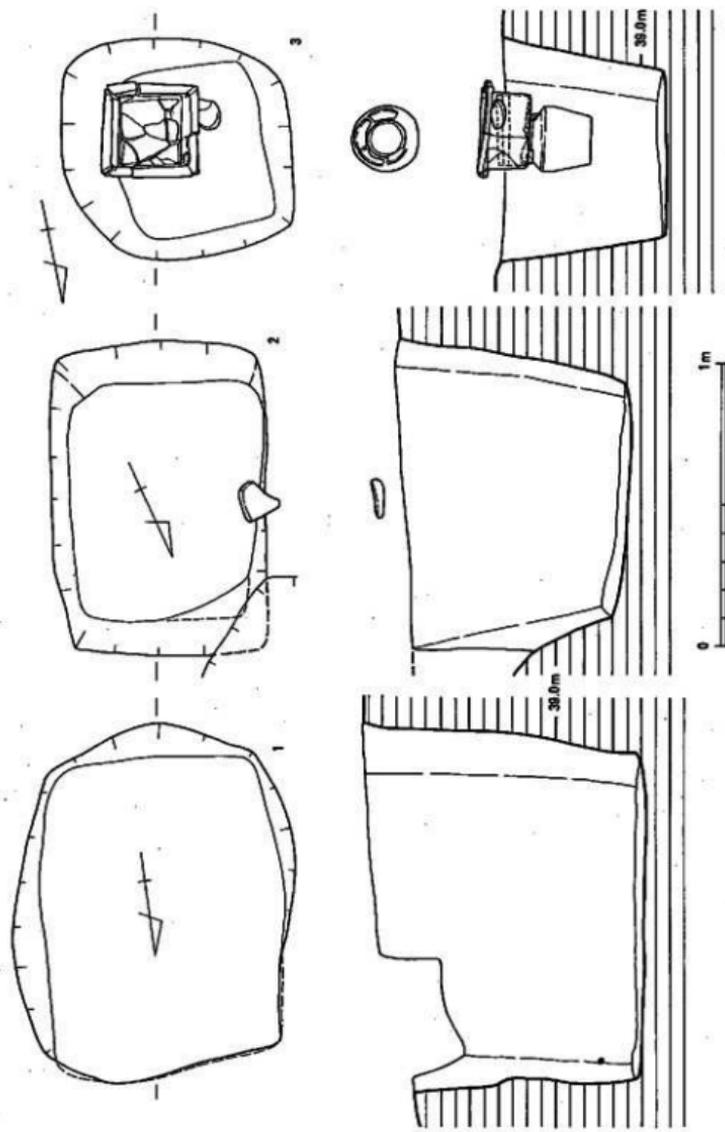
1号墓(第43図)

A区で検出した近世墓中で最も南にあって、切合関係がなく単独で位置する。標石を伴わず、床面はやや不整な長方形、壁体の立ち上がりはほぼ垂直であった。人骨が若干遺存していた。

2号墓(第43図)

1号墓の東に隣接し、160号墓および南西隅付近で検出した火葬墓(163号墓)を切るようである。また、北辺では火葬蔵骨器66号墓と近接するが、切合はない。

小原原石1点が墓塚屑にあった。床面は隅丸長方形を呈し、壁体は若干の傾斜を有する。



第43图 近世墓実測图 1 (1~3号) (1/20)

出土遺物（第44図1~4）

鉄釘が4点出土しているが、その出土位置等は記録していない。1は全体がわかる唯一のもので、全長5cm、身は一辺0.3cm前後の断面方形を呈するようである。これには木質が残らない。2は残存する先端付近に、3・4は頭部付近にのみ木質が残るが、いずれも同一の方向である。ほかに身の残欠が4点ある。

3号墓（図版30・44・45、第43・79図）

2号墓の北東に隣接し、切合関係のある墓はない。

床面規模が0.6×0.5mの小規模な方形平面を有する。この上面に壺・火鉢・瓦で構成された火葬墓が2基埋納されている。墓壇床付近からの出土品がないために確実ではないが、火葬墓と墓壇床面の間にはかなりの空間があることから別個の墓と思われる。なお、その場合には、火葬墓を構成する各器種が正置の状態で見出されたことから、木棺が腐朽し、陥没が治まるまでの時間を経て埋納されたものであろう。

銅銭が出土したというメモがあるが、現物は不明。なお、火葬墓の詳細は後述する。

4号墓（第45図）

3号墓の北に隣接し、これも単独で、切り合う遺構はない。

床面は一辺90.35~0.4mのほぼ方形プランを有し、深さは0.65mと平面形に比して深い。後述するように小型の釘が10数点出土しており、掘形規模と考え併せるならば小児墓としてよからう。墓壇肩に河原石が置かれていた。

出土遺物（第44図5~15）

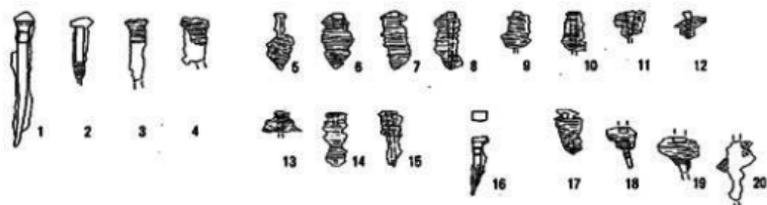
これも鉄釘が出土したが、その状況を記録していない。図示した11点はいずれも頭部を残すと思われるもので、あるいはほかに1点、頭部かと思われる破片がある。鍔と木質で細部がはっきりしないが、全体に小振りである。5の木質は直角方向に交わるもので、頭部に近い部分は0.7cm、先端部分は1.1cmの厚さで残る。

5号墓（第45図）

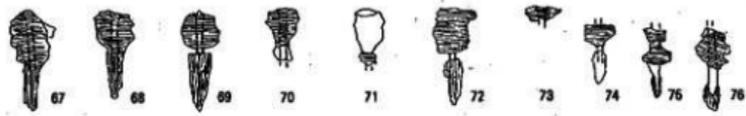
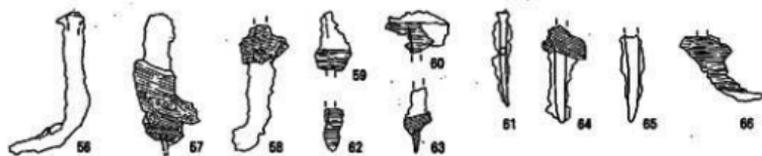
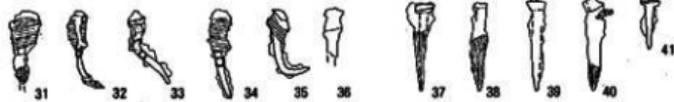
4号墓の東に隣接し、6号墓を切るが、個別実測図の作製を怠っており、床面形状・深さ等の細部は不明。

6号墓（第45図）

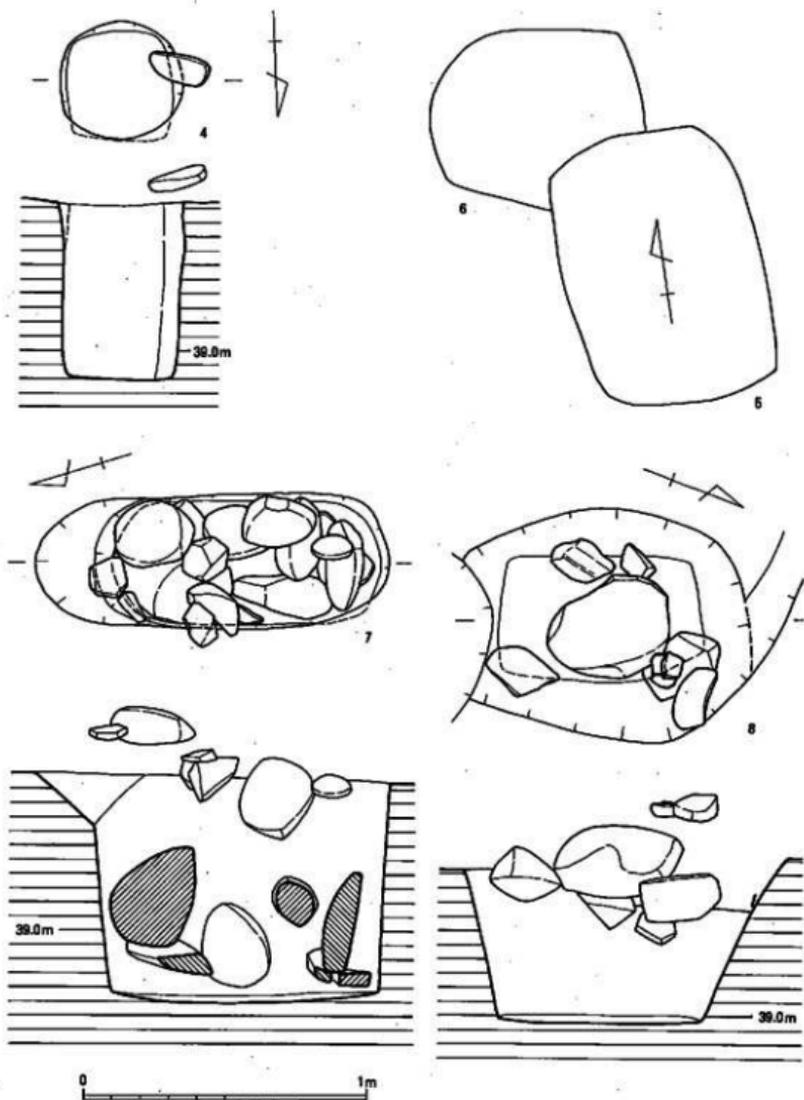
5号墓に切られるが、これも実測図の作製を怠っており、床面形状・深さ等の細部は不明。



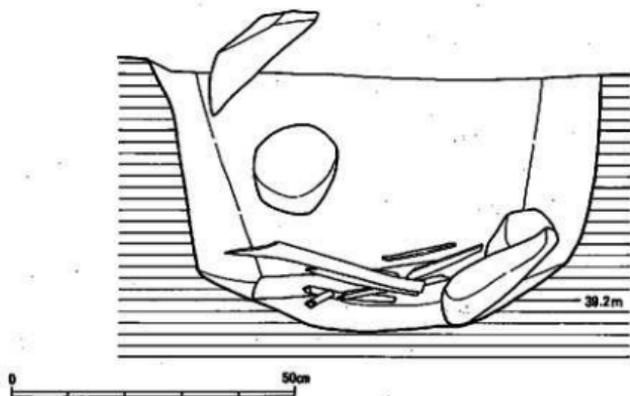
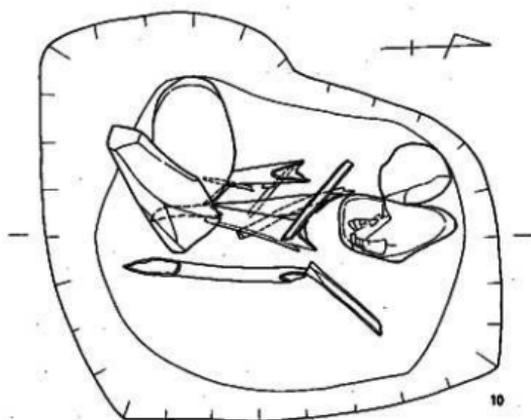
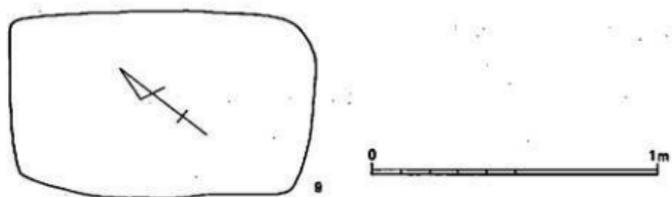
2号墓...1~4
 4号墓...5~15
 32号墓...16
 93号墓...17~20
 89号墓...21~30
 115号墓(南)...31~33
 115号墓(北)...34~36
 146号墓...37~41
 154号墓...56~68
 161号墓...67~78



第44图 近世墓出土铁钉实测图 (1/2)



第45图 近世墓実測図2 (4~8号) (1/20)



第46图 近世墓实测图3 (9·10号) (1/10、1/20)

7号墓 (図版30、第45図)

4号墓の西に隣接し、切合関係はない。

床面で0.95×0.45mの規模を有し、長さに比して幅が狭い。墓壇上面で数点の河原石を検出するとともに、墓壇底でもほぼ全面で礫を検出した。本来的なものとは思えない無秩序な状態であり、木棺直上に積み上げられた(?)ものが腐朽とともに転落したものであろう。鉄釘や木質の出土はないが、木棺が使用されていた傍証になるものと思われる。

8号墓 (第45図)

6号墓に切られるが、床面はかろうじて全体が残っていた。墓壇上面に大小の礫が落ち込んでいたが、子細に見ると最大の礫を中心にして周囲に小振りの石材を配置しており、小振りの礫の上に大振りの礫を載せていた様子が窺える。

9号墓 (図版43、第46図)

8号墓の北東に位置し、切合はない。86号墓と主軸をほぼ平行にして掘削されるようであるが、これも実測図の作製を失念していて、細部は不明。

10号墓 (図版31、第46図)

9号墓の北西に位置する。墓壇は113号墓を意識したかのような不整形を呈する。

床面も不整形プランとなり、規模は長軸0.65m、短軸0.5mを測る。この土壇墓では人骨の保存が比較的良好で、頭骨片や歯、各種の骨が出土している。特に頭骨は墓壇北端の底に斜位に置かれた河原石の上であり、木棺が使用されていなかったことを示す。木棺の不使用は不整形な平面プランや床が水平面をなさず曲線を描くことから首肯される。

なお、人骨より上位で検出した礫は標石であろう。

11号墓 (第47図)

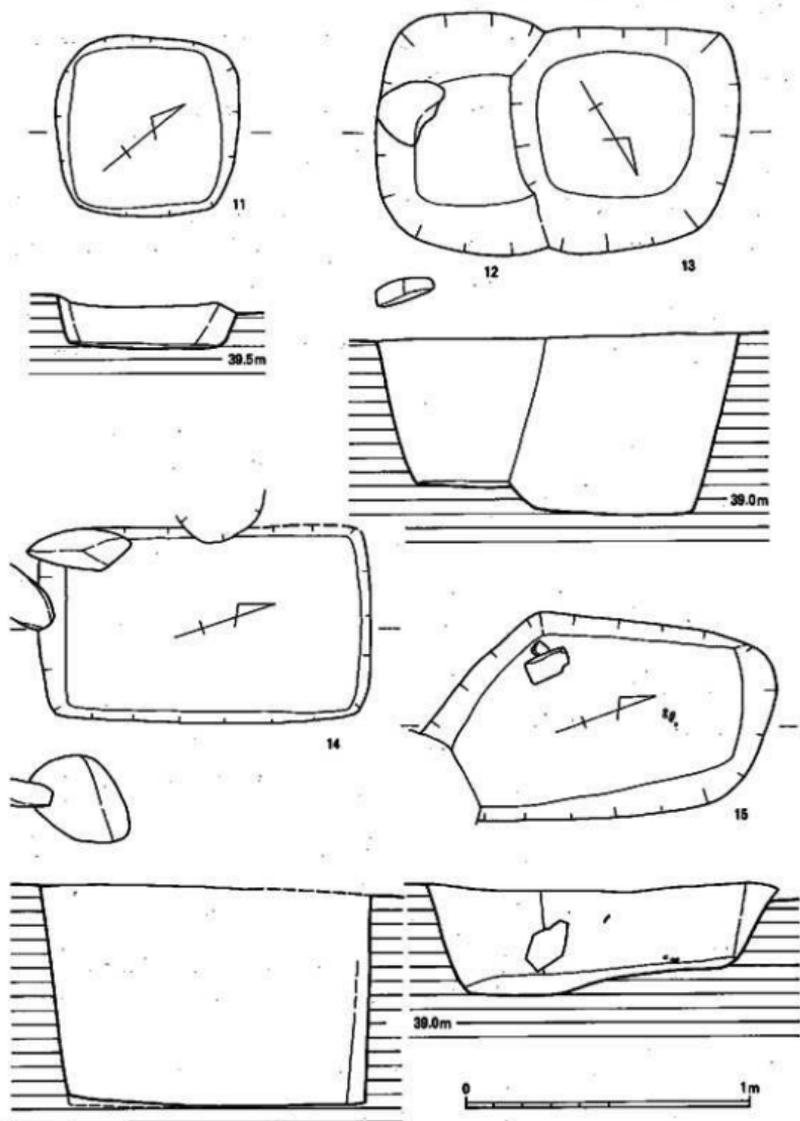
10号墓の南西、8号墓の北西にあつて、70号墓を切る。

一辺0.5mの整った方形プランを有し、深さが0.2mと非常に浅い。火葬骨の出土がないために土壇墓としたが、深さの点で疑問がある。小児墓であろうか。

12・13号墓 (第47図)

11号墓の南西、8号墓の北西に位置し、13号墓は138号墓を切る。

この両者も切り合うが、先後関係は確認できていない。12号墓上面には標石が1点置かれていた。



第47图 近世墓实例图4 (11~15号) (1/20)

14号墓 (第47図)

13号墓の北西にあって、やはり138号墓を切る。西辺肩で墓壁を覆うような状態の火葬骨(50号墓)を検出しており、それに切られるのであろう。

1.05×0.6mの非常に整った長方形プランを有する。また、標石を伴う。

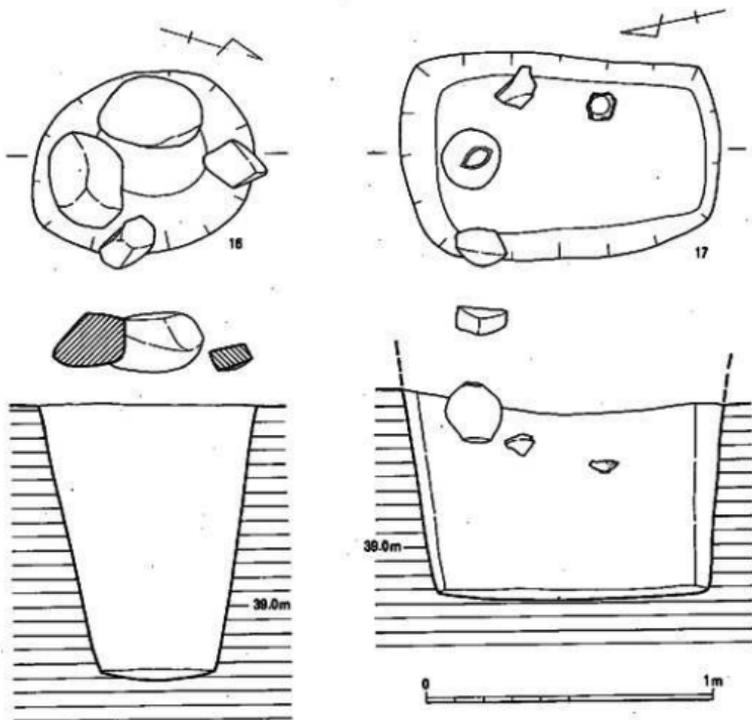
15号墓 (第47図)

14号墓の北西に連続するように見えるが、切合関係ははっきりしない。

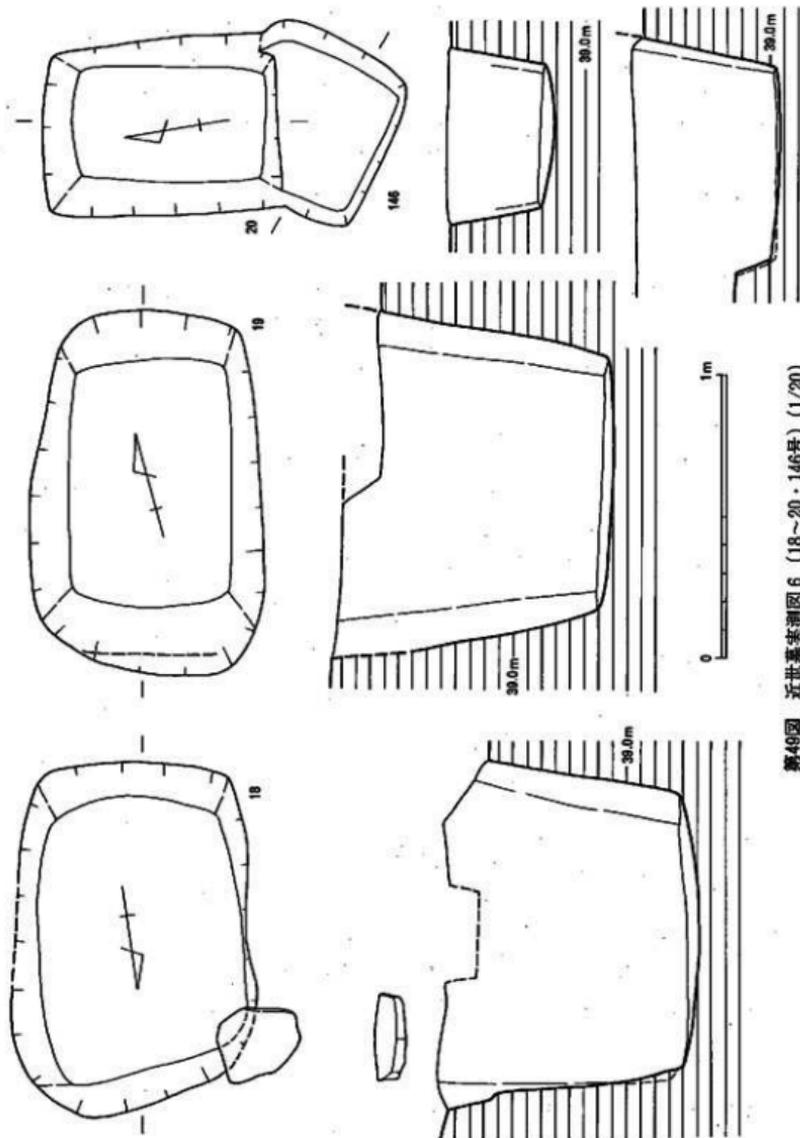
床面プランが不整四辺形を呈する。床面も北半と南半でレベルが異なっており、あるいは2基の土壌墓を分離できなかったのかも知れない。若干の歯が出土した。

出土遺物 (図版94、第95図1)

出土状態を確認できていないが、図示部分がほぼ完周する陶器片。残存部は総軸で、外面は



第48図 近世墓実測図5 (16・17号) (1/20)



第46回 近世墓実測図 6 (18~20・146号) (1/20)

灰褐色の地に白色で刷毛目文様を描き、内面にはイッチン掛けを施す。

16号墓（第48図）

15号墓の北に位置する。密集する中にあるにも拘わらず、切合関係はない。

床面は直径0.35～0.4mの整った円形平面を有するが、深さはそれにして0.95mと深い。平面形から考えて小児墓であろうか。墓壇上面に標石が配される。

17号墓（図版31、第48図）

16号墓の東に隣接し、79号墓を切る。上層で火葬骨（遺構番号は未登録で、「17号土壇墓上層」として取り上げた）が出土したが、これは17号墓に後出する火葬墓と思われる。

平面形は整った長方形プランを呈する。墓壇上部で供献されたと思われる土器群を検出した。墓壇中に置かれていたものであろうか。

出土遺物（図版94、第95図2・3）

2は陶器で、口縁部の両側を内側へ押し込む、耳杯風の椀。総軸で、茶褐色釉を全面に付し、中に斑に黒色釉が現れている。2も総軸の陶器で、頸部以上を欠く。焼成時が非常に高温であったために、釉のほとんどが飛び、かつ器表にひび割れが随所に入る。残存する釉の色は黄緑色に近い。なお、いま1点の破片が出土するが、図示していない。

18号墓（第49図）

17号墓の北東に位置し、切合関係はない。

床面プランは長方形を意図しているが、隅丸でややいびつなものとなる。扁平な標石を1点配置する。

19号墓（49第図）

10号墓の北にあり、134号墓を切っている。

床面は長軸0.9m、短軸0.55mの非常に整った長方形となる。

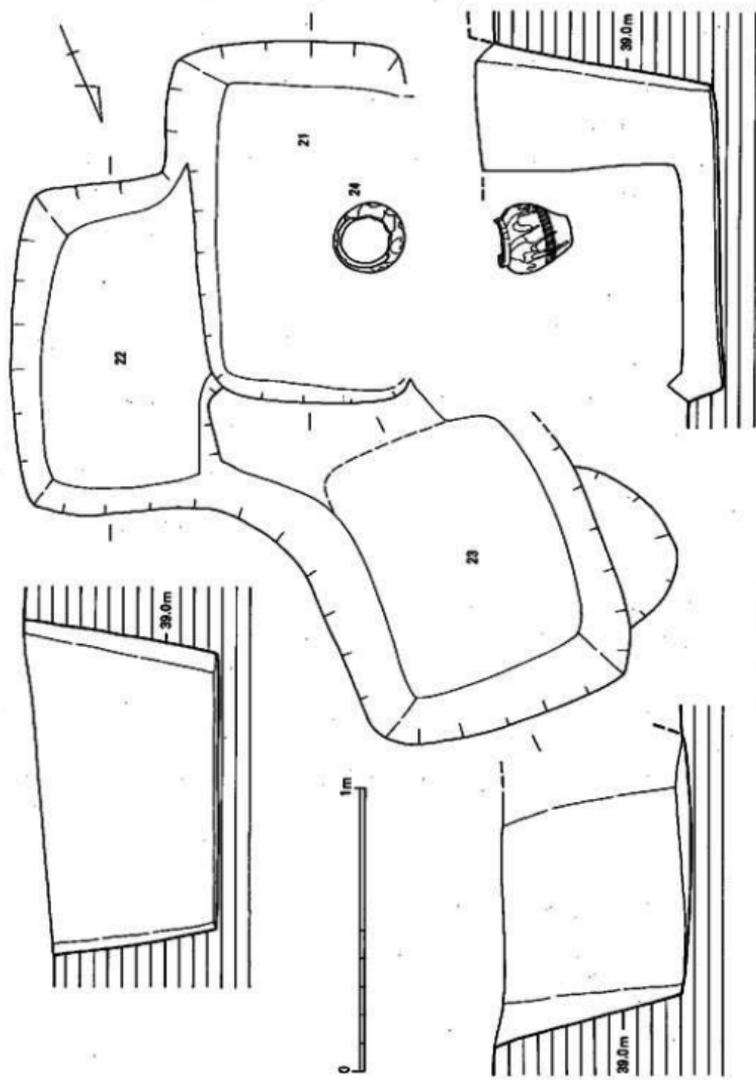
20号墓（第49図）

18号墓の北に位置し、146号墓を切る。また、上面を57号墓の火葬骨が被さっていた。

これも床面は整った長方形プランとなる。ただ、規模は0.7×0.4mとやや小型である。

21～23号墓（図版32、第50図）

近世墓群東端中ほど、19号墓の北に隣接する。



第50圖 近世墓穴測図 7 (21~23号) (1/20)

21~24号墓は重複しており、平面的に精査したが先後関係は把握できなかった。ただ、24号墓とした火葬蔵骨器は21号墓墓壙中に掘り込まれていて明らかに後出するものである。

平面形はいずれも整った長方形プランを呈し、かろうじてその規模を窺える。

25号墓 (第51図)

21・23号墓の西に隣接し、上面に64・65号墓の2基の火葬骨が置かれていた。65号墓は木棺の腐朽に伴って墓壙内に落ち込み、64号墓はなお水平な状態を保っていた。65号墓の方が早く置かれたのであろう。なお、これらの火葬墓には特別な施設は見受けられず、布・木箱などを用いていたものであろう。

25号墓掘形は整った長方形プランを有する。

26~28号墓 (第51図)

25号墓の南西に隣接し、3基が重複する。調査時の所見では27→26→28号墓の順に構築されたようである。27・26号墓のように大きく切り合う例は他になく、両者の間にかかなりの年数を経ていると思われる。それでもなお、27号墓の床面に達していないところを見ると人骨が現れたのであろうか。

28号墓は直径0.4mの円形に近い平面プランとなる。

29号墓 (図版32、第52図)

25号墓の北にある。157号墓と切り合うようであるが、確認できていない。

円形プランを有し、床面規模は0.8mのややいびつな形態となる。南辺付近の張り出しは現状でも浅い窪地となっていたもので攪乱坑かと思われる。したがって、本来的な深さは0.7m以上となる。

床面北側に偏して潰れた状態の頭骨片が検出され、そこから南に向かって大腿骨等の太い骨の一部が残っていた。

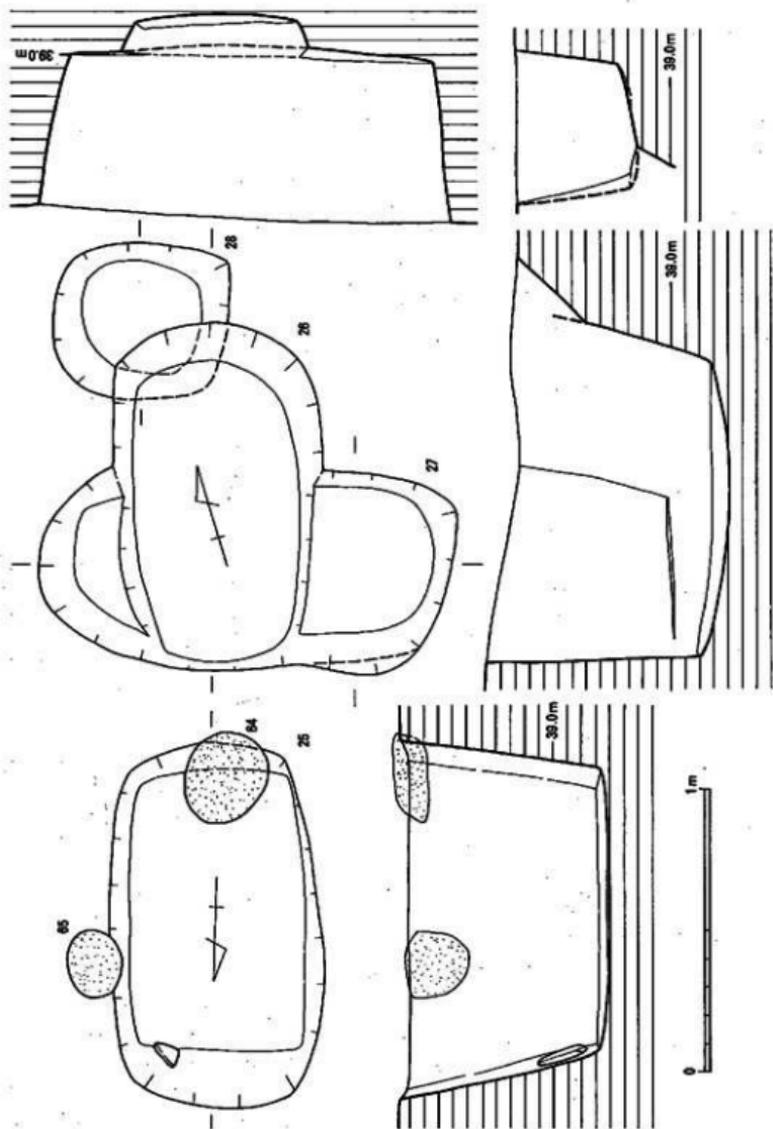
30号墓 (第52図)

A群の北端近く、29号墓の北西に位置し、31号墓を切る。

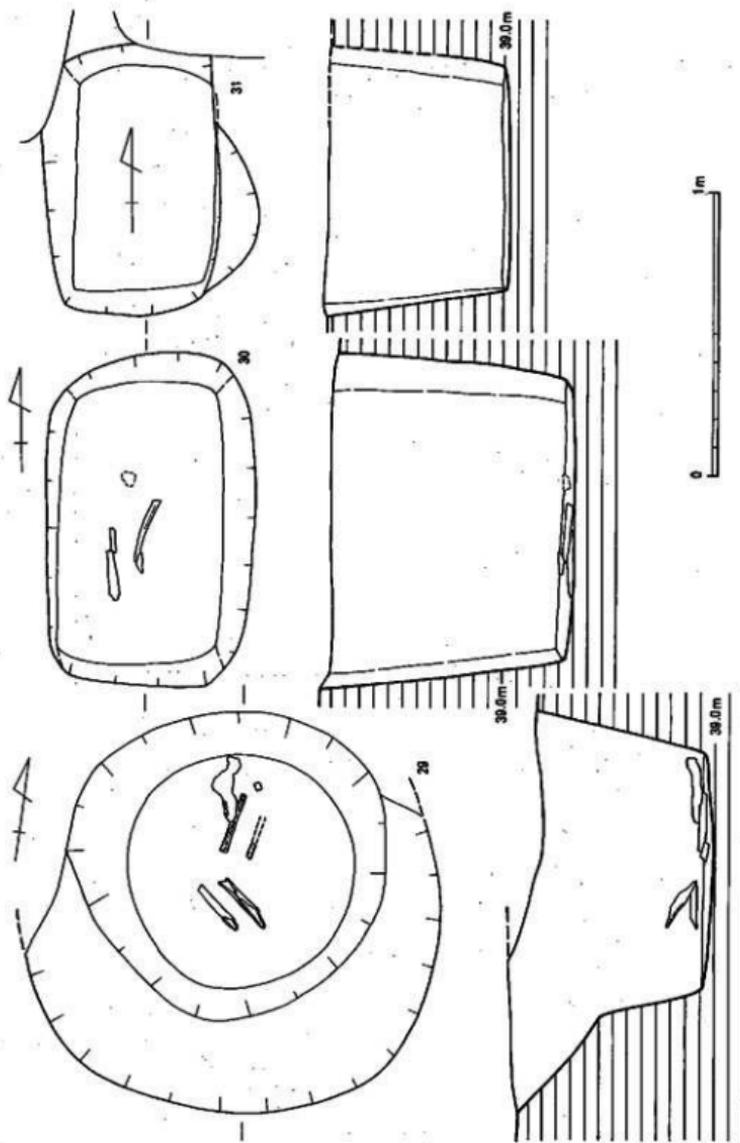
墓壙は整った長方形プランを呈し、床面に歯の一部と大腿骨らしき骨が残存していた。骨の状態から見て頭位は北にっていたようである。

31号墓 (第52図)

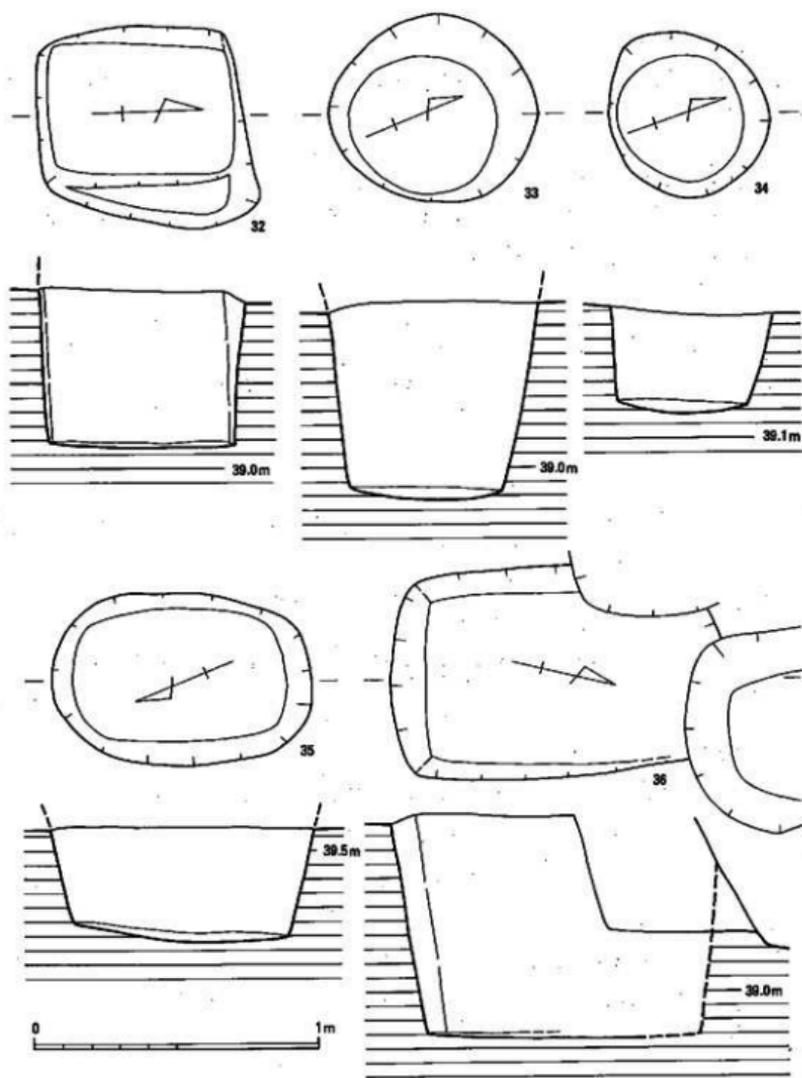
30号墓の南にあつて、同墓・67号墓に切られる。



第51圖 近世墓実測圖 8 (25~28・64・65号) (1/20)



第52圖 近世墓実測圖9 (29~31号) (1/20)



第53图 近世嘉实洲园10 (32~36·119号) (1/20)

これも墓壇は整った長方形プランを呈する。

32号墓 (第53図)

31号墓の南に近接し、上面を159号火葬墓が覆うようであるが、これもはっきりしない。墓壇はやや小型であるが、非常に整った長方形プランを呈し、壘体もほぼ直に立ち上がる。人骨片および鉄釘が出土する。

出土遺物 (第44図16)

わずか1点のみを検出したが、遺漏があるのだろう。全長2.1cm、身が一辺0.2~0.3cmの長方形断面を呈する。先端の半分ほどに木質が銜着する。

33号墓 (第53図)

32号墓の南に近接し、ほかの墓との切合関係はない。

床面形状は直径0.5mの円形プランとなり、深さは0.7mを測る。人骨片が出土する。

34号墓 (第53図)

33号墓の西にあって、90号墓を切る。

これも床面は円形を呈し、規模は直径0.45m、深さは0.35mと浅い。

35号墓 (第53図)

34号墓の北に隣接し、これも90号墓を切る。

床面は長軸0.75m、短軸0.45mの隅丸長方形を呈し、深さは0.4mを測る。人骨片が出土している。

36号墓 (第53図)

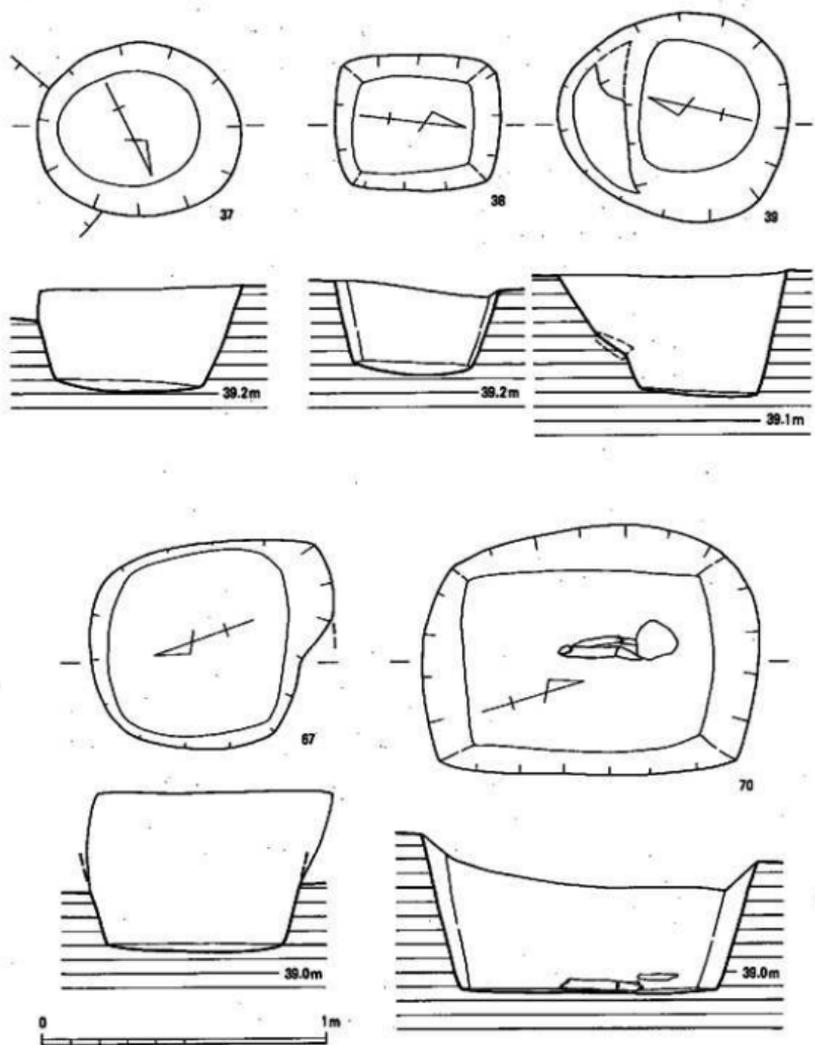
35号墓の北に位置し、北辺を37・119号墓に切られていて、全体を発掘していないが、床面長はほぼ1m弱の規模かと思われる。また、61号火葬墓が上面を覆う。

形状は整った長方形プランとなる。

37号墓 (第54図)

36号墓を切り、162号墓をも切っている。

床面が直径0.4~0.5mの扁円形プランを呈する小型の円形墓で、深さも0.4mに過ぎない。人骨片が出土。



第54图 近世墓实测图11 (37~39·67·70号) (1/20)

38号墓 (第54図)

37号の東に隣接し、その西に近接する95号墓とはわずかの距離を置いて平行に主軸をとる。これも小型で、床面は0.4×0.35mの整った長方形プランとなり、深さも0.35mに過ぎない。

39号墓 (第54図)

38号墓の南に位置し、73・96号墓を切っている。

これも小型の墓で、床面が0.4~0.5mの不整形プランを呈し、深さは0.4mである。北側でテラス状の緩斜面を検出したが性格はよくわからない。人骨が若干出土した。

67号墓 (第54図)

A群の北端付近にあって、31号墓および118号墓を切る。

床面が一辺長0.65mの隅丸方形プランを呈する。

70号墓 (図版33、第54図)

11号墓の西にあってそれに切られ、さらに上面に火葬骨が置かれていた(70号墓上層)。

整った長方形プランを有し、床面で頭骨と大腿骨かと思われる骨の一部を検出した。それによれば頭位は北方向と思われる。

出土遺物 (図版90、第55図1・2)

これらはいずれも出土状態が確認できていない。上面に置かれた火葬骨に伴うものではないようであるが、残欠が乏しいのでそれすらも確信はない。

1は木質に薄い銅板と鉄製金具および銅製釘が付着したもの。周縁が破損しており、本来の形状は窺えないが、銅板には木の葉文状の文様が打ち出されているようで、箔の合間、あるいは木質上に微かに見える。この銅板を木質に打ち留める鉄製金具が2点残るが、いずれも環状かと推測される頭部は破損する。また、装飾を兼ねたと思われる長さ0.7cmの銅製釘が1点だけ残っていた。木質は現状で厚さ1.7cmを測る。

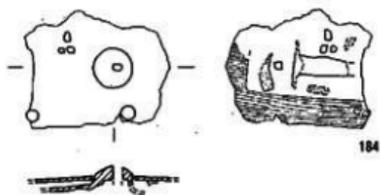
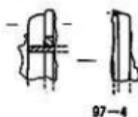
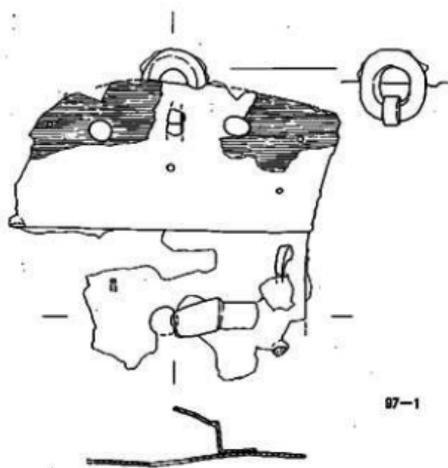
2は鉄釘で、これも1点のみを検出したが、残欠がなかったとは言い切れない。全長3cmで、半分の1.5cmに木質が銹着する。

両金具製品は、木質の厚みがほぼ同じであり、同一の製品に使用されたものであろう。

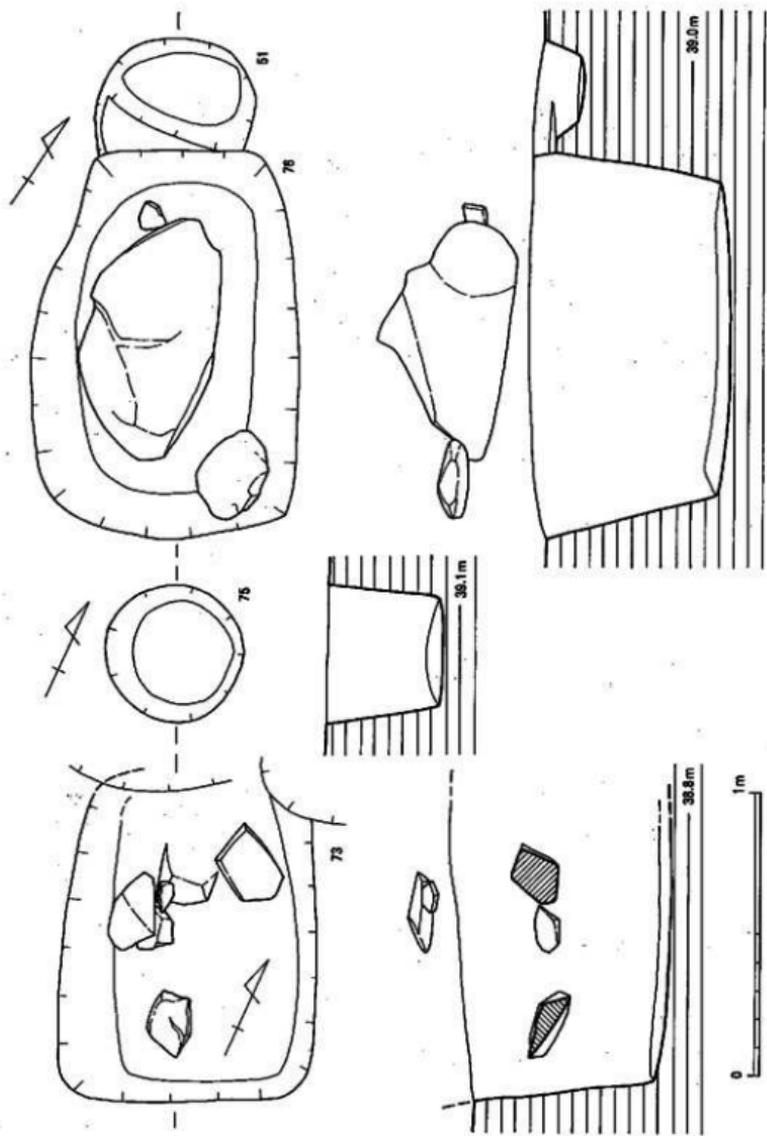
73号墓 (第56図)

北辺を39・96号墓に切られ、上面に火葬墓の116号墓が埋置されていた。

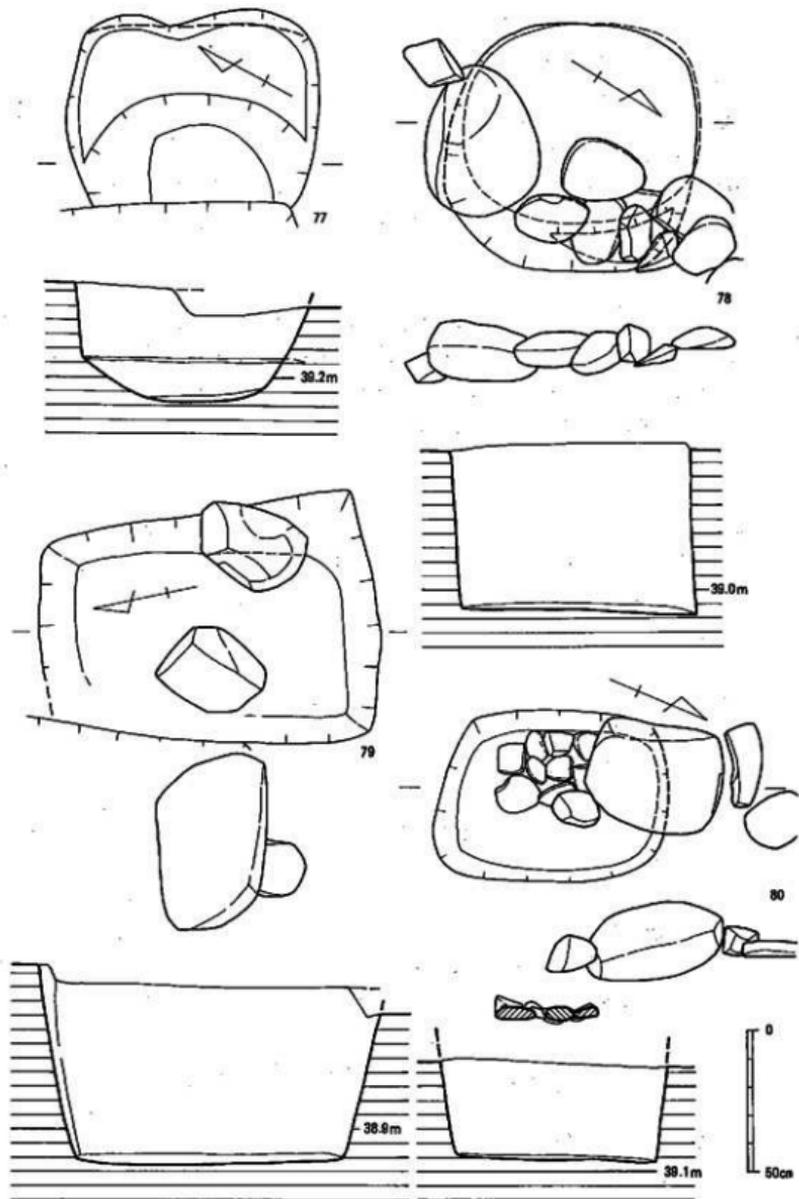
上記の理由で全掘していないが、長軸長はおよそ1m、幅0.65mの整った長方形プランとなる。墓壇上面および埋土中層で数点の鏝を検出したが、これらは標石が転落したのであろう。



第55图 近世墓出土金属製品实测图 (1/2)



第560圖 近世墓穴測圖12 (51・73・75・76号) (1/20)



第57圖 近世墓実測図13 (77~80号) (1/20)

75号墓（第56図）

73号墓の南に、切合関係をもたずに位置する。

直径0.35mの円形床面を有し、深さ0.4mほどの小型の墓墳である。個別実測図には図示していないが、後述する165号墓のような石組があったようだが、すでに乱れていた。

76号墓（第56図）

75号墓東にあり、51号墓火葬骨が上面に置かれていた。また、77号墓を切る。

隅丸長方形の墓墳を有し、墓墳上面の中央部に花崗岩の巨石と小礫敷点を置く。巨石の下端はなお墓墳上端付近に留まっているが、木棺の腐朽・陥没を考慮すればかなり沈下しているはずである。あるいは立てられていたものかも知れない。

77号墓（第57図）

130号墓を切るが、76号墓に切られ、かつ53号墓の蔵骨器が墓墳上に埋め込まれていた。

全体は不明であるが、東辺にほぼ水平のテラスが付設され、床面は0.45mほどの不整形（？）形プランかと思われる。

78号墓（第57図）

76号墓の南東に隣接するが、周辺の墓との切合関係はない。

床面は一辺0.75～0.8mの隅丸方形に近いプランを有し、深さは0.6mほどであった。北隅で検出したテラスは納棺時の足場に供されたものであろうか。

検出面の上方約0.3mの付近で大小の礫が集中して配置されており、標石として置かれたものと思われるが、周辺の墓上の石と連続的になっていて特定できない。本来の深さは0.9mほどであったと思われる。

79号墓（第57図）

70号墓の北西隅を切り、17号墓に北西隅を切られる。

しかし、床面の全体を復することができ、それによれば長軸0.95m、幅0.55mの整った長方形平面となり、残存する深さは0.6mであった。

これも検出面の0.1m上方で比較的大型の石材が立て据えられていた。

80号墓（図版33、第57図）

17号墓の北に接している。

墓壇は0.7×0.5mのやや小型の隅丸長方形プランとなり、その検出面上0.1m強の位置で並べられた河原石を検出した。いずれも準大前後の河原石で、長方形に整然と並べている。そのうちの約半数の石の上面が黒く変色していたが、どういものかわからないままである。

また、検出面上0.3mの位置に比較的大型の石材が置かれていた。

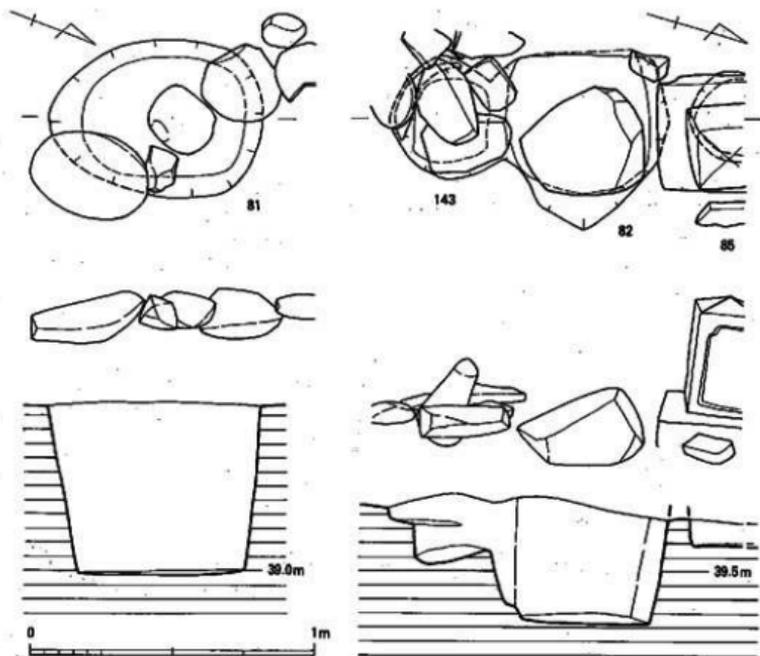
81号墓 (第58図)

76号墓の南に位置する。

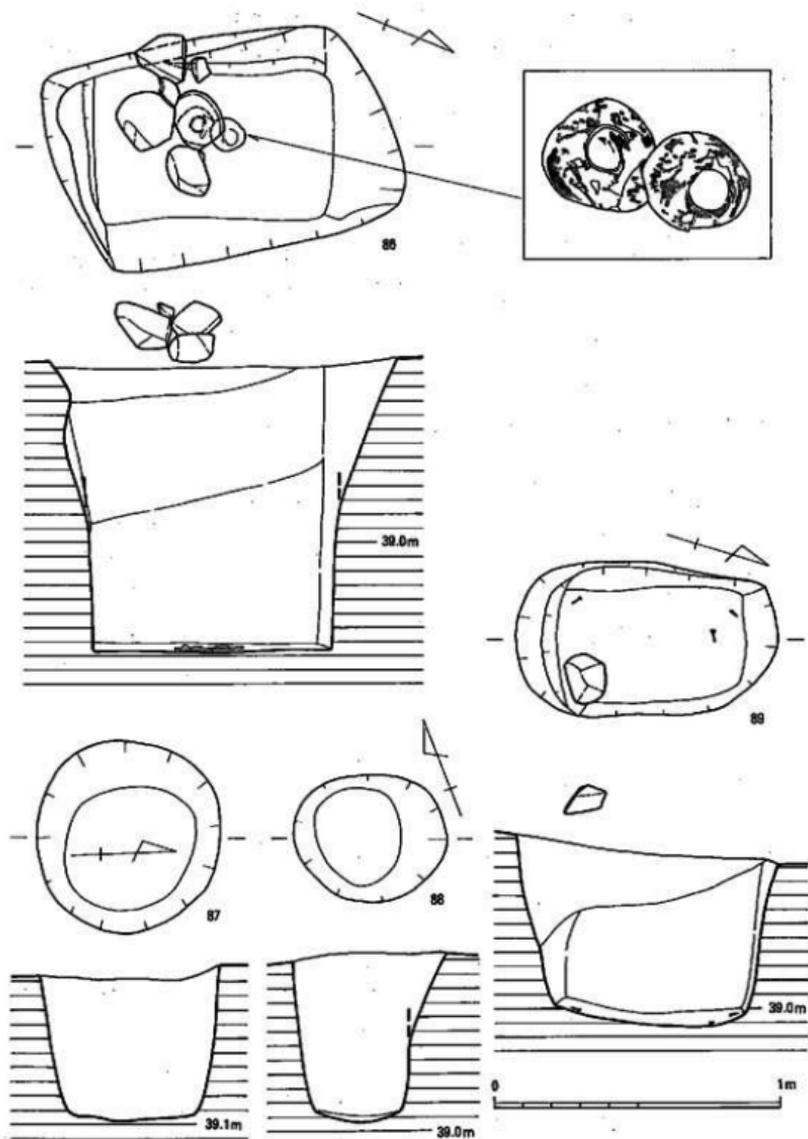
床面は0.4~0.6mの扁円形に近い形状となり、深さは0.6mを検出した。検出面の上方0.2m余の付近に標石と思われる石材が散乱するが、周囲の礫と一連となっており厳密な特定はできない。

82号墓 (第58図)

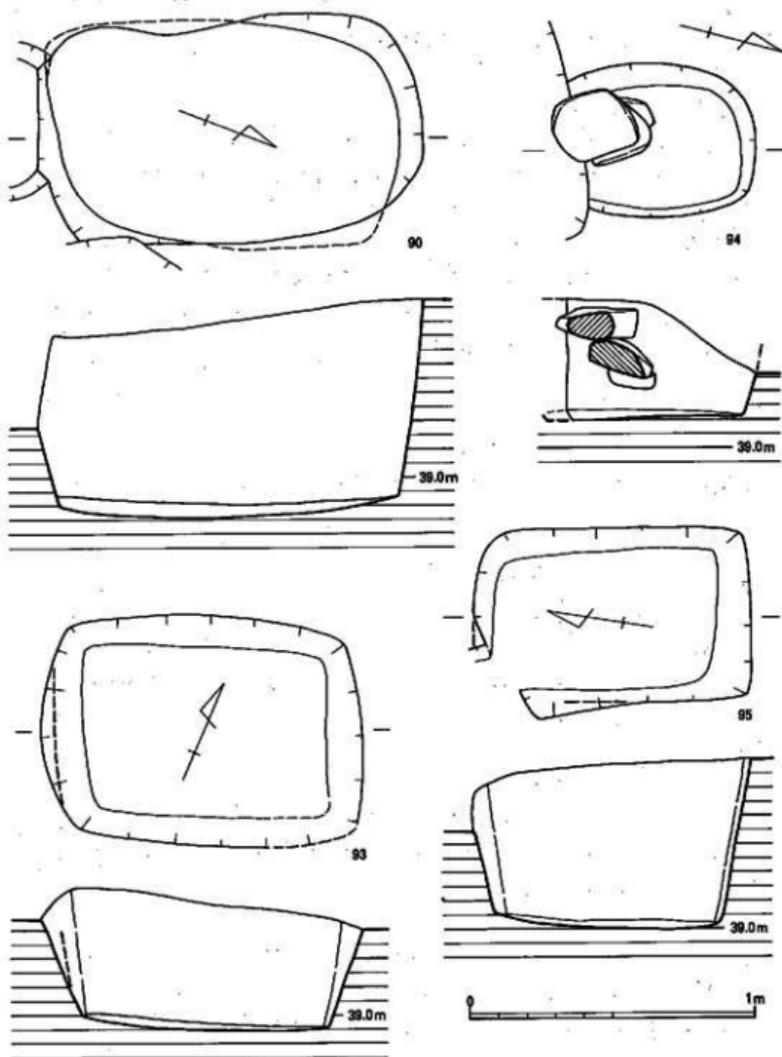
81号墓の南西にあつて、北に位置する85号墓基石が掘形にのっている。



第58図 近世墓実測図14 (81・82・143号) (1/20)



第59图 近世墓穴测图15 (86-89号) (1/6, 1/20)



第80圖 近世墓実測圖16 (90・93~95号) (1/20)

一辺0.5mの正方形プランを有し、深さは0.45mを確認している。143号墓と切合関係にあるが、先後は確認できていない。墓塚上面に礎が1点据え置かれる。

86号墓（図版34、第59図）

A群の南端近く、9号墓の南西に位置し、それと主軸が揃っている。

床面は0.8×0.5mの整った長方形プランを呈するが、墓塚上面は床面と主軸がずれて掘削されている。壁体は特に下半では垂直に立ち上がっている。人骨片が出土。

出土遺物

墓塚底中央付近で漆椀2点が押し潰された状態で検出できた。位置的にみて棺内に納められたものと思われる。それぞれ口径は11.7・13cmを測り、高台径では4.6・5.8cmであった。地に赤漆を用い、黒漆で草花文らしきを描いている。

87号墓（第59図）

86号墓の南東、3号墳周溝外側の肩に近接する。

床面は直径0.45mの円形プランとなり、0.5mの深さが残っていた。

88号墓（第59図）

87号墓と3号墳周溝の間に位置する。

これも小型円形墓塚である。床面直径は0.3～0.35m、深さは0.6mを確認できた。

出土遺物（第55図）

寛永通宝1枚を検出した。遺物の大きさや色から判断して遺漏はないものと思われ、1枚のみが副葬されたものであろう。

89号墓（図版34、第59図）

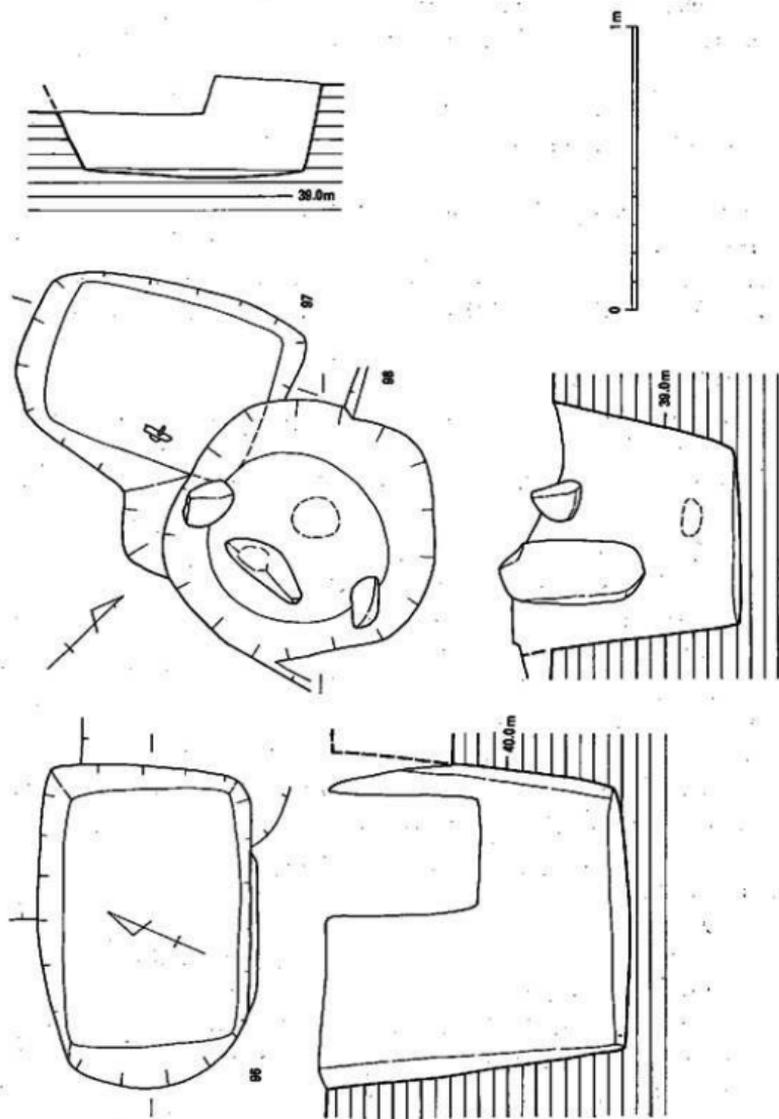
88号墓の南西に近接し、やはり3号墳周溝の肩に位置するものである。

床面は0.65×0.4mの整った長方形プランとなり、深さは0.65mが残存する。床面付近から図のような状態で鉄釘が出土している。

出土遺物（第55図21～30）

頭部はほぼすべてを図示した。鎧と木質の鍔着のために細部がはっきりしないものが多い。様子がよくわかるのが21で、全長4cm、身はほぼ一辺0.3cmほどの方形断面となるようである。22は身がねじれるように見える。23・25では身の中途で木質の方向が90度異なる。

90号墓（第60図）



第61图 近世墓铜镜图17 (96~98号) (1/20)

A群北端近くに位置し、34・35号墓に切られる。
床面は1.2×0.8mの大型の隅丸長方形プランを有する。

93号墓（第60図）

A群の北西隅の付近に位置する。

0.85×0.6mの整った長方形プランを有し、主軸が南北よりも東西方向にむしろ近い。95号墓とは切合関係にないが、発掘時に壁が落ちて切り合うようになっている。

出土遺物（第44図17～20）

出土位置を確認できないが、鉄釘が若干出土した。頭部が残るのは17のみで、ほかはいずれも身の残片である。いずれも木質の銹着がひどく、細部は不明だが、全体に小型である。

94号墓（第60図）

93号墓の南に隣接し、96号墓に南辺のすべてを破壊されるが、標石と思われる石材はかろうじて残っていた。

床面規模は長軸が0.5m強、短軸が0.45mの小規模な隅丸長方形を呈する。

95号墓（第60図）

93号墓の南東に近接し、主軸はそれとほぼ直交して94号墓に近い。

床面は0.8×0.5mの長方形プランとなる。93号墓とは切り合っていないが、非常に近接しているために壁が崩落した。

96号墓（第61図）

94号墓の南にあって、同墓・73号墓を切り、39号墓に切られる。

これも床面は整った長方形プランとなり、主軸方位が東西方向に近くなる。墓底中央付近から歯の残片が出土している。

97号墓（図版35、第61図）

93号墓の東に隣接し、その方位と揃う。また、98号墓に切られる。

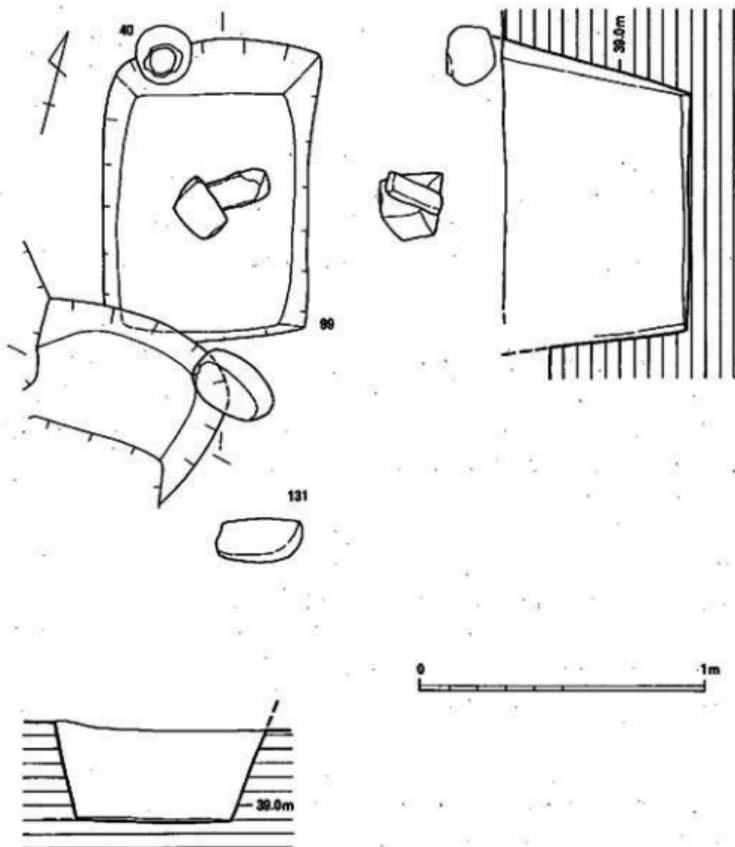
床面は0.75×0.55mの整った長方形プランとなるが、深さは0.35mと比較的浅い。

出土遺物（図版90、第55図）

木棺に装着されたと思われる金具が出土している。最も大型の板状製品は床面から20cmほど浮いた位置で立ったような状態で出土し、頭部が円環となる金具の1点は先の板状製品と距離を置き、北隅付近でやはり床上20cmほど浮いて出土した。

板状製品は中央付近で横方向に2cmほど屈曲して段を有している。この段を境に上・下段として説明を続ける。図示した正面図は実際の使用時には背面(棺蓋)となる部分であるが、緩い山形となる図上端、およびくびれるような右側の縁は原状をかなり留めるようである。

上段の中央やや上に位置すると思われる部分に円環を取り付け、背面から見るとさらに小さな釘が4ヶ所に見える。おそらく左下にも存在するものと思われ、合計5個の小釘と円環を留める金具で上段部分を固定したのであろう。円環の左右には直径1cmに満たない小孔が開けら



第62図 近世墓実測図18 (99・131号) (1/20)

れている。

下段では中央付近にやはり直径1cmほどの円孔が開けられており、その右側に幅1cmほどの鉄板を折り曲げたものを貼り付けるようである。おそらく左側にも対になるものが貼り付けられていたであろうが、痕跡も残欠も検出していない。さらに鉄板の右上方に釘が打ち込まれており、右下にも釘の破断面と思われるものが見える。円孔の左上方にも釘と思われる破断面が見えるが、位置的には右側のものと対応しない。

頭部を円環とする金具は図示した2点以外にもう1点が存在するようである。また、いま一つ、小さな鉄板に断面長方形の小さな鉄棒を貼り付けた小片が出土している。

以上の鉄製品は木棺の装飾を兼ねたものであろうが、実際に使用された部位や役割などはよくわからない。

98号墓(第61図)

97・132号墓を切り、41号墓(蔵骨器)が墓壇上に被さる。

床面が直径0.6~0.65mの円形平面を有する。床面から約10cm浮いた付近で頭骨らしき骨片が出土した。また、標石は立ったまま、ほぼ全体が墓壇内に沈んでいる。

99号墓(第62図)

A群の北東端に近く位置する。131号墓に南隅を切られるとともに、北辺中央付近の墓壇層に40号墓の蔵骨器が置かれている。蔵骨器は標石よりも下位にあることから土饅頭の中に埋め込まれたものと思われ、99号墓との関連性を窺わせる。また、南東および北西隅にも火葬骨(60・114号墓)が見られたが、先後関係の確認はできていない。

床面は整った長方形プランを呈する。

108号墓(第63図)

132号墓の北に位置し、1号墳墓道を切っていたが発掘順を間違えている。

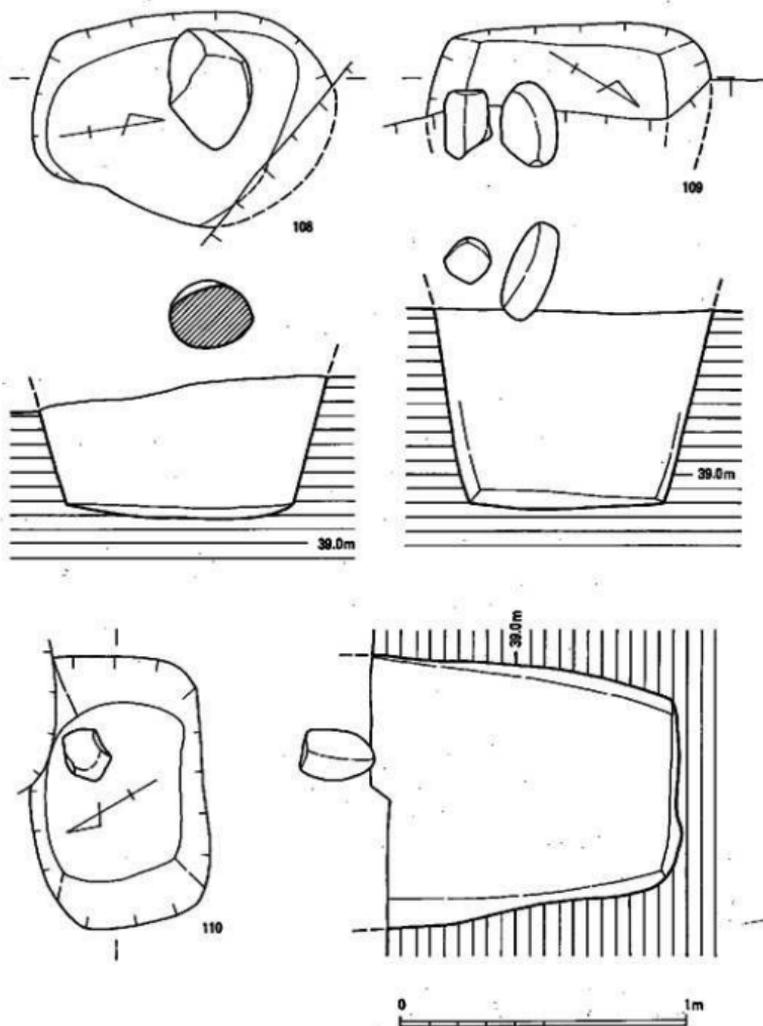
床面は不整形となり、墓壇上に標石を置く。南西隅で鉄釘2点を検出し、それらは現位置をほぼ保っているようである。

鉄釘は所在不明であり、図示していない。

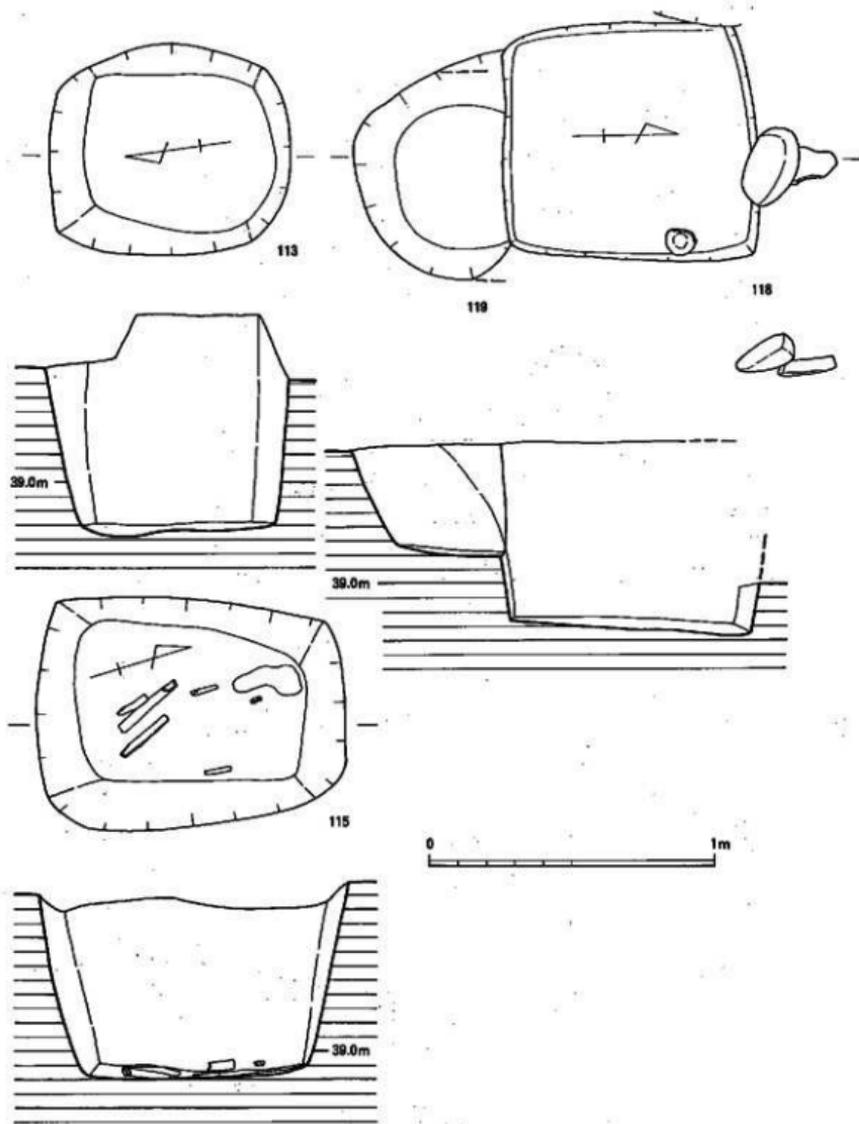
109号墓(第63図)

A群中、最北端に位置する。南の108・132号墓とはほぼ直線に並び、主軸も近い。これも1号墳墓道を切って掘削されたものであるが、発掘を誤りほぼ半分を飛ばしてしまった。

床面は長軸0.7m、幅0.25m以上の整った長方形プランを思わせる。これも標石を立て据え



第63图 近世墓实例图19 (108~110号) (1/20)



第64图 近世墓実測图20 (113·115·118·119号) (1/20)

ている。

110号墓 (第63図)

3号墳周溝近くに位置する。160号墓を切り、7号墓に墓壙の一部を切られる。

床面は0.65×0.5mのややいびつな隅丸長方形プランを呈し、深さが1.1mと平面形に比して非常に深い。主軸方位が南北方向から大きくずれ、東隅に標石を立て据えている。

113号墓 (第64図)

A群東端付近、10号墓の西に位置し、137号墓を切る。主軸はほぼ10号墓に揃う。

平面形は0.65×0.55mのほぼ隅丸正方形に近い。

115号墓 (図版35、第64図)

A群東北隅付近、29号墓の南西に位置する。57号墓の火葬骨が上面にのるようである。

長軸0.8m、短軸0.45～0.55のやや台形に近い平面プランとなる。床面では・頭骨や大腿骨などが部分的に残存しており、頭位は北にあったことが推測される。

出土遺物 (第55図31～36)

鉄釘を検出したが、発掘時に原位置を動かしたために、一応南北2群に分けて取り上げた。31～33が南群、34～36が北群である。いずれも木質の銹着と錆のために形状ははっきりしないが、小型品である。また、身が曲がったものが多い。

118号墓 (図版36、第64図)

A群北端付近にある。131号墓を切り、67号墓に切られる。119号墓との先後関係はつかめていない。

一辺0.8m強の正方形プランを有する。東辺にそって土器が出土したが、床面から約0.2m浮いた位置でほぼ正立した状態であった。棺内に納められたものとは思えないが、棺上に置いたにしても出土状態に疑問がある。

出土遺物 (図版94、第95図5)

高台付碗で、底部が非常に厚い。体部から口縁部にかけては直立ないし内傾気味に立ち上がり、全体が横撫でで仕上げられるが、底部から体部へ移行する付近では削削りが施される。

これは素焼きのもので、ほとんど土師質の段階である。この後に軸掛け、焼成を行うのであろう。

119号墓 (第64図)

118号墓の南にあって切り合うが、先後は不明。しかし、36号墓を切っている。
床面の形状は直径0.5mのほぼ円形を呈するようである。

121号墓（第65図）

A群北西隅付近にあって、93号墓に切られる。
床面はほぼ0.7m弱の円形プランを有していた。

122号墓（第65図）

121号墓の東に位置し、主軸方位、平面形状ともに両者は似る。
床面はほぼ0.5m前後の隅丸方形あるいは偏円形に近い平面形となる。その墓壇全体を覆うような大きな標石を置いている。

123号墓（第65図）

122号墓の南にあり、ほかの墓とはやや距離を置いている。
これも直径0.4～0.5mの偏円形に近い床面プランとなり、深さが0.7mと墓壇平面に比して深い。また、墓壇に比して大型の石材を標石として用いる。

129号墓（第65図）

A群中央付近に位置し、130号墓に切られる。
床面は直径0.4～0.5mの偏円形プランとなる。標石を確認しているが、流失したものか平面的な立面図の対応関係を特定できない。図化を怠っている。

130号墓（第65図）

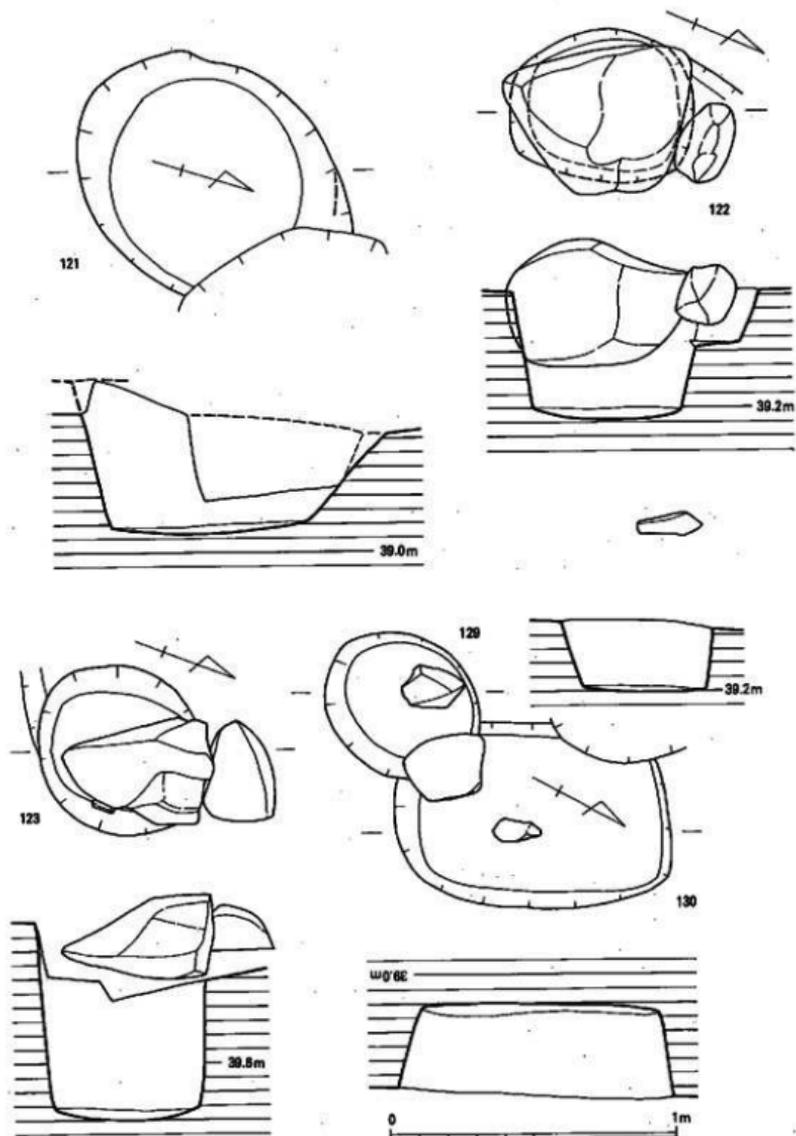
77・129号墓に切られ、また、いくつかの火葬墓が上面にのるようである。
床面は0.85×0.55mの隅丸長方形プランを想定でき、深さは0.3m強と浅い。これも墓壇上面で石材を確認できるが、図化ができていない。

131号墓（第62図）

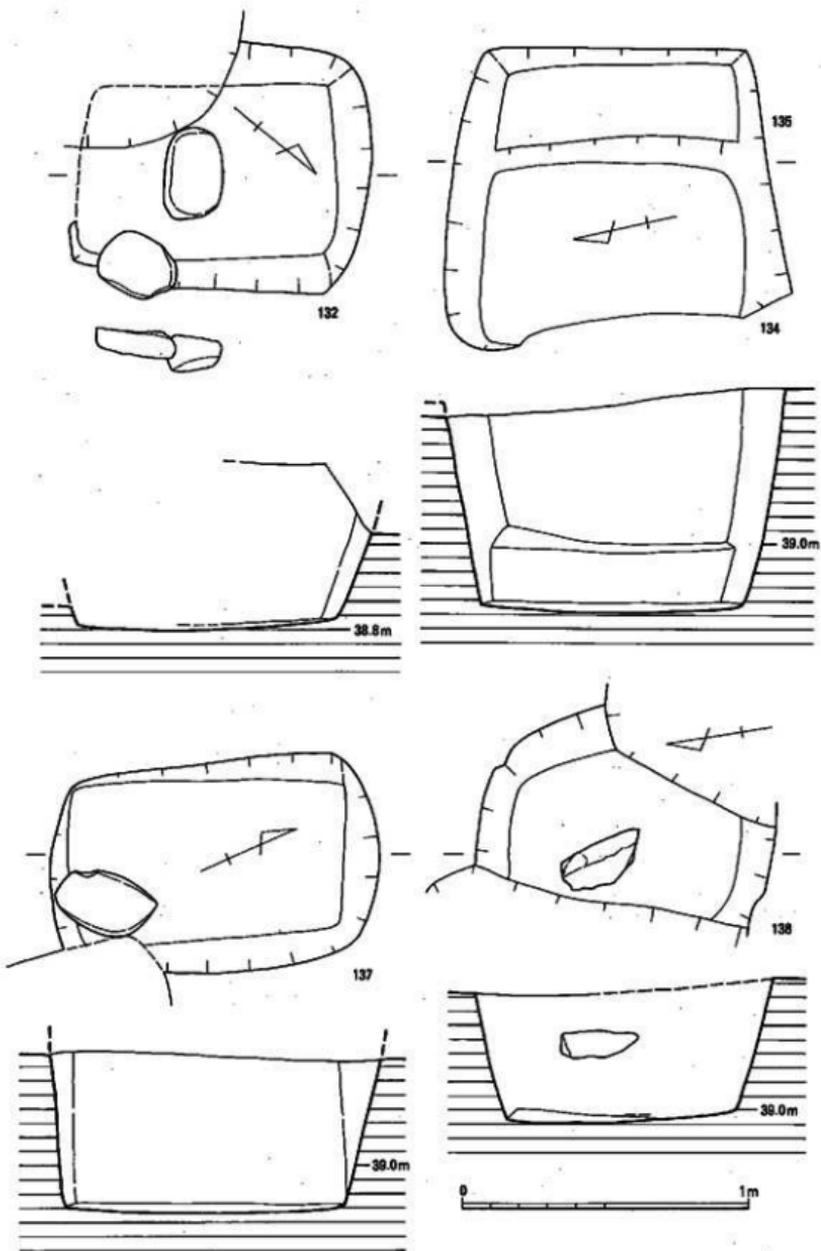
A群北端付近にあって、99号墓を切り、118号墓に切られる。また、132号墓とも切合関係にあるが先後関係を把握できていない。

132号墓（第66図）

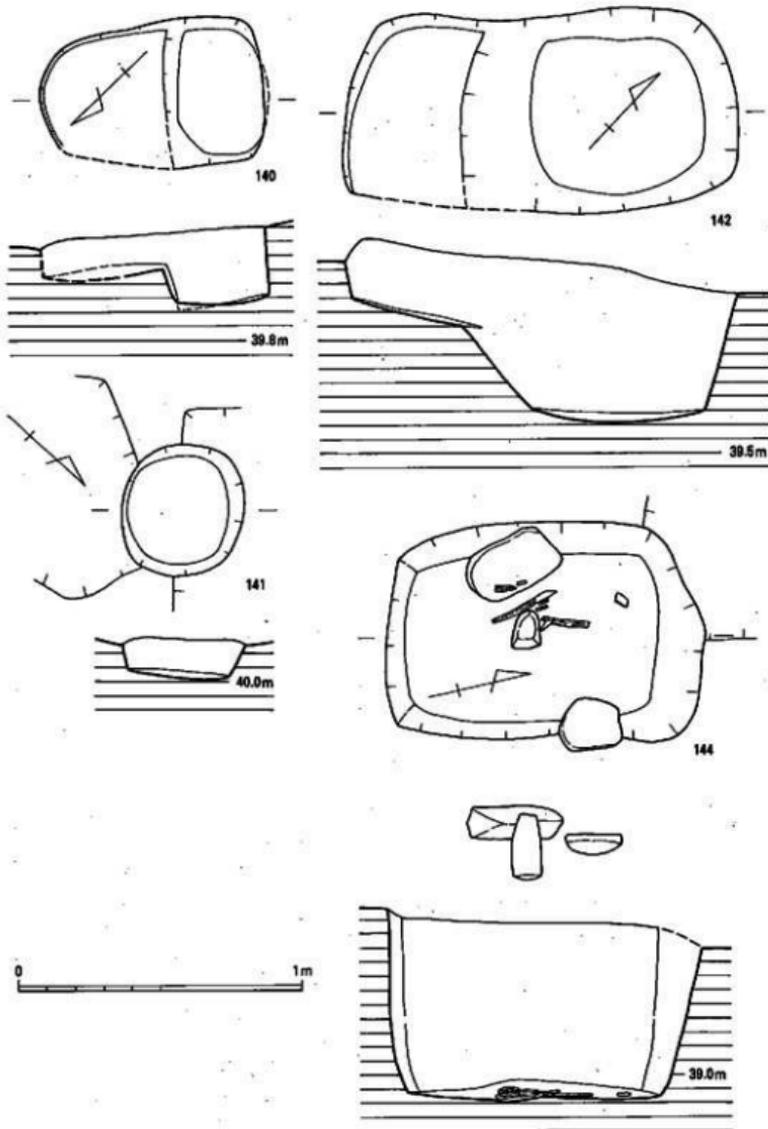
98・108号墓に切られ、131号墓とも切り合うがこの先後関係は確認できていない。



第65图 近世墓实测图21 (121~123·129·130号) (1/20)



第66圖 近世墓実測図22 (132・134・137・138号) (1/20)



第67图 近世墓实测图23 (140~142·144号) (1/20)

床面は整った長方形プランとなり、深さは0.6mを検出したが、標石の位置から見て本来は0.9m近くあったものと思われる。主軸は南北方向から45度ほど触れる。

134・135号墓（第66図）

A群中程の東端に位置する。切合を確認できず、完掘してから2基の重複に気付いたものである。134号墓はさらに19号墓に切られるがろうじて0.9×0.65mほどの床面規模がわかる。

137号墓（第66図）

10号墓の南西に隣接し、113号墓および火葬骨のみを検出した101号墓に墓域の一部を切られる。また、南辺肩に68号墓の火葬骨が置かれるが、切合関係はないようである。

床面は1×0.55mの整った長方形プランとなる。

138号墓（第66図）

13・14号墓に切られ、一部を検出した。

床面は0.8×0.6mほどの隅丸長方形プランを有したようで、深さは0.5mが残存する。

140号墓（図版36、第67図）

A群北西隅付近で検出した。141号墓に切られる。断面形状から2基が重複している可能性があるが、確認できていない。最も深い部分は0.45×0.3mの隅丸長方形プランとなる。

141号墓（図版36、第67図）

140・142号墓を切って掘り込まれる。

床面は直径0.35～0.4mの円形平面に近い。深さも0.15mと非常に浅いものである。

142号墓（図版36、第67図）

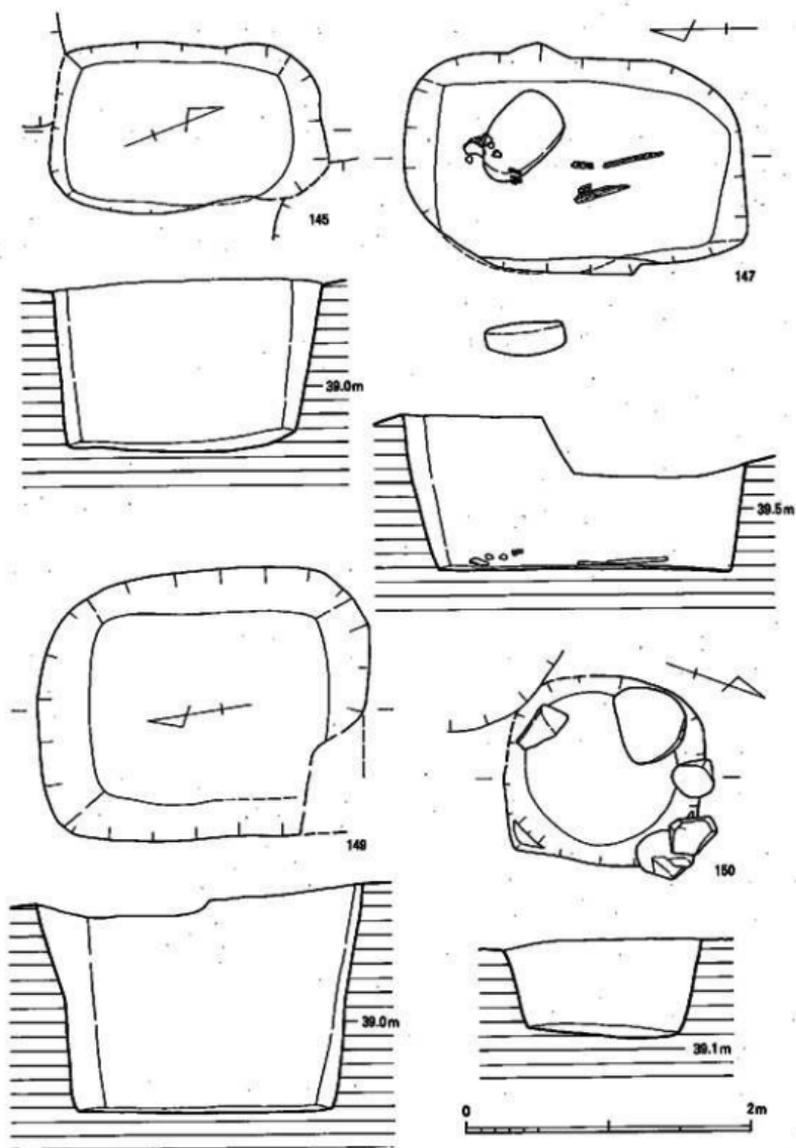
141号墓の北にある。蔵骨器である74号墓が墓域に埋置されるようであり、北辺の隅付近に124号墓の火葬骨も検出された。

これも2基が重複している可能性があるが未確認。最も深い部分はほぼ一辺0.6mの隅丸方形プランとなる。

144号墓（図版37、第67図）

14号墓の南西に位置し、それと主軸を揃えたとともに平面形も似る。

0.9×0.6mの整った長方形プランを有する。床面から骨の一部が検出されているが、非常に



第68图 近世墓実測図24 (14・147・149・150号) (1/20)

残りが悪い。また、標石は墓域中央部に相当する位置に棒状石材を立てていた。

145号墓 (第68図)

11・137号墓の間にあって、それらとは重複しないようであるが、掘形上に蔵骨器44号墓と、136号墓の火葬骨がのっていた。

床面は0.8×0.5mの隅丸長方形を呈し、0.6mの深さが残存する。

147号墓 (図版37、第68図)

A群西端付近にあって、ほかの墓とは距離を置いて単独で位置する。

床面は1×0.7mの長方形プランとなるが、南東および北西隅の形状が崩れている。床面で歯や人骨片を検出したが、その状況から北に頭位を置いたことが想定される。

ちょうど頭の付近に河原石を標石として置いたようである。

149号墓 (第68図)

147号墓の南東に位置し、154号墓にきられ、蔵骨器である105号墓が掘形北西隅付近に埋置される。

床面は0.85×0.7mの隅丸長方形プランとなる。

150号墓 (第68図)

149号墓の北に隣接する。

床面は直径0.55mの円形平面となり、深さは0.35mと浅い。人骨片が出土する。墓域上で散乱する標石を確認しているが、立面図の図化ができていない。

151号墓 (図版38、第69図)

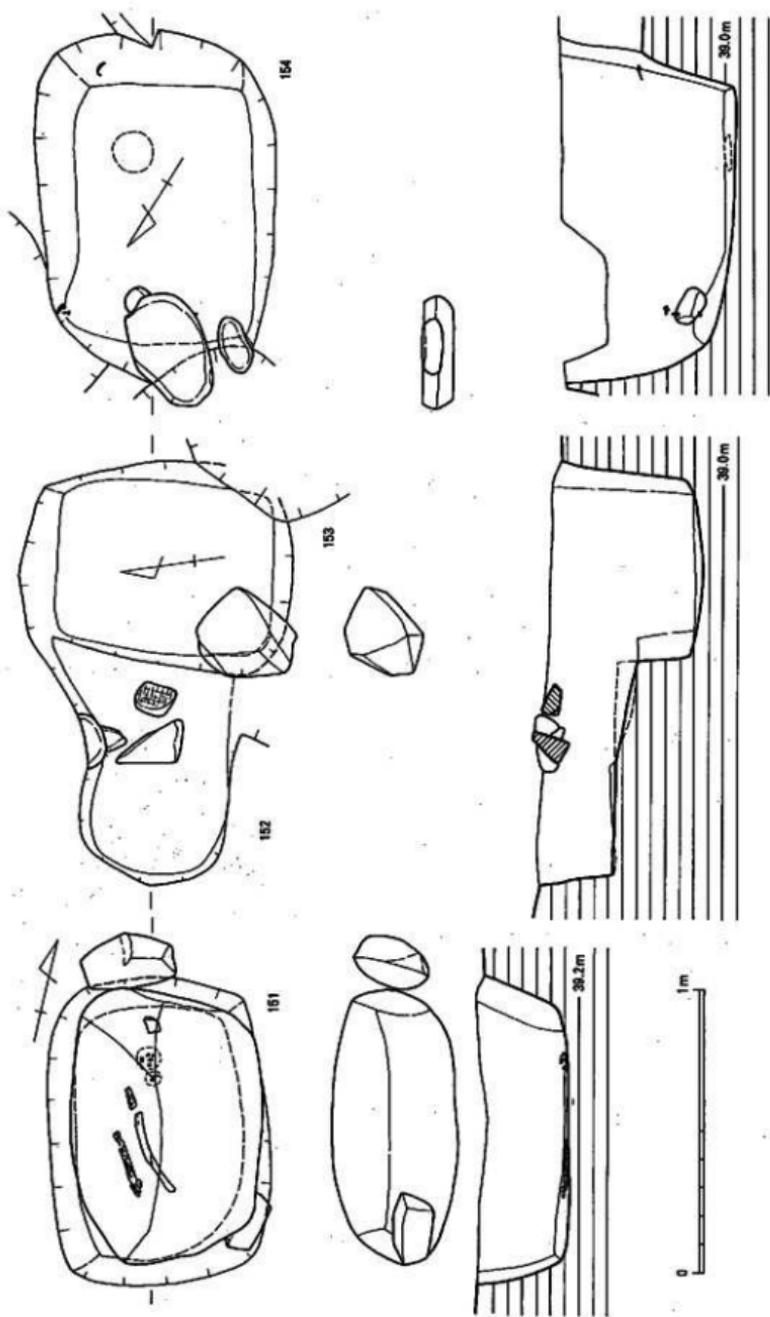
150号墓の北に位置し、他の遺構との重複はない。

床面は0.9×0.6mの隅丸長方形に近く、深さは0.3mと浅い。墓域底で人骨片に混ざり、北側で歯とガラス玉を検出している。

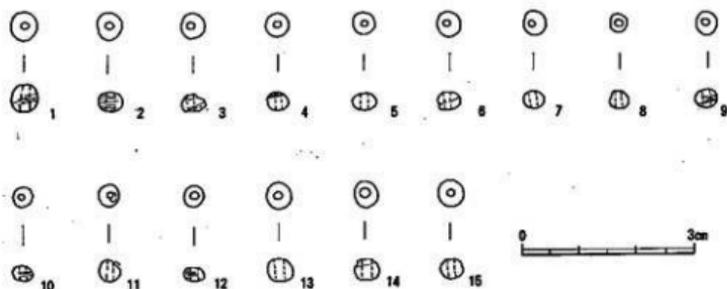
墓域上面には墓域をすっぽり覆うような長軸約1m、短軸0.7m、厚さ0.45mの巨石が置かれていた。その北側にも石が散乱するが、どれに伴うものかはっきりしない。

出土遺物 (第70図)

白濁する半透明のガラス玉13点と青味を帯びる不透明のガラス玉2点が採集される。直径3～4cm、高さ2～5cmの大きさで、多くに製作時の横方向の条線が残る。腕飾りであろうか。



第69图 近世墓実測図25 (151~154号) (1/20)



第70図 151号墓出土遺物実測図 (1/1)

152号墓 (図版38、第69図)

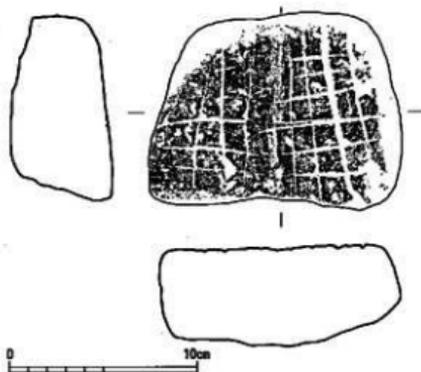
A群西端近く、149号墓の西に隣接し、153号墓と切り合う様な位置にあるが、細部は確認できていない。

床面は長軸0.6m以上、短軸0.5mの規模となるが、主軸方位を考えると平面形は隅丸方形に近い形となるのであろう。

出土遺物 (図版95、第71図)

検出面で検出した数点の礫の中に、ここに紹介する刻線礫がある。石材は長軸13cm、短軸10cm強、厚さ5cmほどの方形に近い泥岩の自然礫である。

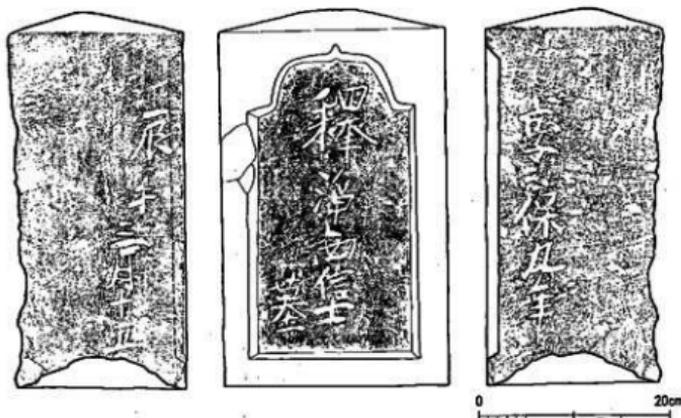
その片面にかなり鋭利な器具で掘り込まれる刻線が見える。刻まれた面の中央に幅広い浅い溝状の掘り込みがあるが、これが意図的なものかどうかはわからない。その掘り込みに平行する線が7本刻まれる。直交する線は溝の右側で6本、左側で4本が確認できるが、残余の2本ははっきりしない。



第71図 152号墓出土刻線礫実測図 (1/3)

153号墓 (第69図)

床面は0.75×0.6mの隅丸長方形プランとなる。深さは現状で0.55m余であるが、標石の位置



第73図 155号墓石塔実測図 (1/6)

を考慮すれば本来は1mほどであったものと思われる。人骨片が出土。

出土遺物 (第44図42~55)

かなりの釘が出土したが、いずれも出土位置を確認できていない。木質の錆着と錆の進行のために、細部がはっきりしないが、頭部と判断できるものは図示した13点のほかにそれらしい1点がある。頭部から0.5~0.7cmの位置で木質の方向が90度異なっており、棺材の厚さを推定できる。また、釘は全体に小型である。

154号墓 (図版39、第69図)

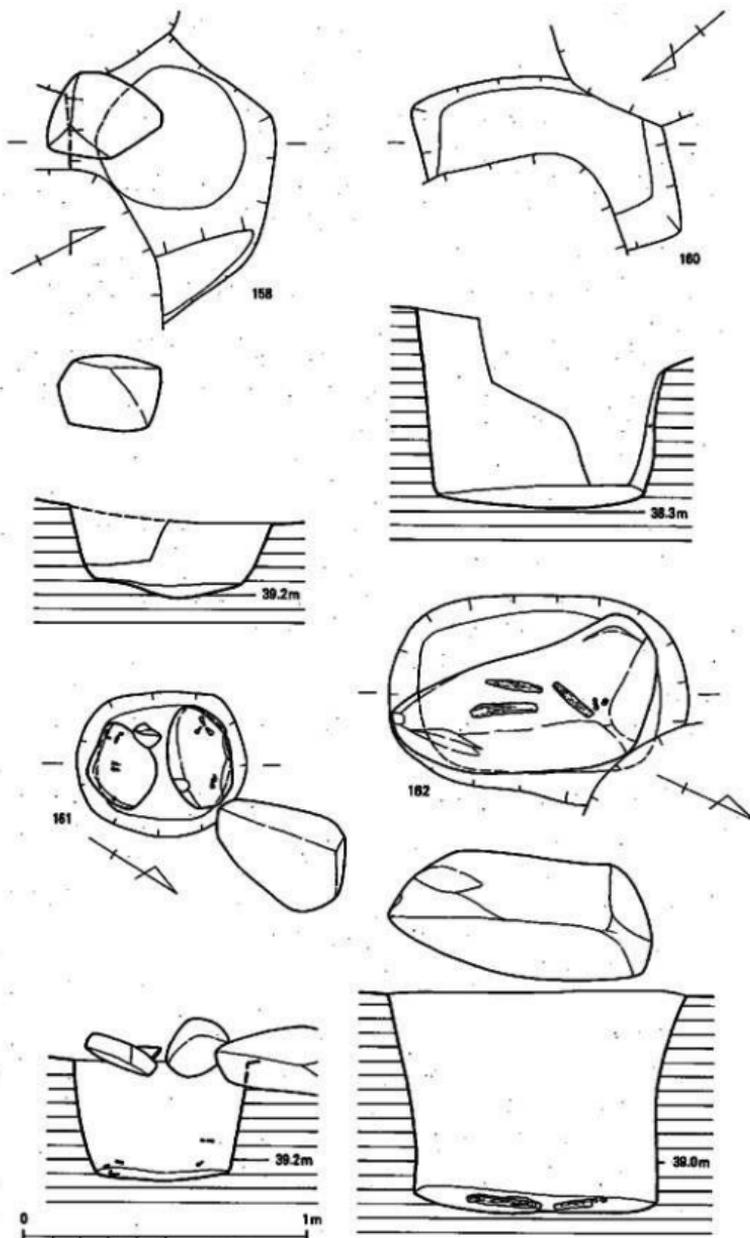
149・153号墓を切る。

床面は0.9×0.6mの長方形プランとなる。南よりの床面で人骨片を出土したが残りがよくない。また、北側の床面から拳大の河原石が出土したが、これは本来的に棺内あるいは棺底に置かれていたものかも知れない。

出土遺物 (第44図56~66)

図のような位置で鉄釘を確認している。すべてを図示したものではなく、これも錆の進行が著しいために細部は不明であるが、一見してわかるように大小2種類がある。

大型のものは56~58で、全長5~7cmを測る。64~66もそうであろう。小型品は63を例にとれば全長3.5cm、身の断面は0.3cmほどの方形断面となる。



第74圖 近世墓実測圖27 (158・160~162号) (1/20)

155号墓（図版39、第72図）

150号墓の北にあり、151号墓の西にある。これも単独で位置する。

床面は0.9×0.65mのややいびつな隅丸長方形を呈する。深さは0.5mを確認しているが、上方の墓石までの深さは0.8mを測る。石塔の下に磔を据えて安定を図っている。

石塔（第73図）

台石と石塔からなり、凝灰岩を用いたもの。台石（基壇）は長さ34cm、幅30cm、厚さ9cmの整った直方体である。

石塔は頂部を四角錐形に加工する。正面幅23.5センチ、奥行き18cm、高さ40cmほどの規模である。正面に火燈風の掘り込みを入れて「釋淨西僧土墓」と記すが、「墓」字は左へ行を改めている。右側面に「享保九年(1724)」、左側面に「辰年三月十五日」と刻む。

156号墓（第72図）

18号墓の北西にあり、重複する土壇墓はない。ただ、北辺肩に42号墓藏骨器が半ば覆うような位置に埋置されていた。

床面は0.85×0.65mの整った隅丸長方形プランとなり、深さは0.5mを確認できた。壁体は良好に遺存し、垂直ないしはややオーバーハングして立ち上がる。

157号墓（第72図）

158号墓（調査時は未登録。本報告にあたって新たに登録した）と重複するが、先後関係は確認できていない。

直径0.55mの不整形円形プランとなる。墓壇上面に磔が1点落ち込むが、さらに上面に標石が存在した。

158号墓（第74図）

A群西端付近にあり、144・149号墓に切られるが、床面はすべて残る。

床面は直径0.5mの扁円形を呈する。標石下面までの深さは0.6mを測る。

160号墓（第74図）

A群南端付近、3号墳周溝肩に近く位置し、2・110号墓に切られ、床面の半分近くが失われるが、かろうじて規模はわかる。

床面は0.75×0.5mの長方形プランを有し、深さは0.7mが残る。

161号墓（図版40、第74図）

やはり3号墳肩付近、5号墓の東に位置する。この狭い範囲にある墓は、互いに切り合わず、分散する。

床面が0.5×0.4mの隅丸長方形プランを有する、深さ0.45mの小型の墓墳である。床面あるいはやや浮いた状態で鉄釘を出土している。

標石は墓墳をほぼ覆うように2点の河原石が置かれていた。

出土遺物（第44図67～76）

鉄釘の一部を図示した。ここで検出した釘の特徴の第一は、木質の方向である。他例ではいずれも味に対して直角方向に執着していたものが、ここでは上半では直角方向、下半では平行な方向の木目となる。上半部の厚みは1.5～2cmとなっている。

162号墓（図版40、第74図）

A群北端近くにあつて、37号墓に切られる。

床面で0.85×0.55mの隅丸長方形のプランを有し、深さも0.8mと深い。床面から大腿骨と歯の一部が出土しており、それから推して北辺に頭位を置いたようである。

墓墳上には長軸1m弱、短軸0.5m、厚さ0.4m強の巨石が墓墳を塞ぐような位置に置かれていた。

167号墓（図版42、第76図）

B群にあつて調査区の境界に位置し、その一部を発掘した。

残存規模は長軸0.65m、幅0.65m、深さ0.75mで、長方形プランを有するようである。この墓も含めて、B群に位置する遺構は等高線に沿って営まれる例が多い。

168号墓（図版42、第76図）

167号墓の南に接する。

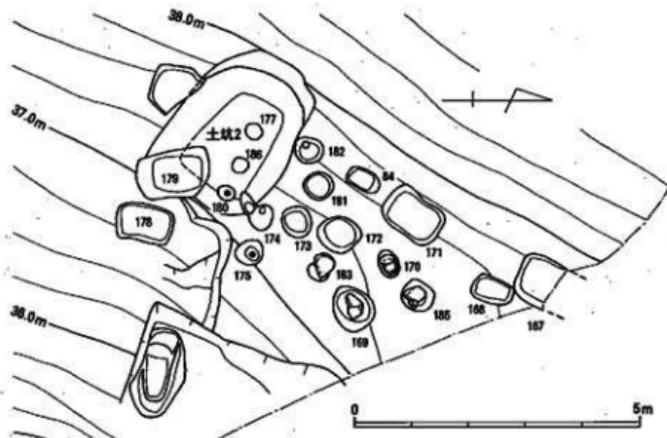
床面は0.55×0.35mの小型隅丸長方形プランとなるが、深さは0.9mを測り、平面形に比して非常に深い。

169号墓（第76図）

168号墓の南にある。

床面は0.6m弱の扁円形を呈する。床面に接して角礫が出土したが、これも標石が転落したものであろう。

170号墓（図版42、第76図）



第75図 近世墓配置図2 (1/100)

169号墓の北西に位置する。

これも床面は $0.4 \times 0.25\text{m}$ と非常に小型であるが、 0.55m とかなりの深さを有している。また、床面に接して2点の石材が出土しているが、標石が転落したものであろうか。ただ、先の169号墓と同様かなりの深さがあることから、あるいは棺直上付近に置かれていたものかも知れない。

171号墓 (第76図)

170号墓の北西で検出した。さらに167号墓と主軸が等しく、かつほぼ直線上に位置する。

床面形状は $0.85 \times 0.65\text{m}$ のやや歪んだ隅丸長方形となり、深さは 1m を測る。

172号墓 (第77図)

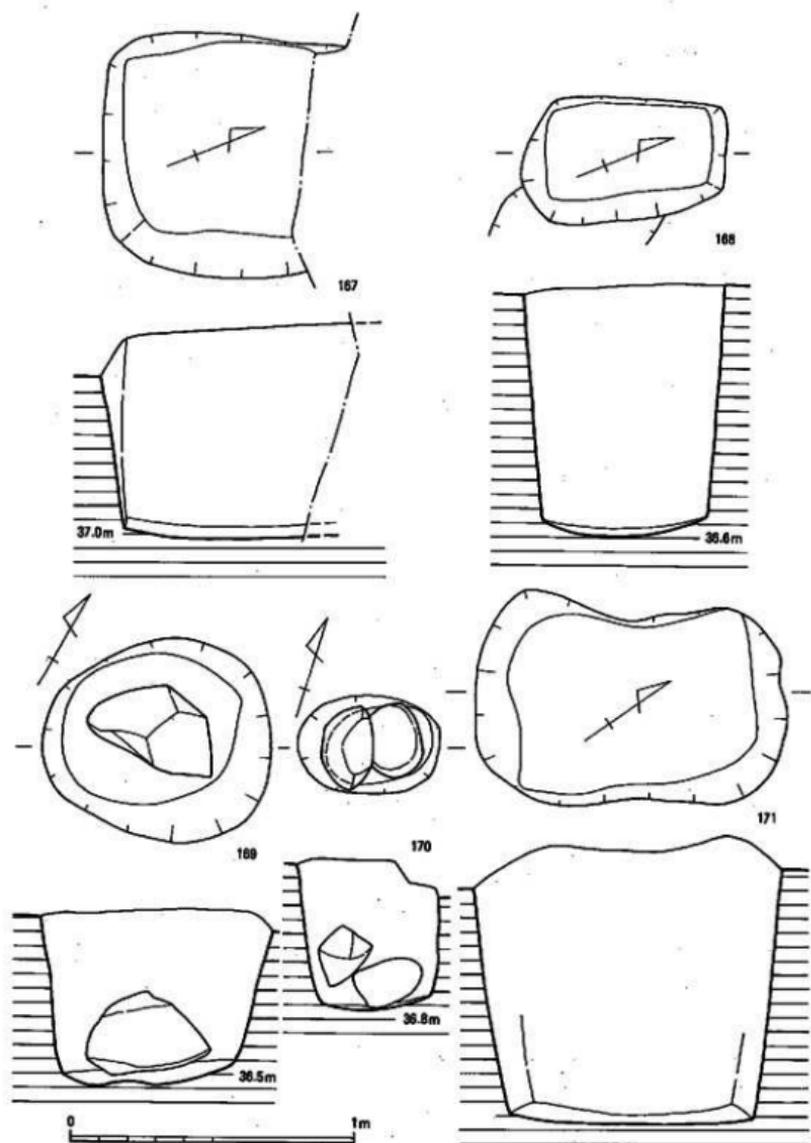
170号墓の南西にある。

床面は $0.45 \times 0.5\text{m}$ の隅丸方形に近い形となる。

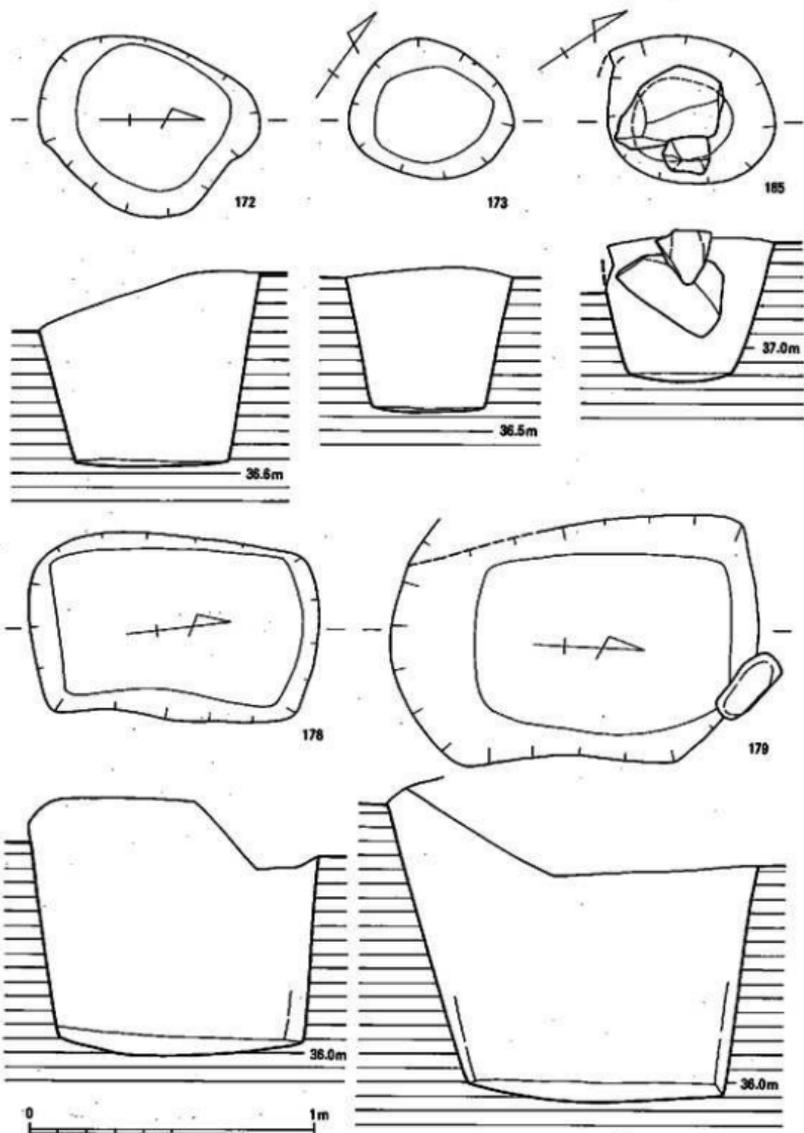
173号墓 (第77図)

172号墓の南に接してある。

床面は $0.35 \sim 0.4\text{m}$ の扁円形プランとなり、深さは 0.5m を測る。



第76圖 近世基実測圖28 (164・167-171号) (1/20)



第77圖 近世墓配置圖29 (172・173・178・179・185号) (1/20)

178号墓（図版43、第77図）

B群の南端に位置し、墓壇主軸はほぼ南北方向となる。

床面は0.85×0.5mのややいびつな長方形プランとなり、深さは0.9mが残る。

179号墓（図版43、第77図）

178号墓の西に隣接し、主軸方位はやや異なるがやはり南北方向に近い。両者は深い関係があると思われる。22号土坑と重複しており、発掘を失敗したが、床面は全体がわかる。

床面規模は0.9×0.6mの隅丸長方形プランを有し、深さは1mが残る。

185号墓（第77図）

168・169号墓の間で検出した。

これも床面は0.3～0.35mの扁円形を呈し、深さは0.5mを測る。埋土上半に角礫2点が落ち込んでおり、これは標石としてよからう。

火葬墓

火葬墓には蔵骨器に納められたもの、浅い小規模な土坑に納めて石などで覆ったもの、そしてなんらの掘形も確認できずにただ置かれたような状態で検出されたものの3つの形態がある。第三の火葬墓は木箱あるいは布などに納められていたものと思われるが、特に図化を行っておらず、土墳墓などの実測図に一部その所在を示している。

3号墓（図版30・44・45、第43・78図）

鉄密には3号墓の墓壇中に埋置された火葬蔵骨器で、当初は47号墓と呼称していたが、ここでは3号墓（上層）としておく。この蔵骨器はさらに2基からなる。下方に蓋を被せた蔵骨器をおき、その直上に方形火鉢を置く。火鉢の中に火葬骨を入れており、その上に平瓦を通常の伏せ方で置いて塞いでいた。

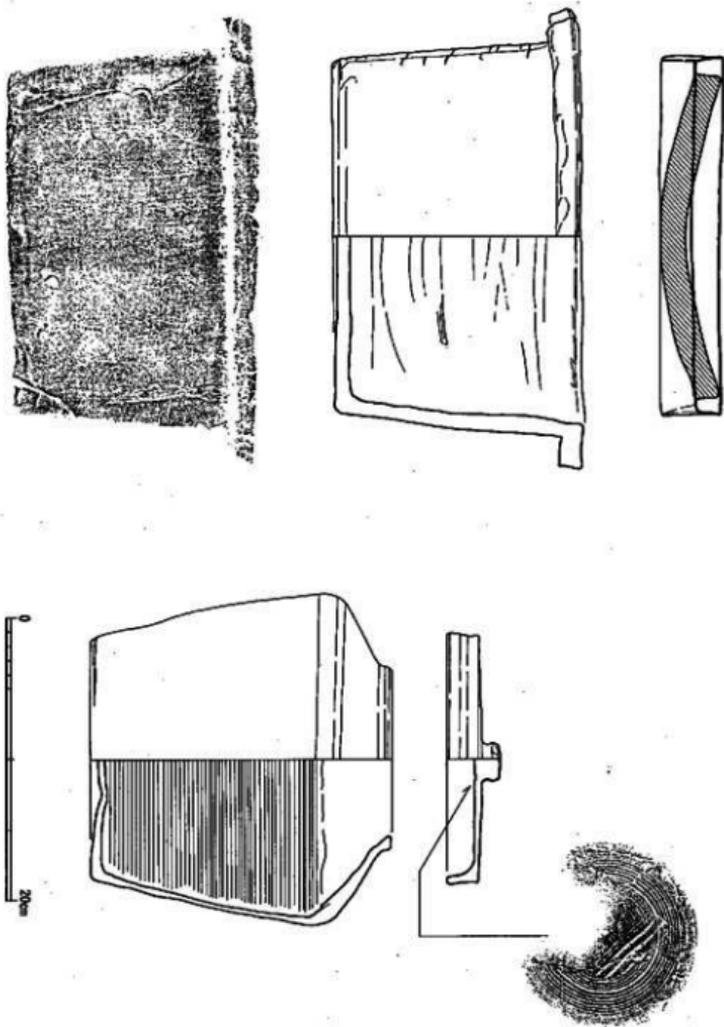
瓦（図版91、第79図）

平瓦であるが、横断面図の右端が小さく折れていて左右非対称となる。また、四周の小口面および凹面は燻されて、光沢を有するが、凸面のみは燻されていない。色は暗灰色。

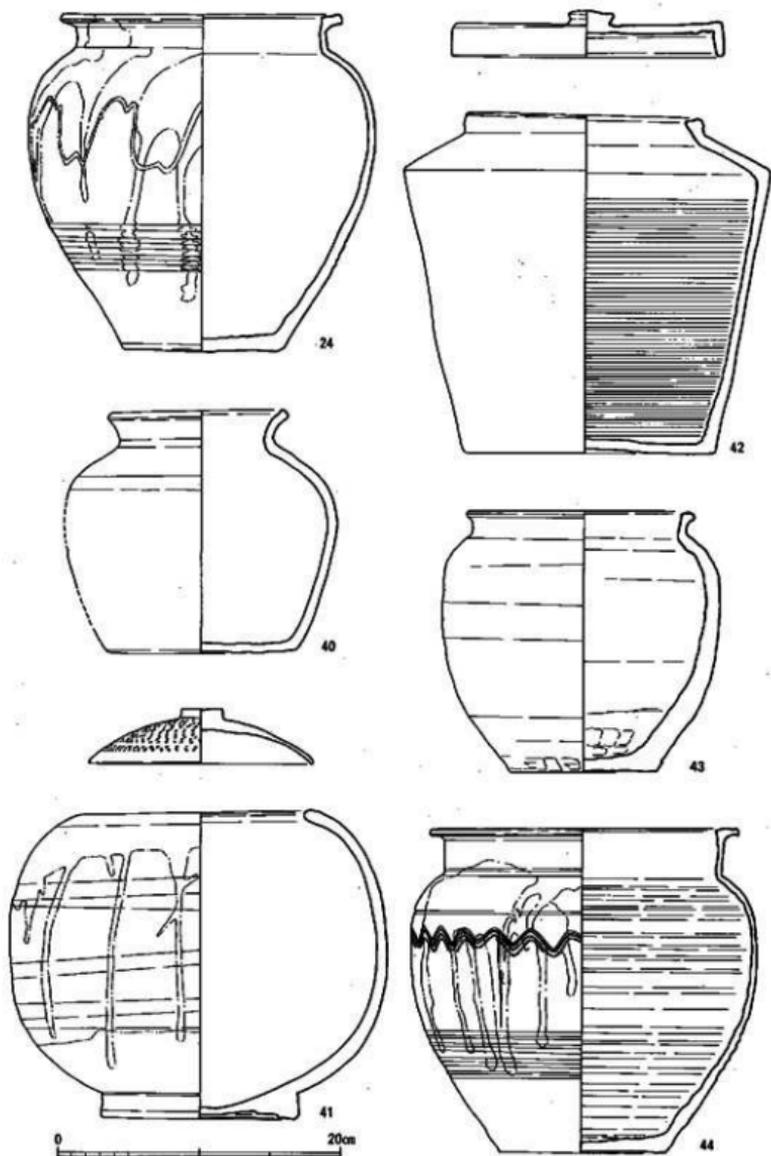
火鉢（図版91、第79図）

瓦器。上面観はほぼ正方形を呈し、タガ状突帯の外縁で30×32.5cm、高さは17cm余である。

四周外面には細かい布目が顕著に残り、内面は一辺のみが縦方向の、他の三辺は横方向の粗い撫でで仕上げられる。内面底部も同様に粗く撫でる。また、底部外面には四周と異なる圧痕が残る。目が粗く、莫慮のようなものであろうか。いずれにしても、長方形の板5枚を型作りで成



第79圖 青銅器實測圖 1 (L/4)



第80图 藏骨器实测图2 (1/4)

壺は肩が張る無頸壺で、体部は直線的、口縁部は断面三角形に内側へ肥厚する。

最大頸部付近にのみ寛削りが観察でき、それを境にして内外面の調整手法が異なる。外面では上部を撫で、下部はよくわからないが、型作りで成形したと思わせるものである。内面では以下を粗いカキ目で、以上を撫でて仕上げる。

なお、外底面も型作りを思わせ、その部分のみ黒く変色する。

24号墓（図版32、第50・78図）

A群中程東端近くにある21号墓墓壙上部に埋置された火葬蔵骨器である。埋置の状態は小さく傾斜するもののほぼ直立に近い。また、蓋を検出しておらず、木蓋で覆っていた可能性がある。

蔵骨器（図版91、第80図）

いわゆる味増壺、梅干壺の類である。体部が張り有し、頸部が直立、口縁部が鬚先状に拡張される陶器。底部外面を除いてすべてに灰褐色釉が施されており、肩部に白濁・鉛釉を垂らす。また、肩部に1条の沈線と不定形波状文を、体部下半に多条の平行線文を付す。

40号墓（図版46、第78図）

1号墳墓道の肩に掘り込まれた99号墓墓壙上に置かれた火葬墓で、掘形平面は検出に失敗した。掘形床面が傾斜しているのは99号墓の陥没によるものであろう。

蔵骨器（図版91、第80図）

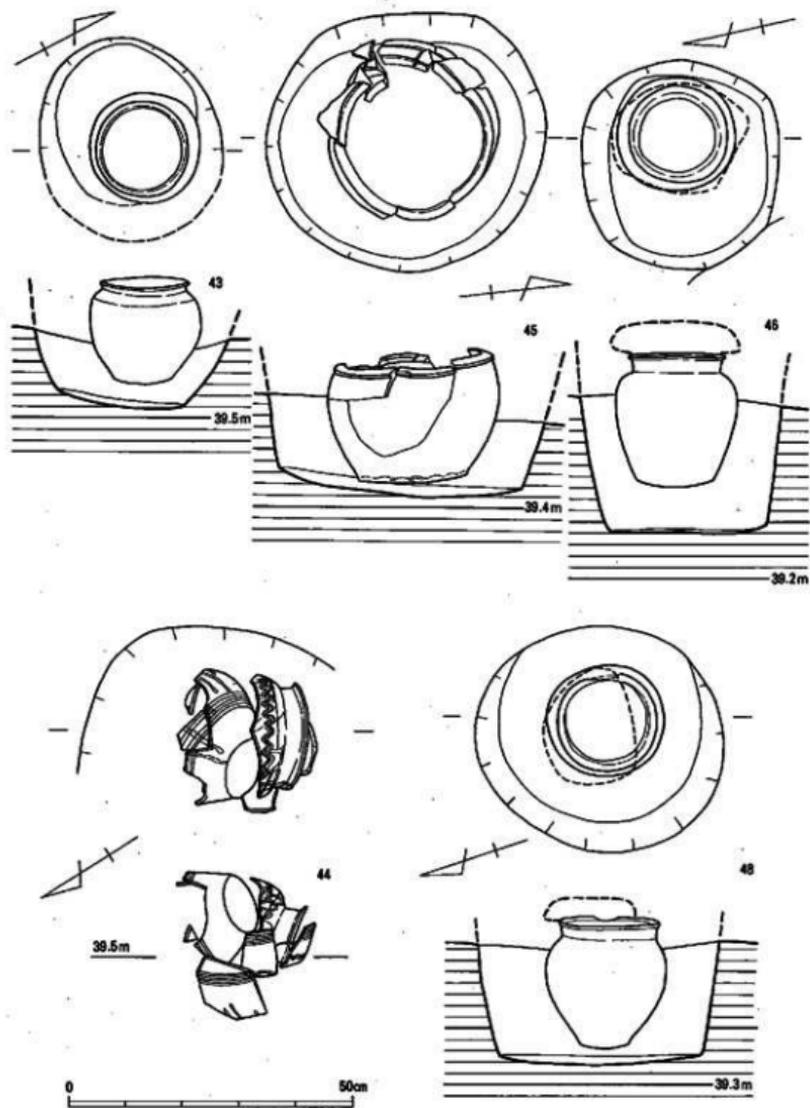
検出時にはつきり古墳に副葬された土器の転用であろうと思っていたほどの須恵質の陶器。底部が平底である以外は古代以前のものとしてもよいようなものである。焼きが甘く、器表が全体に荒れていて細部は不明である。

41号墓（図版46、第78図）

A群北端に近い98号墓の掘形にのるが、かなり掘り下げた位置で掘形を検出した。検出した規模は直径0.4m弱、深さ0.15mであり、床面は曲線を描く。

蔵骨器（図版92、第80図）

球形形を持つもので、口縁部も水平に切り取ったような形となる。底部には大きめの蛇の目高台を付し、体部下半は寛削りで、それ以上および内面を丁寧な器内は灰赤色で、暗灰色釉が垂れる。横撫でで仕上げる。体部内面は露胎である。釉は暗灰色を呈するが、本来の発色ではない。蓋は大きめのつまみを持ち、細かいトビガンナで装飾される。外面はごく薄く灰緑色釉を被るが、これも本来の発色とは思えない。内面は露胎で灰赤色を呈する。



第81圖 近世墓配置圖31(藏骨器2)(1/20)

42号墓（図版47、第78図）

A群中程に位置する146・156号墓の狭い間にある。掘形の全体は確認していないが、形状は直径0.4m弱の円形プランのようで、0.25mの深さを有している。蔵骨器は床面と5cmほどの隙間を有する。

蔵骨器（図版92、第80図）

壺・身とも瓦質。蓋はやはり、平坦な天井部に直角に体部が取り付く。全体を撫でるよう。壺は3号墓のそれと同様の形態であるが、器高が高い。外面は全体に丁寧に磨くようであるが、内面では屈曲部付近で上下の仕上げが異なり、下位では凹凸の著しい横撫で、上位では非常に丁寧に平滑化である。

43号墓（図版47、第81図）

A群中程西端近く、51号墓の南に隣接する。0.25×0.15mほどの扁平な河原石を蓋石として使用していたが、蔵骨器との合成ができなかったので個別実測図には載せていない。

これも掘り下げて掘形を検出した。平面形は0.3～0.4mの楕円形を呈し、深さは0.15mを確認している。蔵骨器は東に偏して埋置している。

蔵骨器（図版91、第80図）

灰赤褐色を呈する無軸索焼きの陶器。体部内面の横撫では粗く、凹凸が著しいが、外面は非常に丁寧に平滑化する。

44号墓（図版48、第81図）

145号墓の掘形上に埋置された蔵骨器で、これ自体の掘形は確認できなかった。また、破砕された状態で検出した。

蔵骨器（図版92、第80図）

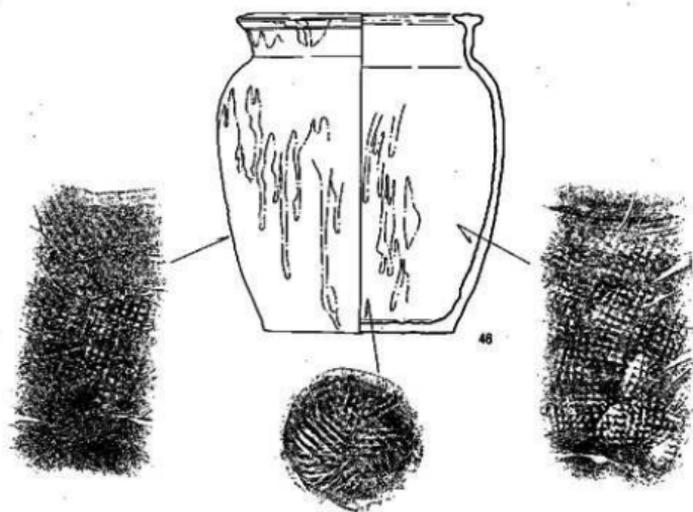
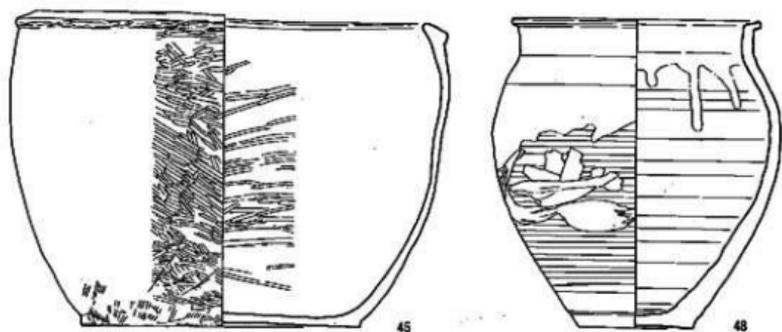
24号墓と同様ないわゆる味噌壺。器形的には体部の張りや頸部の長さがやや異なる。装飾面でも細部は異なるが、肩部に整った髹漆波状文を付し、体部下半に多条の直線文を付すなど、意図は共通する。地に灰褐色の釉を外底面を除く全面に付し、肩部に白濁釉・暗緑～緑褐色釉を垂らす点も同様である。

45号墓（図版44、第81図）

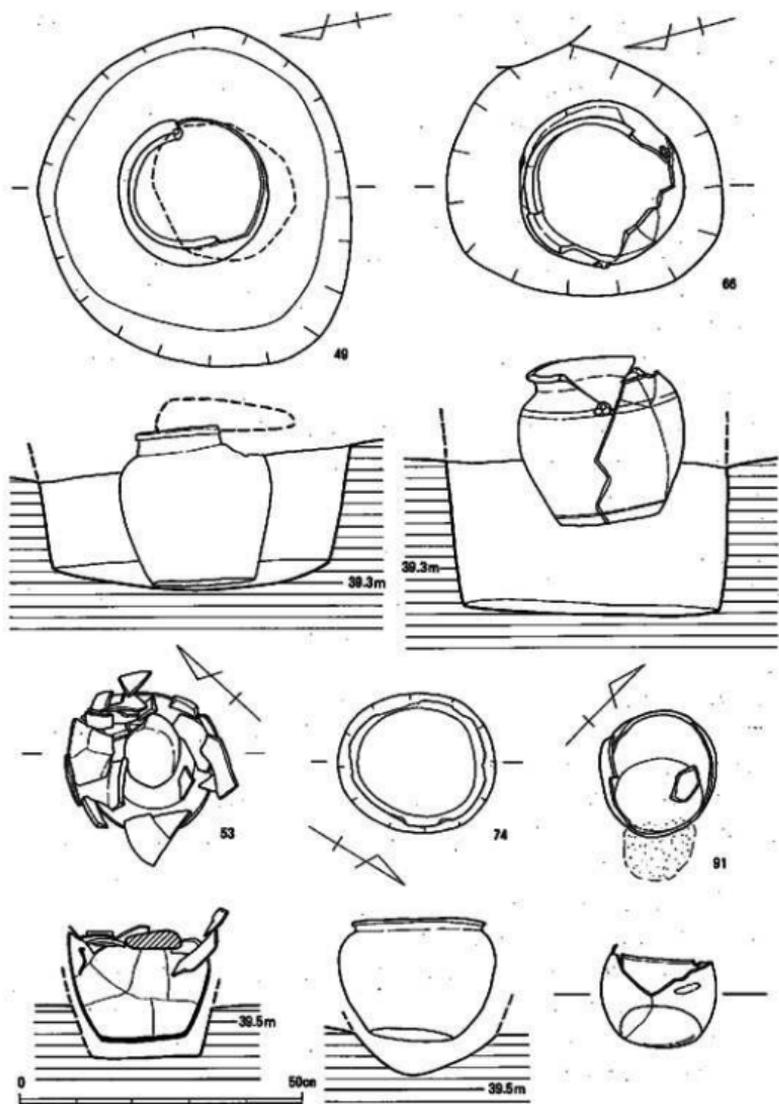
A群南端付近、3号墳周溝削で検出したもの。検出した掘形は0.45～0.5mの扁円形を呈し、深さは0.15m強を確認した。蔵骨器はほぼ中央に埋置されるが、若干傾いていた。

蔵骨器（図版92、第82図）

赤褐色土師質の土器である。底部が非常に大きく、体部は狭く内縁しつつ口縁部へいたる。



第82圖 藏骨器実測圖3 (1/4)



第83圖 近世墓配置図32 (藏骨器 3) (1/20)

口縁部は外面に拡張して断面三角形に近い形状にする。しかし、上面からみると大きく歪み、楕円形に近い平面形状となる。

外面では下端に粗い刷毛目が観察できるが、それ以上は幅広の暗文風の篋磨きで全面を覆う。内面も同様の篋磨きを行うが、底面では撫でて仕上げ、粗い刷毛目が一部にのる。

46号墓（図版44、第81図）

45号墓の東で検出した。表土の段階で蓋石が露出していたものである。

検出した掘形は0.3~0.4mの隅丸長方形ないし扁円形を呈し、深さは0.25mを確認した。蔵骨器は東に偏しているが、正立している。掘形床面とは0.1m弱の間隙をもつ。

蔵骨器（図版92、第82図）

底部が大きく、肩の張りが小さい胴型となる。頸部は直立し、口縁部はT字型に加飾される。地に茶褐色釉を厚く施し、さらに白濁釉を流している。

この壺では格子叩きが顕著に残り、それは体部内外面、底部内面までおよぶ。体部内面下半の観察では、当具の形状は円ないし楕円形を呈し、それに格子を刻んだ様子が痕跡からわかる。なお、底部外面は露胎である。

48号墓（図版45、第81図）

46号墓の南にあつて、これも表土で蓋石が見えていた。

検出した墓墳は直径0.4m強のほぼ円形を呈し、深さは0.2mを確認した。蔵骨器はその中央で正立して検出した。

蔵骨器（図版92、第82図）

形態は先の味噌壺に似るが、頸部の締まりが弱い。外面には粗い刷毛目が施され、内面は凹凸の顕著な横撫でで仕上げる。

上半部内外面に一部で灰緑色に発色する釉がかけられるが、焼成温度が高かったようで、大部分が飛び、白濁する。体部中位には刷毛あるいは筆で釉を付す部分がある。

49号墓（図版44、第83図）

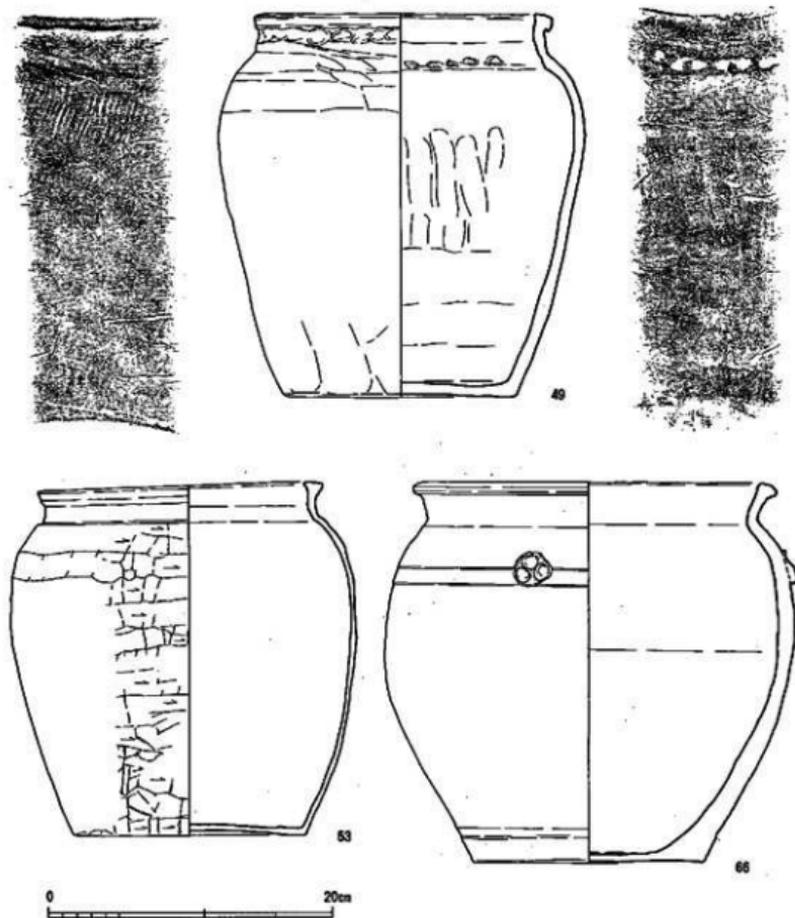
48号墓の西に並んで位置し、これも蓋石が除いていた。

掘形は直径0.6m前後の扁円形プランを有し、0.25mの深さを確認した。蔵骨器はその中央に置かれ、また床面に密着していた。

蔵骨器（図版92、第84図）

これも素焼き、土師質の壺。体部の張りが小さく、口径が大きい。

体部内面は中位付近に縦方向の、以下は横方向の指撫で痕が観察できる。頸部内面の連続す



第84圖 藏骨器実測圖4 (1/4)

る凹凸はやはり雑な指撫での痕跡。同外面は篋削りを雑に施す。拓影で叩き状に見える平行線は篋削り時の制止の痕跡である。

51号墓 (第56図)

76号墓の北辺に接して検出したが、切合関係ははっきりしない。長軸0.4m、短軸0.2m強の隅丸三角形に近い形状となり、深さは0.1mほどである。出土状態の記録がないが、火葬骨が出土している。

52号墓 (図版48、第88図)

A群中の北より、33～35号墓の間に位置する。掘形の検出が困難で、床面近くになってようやく面的に把握できたために掘形はかなり飛ばしている。検出した掘形は0.15～0.25mの扁円形プランであり、石はその一端を覆うに過ぎない。

火葬骨は長方形に近い形で検出したが、調査時に木箱等に納めていたとの確証はえられていない。

53号墓 (図版48、第83図)

52号墓の南に隣接し、77・130号墓の掘形にのる。53号墓自体の掘形はほとんど検出できなかった。蔵骨器の上半は崩れており、内部に河原石1点が入っていた。

蔵骨器 (図版93、第84図)

土師質、素焼きの火消壺で、大部分は黄褐色を呈するが部分的に鮮やかな赤褐色となるところがある。形状は他の例と似て、口縁部を断面三角形に近く拡張する。また、この例では頸部下に明瞭な段を付す。

調整技法も他と同様で、内面を丁寧に横撫でし、外面には不連続な篋削りを施す。また、底部外面の外周にも篋削りの痕跡が見える。

63号墓 (第88図)

A群中央付近のやや南、17号墓の掘形上で検出した。63号墓の掘形はまったく検出していない。おそらく非常に浅いものだったと思われる。円形に近く置かれた火葬骨上に2点の河原石が置かれていた。

66号墓 (図版44、第83図)

A群南端付近、2号墓の北に隣接するが、切合関係はない。直径0.45mほどの扁円形掘形の中央部に埋置されていた。掘形は深さ0.3m弱を確認したが、蔵骨器は床上0.15mの地点に置

かれる。

蔵骨器 (図版93、第84図)

素焼き段階の壺であろうか。器内は赤褐色を呈し、器表は灰赤色となる。全面に釉を施すが、まったく発色していない。

器形的には頸部の締まりが弱く、口端部を外方に拡張して装飾する。肩部に繊細な沈線を施したもののか、その上に浮文を付す。

74号墓 (図版53、第83図)

A群東端付近、142号墓の掘形にのる。これも面的には掘形を確認できていない。掘形床面は曲線を描き、蔵骨器はやや浮いた状態で埋置される。

蔵骨器 (図版、第87図) 赤く焼かれた素焼きの陶器。頸部が非常に短く、体部の形が大きくなるが、口縁部の形状は他の陶器壺に似る。内面を横線で、外面をカキ目で非常に丁寧に仕上げられているが、底部外面は一部を塗るほかは調整を行っていないようである。

83号墓

74号墓の南東、墓石をもつ126号墓に並んで位置する。床面は直径0.4mの不整形円形を呈し、深さは0.15mを検出した。掘形西辺に近く0.4mの高さの扁平な河原石を立てて墓標とする。掘形内から火葬骨が出土したが、詳細な記録をとっていない。

85号墓 (図版52、第88図)

83号墓の南に位置する。墓石の下で検出したが、墓標を伴うにはは貧相な遺構である。掘形の平面形は0.25m前後の扁円形を呈し、148号墓と切り合が先後関係は確認できない。

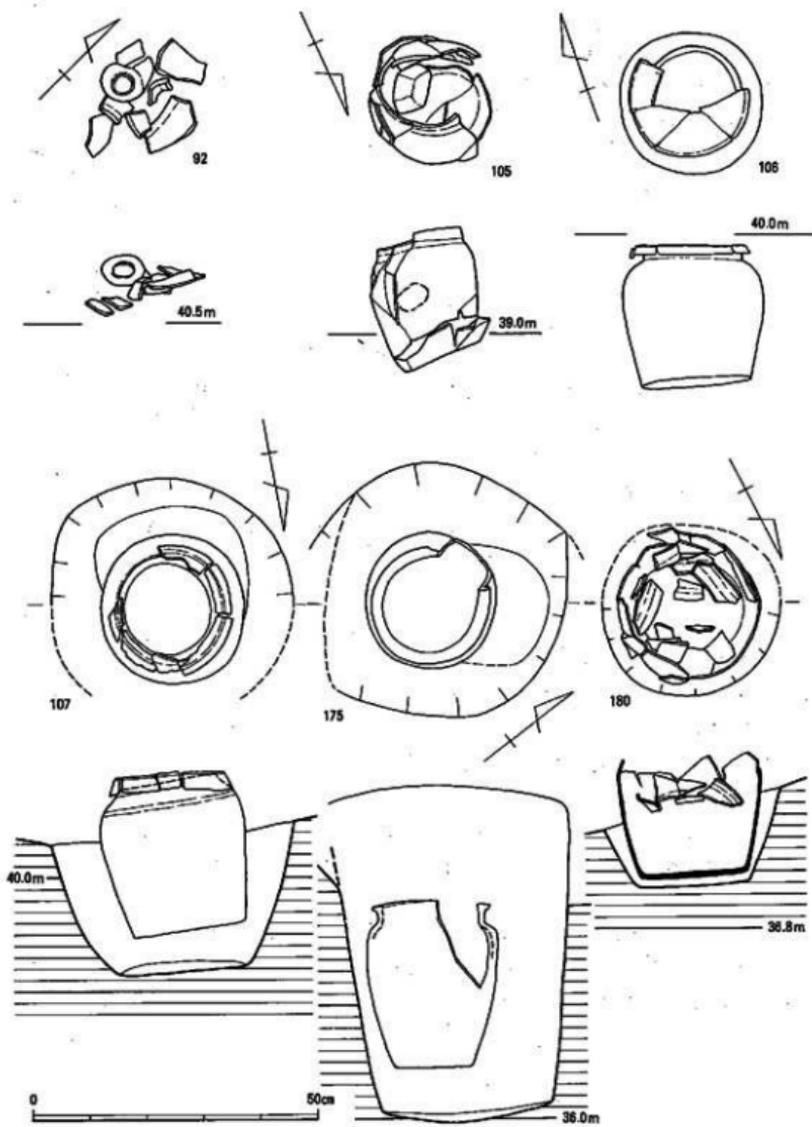
墓石はほぼ東面し、前面に礼拝石を置く。

石塔 (第86図)

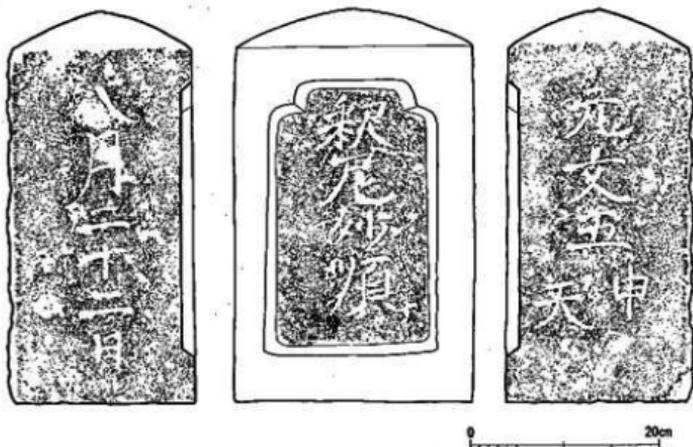
目の粗い凝灰岩を使用し、これは126号墓に使用されたものと同じである。また、戒名を刻む位置の装飾も同様であり、近い時期に同一場所から入手したものであろう。

台石は42×37cmの方形に近い形となり、厚さは10cmを測る。

石塔は頂部を角錐形に成形し、幅25cm、奥行き19cm、高さ41cmの大きさである。正面に「釋尼妙順」、右側面に「元文五(1740)申天」、左側面に「八月二十二日」と刻む。同様な墓石を使用する126号墓の年号は「元禄十五(1702)年」であり、本墓石とは38年の年代差がある。後述する111・112号墓でも同様な石材・形態の墓石を使用するが、そこでは56年の年代差がある。



第85图 近世墓配置图33(藏骨器4)(1/20)



第86図 85号墓石塔実測図 (1/6)

91号墓 (図版53、第83図)

A群最西端に位置する。2号墳墳丘上に埋め込まれていて、これも掘形は確認できていない。

藏骨器 (図版93、第87図)

土師質小型の火消壺で、口縁部は内面に小さく肥厚するが矮小化する。体部内面を指撫で、外面を鹿削りで仕上げる技法は他と同様である。

92号墓 (図版53、第85図)

91号墓の南西に位置する。土器片が散乱しており、火葬墓が破壊されたものであろう。一緒に出土した磁器碗との関係はわからないが、墓を壊した際に付近にあったものを埋め込んだものか。

藏骨器 (図版93、第87図)

土師質の火消壺で、体部下半を失う。口縁部はほぼ直立し、口端部の加飾が見られない。体部の形状、調整技法は他と同様である。

磁器 (第95図4)

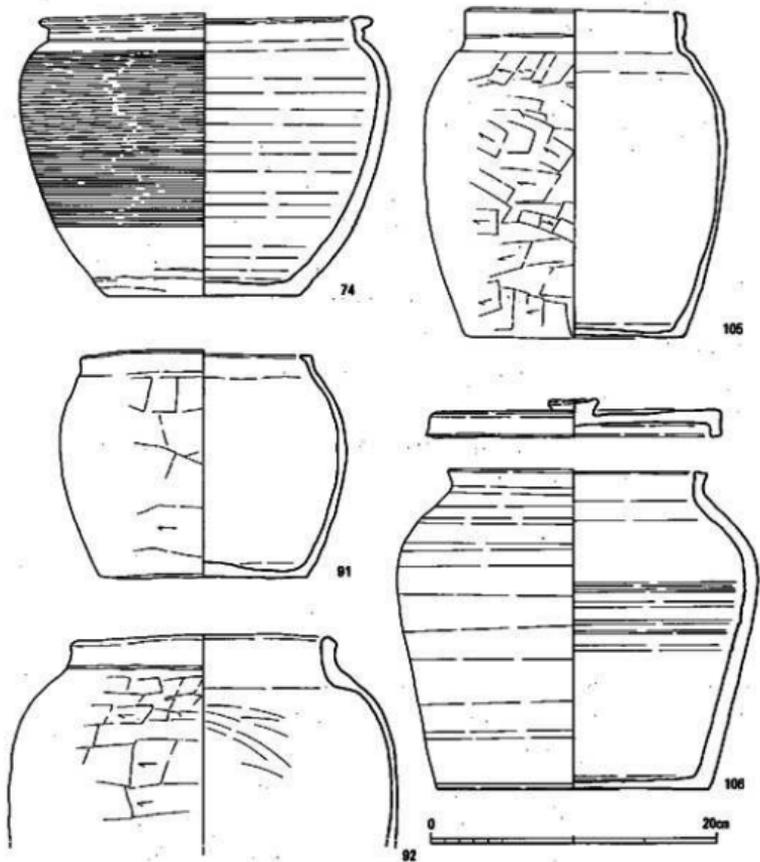
底部がほぼ完周するが、体部以上の多くを失う染付。ほぼ水平に広がる底部から体部が直立して延びる筒形碗で、疊付以外の全面に釉を施す。口縁部内面に菱形紋、見込みに崩れた五弁花文をコンニャク印判で付しし、そして体部外面に大振りの文様を施文する。

100号墓 (図版54、第88図)

A群中程西端に近く、74号墓の東に近接する。

掘形は直径約0.4mほどの円形プランとなり、検出した深さは0.1m強に過ぎない。掘形のほぼ全体を覆うように3点の石が置かれていた。石の下面は掘形上面の約0.1m上方にあった。

火葬骨はほぼ長方形に近い形で納められており、容器に入れられていたものと思われる。



第87図 蔵骨器実測図5 (1/4)

105号墓（図版54、第85図）

A群西端付近、149号墓の掘形隅にのる。掘形を確認できなかった。蔵骨器の内部には火葬骨上に小石が1点入れられていた。

蔵骨器（図版93、第87図）

赤焼き土師質の火消壺。口縁部が小さく肥厚するが、形状は92号墓のそれに近く、裝飾に乏しい。頸部直下にシャープな段を有し、体部は寸胴で、大きな平底の底部へ続く。

調整技法は他と同様である。

106号墓（図版55、第85図）

これもA群西端付近、105号墓の南西、152号墓の南にある。

やはり掘形は確認できなかった。蔵骨器の保存状態は良く、蓋は約1/2が失われていたが、なお全体を窺い知れる状態にある。

蔵骨器（図版94、第87図）

赤褐色を呈する素焼きの陶器。蓋は平坦な天井部の直立する体部を付すもので、天井部は非常に丁寧に撫でる。壺の形態は土師質の火消壺に似るが、成形・調整技法はまったく異なって轆轤を多用する。

なお、底部外面はやはり仕上げ調整を行っていない。

107号墓（図版55、第85図）

106号墓の南西に群とは距離をもって単独で位置する。掘形平面形は約0.4mの円形に近く、0.25mの深さを確認した。掘形床は傾斜しており、蔵骨器は床から0.1m弱浮いた状態で、やはり小さく傾いて出土した。

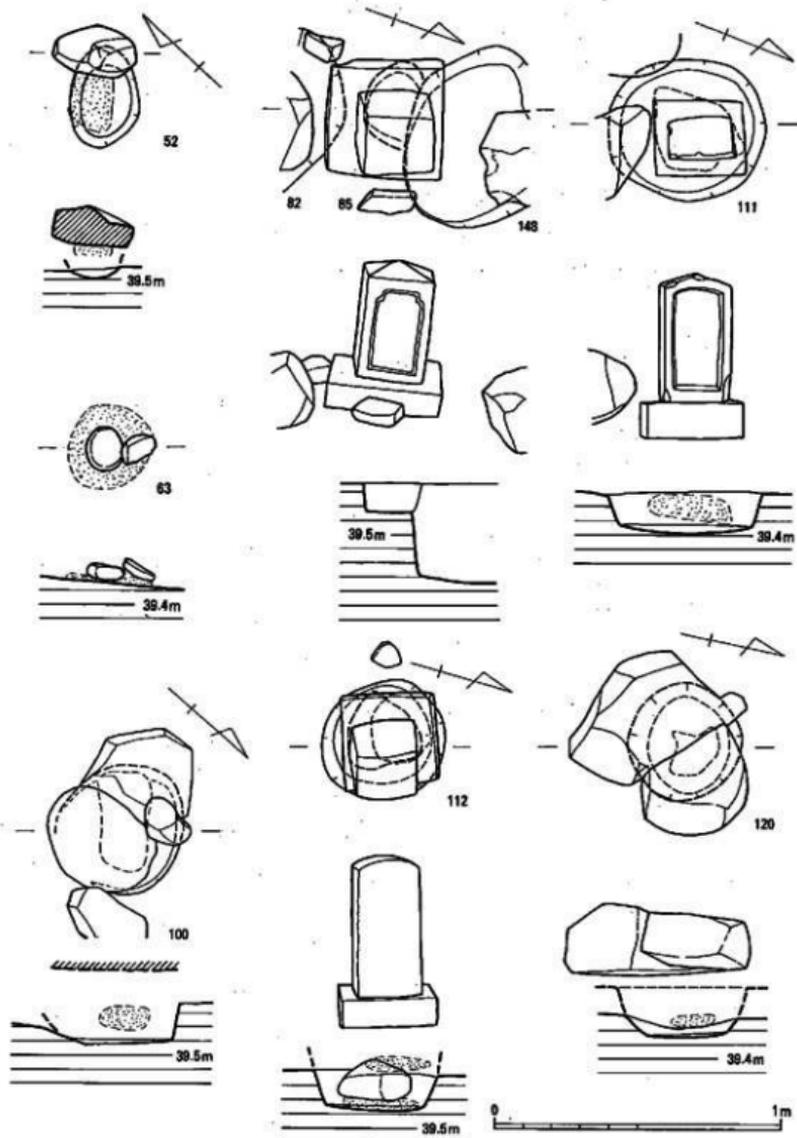
蔵骨器（図版94、第94図）

赤褐色土師質の火消壺。蓋の形状は他の例に似るが、これは取手の形状が環状を呈していたようである。また、天井部は外周を回転、その内側を直線的に同一方向の斲削を行っている。天井部下面には煤が付着するようで、黒褐色となる。

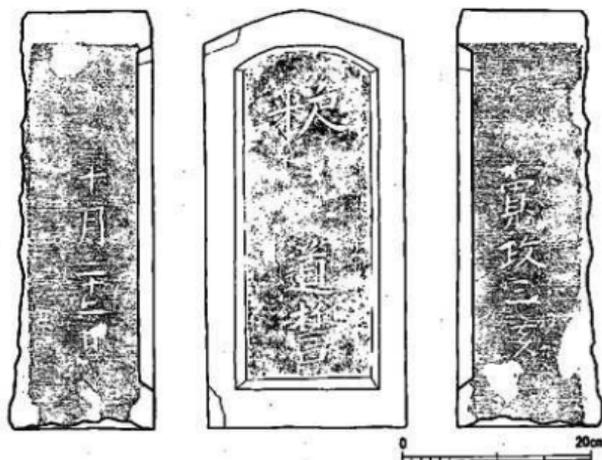
壺は無頸の形状となる。体部内面は非常に丁寧に撫でで仕上げ、外面は下端に粗い刷毛目が残し、それ以上を不連続な斲削りで仕上げ、中位付近はさらに葉状のもので擦過する。

111号墓（図版56、第88図）

A群中央付近西よりに位置する。掘形は直径0.45m前後の円形に近いプランを有し、深さは0.15mを確認している。しかし、本来的には掘形上面と墓石との間の0.2m分も掘形内であっ



第88图 近世墓配置图34 (火葬墓 1) (1/20)



第89図 111号墓石塔実測図 (1/6)

たと思われる。

火葬骨は掘形の床から若干浮いた状態で検出し、平面的には不整形であった。

石塔 (第89図)

墓石は他の墓石同様に北東を向く。石材は灰黄褐色の凝灰岩を使用するが、この石材は112号墓でも使用されており、かつ両者の石塔の形態も似る。

台石も同じ石材を用い、規模は 33×27.5 cmの略方形を呈し、厚さは13cmとなる。

石塔は頂部が蒲錐形となるもので、戒名を刻む部分も頂部が曲線を描く。正面幅21cm、奥行き13cm、高さ44.5cmを測る。

正面は「釋 道馨」、右側面に「寛政三亥 (1791年)」、左側面に「十月二十日」と刻む。

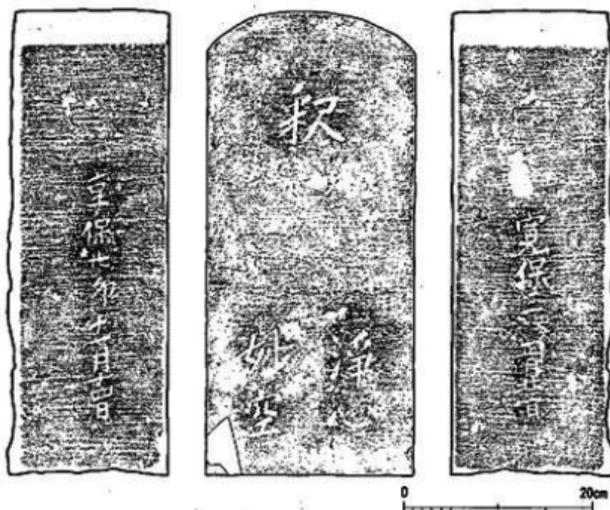
112号墓 (図版57、第88図)

墓石を伴うものの中では最も西に位置するもので、85号墓の北西にある。

掘形は直径0.35mの円形プランを有し、深さは0.15mを確認した。その上方0.1mの位置に墓石がある。平面的にはほぼ掘形を覆う位置である。

掘形を確認した付近で礫の上ののる火葬骨を検出しているが、礫を除去するとさらに底に接して火葬骨が現れた。

石塔 (第90図)



第90図 112号墓石塔実測図 (1/6)

111号墓と同様の石材を用いるほぼ同形の石塔で、台石は32.5×31×14cmのほぼ正方形を呈するものである。

石塔は頂部が薄錐形を呈するが、戒名を刻む部分の加飾が掘り込まれていない点で先の111号墓と異なる。大きさは正面幅22cm、奥行き15.5cm、高さ48.5cmである。

正面には「釋・淨心」・「妙空」が並列して刻まれ、右側面に「寛保三庚 (1743年) 正月廿二日」、左側面に「享保廿卯 (1735年) 十一月十四日」と刻まれる。このことから、出土した火葬骨が二体分であることがわかる。

120号墓 (88第図)

A群北西端に近く位置する。検出した掘形は0.25~0.35mの扁円形プランであり、深さは0.1m弱であった。検出面上0.15mの付近に掘形を覆う大型の礫の下面が位置する。この礫は二片に割れているとはいえ長軸0.75m、短軸0.5m、厚さ0.25mの大きさである。

火葬骨は掘形底から若干浮いた位置にあり、平面的には不整形を呈する。

124号墓 (第91図)

これもA群北西端にあり、142号墓に接する。掘形は0.3×0.35mの隅丸方形プランを有し、

深さは0.1m弱を検出した。火葬骨はやや北に偏して埋置され、上面観は不整形というべきである。

126号墓（図版29、第91図）

142号墓の南東に位置し、83号墓の北に接する。

墓石を伴い、掘形は床面規模で0.55×0.3mの不整形プランとなる。検出した深さは0.15mで、北に向かって小さく傾斜する。

掘形のすぐ上面を長軸0.55m、短軸0.3m、厚さ0.1mに満たない扁平な板石で覆い、さらにその上に墓石を立てていた。

石塔（第92図）

これのみ北向きに戒名が刻まれる。ただ、調査当初にこの石塔は倒れており、それをそのまま起こしたもので、本来的に北を向いていたものか確認できない。他の例からみて東面していたとみた方が妥当であろう。

石材は粗い凝灰岩で、石材、作りともに85号墓に似る。台石は平面37×37cmの正方形となり、厚さは13cmであった。

石塔は正面幅23.5cm、奥行23cm、高さ41cmで、頂部は角錐形となる。正面に掘り込みがあり、戒名が刻まれるが、これも「釋宗玄」・「釋妙慈」の二名が併記される。右側面には「元禄十五年（1702）十月十七日」とある。なお、字体が粗く、誤読があるかも知れない。

127号墓（第91図）

126号墓の西に近接する。床面は長軸0.3m、短軸0.1m強の扁楕円形プランを呈し、深さは0.15mを検出した。掘形南東辺にはテラスが付される。この上面を2点の河原石で覆っていた。

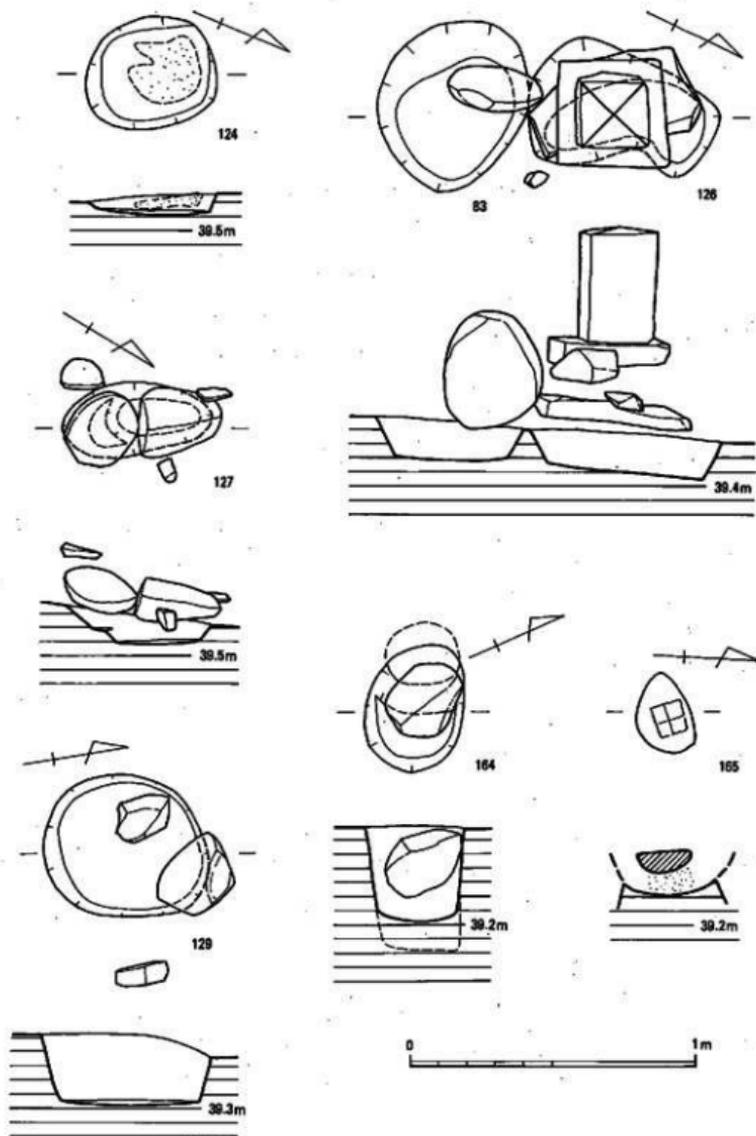
129号墓（第91図）

A群墓域のほぼ中央に位置し、130号墓を切る。掘形床面は不整形円形を呈し、大きさは直径0.45mほどである。深さは0.25mを確認した。周辺に河原石が散在するが、他の例で見られたような明瞭な標石は残ってないようである。

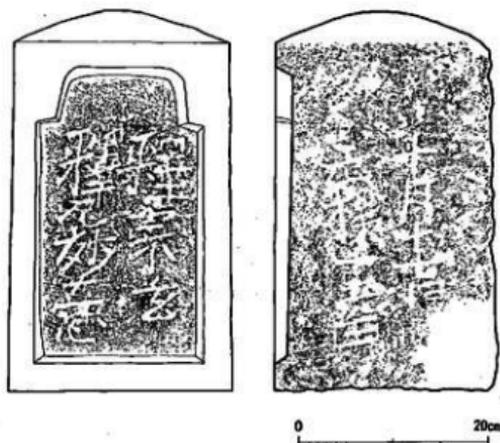
143号墓（図版58、第58図）

A群中程の西端付近にあって、82号墓と切合関係にあるが、先後は未確認。

墓壇は小規模で、床面は一辺0.25～0.3mの方形プランとなり、東辺～南辺にかけてテラスを付す。確認できた深さは0.25mに過ぎないが、標石下端から測った深さは0.6mとなり、平面規模に比して非常に深い。人骨片が出土している。



第91图 近世基配置图35 (火葬墓2) (1/20)



第92図 126号墓石塔実測図(1/6)

標石は棒状の石材を墓石として立て据え、その周囲に添え石をしている。ことに東に置かれた石は札押石(呼称が適切ではないかも知れないが)を兼ねているようである。

146号墓(第49図)

A群中央北東よりに位置し、42号墓の北にあつて20号墓に切られる。一辺0.5m前後の方形平面を呈し、床面付近で散乱する鉄釘を出土した。釘は南東部に集中している。

出土遺物(第44図41)

検出した点数は少なく、かつ頭部を残すものは1点のみである。全長1.7cmほどの大きさの小型品。他には比較的大型の破片もある。

164号墓(第91図)

3号墳周溝肩付近、7号墓の北西にある。

墓竈上端が0.35~0.45mの長円形に近い平面形を呈し、テラスを経て0.25×0.2mの隅丸長方形に近い墓竈底へと続く非常に小規模な遺構である。上段に入り込む礫を標石の転落したものと考えている。調査終了後間もなく作製した一覧表に火葬墓としており、それに従う。

165号墓(図版59、第91図)

A群北西端付近、2号墳北辺周溝中で検出した。74号墓（蔵骨器）の東になる。

裸の上面に格子の線刻が施されていたことから気付いたもので、掘形は面的に捉えていないが垂直的には裸の下に0.1mほどの空間がある。

刻線壕（図版95、第96図）

遺構実測図から判断して、第98図に示した「I-4号溝状遺構」出土の裸がこれに該当すると思われるので、注記ミスとしてここで報告する。

扁平な安山岩で、長軸27cm、短軸18cm、厚さ5cm強の大きさである。断面形状は緩く湾曲し、その凹面に刻線が見える。石材自体の風化が進んでいて細部が不鮮明であるが、3本づつの平行に近い線を直角方向に配し、およそ「田」字形に格子を刻むようである。

風化のためであろうが、概して線は幅広く、浅い。

166号墓

A群南端の一群、8号墓の東に隣接する。床面は直径0.35mほどの扁円形を呈し、深さは0.15mを確認した。人骨等の詳細は記録を怠っている。

175号墓（図版59、第85図）

B群、169・178号墓の間で検出したもので、掘形も含めて良好な状態であった。

掘形上端は直径0.45mの扁円形プランであるが、床面は0.2×0.3m弱の隅丸長方形に近い形となる。深さは傾斜地に立地するため最大で0.6mを測る。

蔵骨器は南に偏した位置に、床から約0.1m浮いた状態で納められており、その上端から掘形上面までの高さは0.2mであった。

蔵骨器（図版93、第94図）

底径が小さく、そのために締まった感じを受ける甕で、46号墓蔵骨器に似る。釉の色調、施釉法、格子叩き・同当て具を使用した成形法などはほぼ同じである。形状は46号墓例に比して、本例の方が丈が高く、口端部の加飾がおとなしい。

180号墓（図版60、第85図）

B群179号墓の北に近接し、全体が2号土坑埋土中に掘り込まれていた。掘形は直径0.3mの円形に近く、その規模は蔵骨器がかろうじて納まる程度の大きさである。

蔵骨器の上端は崩れ落ちるが、その上にはさらに蓋石が置かれていた。

蔵骨器（図版93、第94図）

赤焼き土師製の火消壺。体部の張り小さく、頸部はほぼ直立、口縁部はT字形に近い形に加飾される。調整技法は他の火消壺と同様で、本例も体部内面を塗で仕上げる。必ずしも平

腐化はしていないが、丁寧である。

181号墓（図版60・61）

B群171号墓の南で検出した。一部の発掘を失敗したが、床面は一辺0.4mほどの隅丸方形プランを有し、深さは0.3mを測る。

掘形の西に偏する位置、床面に接して火葬骨が埋置されていたが、平面的には不整形の広がりをもっていた。

182号墓（図版60・61）

181号墓の西に隣接する。床面は直径0.25～0.35mの扁円形を呈し、深さは0.45mを確認できた。

火葬骨はそのほぼ中央に埋置され、上面観はほぼ長方形を呈する。また、上面レベルは墓床層から0.15m下位に位置するが、下面の確認は行っていない。

183号墓（図版62）

B群169号墓の南西に近接する。床面は0.2～0.3mの楕円形平面を呈し、深さは0.25mを確認した。しかし、上方で確認した石材は検出面よりも0.1m上位にあり、本来はもう少し深かったものと思われる。

掘形内には中位に拳大前後の塵が詰まっており、その下方に火葬骨が若干入っていた。

184号墓（図版62、第9図）

171号墓の南西にあって、主軸がほぼ横う。掘形床は長軸0.4m強、短軸0.3mの整った長方形平面を有し、深さは最大で0.3mを測る。

火葬骨はその中央床面上で出土し、上面観は0.35×0.25mのこれもまた整った長方形を呈している。北東側の長側辺で木質が付着した金具が検出されたことも併せて、これらの骨が木箱に納められていたことがわかる。

金具（図版90、第55図）

薄い鉄板で、5×4cmほどの大きさで残るが、周縁はすべて失われるようである。残存部のほぼ中央に直径1cm強の座金具があるようで、中央に足金具の入っていた孔が開いている。

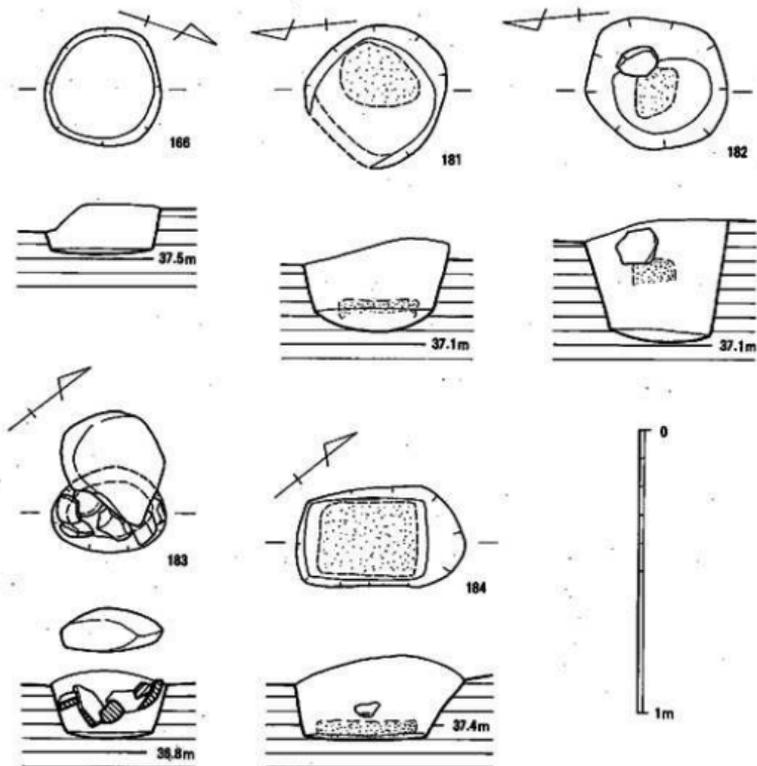
近世墓周辺の出土遺物（図版95、第95図6～9）

近世墓は石材が多く露出していたが、先にも記したように墓床掘形は表土を数10cm掘り下げた後検出された。その際に出土した土器を紹介する。どの墓に伴うものかはわからない。

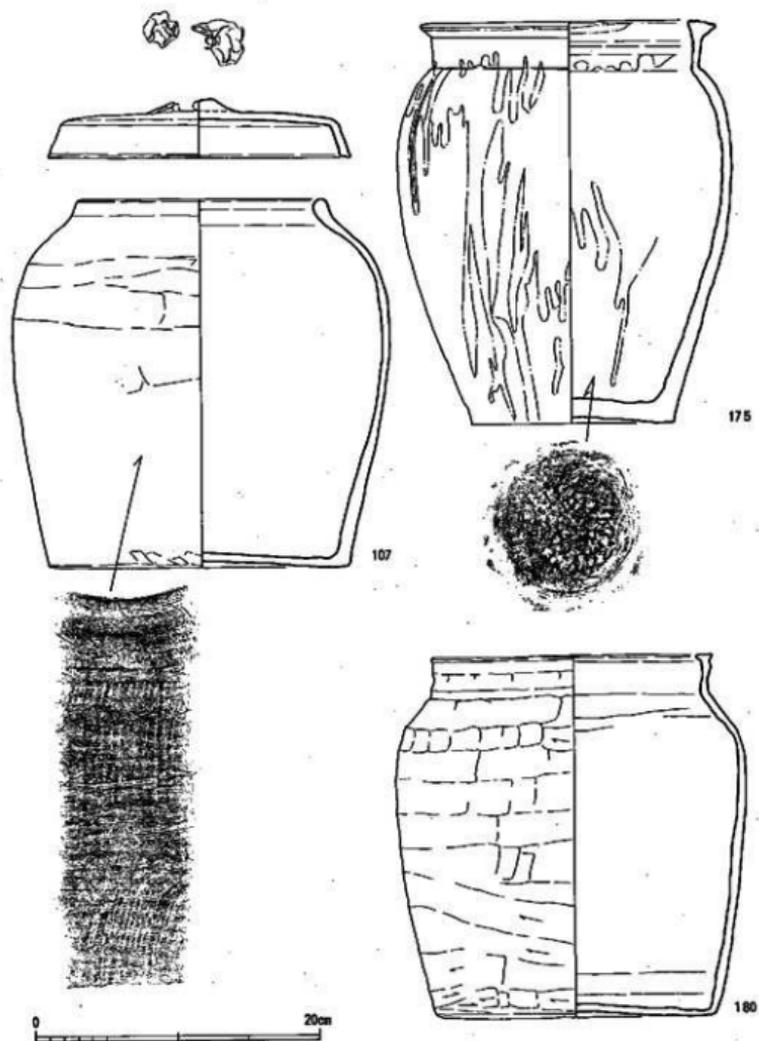
6～8は染付。いずれも壺付のみ露胎で、見込みに圏線と文字あるいは簡略な文様を描く。8の文様は灰味強い青色となるが、7はコバルトを使用したものか非常に鮮やかな、明るい青色に発色する。6は両者の中間的な色である。

6の広東碗は使用時期が比較的限定されるといい、8も高台が華奢で、口縁部は端反となる。詳細はよくわからないが、いずれも18世紀末～19世紀初頭頃に属するものであろう。7は他に比して時代が下るようである。

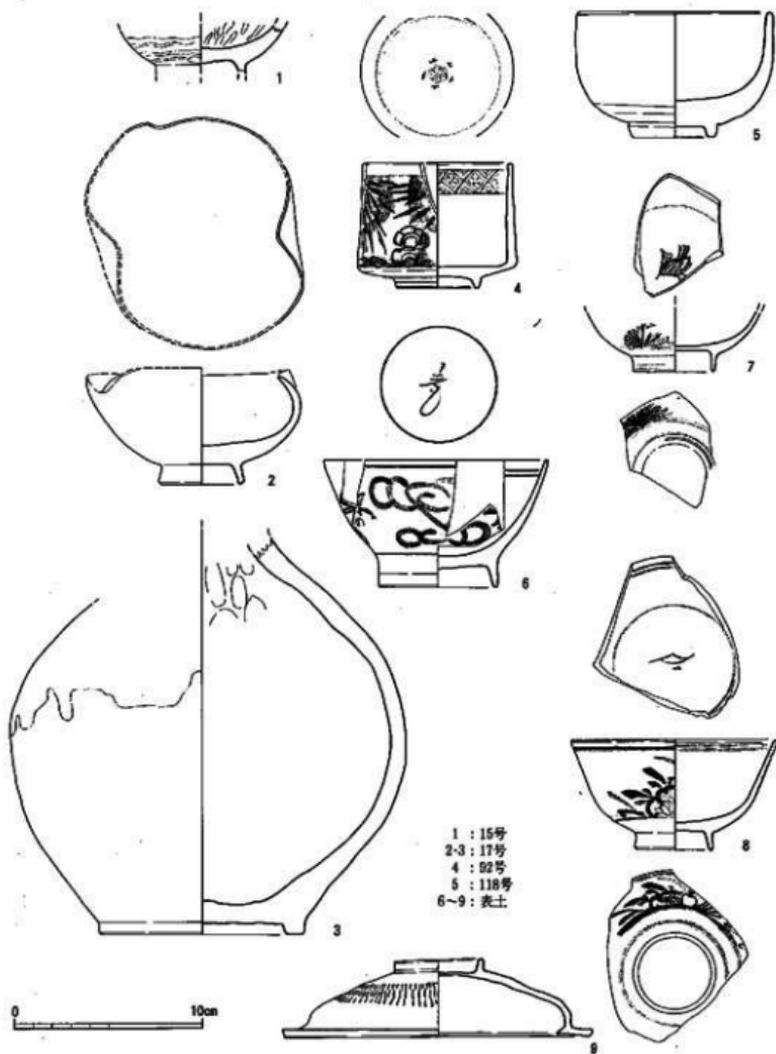
9はトビガンナを多用した蓋で、鉄釉を帯状に付す。近代のものか。



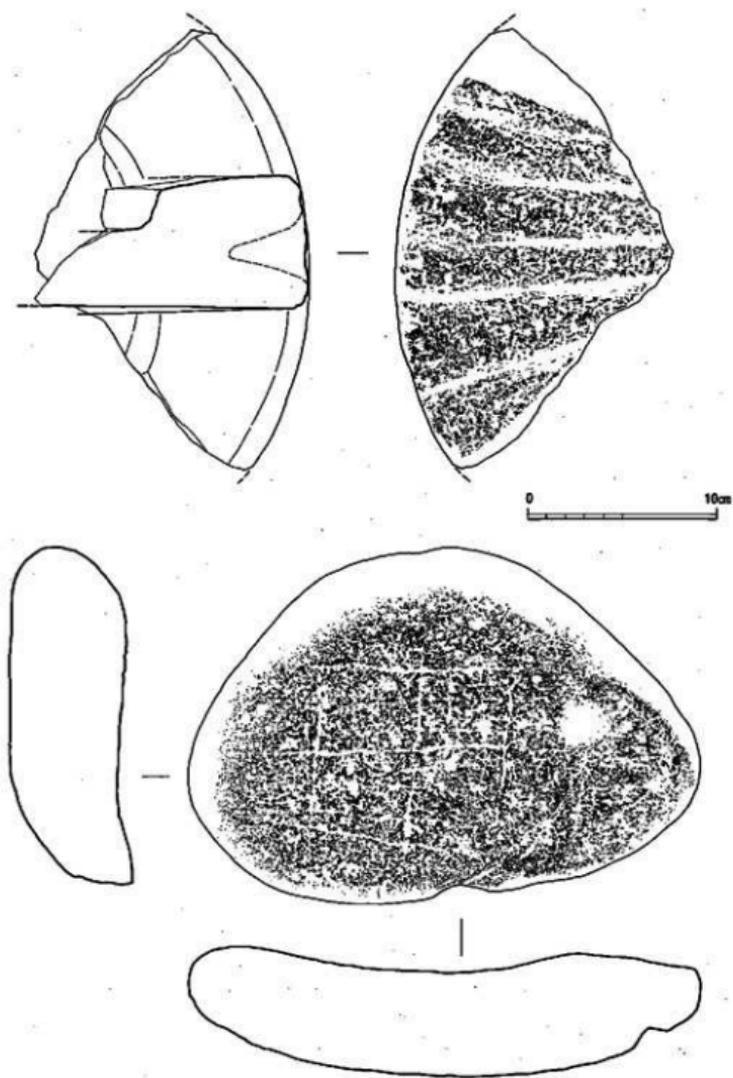
第93図 近世墓配置図36 (火葬墓3) (1/20)



第94图 藏骨器实测图6 (1/4)



第95図 近世墓および周辺出土土器実測図 (1/3)



第96图 I-4号沟状遗構出土石製品実測图 (1/3)

2) 溝状遺構

I・II区でそれぞれ数条の溝状遺構を検出したが、調査時の所見ではいずれも新しいものとして記録を省略したものがある。

I-1号溝状遺構

1号墳北西から調査区中程を走り、30m強の長さを検出した。幅は1m強、深さは0.1mに満たない小規模なものである。埋土の記録を行っていない。

I-2号溝状遺構

I-1号溝状遺構の西端付近にあって、ほぼ平行して走る。長さは9mほどを検出し、幅は1m弱、深さは0.1m前後のやはり浅い溝であった。これも埋土の記録を行っていない。

I-3号溝状遺構(図版63、第97図)

I区北隅で検出したL字形の溝で、現行の畦畔に合致するようである。北東から南西へ延びる直線部分の北東端付近で石組を検出した。

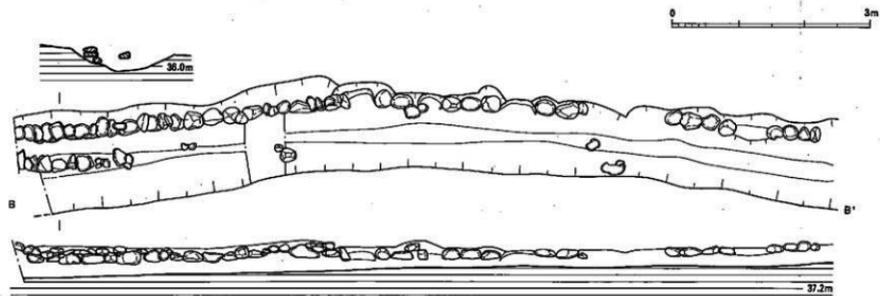
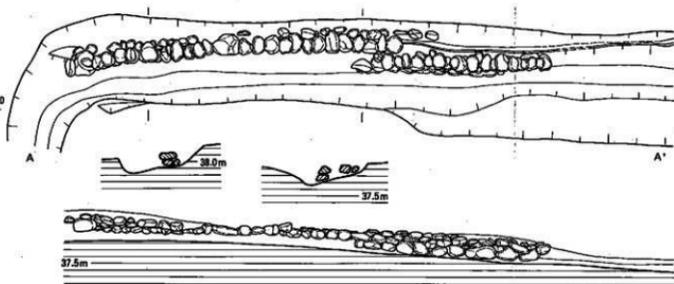
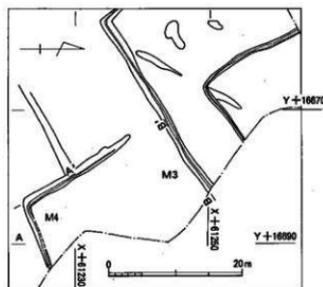
石組は高位部分に組んだ1~2段が残存し、高さは最高で0.2mほどとなる。全体に基底部の石材が大振り、裏込めの石を用いていない。石組前面に浅い溝を掘削して排水とする。ただ、最東北端部分では溝底の真上でも石列が出土しており、これが崩落したのではなく、並べられたものとの感触をえている。溝が埋没した後に石組を行って水路を再構築したものであろうか。

この溝状遺構の北にもさらにL字形に配された素掘りの溝がある。幅0.5~1m、深さ0.1mほどの小規模なものである。

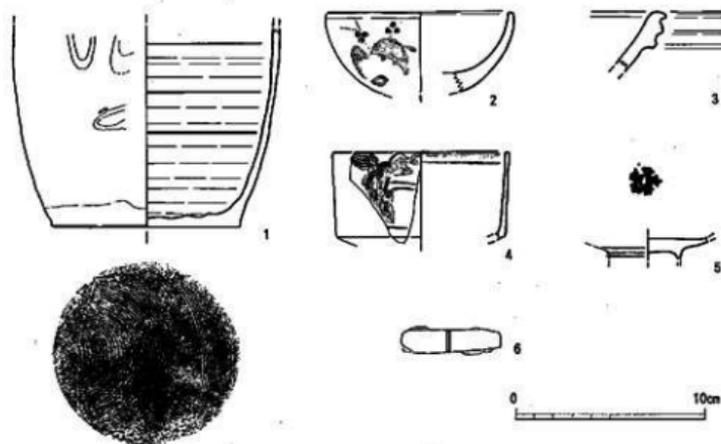
I-4号溝状遺構(図版63、第97図)

3号溝状遺構の南東部、高位部分で検出したL字形の溝。この部分にも現行の畦畔があり、これはその古い形を示すものであろう。

この溝でも南東から北西に走る部分の一部に石組が残っていた。石組は1~3段に組まれ、0.3m弱の高さで残存し、やはり前面に溝が掘削されている。ここでは基底部に小礫を用いた部分が多いためか、裏込めも残っていた。石組基底部は水平に近く地山を削ってテラス面を作っている。石組北端付近ではやや前面に別の石組を構築している。補強のためであろうか。この新たな石組は基底面を成形せず、溝底に近い斜面上に組む。



第97圖 近世石祖突測圖 (1/600、1/60)



第98図 溝状遺構出土遺物実測図 (1/3)

出土遺物

土器 (第98図1・2)

1は陶器の徳利か。底部および体部下端を除く外面全面に暗緑色釉を施し、体部に文字あるいは簡略な文様を灰黄色に発色する釉で付す。2は柴付で、焼けたものか、文様が黄変する。器肉が厚く、小振りの碗。

石製品 (図版95、第96図)

1は石組に使用されていたものであるが、実測図に所在を記していないので、細かい地点は不明である。安山岩製の石臼の小片。2は165号墓に使用されていたものと思われ、そこで説明を加えた。注記のミスであろう。

Ⅱ-1号溝状遺構 (図版64、第99図)

調査区中程を横切る大型の溝で、長さ54mを確認した。幅は1.5~3m。南半は幅に比して深さ0.1mに満たない、下端の確定も困難な非常に浅いものである。

北端付近で2・3号溝状遺構に切られるが、その部分で土層図を作製した。最上層には地山土と非常に似た土が厚く入っており、人為的に埋めたような状況であった。その下位に灰黒色土が入り、さらに下位の土質はいずれも砂質土であった。土層ラインを見ると土層3の堆積後に最掘削が行われたような痕跡を留める。最終的な埋没はこの丘陵の開墾時であろう。

この溝付近にも現行の地境があったようである。また、溝を境にして東はなだらかな平坦地が広がり、西は徐々に傾斜して谷部へ続く。この溝は道路あるいは境界として平坦地の開墾時に掘削され、開墾地の拡大とともに畦畔として痕跡を留めたのかも知れない。

出土遺物

鉄製品 (第98図6)

ほぼ完結すると思われるもの。長さ5cm余、幅1cm余、厚さ0.2cmの長方形の鉄板で、刃はないようである。北端から出土した。

Ⅱ-2号溝状遺構 (図版64、第99図)

Ⅱ区の北辺に沿うように走る。1号溝以東では2条に分かれ、以西では1条となる。先の1号溝状遺構が等高線と平行に掘削されているのに対し、この2号、後述する3号溝状遺構は等高線に直角に近く掘削されている点で性格を異にするかと推測される。

この溝の場合、北端付近の溝底の傾斜が緩やかになる付近に礫が多く堆積していたことや、その部分の土層観察で、最掘削された部分の最下層に非常に硬く、薄い砂層を竊状にかむ土層が堆積している点などから道路として使用されていた可能性が高い。礫は簡易舗装に供したものであろう。

Ⅱ-3号溝状遺構 (図版64、第99図)

2号溝状遺構と交差するがほぼ同様な方向で掘削される。ただ、西端が直角に屈曲する点で区画溝としての性格が強いものと思われる。埋土は表層に青灰色の耕作土を被り、1・2号溝状遺構と交差する部分の西側では小規模な石組も観察できた。

現行畦畔がこの2・3号溝状遺構の付近に走っており、3号溝状遺構の後も襲ったものであろう。もちろん、2号溝状遺構の存在が伏線となったものと思われる。

出土遺物

土器 (第98図3)

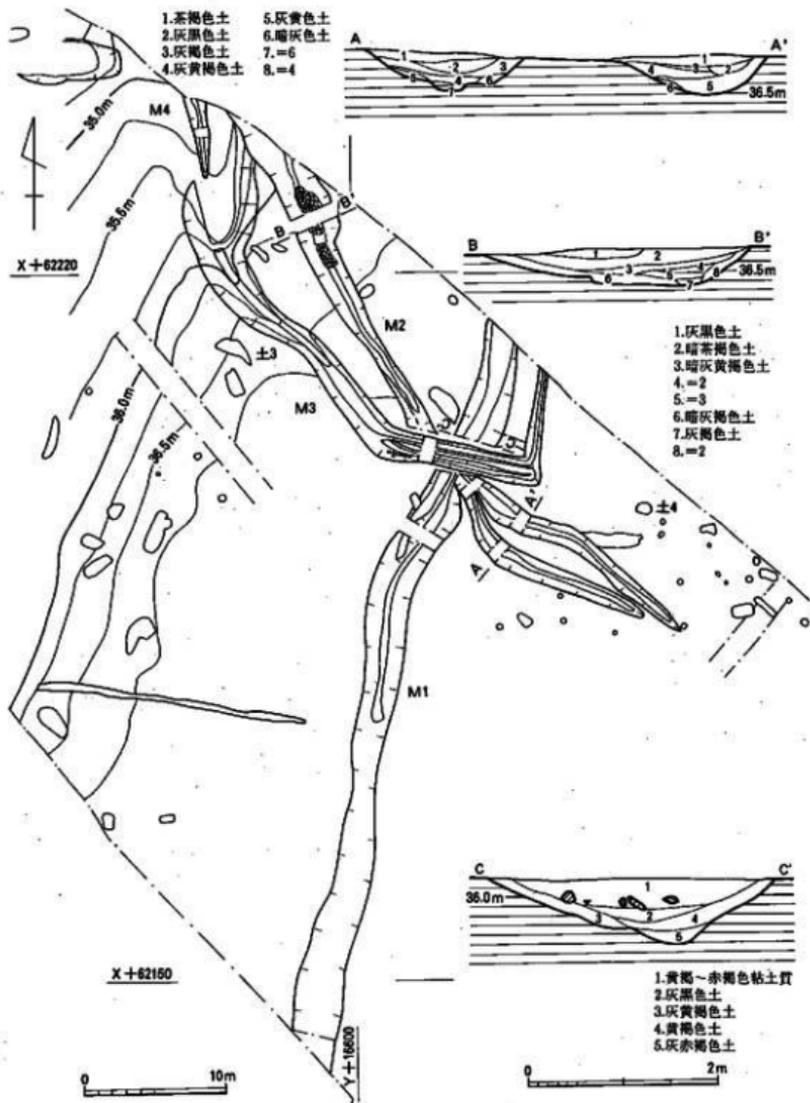
陶器の摺鉢小片。鉄釉をかけるが、灰味の強い茶色に発色する。口端部を外方につまむとともに、その下位に突帯を2条付す。高取焼系である。

Ⅱ-4号溝状遺構 (第99図)

Ⅱ-3号溝状遺構の延長で一部を確認したもので、本来は同一のものであると思われる。

Ⅱ-5号溝状遺構 (第99図)

調査区西北隅付近で確認した落ち込みで、上記のように称したが明瞭な遺構とはみなしがた



第99图 II区沟状遗構实测图 (1/600、1/60)

い、浅いものである。

出土遺物

土器（第98図4・5）

いずれも染付。4は小型の筒形碗。5は見込みに五弁花をコンニャク印判で付す。

3) 野壺（図版66、第100図）

1号墳石室の西側、墳丘中で野壺を1基検出している。

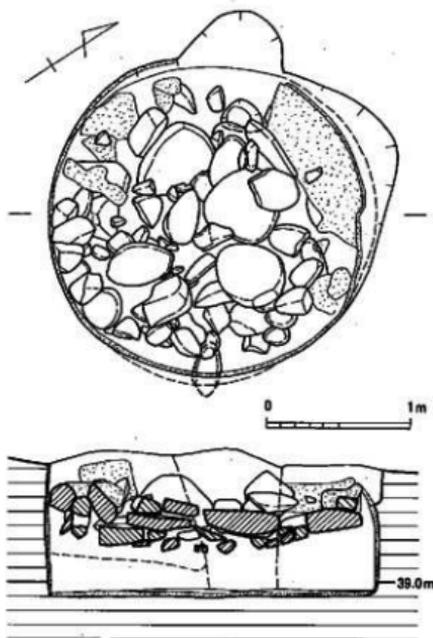
床面は直径1.1mほどのほぼ正円を呈し、検出した深さは0.5mであった。壁・床面に黄褐色の漆喰をほぼ全面に貼り付けている。

埋土はいかにも新しいと感ぜられる暗灰褐色の締まりのない土であった。中位にはほぼ全面を河原石と漆喰ブロックが覆っていた。

また、北西の一部では漆喰のない部分が床面まで続いている。

出土遺物

図示していないが、近代と思われるガラス・瓦・陶磁器片などが若干出土する。



第100図 野壺実測図（1/20）

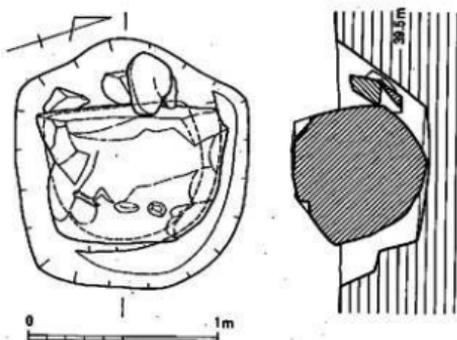
4) 石材採取跡（図版66、第101図）

1号墳主体部の南西、周溝に接する付近で石切場を検出している。長軸1m、短軸0.75m、厚さ0.7mの花崗岩の巨石を土坑内に落とし込み、ヤを打って割ろうとしたものである。打ち込まれたヤと反対側では、土坑壁と巨石の間にも花崗岩を挟み込んでいるが、これは打撃の衝撃を土が吸収しないような効果を図ったものであろう。

ヤ痕の大きさは長さ9・13・15cmとそれぞれ異なる。

巨石の入った土坑は一辺1.3mのほぼ方形に近い形状となり、深さは0.5m弱である。裡土には絡まりのない灰褐色土が入り、新しいとの印象を受けた。

おそらく、1号墳主体部の石材を落とし込んだものであろうが、時期ははっきりしない。



第101図 石材採取跡実測図 (1/30)

5) 小 結

近世墓についての若干のまとめを記しておきたい。調査区内の東端、集落を見下ろす位置で二群の墓地を検出できた。先にも記したように調査区の南、未調査の金居塚古墳群中にも墓石が存在しており、さらにいくつかの墓塚があることがわかる。しかし、この築上郡周辺では近世墓の発掘がほとんど行われておらず、今回の調査がはじめての事例といってもよい。したがって、比較の材料がなく、北九州市あるいは福岡地方などで報告された遺跡を参考してみたい。といっても、福岡市周辺は旧藩時代は異なる藩に属し、また、北九州市の報告例は寺院境内のものであり、かつ享保期以降は藩主が変わった。本遺跡とは前提が異なるものである。

墓地の形成

ここで検出したA・B両群の形成された時期については、墓石の年号が「元禄十五(1702)~寛政三(1791)年」を示し、点数が少ないがA群の表土中で検出した磁器はほぼ19世紀はじめを中心とする時期のものであった。また、88号墓から出土した寛永通宝はいわゆる新寛永と呼ばれるものようでこれも17世紀末以降のものであり、墓石との齟齬はない。したがって、この墓地群はおおよそ18世紀代全般を通じて、一部は19世紀代の初め頃までのほぼ100年間にわたって主として使用されたものと思われる。さらには明治期まで下るものもあるのかもしれない。

副葬品として納められた陶器の中には古拙な趣のものがあるが、詳細な比定は困難である。また、118号墓出土の製作途中の陶器碗は、上唐原地区に所在する「唐原焼」との関連を思わせるものの、唐原焼自体、シジミが焼き付いたトチヤや染付磁器が採集されていて、内容のはっ

きりしないものである。しかし、近辺には他に近世期の痕跡が知られておらず、唐原焼窯跡が本遺跡の卑近に位置することから関連性が考えられる。

一方、46号墓および175号墓で蔵骨器として使用された甕は肥前陶器である。近世墓の甕棺について考察した下村氏が18世紀前半頃に比定したものに相当すると思われる⁸⁷。この点についても墓石の記年銘から窺える造墓時期に合致する。

埋葬形態

今回検出した200基近い墓地の内容としては、墓域の全体を調査したA群に限れば土墳墓97基、火葬墓66基を確認できた。複数の遺体が納められたものや不確実な遺構が数基存在するために、実数は若干増加するものの、両者の比率に大きな変化を及ぼすものではない。このことから、18世紀頃の下府原地区では死者の6割が土葬で、4割が火葬で葬られたこととなり、火葬墓の比率が非常に高いことは注目される。

当遺跡に最も近い位置で調査された大分県中津市ガラヌノ遺跡⁸⁸では7基の墓地が調査され、うち4基が火葬であり、外容器として本遺跡でみられた唐津系陶器や土師質火消壺などが使用されていた。17世紀後半から18世紀前半に位置付けられる。京都府豊津町鶴先遺跡では、本文中に土葬・火葬の記載がないようであるが、出土人骨の分析表では65体中の2体が火葬骨であり、そのほかの2体に火葬骨が混入していたという。大きくみてもその比率は6%に過ぎない。この墓地は17世紀末以降、明治期まで使用されたとされており、95基からなっていた。ほぼ17～18世紀に造墓されたという北九州市宗玄寺跡墓地⁸⁹では調査した619基の近世墓の中、火葬墓はわずかに18基(2.8%)に過ぎない。18～19世紀に造墓のピークがある同京町遺跡⁹⁰(永照寺跡地Ⅰ-1、Ⅱ-2・4区)では230基余の中45基(約20%)であった。また、江戸時代を通じて営まれたとされる福岡市席田青木遺跡⁹¹では550基を越える墓地に火葬墓はみられなかったという。

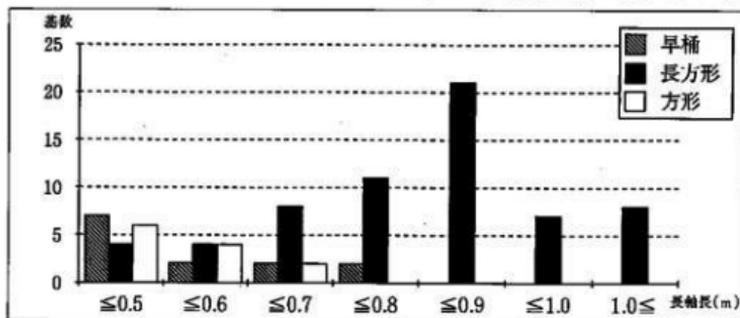
以上の乏しい遺跡例ではあるが、多くの例では火葬墓の比率が極めて小さく、この金居塚遺跡とサンプルが乏しいもののガラヌノ遺跡が突出している。この2遺跡は、現在では福岡・大分両県に編入されているが、古代においては豊前国上毛・下毛各郡に属し、近世初期も黒田・細川時代には同じ藩に属していた。寛永9(1632)年、小笠原氏入部後、藩領は本藩と三支藩に分かれ、そのうち中津小笠原藩八万石が現大平村・新吉富村の東半、および吉富町、下毛・宇佐郡などを藩域としていた。この中津小笠原藩はやがて四万石に減封され、享保元(1716)年には跡継ぎがないために領地没収、同2年に奥平氏が新たに移封(十万石)されて以後明治時代まで続く。この間、唐原地区は一貫して下毛郡域と同一の藩主を戴いていた⁹²。金居塚遺跡の火葬墓は、126号墓が元禄15(1702)年銘、112号墓が享保20(1735)、111号墓が寛政3(1791)年であり、完全に奥平氏の治世と合致するものではない。

当時の火葬に対する考え方的一端を窺い知るものに福岡藩の儒学者貝原益軒（1630～1714）の記したものがあ。それによれば「焚屍者 浮屠之所尚 而西胡之法俗也」とし、父母を火葬することを不孝な嘆かわしいことと非難している。

下って、明治13年太政官布告第34号「伝染病予防規則」では、第10条に、「虎列刺病者ノ死屍ハ其埋葬地ヲ区画シ蓋リニ雑葬セシムヘカラス且ツ他ニ改葬スルヲ許サス但火葬ハ尋常ノ焼場ニ於テシ其遺骨ハ改葬スルモ妨ケナシ」とあって、伝染病への対策として火葬が利用されることがあったことがわかる。こうした衛生上の配慮は布告に基づかずとも集団生活の知恵として当然行われうるのであろう。

ただ、金居塚遺跡の多数の火葬骨が伝染病対策として処置されたと想定するには根拠が乏しい。当時の記録にそうした病の流行は記されておらず、他方で頻繁に飢饉が発生している。飢饉で生じた一時的な大量の死者を葬るため、死者から生ずる伝染病予防という衛生上の配慮もあって火葬に付した可能性も考えられる。しかし、その場合にも飢饉はこの地域だけに生じた現象ではなく、広範な地域で起きた天災であって、それをもってこの遺跡の火葬墓の比率の高さを十分に説明できるものではない。火葬の風習が地域的な伝統であったのか、あるいは藩主奥平氏の意向が影響したのか現段階では判断材料を捜しえないが、今後の調査に期待したい。

次に土葬の場合をみてみる。これも、やはり墓群全体を調査しえたA群を対象とする。下に早桶（円形墓塚）、長方形墓塚・方形墓塚の3つの形態に分類した法量表を示した。実測図上で隅丸を示す形態や、やや歪んだ形態をもつものがあるが、本来の形状を想定できるものについてはいささか恣意的に上記3形態に当てはめたものである。深さについては数値化していないが、およその傾向は窺えよう。ここでわかることは、円形・方形墓塚では直径あるいは一辺が0.9mを越えるものがない点である。大分市女狐遺跡¹¹の分析結果を適用すれば、いずれも成人墓ではない可能性が高いということになる。また、長方形墓塚の最大の例は27号墓



第102図 近世土葬墓法量分布図

の長さ1.3mの例であり、成人の伸展葬を想定できるような例がないことを考えれば、長さ0.9mを超える墓竈に埋葬された人物はいずれも成人であるのかも知れないが、この点については次年度に予定している人骨の分析を待ちたい。

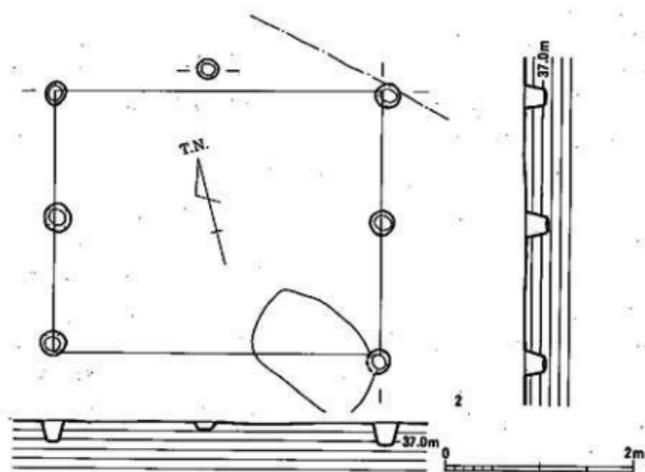
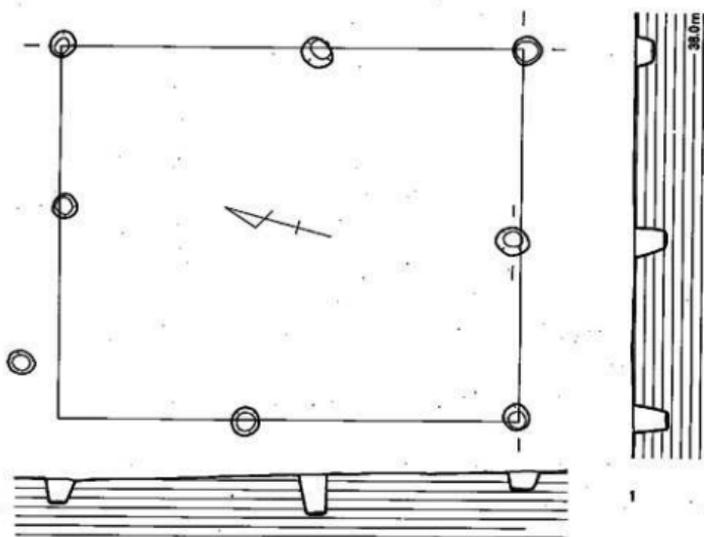
主軸方位

長方形墓竈を有する墳墓について、配置図からみて明らかに一定の方向性をもつグループがあることが知られる。一つは北から西へ大きく振れるもので、5基の墓石群をんでおり、この墓地の主流ともいえるものである。二つにはほぼ真北方向を中心として小さく東西に振れるもの、そして三つ目は北東へ大きく触れるものである。それらの分布は互いに錯綜しており、切合関係についても一定の規則性は認められない。したがって、それぞれ同一方向をとる墓群が決して同一家族の墓地であるとは考えられず、むしろこのA群全体が同一家族・血縁集団の墓所であったとする方が妥当であろう。また、ほぼ100年におよぶ時期差をもつ墓石が、同一方位をもって近接することは方位の違いが単に年代差を表すものではないこと、加えて墓石を有する被葬者の近い関係をも示している。方位の違いが何に起因するものか判然としないが、本家・分家、出自が異なるといったといったような問題が想像される。

金居塚遺跡の近世墓群は、副葬品や墓石などといった遺物が乏しいものであったが、この地域で行われたのはじめての近世墓の調査ということもあり内包する問題が多い。

下唐原地区を含む山国川左岸は、現在でも純農村地帯であり、中津城下に近いとはいえ当時もごく一般的な農村であったことは間違いない。この遺跡の墓地を構成した人々は「信士・信女」といった戒名をもつ墓地が200基近い中に5基しか存在しないことから、決して富裕な農民層の墓地ではなかったものと思われる。そのことは近年近世墓の調査の中で重要な位置を占めつつある六道銭や陶磁器、そして金属製の装飾品や日用品などといった副葬品が非常に乏しかったことから傍証される。

はなはだ不十分な検討を加えるに留まったが、歴史に記されることの少ない当時の大多数をしめる一般農民の生活の一端を示すものとして、墓地の調査はますます重要な手段となることと思う。今後とも墓地を含めた近世遺跡の調査を軽んじることなく実施する必要性を感じる。



第103圖 掘立柱建物跡実測圖 (1/60)

V. その他の遺構

ここでは所属時期のはっきりしない遺構をとりあげる。といっても土坑としたものは近年の調査例ではおおむね縄文時代であるとの共通認識ができており、土壌墓に関しては周辺の古墳との関係を想定できるものである。ただ、今回の調査ではいずれも確信を持ちえなかったためにここでまとめる。

1) 掘立柱建物跡

2×2間の掘立柱建物跡2棟を検出した。いずれも出土遺物は皆無である。

1号掘立柱建物跡(図版67、第103図)

方形に配列する(石蓋)土壌墓群の南8mの位置にある。これら以外にはほとんど柱穴を検出してないことから、配列に不安があるものの建物跡を想定した。柱穴はいずれも直径0.3~0.4mの小規模なもので、深さは0.2~0.4mほどである。

柱穴の配置は北西隅の柱穴が大ききずれているほかは柱筋が通る。柱間距離は、南辺梁行が2.2m、北辺が現状のままで1.7・1.7mとそれぞれ等間にはなるが両辺の数値は大きく異なる。東辺桁行は2.2・2.7m、西辺は2.4・2.9mとここでは各辺の数値も合計値も異なる。

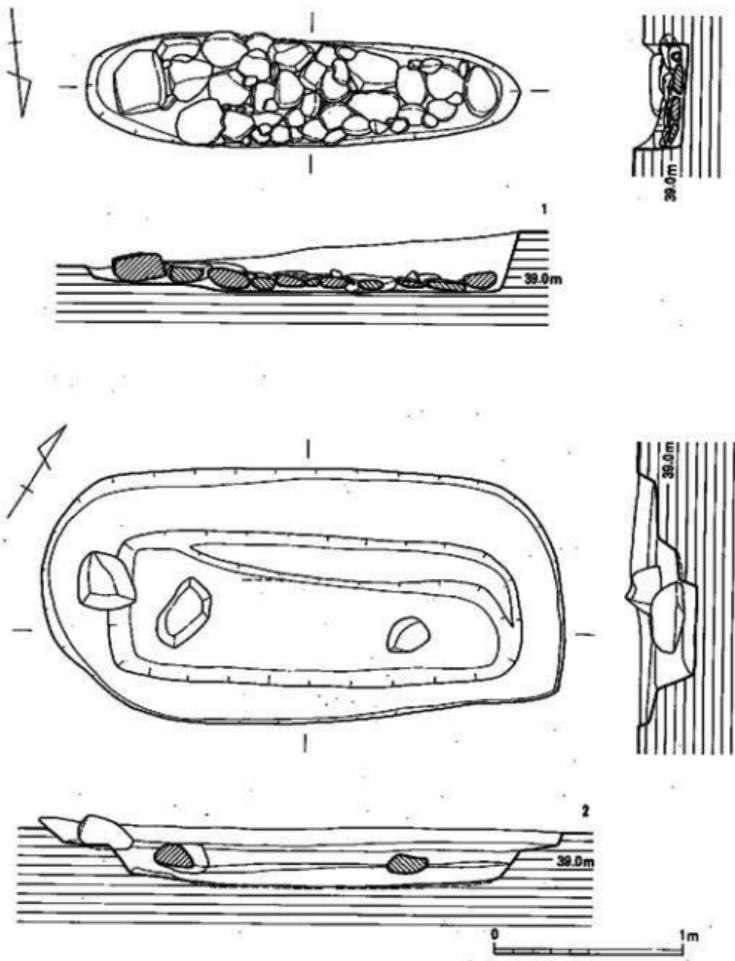
こうした配列でどの様な建物が建てうるのか、よくわからないが、墓地の卑近に位置することを強調すれば仮設的な建物でも事足りるのかも知れない。

2号掘立柱建物跡(図版67、第103図)

Ⅱ区西隅で検出したが、この建物の詳細な実測図を製作しておらず、平板図から起こした図を掲載している。したがって細かい配列や数値は意味が薄いので略略に留めたい。

柱の配列は北辺の中柱が外方にはずれ、南辺の同位置の柱を検出できなかった以外はほぼ直角に並び、柱間距離もほぼ近い数値となっている。桁行長2.7~2.8m、梁行長3.5mの規模である。

この建物跡についても1号掘立柱建物同様、卑近に柱穴の類がないことから容易に判断できた。時期を示す遺物もなく、調査区外の状況も不明であるが、やはり(石蓋)土壌墓群との関連性を考えておきたい。



第104图 土墙基实测图 (1/30)

2) 土墳墓

古墳周辺の段丘肩付近で2基の土墳墓を検出している。形態は先述した弥生時代末～古墳時代初期頃と推測されるものと随分異なり、項を改めた。

これらの遺構の時期を確定することは困難である。また、北部九州にあつては、往々にして6・7世紀の古墳周辺に無墳丘の石室が発見されることがあるが、この例は石室ではなく、そうした状況とは異なる。しかし、金居塚遺跡全体の中で考えた場合、これらがそれぞれ単独で、他の遺構と無関係に営まれたとするよりは、まだ古墳に付属する遺構としたほうがより妥当ではないかと考えている。

1号土墳墓(図版68、第104図)

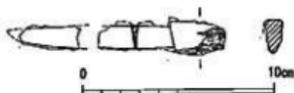
3号墳北、1号石蓋土墳墓のすぐ西に位置する。

長軸2.3m、最大幅0.6mの長円形に近い平面プランを有し、頭位側が幅広く、足位側が狭くなる。深さはよく残る足位側で0.3mほどであった。

床面は全面に河原石を敷き詰め、その上面は平坦を意識している。また、頭位には最も大きな石を据えて枕石とする。被覆施設の痕跡はまったく検出していない。

出土遺物(図版90、第105図)

胸に相当する付近の敷石上から刀子が出土している。身の中央を欠くが、切先と鹿角が装着された柄が残る。



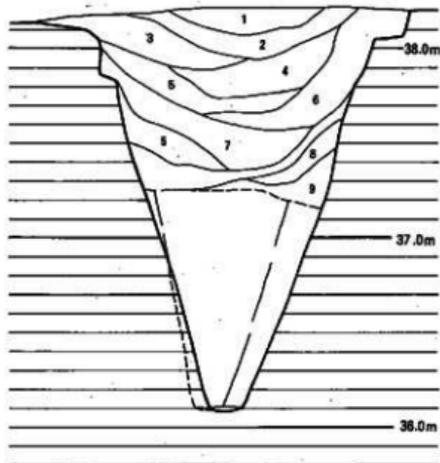
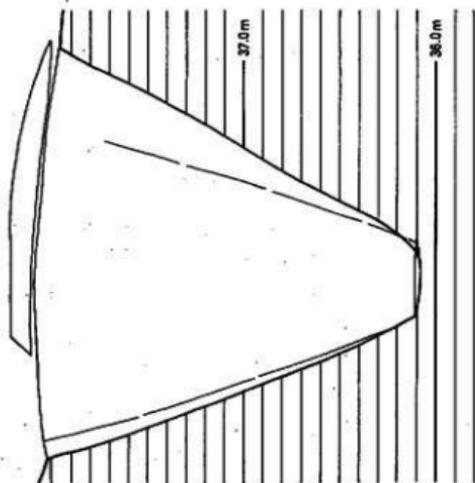
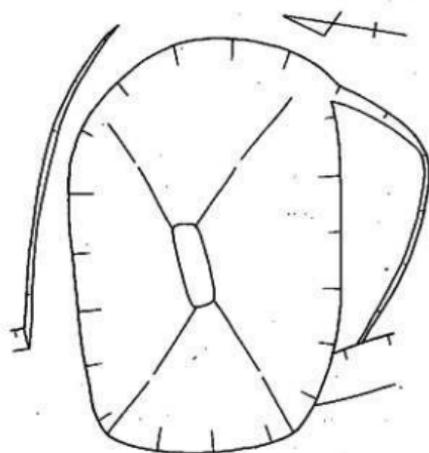
第105図 土墳墓出土遺物実測図(1/3)

2号土墳墓(図版68、第104図)

調査時には先に説明を加えた3号土坑を「2号土墳墓」としており、本遺構は「3号土墳墓」と呼称していたが、ここで改めた。

4号墳周溝の北東に近接する位置にあり、検出面では黒褐色土が入っていたために容易に判断できたが、以下の埋土は暗灰褐色土で、見極めが容易ではなかった。

墓壇は二段となり、上段は2.65×1.35mの隅丸長方形に近い平面プランとなる。深さは最大で0.1m強に過ぎない。埋葬部は下端規模で長軸1.95m、短軸0.45mの規模となり、深さはやはり0.15mと浅い。内部に人頭程度の礫が3点入っていたが、いずれも標石の転落したものと思われる。出土遺物は皆無である。



1. 灰黄色土
2. 黑褐色土
3. 暗灰褐色土
4. 灰黑色土
5. 灰褐色土
6. 明灰褐色土
7. 灰黑色土
8. 淡褐色土
9. = 4



第106图 土坑实测图1 (I-1号) (1/30)

3) 土坑

全体で22基の落とし穴と思われる遺構を検出した。そのうちの17基は床面に1穴を有し、2基は無穴の通有の落とし穴状土坑であるが、3基は大型で、通常のものとは形態が異なっているために疑問点もあるが、ここでは仮にそう呼称して前へ進める。

調査区内では遺構とは思えない灰褐色のシミ状の不整形の落ち込みが多数あり、それらを一段掘り下げると漸く遺構でないものところにあげる落とし穴状土坑の違いが明らかとなる。それほど不明瞭な埋土であるのは、遺構内に堆積した有機物の分解が相当進んだ、すなわち非常に古い時期の遺構であることを傍証しているものと考えている。ただ、ここでも小型の遺構からはほとんど遺物が出土せず、所属時期はわからない。

大型の遺構は概して明瞭に遺構であるとわかった。これらは上層で弥生土器あるいは土師器片を出土しているが、埋土の状況からみてそれらが埋没した時期まで窪地で残っていたものと考えている。これらの土器が遺構の時期を示唆するものでは決してない。

さて、分布を見ると大きく3群に分かれそうである。一つは段丘肩に配置された問題のある大型土坑で、それぞれほぼ20・40mの距離を置いて位置する(A群)。

二つ目は4・5号墳の西南部付近で南北に配置された4基の小型のものである(B群)。

そして三つ目はI・II区にまたがってやはり南北方向に分布する14基で、最も集中する部分である(C群)。このC群は10m余の幅をもって、75mの長さまで確認しており、さらに北へ延びるのは確実である。

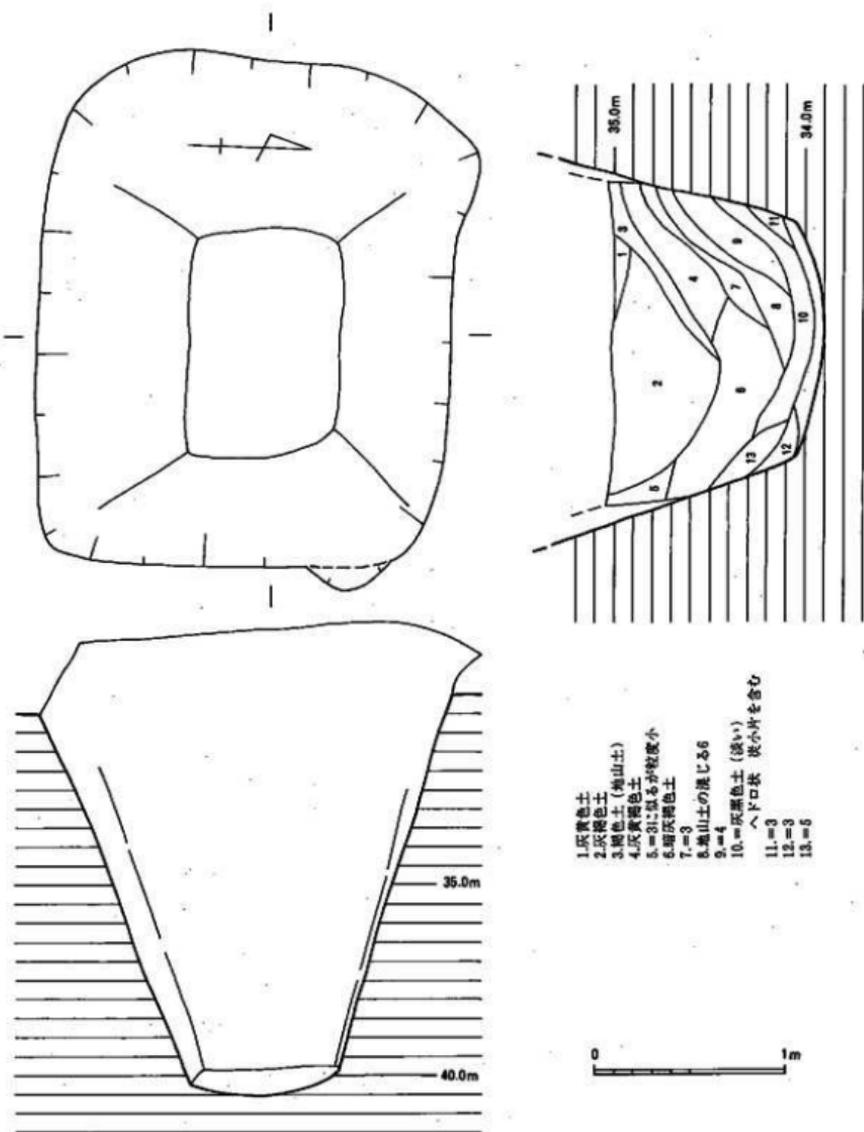
II-3号土坑は唯一孤立して位置するが、調査区の北に偏しており、調査区外にグループを構成する遺構が存在するのかも知れない。

この金居塚遺跡は東が河岸段丘の肩まで、そして西は段丘を開折した谷で区画される。C群の中程を村道が掘り切っているが、この村道は本来小規模な谷が入り込んでいた部分を開削したものである。この谷がどの付近まで入り込んでいたものか、即断できないが、先述したI-3号溝状遺構に対応する道路北側にも畦畔が認められることから、少なくともこの付近まで入っていたことは確実であり、そうだとすればC群は谷筋に沿って配されたものといえる。そのほか、B群が尾根線上、A群が先述したように段丘肩といった要所に分布している。

I-1号土坑(図版69、第106図)

5号墳東の縦斜面にある。遺構配置図でわかるようにここには浅い谷が入っており、そのために横穴墓も途切れているが、谷の最も低い部分に、長軸を等高線に直行させて掘削する。

土坑は上端で2.7×2.2mの隅丸長方形プランを呈し、床面は1.2×0.8mのやはり整った長方



第107図 土坑実測図2 (I-2号) (1/30)

形となり、四隅の後縁はかなりシャープに残る。深さは1.7~2.4mを測り、壁体は傾斜をもつが直線的に立ち上がる。

埋土は固化を行っていない上層部分に黒色腐植土層がレンズ状に堆積していた。また、最下層に淡い黒色へドロ状の炭小片を交えた土層があるが、他は褐色系のものであった。

出土遺物

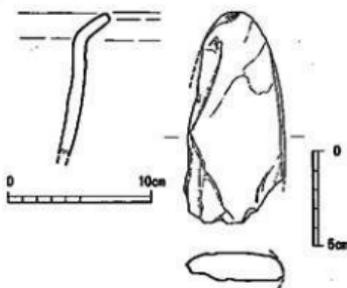
出土遺物には最上層から弥生土器・土師器片が、また位置を確認できていないが、縄文時代の石斧が出土している。

土器 (第108図1)

如意形口縁をもつ弥生土器の小片。器表の残りが悪いが、前期後半から中期初頭頃のものである。先にも記したように該期の遺構はなく、古墳下層から出土した弥生土器との関連性を思えば、中期初頭頃とできる。

石器 (第108図2)

蛇紋岩製の石斧で、頭部付近。側縁は非常によく研磨されるが、図上面は雑な、ほとんど自然面をそのまま残すような状態である。



第108図 I-1号土坑出土遺物実測図
(1/1、1/3)

I-2号土坑 (図版70、第107図)

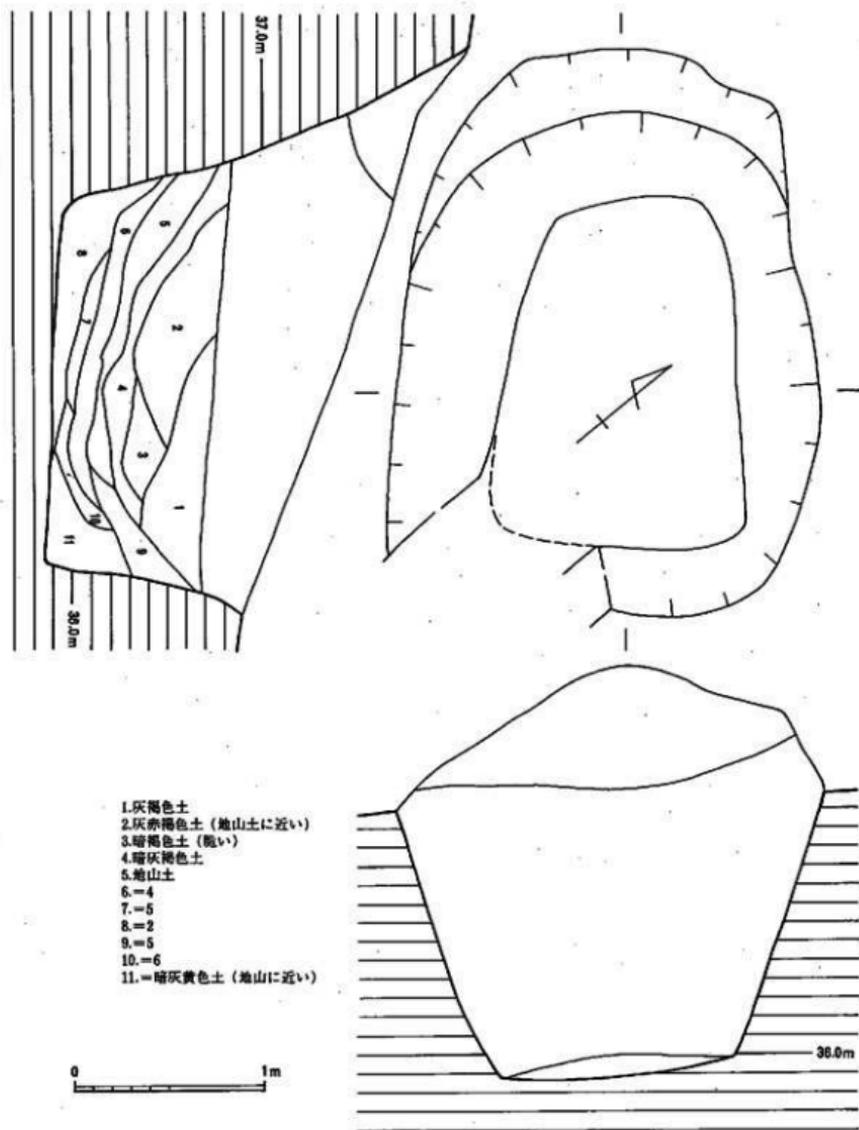
4号墳前面の近世墓群中で検出した。というよりも、近世墓発掘中に地山が現れないために精査して気付いたもので、それほど埋土の見極めが困難であった。I-1号土坑と同様に谷状地形の中にある。

掘形は近世墓に一部が破壊されているが、上端で長軸3m、短軸2.2mを測るが、北西側で小さく崩れている。床面は1.8m×1.2mほどの隅丸長方形プランとなり、深さは最大で2.2m、最小で1.1mとなる。これも壁の立ち上がりは直線的である。

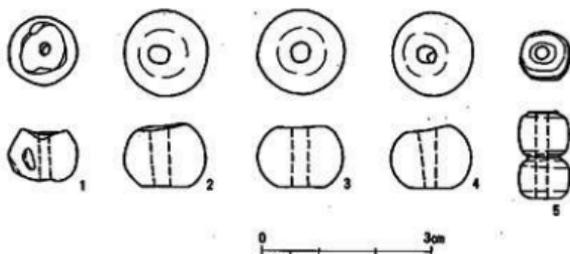
埋土には褐色系の土が入り、黒色腐植土層は入っていない。また出土遺物は黒曜石片1点のみであった。

I-3号土坑 (図版71、第109図)

当初「2号土壙墓」としていたが、報告に際して改めた。3号墳南東、段丘肩に位置する。この土坑の標高は38mほどであり、隣接する3号墳地山の標高が約40m測ることから、古墳が築造された付近に比べてこの段丘肩が一段低く、けものみちが存在した可能性がある。



第109図 土坑実測図3 (I-3号) (1/30)



第110図 I-3号土坑出土遺物実測図(1/1)

この遺構は検出が容易であり、そのために土墳墓と称していた。さらに、最上層および第2層目から若干の土器と玉類が出土したことが近世墓群の存在と相俟っていいよ土墳墓に違いないと思わせたが、断ち割を行ってもなかなか床面が現れず、土層を残すことも困難な状況となり、途中から全掘を始めた。

上層の規模は長軸2.2m、短軸1.4mの隅丸方形ないし長円形に近い平面プランを有し、床面では0.4×0.1mほどの平坦面しか遺さない。深さは2mを測り、全体はかなりの傾斜で直線的にすばまって行く。この形状を目にしたときは、落ち込んだ動物は身動きがとれず、跳躍もままならないのではないかと、まさしく落とし穴に相応しいものだとの印象を得た。

出土遺物(図版90、第110図)

上層から出土した玉類。1は瑪瑙製で、半透明、淡いオレンジ色を呈する。表面に小さな凹凸が多数あり、質はさほど良くない。2～5はガラス玉。2～4は抹茶のような緑味を帯びる暗褐色を呈し、明るさの度合いには差異がある。5は黄味帯びる乳白色不透明で、2個が融着する。切り離された両端は非常にシャープな面となり、鋭利な刃物で切ったようである。なお、縦方向(孔と平行)に細密な筋が多く入る。

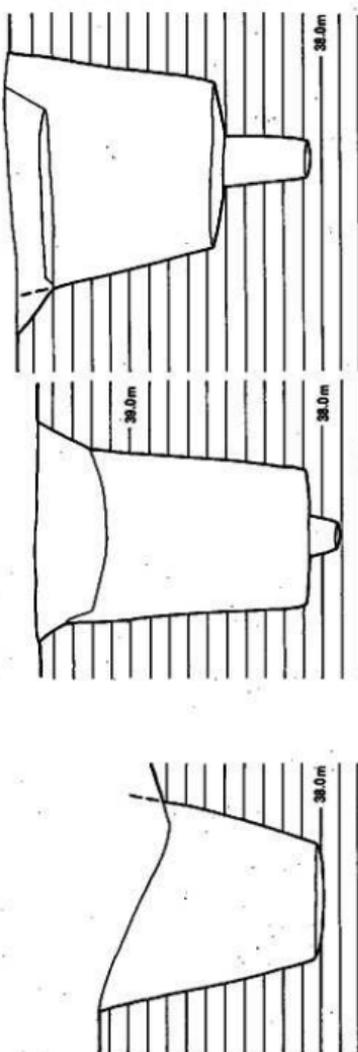
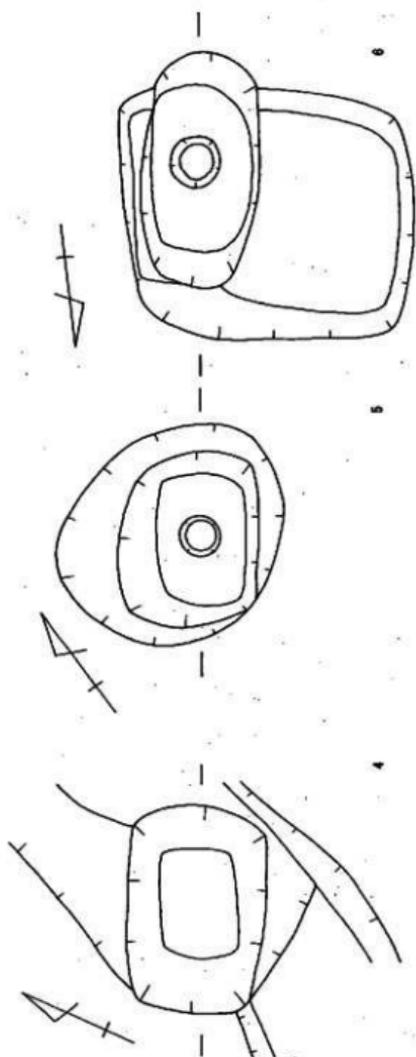
これらの玉のうち、少なくとも瑪瑙製品を除く4点は古墳からは出土しないもので、新しいものようである。近世墓に関連するものであろう。

I-4号土坑(図版72、第111図)

4号墳北西にある。シミ状の不整形の落ち込みの中で検出したもので、床面は0.6×0.4mの長方形プランとなる。深さは約1.2m。埋土は灰褐色土を主体とし、出土遺物はない。

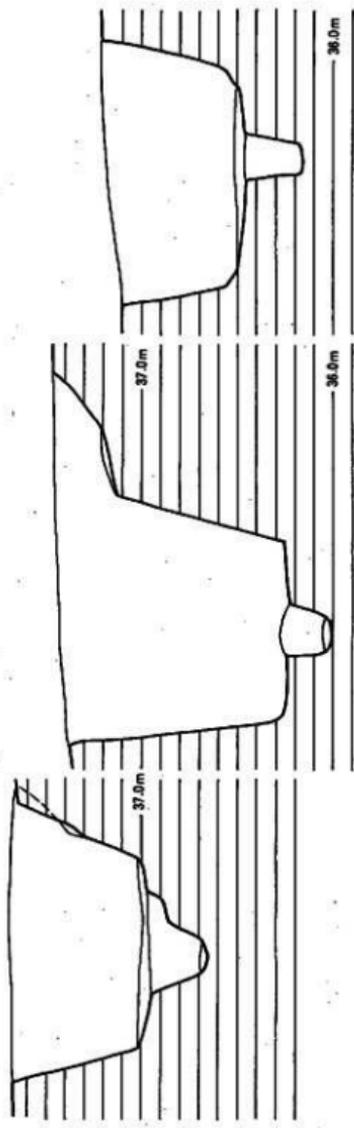
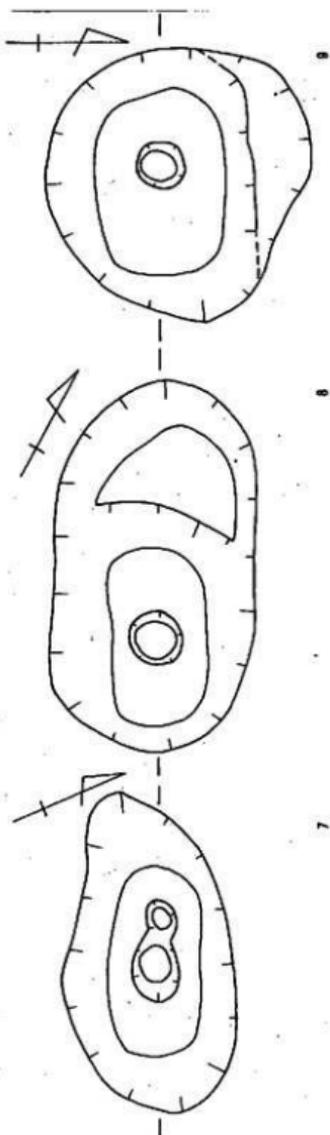
I-5号土坑(図版72、第111図)

4号土坑と4号墳の間に位置する。検出面では円形に近かったが、床面は0.7×0.5mの隅丸



第111圖 土坑実測圖4 (I-4~6号) (1/30)

0 2m



第112圖 土坑実測圖5 (I-7~8号) (1/30)

長方形プランとなる。深さは1.4mを測り、壁は垂直に立ち上がる。これも埋土は灰褐色土を主体とし、出土遺物はない。

床面に直径0.2mのピットがあるが、深さは0.1mと浅い。

I-6号土坑 (図版73、第111図)

5号墳の西に位置する。方形のシミ状の落ち込みを発掘後に気付いたもので、やはり埋土は灰褐色土を主体とする。床面は0.9×0.5mの隅丸長方形プランを有し、深さは1.1mを測る。壁体は長側片ではほぼ垂直に立ち上がり、小口部分では傾斜が緩やかとなる。

床面中央に直径0.2m強のピットがあり、その深さは0.4m強であった。

I-7号土坑 (図版73、第112図)

I区西端の中央付近にある。床面は1×0.5mの隅丸長方形プランとなり、深さは0.7mを測る。上面の平面形はやや崩れるようである。

床面中央に直径0.3mほど、深さ0.3mのピットがある。その西側に連続する浅いピットは発掘ミスと思われる。

I-8号土坑 (図版74、第112図)

やはりI区西端の中央付近に位置する。床面は0.9×0.5mの整った隅丸長方形プランを呈し、深さは1.2mと平面規模に比して深い。

床面中央に直径0.3m、深さ0.2m強のピットが掘られている。

I-9号土坑 (図版74、第112図)

8号土坑の東にある。上端の平面形は扁円形に近いが、床面でのそれは1×0.7m、深さ0.7mの隅丸長方形となる。

床面にはやや西に偏して直径0.2m、深さ0.3mのピットが穿たれていた。

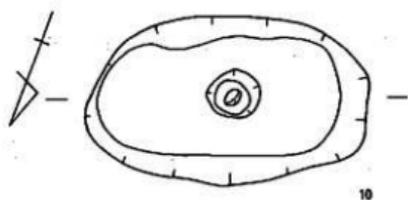
I-10号土坑 (図版75、第113図)

9号土坑の南に位置し、主軸方位もそれに近い。床面はほぼ1.2×0.6mの隅丸長方形プランとなり、深さは0.7m余である。

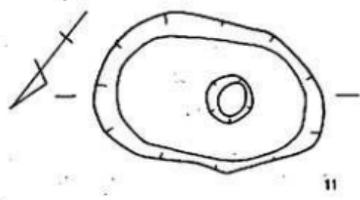
ほぼ中央に直径0.3mほどのピットがある。深さは0.3mで、中に小礫が1点入っていた。

I-11号土坑 (図版75、第113図)

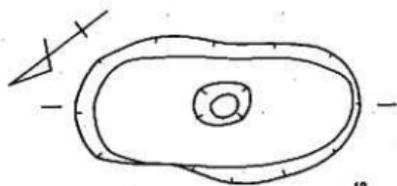
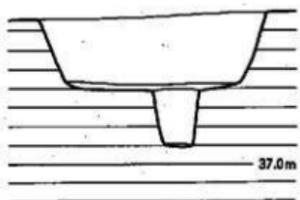
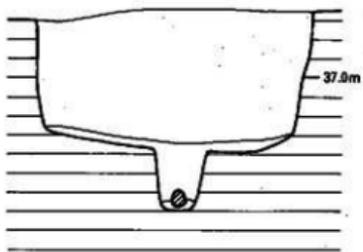
7号土坑の南東にある。床面は1×0.6mの長円形に近い平面形を有し、深さは0.4mが残っ



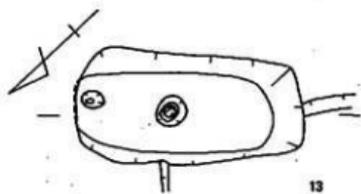
10



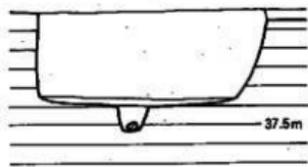
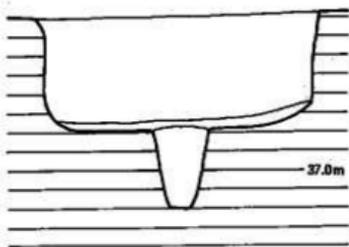
11



12



13



第113图 土坑实测图6 (I-10~13号) (1/30)

ていた。

床面にはやや西に偏して直径0.2m強、深さ0.3mのピットがある。

I-12号土坑 (図版76、第113図)

11号土坑の南西に近接し、主軸方位もそれに近い。床面は1.3×0.6mの長円形に近いプランを有し、深さは0.6mが残っていた。

床面中央に直径0.2~0.3m、深さ0.4mのピットがある。

I-13号土坑 (図版76、第113図)

12号土坑の南に近接する。床は1×0.4mの隅丸長方形プランとなり、深さは0.5mを測る。北東小口部分ではわずかにオーバーハングしており、これが本来の形状かとも思われるが例が乏しい。

床面中央に直径0.2m弱のピットがある。深さ0.1m強と浅いが、底に小礫が1点入っていた。

I-14号土坑 (図版77、第114図)

13号土坑の北東に近接する。床面はややいびつな隅丸長方形を呈し、その規模は1×0.6mであった。深さは0.8mを測る。

床面中央付近に直径0.3m、深さ0.4m近いピットがある。

I-15号土坑 (図版77、第114図)

13号土坑の東に近接する。床面は歪んだ長円形を呈し、その規模は長軸0.8m、短軸0.4mである。深さは0.7m。

床面には直径0.3mのピットが中央やや西よりに掘られ、内部には小礫数点が入っていた。深さは0.5mであった。

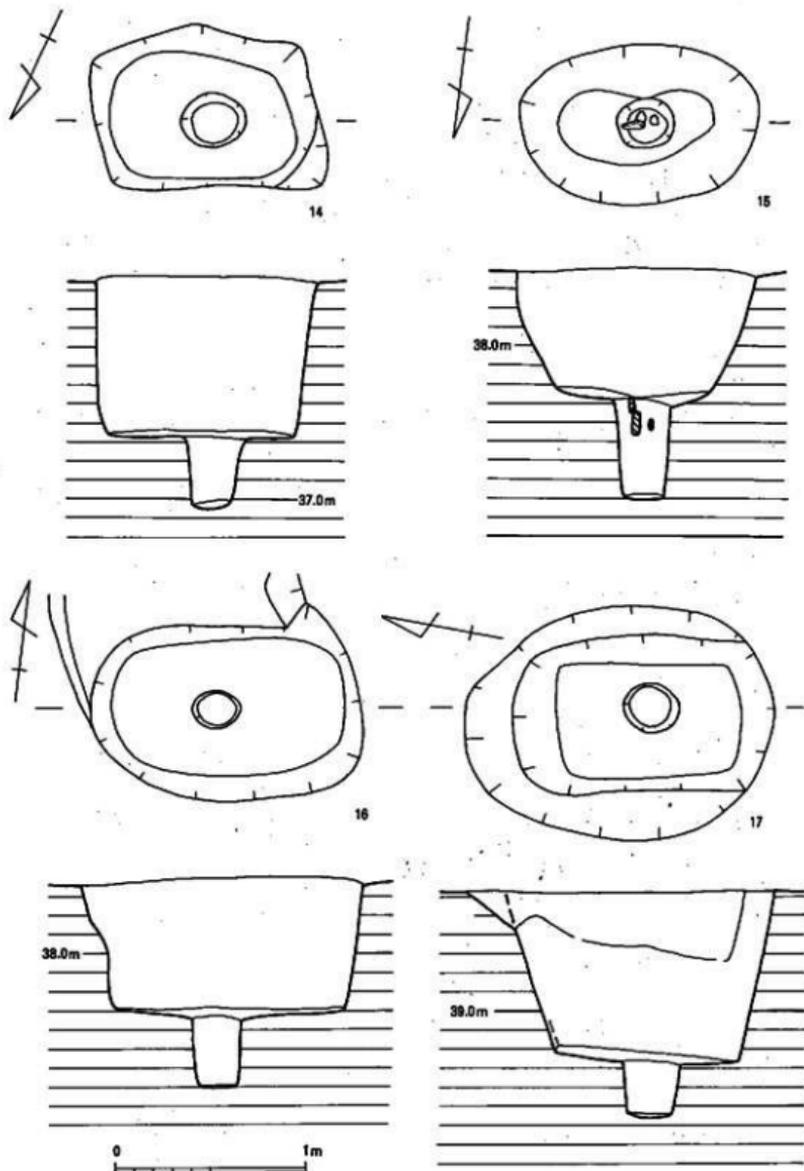
I-16号土坑 (図版78、第114図)

15号土坑の北東に隣接し、連続する落ち込みはシミ状の部分である。床面は1.2×0.7mの隅丸長方形プランで、深さは0.7mが残っていた。

これも床面中央に直径0.2m、深さ0.4m弱のピットがある。

I-17号土坑 (図版78、第114図)

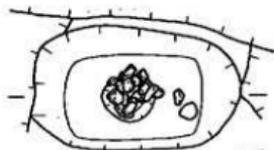
6号土坑の南西にあり、他のこの種の土坑とはかなり距離を置いて位置する。調査時には「3号」と番号を付していたが、この報告で改めた。



第114圖 土坑実測図7 (I-14~17号) (1/30)

検出面では扁円形プランを有していたが、発掘が進むにつれて長方形となり、床面では 0.9×0.6 mの整った隅丸長方形となった。深さは 0.9 m。

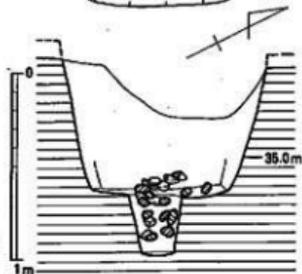
床面中央からやや偏した位置に直径 0.3 m、深さ 0.3 mのビットがある。



I-18号土坑 (図版79、第115図)

20号石蓋土墳墓と14号土墳墓に切られ、当初はこれも16号土墳墓と呼称していたものである。明らかな落ち込みであるとはわかったが、なお輪郭がはっきりせず、周囲を若干掘り下げて漸く検出できた。

床面は 0.7×0.45 mの長方形プランを有し、深さは 0.7 mを確認できた。この土坑では他の同種の遺構埋土に比してより黒い灰黒色土が表層で確認されたが、以下は同様な灰褐色土が入っていた。



第115図 土坑実測図9 (I-18号)
(1/30)

床面中央部に直径 0.3 m弱のビットがあるが、その深さはやはり 0.3 mであった。ここではビット内外で拳大に満たない無数の小礫が散乱して検出された。中央に立てられた杭の根固めであろう。

II-1号土坑 (図版79、第116図)

II区西隅にある。床面は 0.9×0.5 mの長円形あるいは隅丸長方形プランを呈し、深さは 1.1 mが残っていた。分層を試みたが非常に困難なために諦めた。それほど一様に見える、炭の小片を交えた茶褐色土が入っていた。

床面にビットが検出されなかったが、断面図に見るように中央部が高まりをもつ。

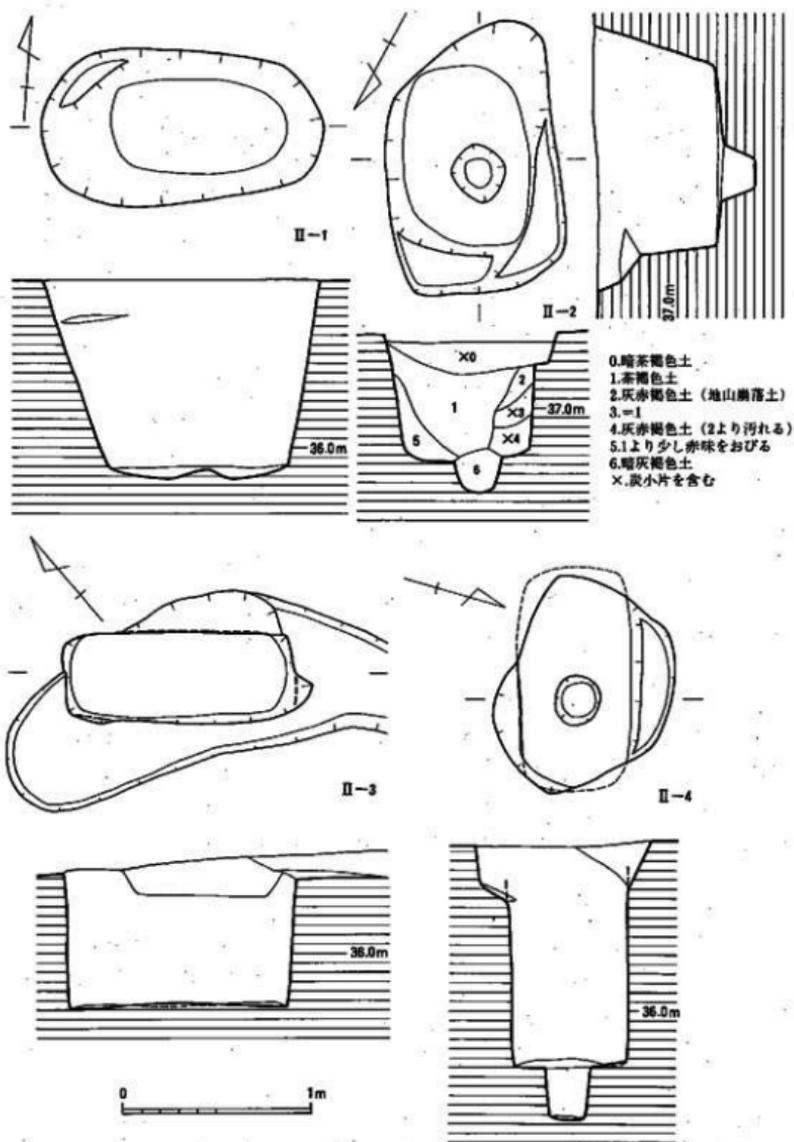
II-2号土坑 (図版80、第116図)

II-1号土坑の北西に近接する。検出面ではいびつな平面形であったが、床面は隅丸長方形を呈する。規模は 0.95×0.65 mで、深さは 0.65 mを測る。図のような土層図を作製したが、土質はいずれもよく似たものである。

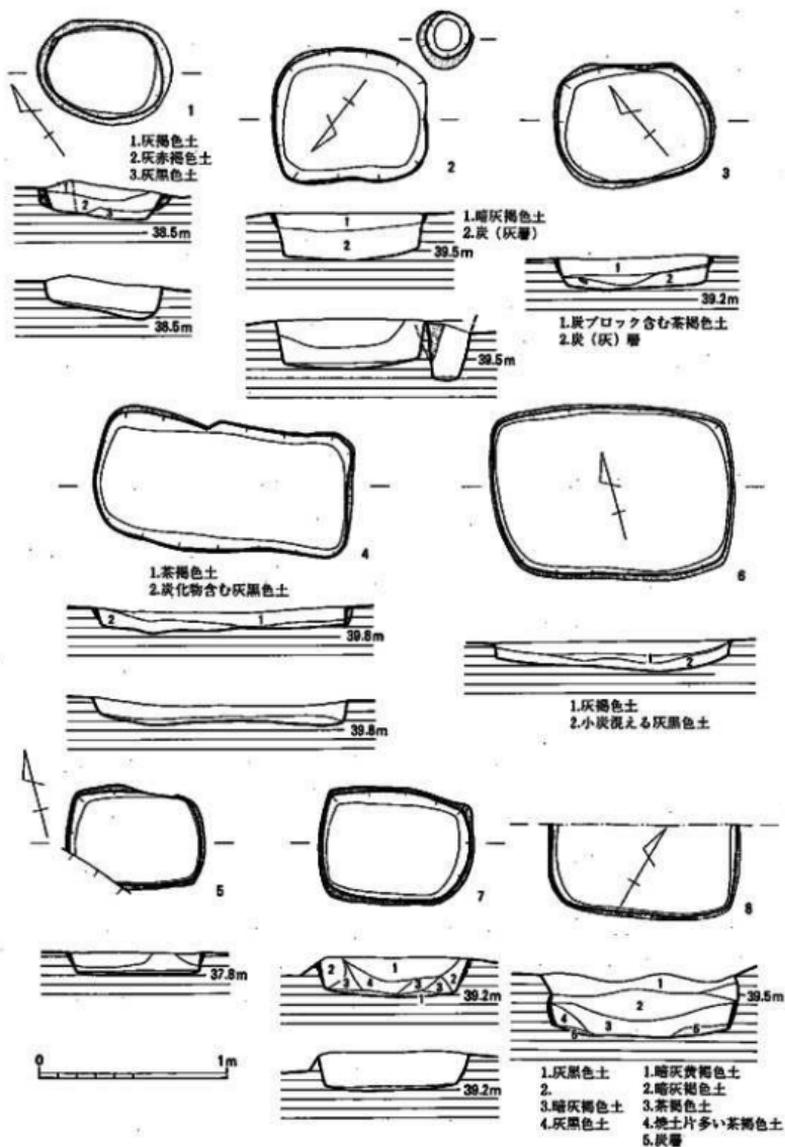
床面中央からやや偏した位置に直径 0.3 m、深さ 0.2 m弱のビットを検出した。

II-3号土坑 (図版81、第116図)

II区西側の斜面上位に孤立して位置し、これもシミ状の変色域を掘り下げて確認したもので



第116図 土坑実測図8 (II-1~4号) (1/30)



第117図 焼土坑実測図1 (I-1~8号) (1/30)

ある。形状が非常によく残っており、床面は1.15×0.45mの隅丸長方形を呈し、四周の壁はほぼ垂直に0.8m立ち上がる。

埋土には炭小片を含む緻密な灰褐色土が入っていた。

Ⅱ-4号土坑 (図版81、第116図)

Ⅱ-2号土坑の北西、調査区境界付近で検出された。検出時の平面形はいびつなものであったが、床面は1.2×0.6mの整った。隅丸長方形プランとなる。深さは1.2mが残り、壁の立ち上がりは長辺で垂直、短辺ではオーバーハングする。埋土は他と同様、灰褐色のほほ一様な土が入っていた。

床面中央付近に直径0.4m、深さ0.6m弱のピットが穿たれる。

4) 焼土坑

直径ないしは一辺長が1m前後の浅い土坑で、壁が焼け、内部に焼土や炭の入った土坑をこう呼んだ。この調査で19基を検出したが、その分布は散在し、一定の法則を読みとることは難しい。かつて、筆者は以前厚川町木山平遺跡¹でこの種の遺構を古墳祭祀に伴うものではないかと考えたが、この遺跡での在り方はそれを裏切るものである。今なお、この種の遺構の中には古墳祭祀に伴うものがあると考えており、この金居塚遺跡や隣接する上の熊遺跡で検出した焼土坑との違いを再検討する必要がある。

I-1号焼土坑 (図版82、第117図)

調査区東端の段丘肩、1号石蓋土塚墓の東に隣接する。上端は長軸0.6m、短軸0.5mの長円形プランを呈し、深さは0.15mほどである。壁体の大部分が焼けて赤く変色するが、床面は変色していない。中層に焼土ブロック混じりの灰赤褐色土が、最下層に炭混じりの灰黒色土が堆積していた。出土遺物はない。

I-2号焼土坑 (図版82、第117図)

4号墳周溝の北西に近接する。上端で0.75×0.7mのいびつな方形プランを呈し、深さは0.25mであった。南隅付近を除く壁体の上端が焼けるが、炭層の堆積した下半部分は焼けておらず、炭を入れた状態で使用したものと思われる。

南隅に隣接して直径0.2m、深さ0.3mの柱穴状のピットがあり、それは焼土坑に接する付近が赤く焼けていた。このピットにも炭混じりの茶褐色土が入っている。

I-3号焼土坑 (図版83、第117図)

4号土坑の南西に位置する。長軸0.8m強、短軸0.6m強の隅丸長方形に近い平面形を有し、深さは0.15m強である。これも下層に炭が入り、それ以上の壁体が焼けて変色していた。床面は変化していない。

I-4号焼土坑 (図版83、第117図)

遺構番号を平板図に書き込んでおらず、個別実測図の方位も失念しているが、平面規模・深さなどから判断してI号墳東に図示されたものがこれに該当するようである。

平面形は1.35×0.7mで、この種の遺構としては大型の隅丸長方形を呈するが、深さはわずか0.1mに過ぎない。上層に茶褐色土、下層に炭を多く含む灰黒色土が入るが、この土坑では壁体の全面が焼けていた。

I-5号焼土坑 (図版84、第117図)

I-1号溝状遺構の東端付近に位置する。一部を耕作時の畝で壊されるが、長軸0.7m、短軸0.5mの隅丸長方形プランを呈する。深さは0.1m。

埋土は灰褐色から茶褐色を呈し、分層が困難であったが、全体に多くの炭を交えていた。壁体は床付近と東北隅の一部を除く大部分が赤く変色する。

I-6号焼土坑 (図版84、第117図)

I-5号焼土坑の南西にある。I-4号焼土坑と同様、大型の遺構で、長軸1.2m強、短軸0.9mほどの隅丸長方形プランとなる。深さは最大で0.15mであった。

上層に灰黄褐色土、下層に炭を交える灰黒色土が入っており、上層に対応する部分の壁体のみが赤く焼けていた。

I-7号焼土坑 (図版84、第117図)

I-17号土坑の北西にある。平面形は0.8×0.6m弱の炭丸長方形プランを有し、深さは0.2mを測る。土層の観察では、他の類似遺構と異なって層位が乱れており、全体に焼土・炭が混ざっている。壁体は全体が焼けて赤変する。

I-8号焼土坑 (第117図)

1号掘立柱建物跡の南、耕作用の農道を残した部分に隠れ、全体の確認はできていない。検出した部分は長軸1m、短軸0.5mほどで、炭丸長方形プランを想定させる。深さは0.3m強。

炭あるいは焼土が入った層は床の周縁で検出され、壁体は全体が赤変する。
土器片が出土するが、時期などを判断するに足りない。

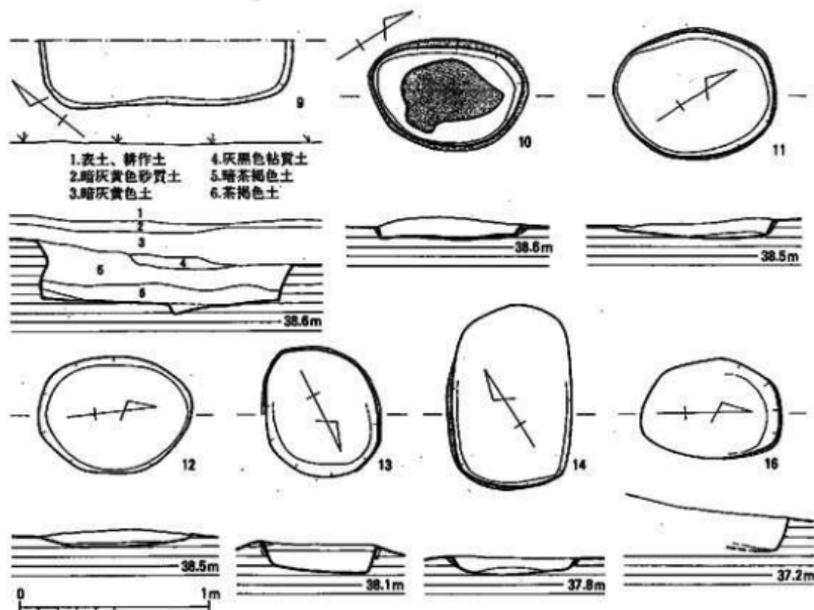
I-9号焼土坑 (第118図)

I-8号焼土坑の西、これも調査区の境界に位置し、全体の確認はできていない。検出した長軸は1.3m、幅は0.35mを検出し、深さは0.3mを測る。

埋土は上層から灰黒色土、暗茶褐色土・茶褐色土（焼土・炭を少量含む）となり、床隅に炭層が小さく入っていた。この壁体は焼けてはいるものの、赤変の度合いが小さく、あまり使用されていないようである。

I-10号焼土坑 (第118図)

I-8号焼土坑の北に位置する。長軸0.8m、短軸0.5mの扁円形プランを呈し、深さは0.1mである。この土坑は埋土の記録を行っていないが、壁体はもちろん、床面も非常によく焼けて



第118図 焼土坑実測図2 (I-9~16号) (1/30)

いた。

これも土器小片が出土したが、特徴をつかみえない。

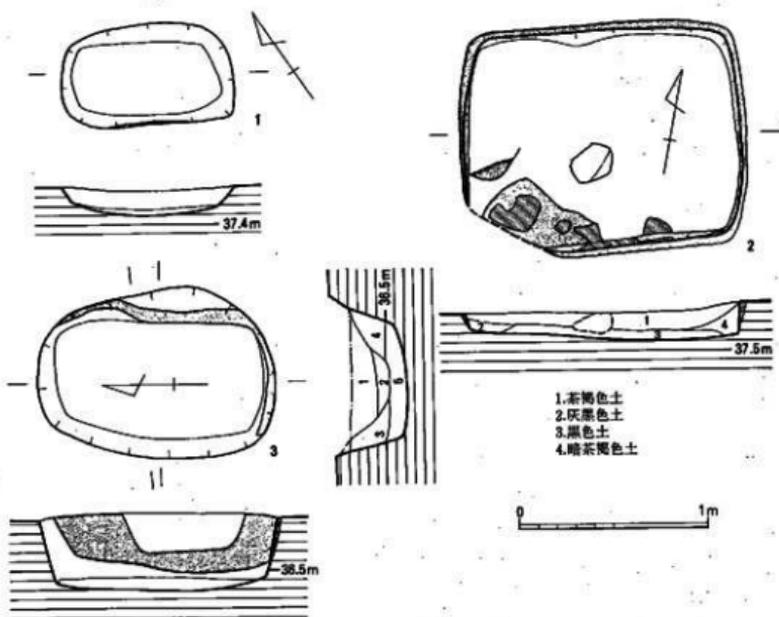
I-11号焼土坑 (図版85、第118図)

I号掘立柱建物跡の東、掘り残した長道の脇で検出した。長軸0.8m、短軸0.7m弱の楕円形に近い平面形となる。深さは0.1mほどが残るが、南西部は遺存状態が悪く、赤辺した部分が残っていなかった。しかし、他の部位の様子から見て、本来は全周の壁が焼けていたものと思われる。

I-12号焼土坑 (図版85、第118図)

I-11号焼土坑の脇で検出し、主軸方位が比較的近い。長軸0.8m、短軸0.6mの楕円形の平面形となる点も先の焼土坑に似る。深さは約0.1mが残る。

この土坑の壁体は顕著に赤変していないが、炭・焼土片を出土したと記憶する。



第119図 焼土坑実測図3 (II-1~3号) (1/30)

I-13号焼土坑 (図版85、118第図)

I-1号焼土坑の北に位置する。長軸0.75m、短軸0.6m、深さ0.15mの扁円形プランを有し、壁体のはほぼ3/4が赤変していたが全体の確認を行っていない。

I-14号焼土坑 (第118図)

I区西端近い、11号土坑の脇に位置する。長軸0.95m、短軸0.6m弱の長円形ないし隅丸長方形プランとなり、深さは0.1mほどが残存する。

床面には炭が堆積し、その上方を茶褐色土が覆う。壁体はほぼ1/2が赤く焼けていたが、これも全掘を行っておらず、確認できていない。

I-15号焼土坑 (第118図)

I区西端の8号土坑の横にあり、ほぼ1/2が調査区外へ続く。深さが2cmほどに過ぎないため、個別の図化を行っていない。幅は0.7mほどである。

I-16号焼土坑 (第118図)

I-4号溝状遺構の近くに位置する。長軸0.7m、短軸0.5mの扁円形に近い平面プランとなり、深さは0.2mほどである。これもほぼ1/2を未掘のままにしており、詳細は不明であるが、北西の一部は赤変していない。

II-1号焼土坑 (図版85、第119図)

II区東隅、掘立柱建物跡や土坑の近くで検出した。長軸0.9m、短軸0.5mの隅丸長方形に近い平面形となり、深さは最大で0.15mほどである。

埋土に炭・焼土などを含むが、床はもちろん、壁体もごく一部が赤変するのみである。

II-2号焼土坑 (図版86、第119図)

II区南東隅で検出したもので、大型である。南西隅の一部が破壊されるが、平面形は1.5×1.5mの整った隅丸長方形となり、深さは0.2mが残存していた。

壁体は四周ともによく焼けて赤変するが、特に南辺付近は床も部分的に赤くなり、一部では灰黄色～灰青色の硬化面となっている。埋土は最下層に炭を多く含む黒色土、その上方に若干の炭・焼土をかむ茶褐色土が入っていた。

出土遺物

埋土中層、上下層の境付近から出土した。

土器 (第120図)



第120図 II-2号焼土坑出土遺物実測図 (1/4)

脚部が長く発達する高杯の柱状部で、図示部分は完固する。また、焼土坑使用時にすでに中に置かれていたようで、焼けて赤変する。石蓋土墳墓周辺で採集した高杯片と同様の時期と思われる。

II - 3号焼土坑 (図版87、第119回)

II区東よりの南辺に近い部分で検出した。長軸1.2m、短軸0.9mの隅丸長方形ないし長円形平面を有し、深さが0.4mと他の類似遺構に比べて深い。

埋土には床面に厚く炭の層が堆積し、ほぼそれ以上の壁の1/2が焼ける。

5) 小 結

性格の異なる各遺構をまとめて紹介したので、それぞれに所見を記したい。

掘立柱建物跡

小規模な掘立柱建物跡2棟を検出した。いずれも側柱のみの2×2間規模である。生活跡としてこの建物跡と関連しうるのは1号墳下層で検出した竪穴式住居跡であるが、それも1軒のみで、該期の遺物も段丘法面などで若干を採集したに過ぎないことなどから一定規模の集落が存在したとは考えられない状況である。こうした建物跡自体は、通常、集落を構成するものであるが、ここではまったくそうした様子がないことから、特殊な用途を想定できよう。

出土遺物がまったくないためにその性格を推し量ることは困難であるが、あえて推測するならば、方形墓域に配された石蓋土墳墓・土墳墓群との関連性である。それらと比較的近い距離をもって位置し、建物主軸と墓域の想定される方位も比較的近い。特に1号建物跡は、柱間が不揃いで、以下にも急傾え、一時的な工作物との印象を強く受ける。2号建物跡は墓域から35mほどの距離をもつが、さらに別の墓域が調査区外にあるのか、あるいは1号建物跡と関連するものか、現段階ではわからない。

土墳墓

弥生時代終わり頃から古墳時代初めにかけての墓地群とは内容の異なる土墳墓を2基検出した。いずれも出土遺物が乏しく、所属時期の判定が困難である。

1号土墳墓は床面に多くの河原石を敷き結めることから、同様に河原石を敷石に多用する古墳や横穴墓との関連性をみてよからう。2号土墳墓については内容から判断する材料がなく、位置的に近接するという点で1号墳との関連を推測するしかない。

6世紀代から7世紀にかけて、横穴式石室墳の近くに寄り添うように小型の堅穴式あるいは横穴式石室が位置することがよく見受けられる。豊前地方ではまだ管見に触れないようだが、そうした在り方と共通の意識の下で造営されたものであろうか。これも今後の課題であろう。

土坑

先にも記したが、大きく3群に分けうる。段丘肩に大型の遺構が疎に配され、ほぼ尾根線上に4基、東から入り込む浅い谷筋に10数基が配置される。もちろん、遺構の時期を確実に示す遺物はなく、その掘削された時期、同時存在した遺構の特定もできない。しかし、これらが「落とし穴」とすれば、単独で配するよりも、地形を勘案して複数を配するほうがより効果的であるのは自明のことなので、少なくとも各群それぞれは同時期に存在したとみなしてよいのではなかろうか。規模や、床面ピットの有無は壘物の大きさ、あるいは生け捕りにするか否かといった目的の違いによるのだろう。

大型の1-3号土坑が段丘肩にのみ位置する意味はよく知りえないが、壘物の行動特性によるものであろう。現状では、この段丘肩は金居塚古墳群を抜けて、200mほど南で小河川の入る比較的大きな谷筋へと緩やかな傾斜で続く。1・2号土坑が小規模な谷の奥に位置するといっても、それは段丘崖に対して直交する方向であり、傾斜はきつい。緊急時はともかく、平時にはこの段丘肩が水辺にいたるけのみちとして利用されていたものと考えられる。

この遺跡で最もこの種の遺構が集中するC群についても、ほぼ谷状地形の筋に沿って配置され、さらに両群の間にもB群が位置する。調査範囲の中で見ると、幅160mの尾根状地形の上に3列が配されていて、それぞれが段丘肩・尾根線上・谷状地形といった、より狩猟に適したといえる配置をとっている。

この遺跡で最も古い時期の生活面を残す古墳下層からかなりの量の石畿が出土し、あるいは堅穴式住居らしき掘り込みや柱穴を伴わない石組炉が存在することは、ここがハンティングフィールドとして利用された可能性を高めるものである。

焼土坑

今回の調査区で、埋土に炭・焼土を含み、壁体が焼けて赤変する小型の土坑を19基検出した。大部分は壁体のみが焼けるが、一部に床面まで焼けて硬化する例がみられた。多くの例は床面に灰などを敷いて火が直接床に接しない状態で使用したことを示すものと思われる。ことさらに、火が床面に接することを避ける理由は想定できず、着火しやすいように床面に草葉を十分に敷いた上で使用したまったく偶然の結果かと想像される。

これらの分布は、I-1・II-3号焼土坑を除いて遺跡の中央部、尾根線付近に集中する傾向が窺える。また、古墳や土壌墓群などの特定の遺構に偏重するといった状況でもない。

一方で、これらの遺構がすべて近い時期に使用されたという根拠はない。使用された時期については、推定できる遺物はわずかにⅡ-2号焼土坑から出土した高杯片のみであるが、それも上限を示すだけと考えている。この土器は弥生時代末～古墳時代初頭頃に属するものであるが、残片であること、中層から焼けた状態で出土すること、そして、何よりもほぼそのころに営まれた墓地群と無関係の状態分布するなどがその理由である。

したがって、現段階ではこの種の遺構の性格を云々するには資料が乏しく、単なる焚火の跡とするもやぶさかではない状況である。ただ、埋土は決して新しいものではなく、近世以前に遡るのはほぼ間違いないと考えている。

- 註 1 千田 昇ほか「山国川流域の地形」(大分大学教育学部『山国川—自然・社会・教育—』、1989)
- 註 2 坂本 嘉弘「佐知遺跡」(大分県教育委員会『大分県文化財調査報告書』第81輯、1989)
- 註 3 平成8年度、園場整備事業に伴い、豊前市教育委員会が調査。記者発表。
- 註 4 飛野 博文「能満寺古墳群」(大平村教育委員会『大平村文化財調査報告書』第9集、1994)
- 註 5 大平村下唐原の段丘上に位置する桑野遺跡は、弥生時代中期前半～中頃にかかる集落遺跡であるが、いわゆる貯蔵穴(袋状窪穴)はなく、小型土坑・掘立柱倉庫群からなっていた。
飛野 博文「桑野遺跡」(福岡県教育委員会『一般国道10号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第6集、1997)
- 註 6 飛野 博文「穴ヶ葉山遺跡」(大平村教育委員会『大平村文化財調査報告書』第8集、1993)
- 註 7 下村 智「北部九州の近世墓に使用される要領について」(龍田考古会『先史学・考古学論叢—熊本大学文学部考古学研究室創設20周年記念論文集』、1994)
- 註 8 栗焼 憲児ほか「ガラスノ遺跡」(中津市教育委員会『中津市文化財調査報告書』第3集、1984)
- 註 9 副島 邦弘「鶴先遺跡」(福岡県教育委員会『一般国道10号藤田道路関係埋蔵文化財調査報告』第5集、1985)
- 註 10 小方 泰宏編「宗文寺跡」(財団法人北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室『北九州市埋蔵文化財調査報告書』第172集、1995)
- 註 11 谷口 俊治ほか「京町遺跡2~4」(財団法人北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室『北九州市埋蔵文化財調査報告書』第146~149集、1994)
- 註 12 下村 智「席田青木遺跡1」(福岡市教育委員会『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第356集、1993)
- 註 13 田中 符介「女狐近世墓地」(大分県教育委員会『九州横断自動車道関係調査報告書』5、1996)
- 註 14 飛野 博文「木山平遺跡」(厚川町教育委員会『厚川町文化財調査報告書』第2集、1988)
- そのほか、火葬についての資料を大平村歴史民俗資料館藤井聡一氏より提供を受けた。充分活かすえなかつたことをお詫びし、謝意を表します。

VI. まとめ

以上で、金居塚遺跡の発掘調査の報告を終える。最後に、まとめきれなかった部分を多く残すが簡略に遺跡の概要を記す。

○古墳下層から旧石器時代の遺物を含む包含層を検出できた。このことは、火山灰等による堆積層の乏しいこの地域にとって、該期の遺構がまだ一部に残っているということを改めて示した。今後の発掘調査においても、古墳下層の発掘の必要性を示すものである。

○この遺跡を調査した段階において、築上郡のみならず、広く豊前地域においても数少ない初期の青銅製武器を出土したことは、地域の弥生時代史像をぬりかえるものであった。現在では、先にも記したように三光村佐知遺跡や豊前市河原田塔田遺跡でも細型銅剣・銅戈などの発見があるが、その歴史的な価値を低からしめるものではない。

○弥生時代終末頃の墓域の調査では、副葬品こそ決して豊富なものではなく、また明瞭な区画を検出したものでもなかったが、個別遺構では希にみる入念な構造を有する石蓋土墳墓・土墳墓群を知り得た。地域の階層分化の過程を示すものとして貴重なものである。

○古墳時代後期の群集墳として総体の規模は決して大きなものではないが、全長30mを超す大円墳を含み、中規模墳から金銅製馬具が出土、さらに古墳の直下に横穴墓が構築されるなど、当時の社会構造の解明に資する内容をもつ古墳群である。

○周辺地域ではまだ希な近世墓の発掘調査を行った。出土遺物が乏しいことなどがあって、火葬・土葬の葬法の違いの意味、頭位の方向など多くの問題を処理できないままに報告を終えることとなったが、今後に資するところは大きいと思う。

○通常縄文時代の遺構といわれる落とし穴状土坑に新しい例を提供できたのではないかと思っている。決して遺構の数は多くはないが、形態の異なる遺構の分布状況は興味深い。

○大平村域内の丘陵部の調査では焼土坑に悩まされた。出土遺物がほとんどなく、分布も規則性がない。手も足もでない状況である。存外、近世の罫盤に関わる単なる焚火の跡であるかも知れないのだが。

選積番号	位置	平面形・規模(長×幅×深): m		出土遺物	赤色顔料	杖	壘石枚数	備考
		上段(墓室上端)	下段(埋葬部下端)					
1号土塚墓	3号墳北			刀子	無	有	-	床全面に敷石あり。
2(旧3)号土塚墓	4号墳北				無	(無)	-	敷石か?
10号土塚墓	方形区画	隅丸長方形; 2.75×1.35×0.2	隅丸長方形; 2.15×0.8×0.3	鉄鏝	墓室の一部	有	-	小口の一部分に粘土。
11号土塚墓	方形区画	不整長方形; 2.35×1.7×0.2	長円形; 1.7×0.3×0.4		墓室一部・埋葬部床	有	-	重目張りの粘土有り。石13に切られる。
12号土塚墓	方形区画	不整四辺形; 1.8×1.4×0.1	長円形; 1.8×0.3×0.45		墓室一部・埋葬部全面	有	-	墓室底に黄色粘土を敷く。積石有り。
13号土塚墓	方形区画	不整四辺形; 2.9×2.1×0.4	長円形; 2×0.5×0.55		埋葬部床の一部	無	-	
14号土塚墓	方形区画	不整四辺形; 2.05×1.5×0.2	長円形; 1.8×0.4×0.4		床全面	有	-	積石。土15・石19に切られる。
15号土塚墓	方形区画	不整四辺形; (2.2)×(1.4)×0.3	長円形; 1.75×0.4×0.3		杖の一部	有	-	積石。
16号土塚墓	方形区画	不整長方形; 2.1×1.05×0.2	長円形; 1.65×0.35×0.4			有	-	落とし穴状土坑と判明し、欠番。
17号土塚墓	方形区画	隅丸長方形; (2.2)×1.7×0.2	長円形; 1.9×0.4×0.5		墓室一部・埋葬部全面	有	-	積石・目張り粘土。石11に切られる。
1号石壘土塚墓	3号墳北	隅丸長方形; 1.7×1.3×0.2	長円形; 1.1×0.45×0.4	ヤリガンナ	床の一部	無	4+小壘	壘石は花崗岩。
2号石壘土塚墓	3号墳北	-	長円形; 1×0.5×0.3		床全面	無	3	
3号石壘土塚墓	3号墳下層	長円形? ; 1.5×1.1×0.2	長円形; 1.3×0.45×0.25		床全面	無	4	上段は一部カット。
4号石壘土塚墓	3号墳下層	長円形? ; -×-×0.4	長円形; 1.8×0.6×0.4		床全面	無	4(+)+小壘	上段は一部カット。埋葬部は対角線に入る。
5号石壘土塚墓	3号墳下層	長円形? ; (2.4)×1.5×0.3	隅丸長方形; 1.8×0.4×0.6		無	無	3(+)+小壘	上段は一部カット。埋葬部は平行に入る。
10号石壘土塚墓	方形区画	不整長方形; 2.5×1.65×0.25	隅丸長方形; 1.8×0.5×0.6	ヤリガンナ	床全面・壘石下面	有	4	石11を切る。
11号石壘土塚墓	方形区画	隅丸長方形; 2.35×1.9×0.3	長円形; 1.8×0.4×0.6		埋葬部全面・壘石下面	有	6+小壘	土17を切り、石101に切られる。
12号石壘土塚墓	方形区画	不整長方形; 2.0×1.1×0.1	長円形; 1.7×0.6×0.4		埋葬部全面・壘石下面	無	3+小壘	埋葬部も2段。
13号石壘土塚墓	方形区画	不整長方形; 2.05×1.65×0.3	楕円形; 1.9×0.45×0.5	鉄鏝2	埋葬部全面・壘石下面	有	7+小壘	埋葬部に黄色粘土。埋葬部は墓室計内層に入る。
14号石壘土塚墓	方形区画	隅丸長方形; 2.5×1.7×0.2	隅丸長方形; 1.75×0.35×0.5		埋葬部全面・壘石下面	有	4+小壘	石11を切る。
15号石壘土塚墓	方形区画	方形? ; (2.2)×(2.2)×0.15	楕円形; 1.75×0.4×0.6		埋葬部全面・壘石下面	有	6+小壘	埋葬部は墓室計内層に入る。石11・16に切られる。
16号石壘土塚墓	方形区画	不整長方形; 1.6×0.9×0.3	楕円形; 1.15×0.35×0.4		埋葬部全面・壘石下面	有	2+小壘	埋葬部は墓室計内層に入る。石15を切る。
17号石壘土塚墓	方形区画	不整長方形; 2.65×2×0.3	長円形; 1.95×0.5×0.55		埋葬部全面・壘石下面	無	5	埋葬部は墓室計内層に入る。墓室底に黄色粘土。
18号石壘土塚墓	方形区画	不整長方形; 2×1.7×0.2	長円形; 1.85×0.45×0.5		埋葬部全面	有	6+小壘	埋葬部は墓室計内層に入る。墓室底に黄色粘土。
19号石壘土塚墓	方形区画	不整長方形; 2.25×1.4×0.2	長円形; 1.6×0.4×0.4		埋葬部全面	有	5	土14を切る。
20号石壘土塚墓	方形区画	不整長方形; 2.8×2.1×0.5	長円形; 1.7×0.45×0.55		埋葬部全面・壘石下面	有	6+小壘	土12に切られる。

第4表 金居塚遺跡近世墓一覽表1

遺跡 番号	図版番号	碑 番号	位置	形状・規模			出土遺物	土 葬 火 葬	切合関係	備 考
				平面形状	長さ × 幅 × 高さ	長さ × 幅 × 高さ				
1号墓		43	A-h	長方形	1.15 × 0.85 × 0.95		人骨	土		
2号墓		43	A-h	長方形	0.85 × 0.7 × 0.8		鉄釘	土	2→60-100	
3号墓	30-44-45	43-78	A-h	方形	0.6 × 0.5 × 0.6		(鉄)	土	上層に火葬墓2	
4号墓		45	A-h	方形	0.4 × 0.35 × 0.65		鉄釘	土		
5号墓		45	A-k	(長方形)	× × ×			土	6→5	実測図なし
6号墓		45	A-h	(長方形)	× × ×			土	6→5	実測図なし
7号墓	30	45	A-h	長方形	0.95 × 0.45 × 0.8			土		中に磨多
8号墓		45	A-h	長方形	0.7 × 0.45 × 0.6			土	8→5	
9号墓	43	46	A-j	(長方形)	× × ×			土		実測図なし
10号墓	31	46	A-j	不整形	0.65 × 0.5 × 0.45		人骨	土	石枕	
11号墓		47	A-g	方形	0.5 × 0.5 × 0.2			土	70→11	
12号墓		47	A-g	(方形)	0.45 × × × 0.5			土	12⇨13	
13号墓		47	A-g	方形	0.55 × 0.5 × 0.65			土	12⇨13	
14号墓		47	A-g	長方形	1.05 × 0.6 × 0.8			土	138→14→50	
15号墓		47	A-g	長方形	1.05 × 0.4→0.6 × 0.3→0.4		陶器	土	14⇨15	
16号墓		48	A-g	扇形	0.35 × 0.4 × 0.95			土		
17号墓	31	48	A-g	長方形	0.95 × 0.55 × 0.75		陶器	土	75→17.上層に火葬骨	
18号墓		49	A-g	長方形	1 × 0.7 × 0.9			土		
19号墓		49	A-g	長方形	0.9 × 0.55 × 0.95			土	13→419	
20号墓		49	A-f	長方形	0.7 × 0.4 × 0.45			土	146→20	
21号墓	32	50	A-i	長方形	1.05 × × × 0.85			土	21→24	
22号墓		50	A-i	長方形	0.95 × 0.55 × 0.7			土	先後不明	
23号墓		50	A-i	長方形	0.9 × 0.7 × 0.7			土		
24号墓	32	50-78	A-i		× × ×		人骨・石敷・陶器	火	21→24	
25号墓		51	A-f	長方形	1 × 0.6 × 0.7			土	25→64・65	
26号墓		51	A-f	長方形	1.05 × 0.6 × 0.6			土	27→26→28	
27号墓		51	A-f	長方形	1.3 × 0.55 × 0.85			土	27→26→29	
28号墓		51	A-f	方形	0.4 × 0.4 × 0.4			土	27→26→30	
29号墓	32	52	A-f	円形	0.8 × × × 0.7		人骨	土	29⇨157	
30号墓		52	A-f	長方形	1 × 0.6 × 0.9		人骨	土	31→30	
31号墓		52	A-f	長方形	0.8 × 0.5 × 0.65			土	31→30・67	
32号墓		53	A-f	長方形	0.85 × 0.45 × 0.55		人骨・鉄釘	土	32⇨159	
33号墓		53	A-f	円形	0.5 × × × 0.7		人骨	土		
34号墓		53	A-f	円形	0.45 × × × 0.35			土	90→34	
35号墓		53	A-f	長方形	0.75 × 0.45 × 0.4		人骨	土	90→35	
36号墓		53	A-f	長方形	× × 0.6 × 0.8			土	36→37・61・119	
37号墓		54	A-f	円形	0.4 × 0.5 × 0.4		人骨	土	36→37	
38号墓		54	A-b	長方形	0.4 × 0.35 × 0.35			土		
39号墓		54	A-b	方形	0.5 × 0.4 × 0.4		人骨	土	96→39	
40号墓	46	78	A-e		× × ×		人骨	火	99→40	蔵骨器
41号墓	46	78	A-b		× × ×		人骨	火	98→41	蔵骨器
42号墓	47	78	A-f		× × ×		人骨	火		蔵骨器
43号墓	47	81	A-g		× × ×		人骨	火		石蓋蔵骨器
44号墓	48	81	A-g		× × ×		人骨	火	145→44	蔵骨器
45号墓		81	A-k		× × ×		人骨	火		蔵骨器
46号墓		81	A-h		× × ×		人骨	火		石蓋蔵骨器
47号墓			A-h		× × ×		人骨	火	3号墓(上層)	蔵骨器
48号墓		81	A-h		× × ×		人骨	火		石蓋蔵骨器
49号墓		83	A-h		× × ×		人骨	火		石蓋蔵骨器
50号墓			A-k		× × ×		人骨	火	14→50	

第4表 金居塚遺跡近世墓一覽表2

遺構 番号	図版番号	押印 番号	位置	形状・規模			出土遺物	土葬 火葬	切合関係	備 考	
				床面形状	長さ ×	幅 ×					深さ
51号墓		55	A-b		×	×	人骨	火			
52号墓	48	86	A-f	楕円形	0.35 ×	0.25 ×	0.05	人骨	火		
53号墓	48	83	A-f		×	×	人骨	火	77-130-53	鹿骨器	
54号墓	49		A-f		×	×	人骨	火			
55号墓	49		A-f		×	×	人骨	火			
56号墓	49		A-f		×	×	人骨	火			
57号墓	50		A-f		×	×	人骨	火		2部分?	
58号墓	50		A-f		×	×	人骨	火			
59号墓	51		A-f		×	×	人骨	火			
60号墓			A-e		×	×	人骨	火			
61号墓			A-f		×	×	人骨	火			
62号墓	51		A-f		×	×	人骨	火			
63号墓		88	A-g		×	×	人骨	火	17-63	上に石を置く	
64号墓		51	A-f		×	×	人骨	火	25-64		
65号墓		51	A-f		×	×	人骨	火	25-65		
66号墓		83	A-h		×	×	人骨	火	2-66	鹿骨器	
67号墓		54	A-f	方形	0.65 ×	0.65 ×	0.55	土	131-118-67		
68号墓			A-g		×	×	人骨	火			
69号墓			A-g		×	×	人骨	火			
70号墓	33	54	A-g	長方形	0.9 ×	0.65 ×	0.85	人骨	土	70-11-79	
71号墓			A-g		×	×	人骨	火			
72号墓			A-g		×	×	人骨	火			
73号墓		55	A-b	長方形	×	0.65 ×	0.7	土	73-99-96-118		
74号墓	53	83	A-c		×	×		火	142-74	鹿骨器	
75号墓		56	A-b	円形	0.35 ×	×	0.4	土			
76号墓		56	A-b	長方形	1.1 ×	0.6 ×	0.65	土	76-51		
77号墓		87	A-f	(方形)	0.45 ×	×	0.4	土	130-77-53-76		
78号墓		57	A-g	円形	0.75 ~	0.8 ×	0.6	(石版)	土		
79号墓		87	A-g	長方形	0.96 ×	0.55 ×	0.6	土	70-79-17		
80号墓	33	57	A-g	長方形	0.7 ×	0.5 ×	0.35	土		長方形石籠有り	
81号墓		58	A-g	長方形	0.6 ×	0.4 ×	0.6	人骨	土		
82号墓		58	A-c	方形	0.3 ×	0.25 ×	0.45	土			
83号墓			A-c	不整形	0.6 ~	0.5 ×	0.15	火?			
84号墓			A-c	円形	×	×		火			
85号墓	52	85	A-c	楕円形	0.3 ×	0.2 ×	0.1	石塔	火	85-148	
86号墓	34	59	A-j	長方形	0.8 ×	0.6 ×	1	人骨、漆棺2	土		
87号墓		59	A-k	円形	0.45 ×	×	0.5	土			
88号墓		59	A-k	円形	0.3 ×	0.35 ×	0.6	「寛永通宝」1	土?		
89号墓	34	59	A-k	長方形	0.65 ×	0.4 ×	0.65	釘	土		
90号墓		60	A-b	長方形	1.2 ×	0.8 ×	0.75	土	90-34-35		
91号墓		53	A-c		×	×	人骨	火		鹿骨器	
92号墓		53	A-c		×	×	人骨、磁器	火		鹿骨器	
93号墓		60	A-b	長方形	0.85 ×	0.6 ×	0.5	釘	土	121-93	
94号墓		60	A-b	長方形	×	0.45 ×	0.45	土	94-96		
95号墓		60	A-b	長方形	0.8 ×	0.5 ×	0.6	土			
96号墓		61	A-b	長方形	0.9 ×	0.6 ×	1.1	土	73-94-96-39		
97号墓	35	61	A-b	長方形	0.75 ×	0.55 ×	0.35	鉄製品	土	97-98	
98号墓		61	A-b	円形	0.5 ~	0.65 ×	0.8	人骨	土	97-133-98-41	
99号墓		62	A-e	長方形	0.85 ×	0.6 ×	0.65	土	99-40-131		
100号墓	54	88	A-b	楕円形	0.45 ×	×	0.15	人骨	火		

第4表 金居塚遺跡近世墓一覧表3

遺構 番号	図版 番号	押出 番号	位置	形状・規模			出土遺物	土 層 火 葬	切合関係	備 考
				平面形状	長さ × 幅 × 深さ					
101号墓			A-g		× ×			火		
102号墓			A-c		× ×			火		
103号墓			A-c		× ×			火		
104号墓			A-d		× ×			火		
105号墓	54	85	A-c		× ×			火	蔵骨器	
106号墓	55	85	A-d		× ×			火	蔵骨器	
107号墓	55	85	A-		× ×			火	蔵骨器	
108号墓	63	A-a	長方形	0.8 × 0.7 × 0.5	(釘)		土			
109号墓	63	A-a	長方形	0.7 × × 0.7			土			
110号墓	63	A-h	長方形	0.65 × 0.5 × 1.1			土	100→131→7		
111号墓	56	88	A-c	円形	0.45 × × 0.15	人骨、石塔	火			
112号墓	57	88	A-c	円形	0.45 × × 0.15	人骨、石塔	火	石塔	石の上下に2体分	
113号墓	64	A-g	長方形	0.68 × 0.55 × 0.8			土	137→113		
114号墓	46	A-e		× ×		人骨	火			
115号墓	35	64	A-f	長方形	0.8 × 0.45~0.55 × 0.7	人骨、釘	火	115→57		
116号墓			A-b		× ×	人骨	火	39-96-73→116		
117号墓	57		A-h		× ×	人骨	火		骨の上に石を置く	
118号墓	36	64	A-f	正方形	0.85 × 0.8 × 0.7	陶器	土	131→118→67		
119号墓	64	A-f	(正方形)	0.5 × × 0.4			土	36→119→118		
120号墓	68	A-b	扇円形	0.4 × × 0.1	人骨		火			
121号墓	65	A-b	円形	0.65 ~ 0.7 × 0.55			土	121→93		
122号墓	65	A-b	長方形	0.55 × 0.45 × 0.45			土			
123号墓	65	A-b	長円形	0.5 ~ 0.4 × 0.7			土			
124号墓	91	A-b	長方形	0.45 × 0.4 × 0.65	人骨		火			
125号墓			A-b		× ×	人骨	火			
126号墓	91	A-c	不整形	0.85 × 0.25 × 0.15	人骨、石塔		火			
127号墓	91	A-c	長円形	0.55 × 0.35 × 0.15	人骨		火			
128号墓			A-c		× ×	人骨	火			
129号墓	65	A-g	扇円形	0.5 ~ 0.4 × 0.25	人骨		土	130→129		
130号墓	65	A-f	長方形	0.85 × 0.55 × 0.35	人骨		土	130→129		
131号墓	63	A-e	長方形	× × 0.35			土	99→131→118		
132号墓	66	A-e	長方形	0.9 × 0.6 × 0.6			土	132→98-108		
133号墓			A-g		× ×	人骨	火			
134号墓	66	A-j	長方形	0.9 × 0.65 × 0.8			土	135→134→19		
135号墓			A-j		長方形	0.85 × × 0.6	土	135→134		
136号墓			A-g		× ×	人骨	火			
137号墓	66	A-g	長方形	1 × 0.55 × 0.55			土	137→101-113		
138号墓	66	A-g	長方形	0.8 × × 0.5			土	138→13-14		
139号墓	91	A-c	円形	0.45 × 0.4 × 0.2			火			
140号墓	36	67	A-c	長方形	0.45 × 0.3 × 0.3		土	140→141		
141号墓	36	67	A-c	円形	0.4 ~ 0.35 × 0.15		土	140-142→141		
142号墓	36	67	A-c	長方形	0.6 × 0.55 × 0.65		土	82→143		
143号墓	58	58	A-c	長方形	0.9 × 0.6 × 0.7	人骨	火			
144号墓	37	67	A-h	長方形	0.9 × 0.6 × 0.7	人骨	土			
145号墓	68	A-g	長方形	0.8 × 0.5 × 0.6			土	145→44-136		
146号墓	49	A-f	方形	× 0.5 × 0.35	人骨・釘		火	146→20		
147号墓	37	68	A-c	長方形	1 × 0.7 × 0.55	人骨	土			
148号墓			A-c	扇円形	0.6 ~ 0.45 × 0.35		土?	85→148		
149号墓	68	A-c	長方形	0.85 × 0.7 × 0.8			土	148→105-154		
150号墓	68	A-c	円形	0.55 × × 0.35	人骨		土			

第4表 金居塚遺跡近世墓一覽表4

遺構番号	図版番号	碑号	位置	形状・規模			出土遺物	土層火葬	切合関係	備考
				床面形状	長さ × 幅 × 高さ					
151号墓	38	69	A-g	長方形	0.9 × 0.6 × 0.3		人骨・ガラス玉	土		
152号墓	38	69	A-d	長方形	× 0.5 × 0.25		刻線罐	土	152⇨153	
153号墓		69	A-d	長方形	0.75 × 0.6 × 0.55		人骨・釘	土	152⇨153-154	
154号墓	39	69	A-d	長方形	0.9 × 0.6 × 0.6		人骨・釘・鉄製品	土	149-153-154	
155号墓	39	72	A-e	長方形	0.9 × 0.65 × 0.5		石塔	土		
156号墓		72	A-f	長方形	0.85 × 0.65 × 0.5			土		
157号墓		72	A-f	円形	0.55 × × 0.4			土	157⇨186	
158号墓		74	A-g	円形	0.5 × × 0.3			土	158-144-149	
159号墓			A-f		× ×			火	159⇨32	
160号墓		74	A-h	長方形	0.75 × 0.5 × 0.7			土	160-2-110	
161号墓	40	74	A-k	長方形	0.5 × 0.4 × 0.45		釘	土		
162号墓	40	74	A-f	長方形	0.85 × 0.55 × 0.8			土	162-37	
163号墓			A-h		× ×			土		
164号墓		91	A-h	長円形	× ×			火		
165号墓	59	91	A-b	円形	× ×		刻線罐	火		石の下に骨
166号墓			A-		× ×			火		
167号墓	42	76	B	長方形	× 0.65 × 0.75			土		調査区外へ続く
168号墓	42	76	B	長方形	0.55 × 0.35 × 0.9			土		
169号墓		76	B	扇円形	0.6 ~ 0.55 × 0.65			土		
170号墓	42	76	B	長円形	0.4 × 0.25 × 0.55			土		
171号墓		76	B	長方形	0.85 × 0.65 × 1			土		
172号墓		77	B	扇円形	0.5 × 0.45 × 0.7			土		
173号墓		77	B	扇円形	0.4 ~ 0.35 × 0.5			土		
174号墓			B		× ×		人骨	火		
175号墓	59	85	B		× ×		人骨	火		副骨器
176号墓			B		× ×		人骨	火		
177号墓			B		× ×		人骨	火		
178号墓	43	77	B	長方形	0.85 × 0.5 × 0.9			土		
179号墓	43	77	B	長方形	0.9 × 0.6 × 1.1			土		
180号墓	60	85	B		× ×		人骨	火		副骨器
181号墓	60・61		B		× ×		人骨	火		
182号墓	60・61		B		× ×		人骨	火		
183号墓	62		B		× ×		人骨	火		
184号墓	62		B		× ×		人骨・鉄製品	火		
185号墓		77	B	円形	0.3 ~ 0.35 × 0.5			土		

圖 版



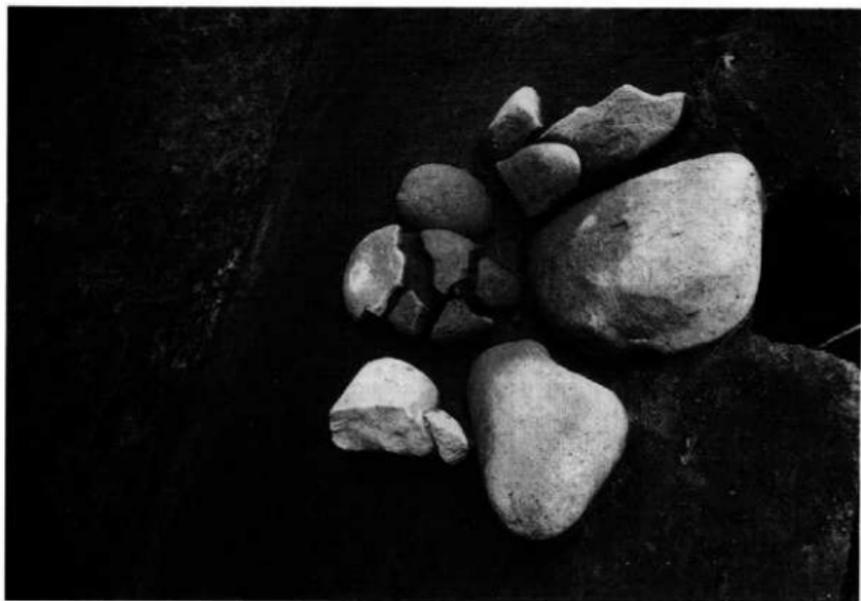
調査区東半全景
(西上空から)



近世墓群全景
(上空から)



石組伊 (南東から)



石組伊 (南東から)



3号墳北畔土層(東から)



3号墳Ⅱ区下層遺物出土状態(東から)



3号墳Ⅳ区下層遺物出土状態(南から)



3号墳Ⅲ区下層遺物出土状態(南西から)



3号墳Ⅱ区下層遺物出土状態(北西から)



竪穴式住居跡(東から)



2～4号石蓋土壙墓検出状態(西から)



2～4号石蓋土壙墓発掘後(西から)



1号石蓋土墳発掘出状態（南西から）



1号石蓋土墳発掘後（南東から）



2号石蓋土壘墓検出状態（南東から）



2号石蓋土壘墓発掘後（南西から）



3-4号石蓋土壙墓検出状態(西から)



3-4号石蓋土壙墓発掘後(東から)



5号石蓋土墳墓検出状態（南西から）



5号石蓋土墳墓発掘後（北東から）



方形区画墓地群検出状態（北から）



方形区画墓地群発掘後（北から）



10・11号石蓋土槨墓検出状態(南から)



10・11号石蓋土槨墓発掘後(南から)



12号石蓋土墳墓検出状態
(南から)



12号石蓋土墳墓埋葬部
検出状態(西から)



12号石蓋土墳墓埋葬部発掘後
(西から)



13号石蓋土壙墓切合状況
(北東から)



13号石蓋土壙墓発掘後
(北東から)



13号石蓋土壙墓埋葬部発掘後
(北東から)

14～17号石蓋土壙墓周辺
(北東から)

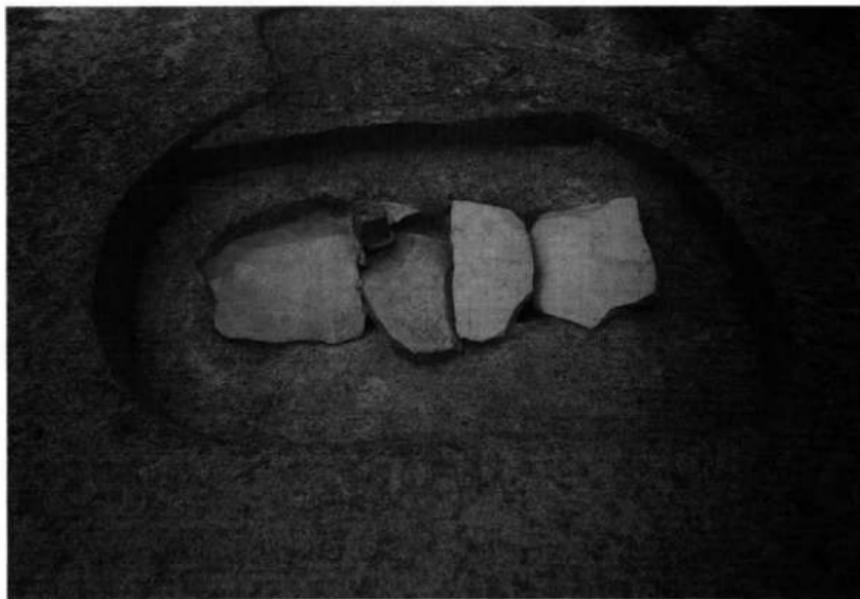


14～17号石蓋土壙墓周辺
(南東から)



14～16号石蓋土壙墓
(北東から)





14号石蓋土壙墓検出状態（南東から）



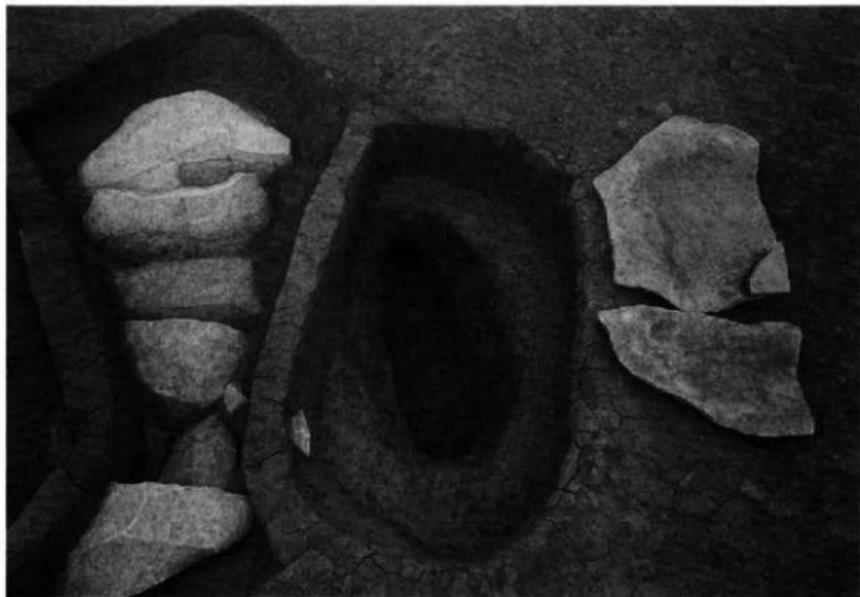
14号石蓋土壙墓発掘後（南西から）



15号石蓋土壙墓検出状態（北東から）



14号石蓋土壙墓発掘後（北東から）



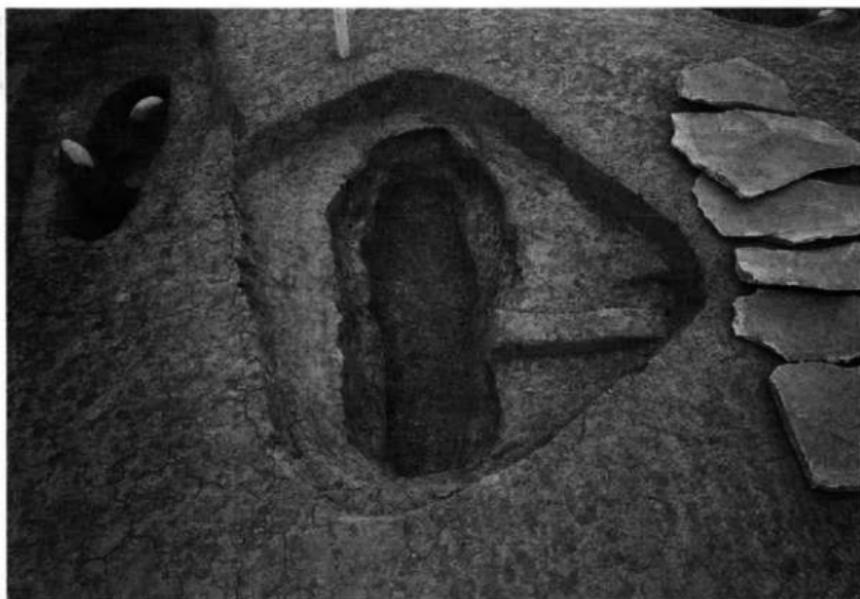
16号石蓋土墳墓発掘後（南東から）



17号石蓋土墳墓発掘後（南東から）



18号石蓋土墳墓検出状態（北西から）



18号石蓋土墳墓発掘後（北西から）



19号石蓋土壙墓周辺（北から）



19号石蓋土壙墓検出状態
（西から）



19号石蓋土壙墓発掘後
（北から）

20号石蓋土壙墓周辺
(北西から)



120号石蓋土壙墓発掘後
(北西から)



20号石蓋土壙墓断ち割り後
(北西から)





10号土墳墓検出状態（南から）



10号土墳墓発掘後（東から）



11号土墳墓検出状態（北東から）



11号土墳墓発掘後（南東から）



12号土壌墓発掘後（東から）



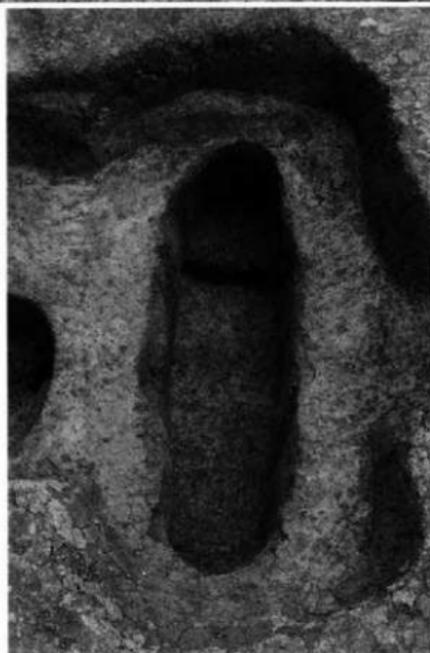
13号土壌墓検出状態（北から）



13号土壌墓発掘後（西から）



14号土壌墓発掘後（西から）



14号土壌墓断ち割り後（東から）



14・15号土壱窯周辺（北から）



17号土壱窯発掘後（西から）

13号土墳墓遺物出土状態
 (北東から)



10号石蓋土墳墓遺物出土状態
 (北から)



12号土墳墓南辺、20号石蓋
 土墳墓蓋石を覆う黄褐色粘土
 (西から)





近世墓A群現況（南東から）



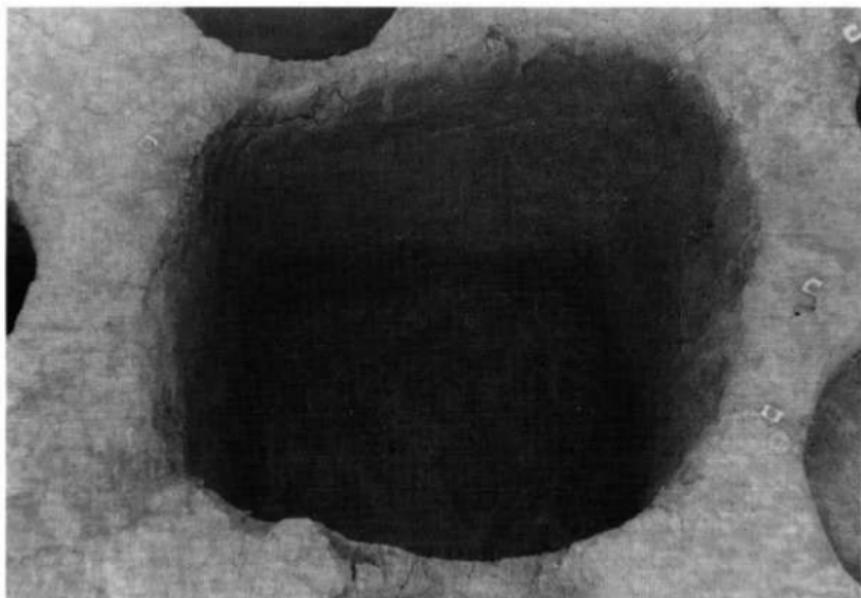
近世A群墓発掘後（南東から）



近世墓A群現況（東から）



近世A群石塔群（東から）



3号墓（西から）



7号墓（西から）



10号墓（東から）



17号墓（西から）



17号墓遺物出土状況（西から）



21・24号墓（東から）



29号墓（南から）



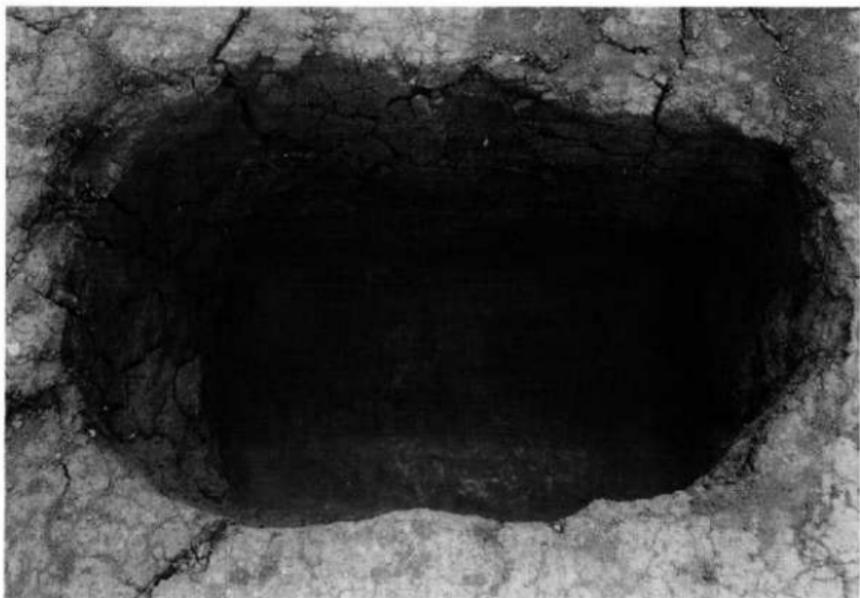
70号墓（西から）



80号墓（東から）



86号墓 (東から)



89号墓 (東から)



97号墓 (西から)



97号墓遺物出土状態
(西から)



115号墓 (東から)



118号墓（東から）



140～142号墓（西から）



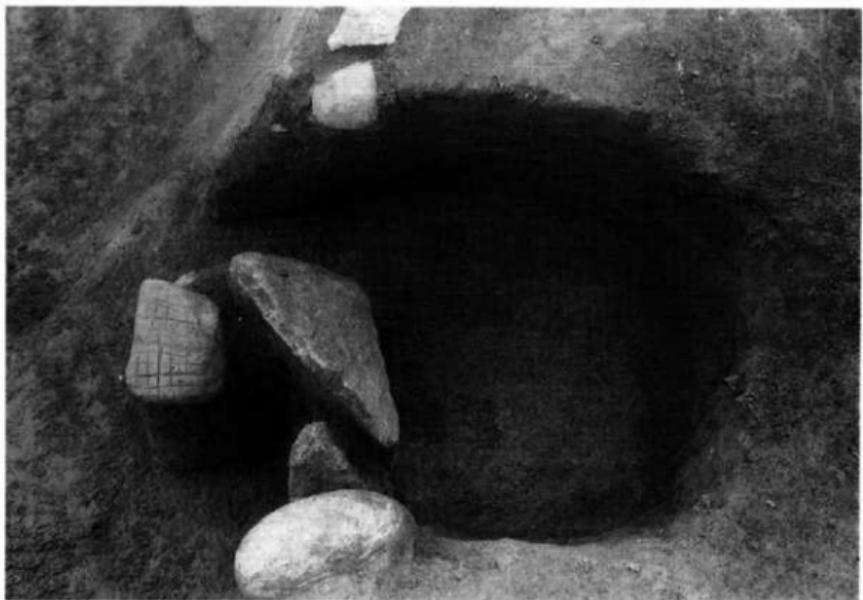
144号墓 (東から)



147号墓 (東から)



151号墓（東から）



152号墓（北から）



154号墓（南西から）



155号墓（東から）



161号墓（北東から）



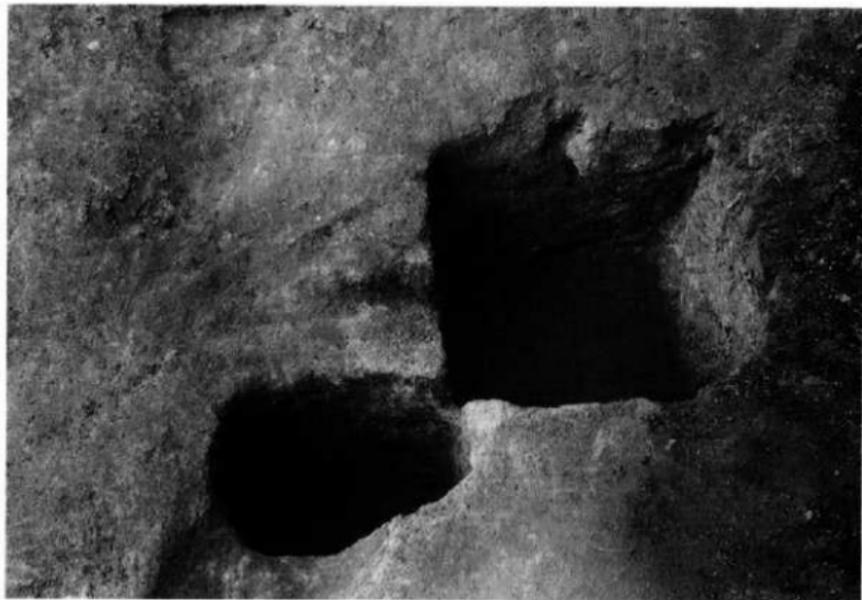
162号墓（南から）



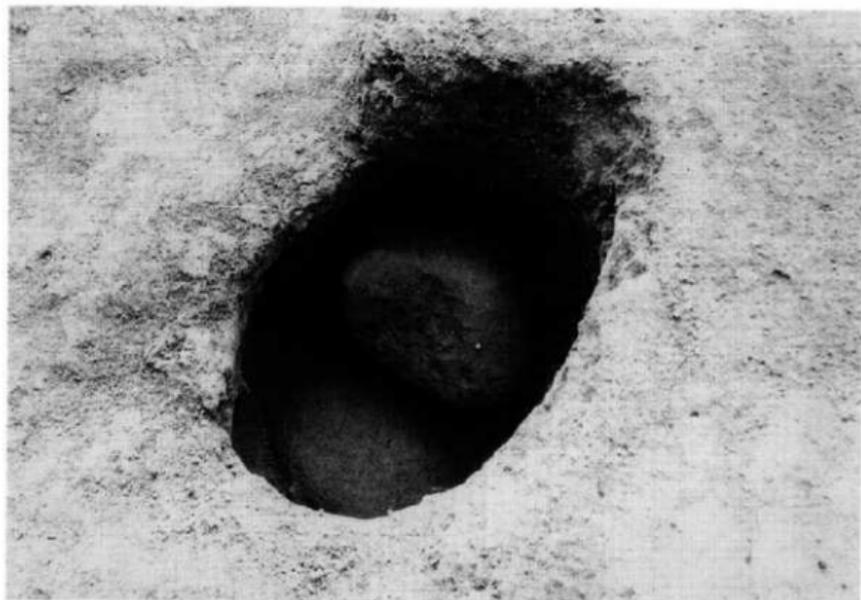
B群墓地（北西から）



B群墓地（南西から）（西から）



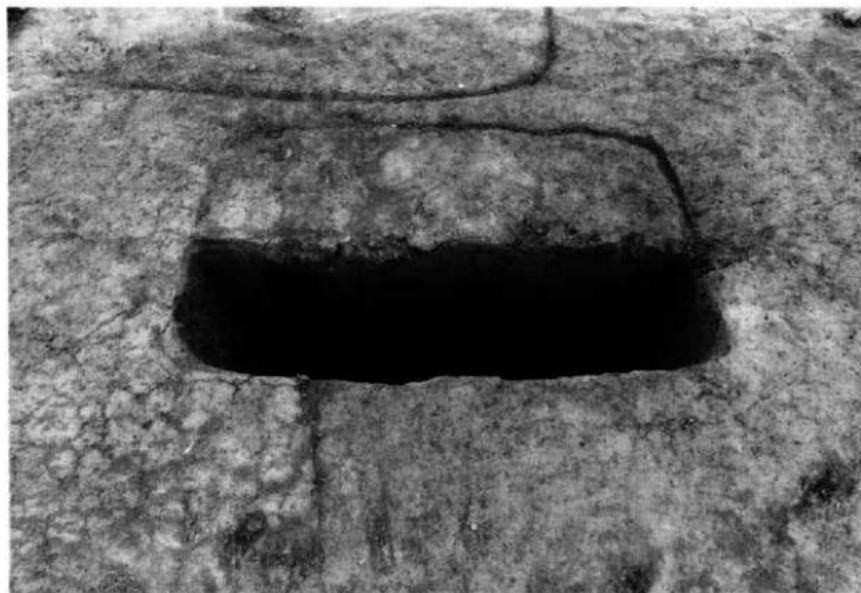
167 (右)・168号墓 (南から)



170号墓 (東から)



178 (左)・179号墓 (北から)



9号墓土層断ち割り状況 (北東から)



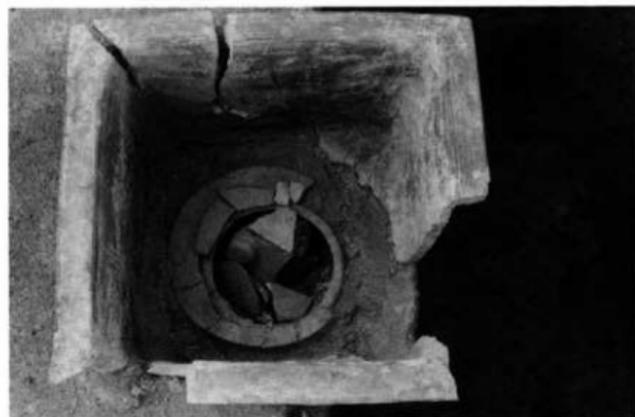
3号墓周辺（北から）



3号墓瓦除去後（北東から）



3号窯火鉢清掃後（西から）



火鉢下の蔵骨器（西から）



蔵骨器検出状態（西から）



40 (右)・114号墓 (南から)



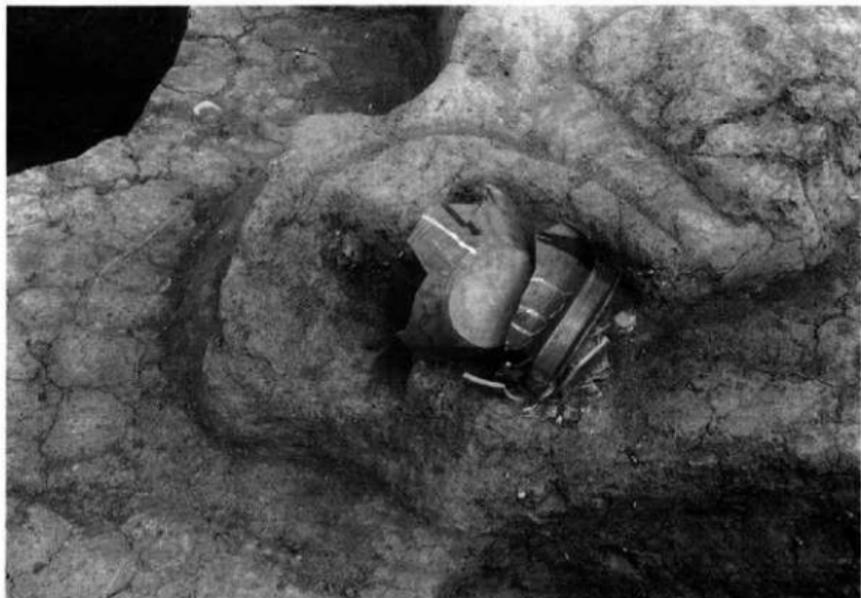
41号墓 (東から)



42号墓（東から）



43号墓（東から）



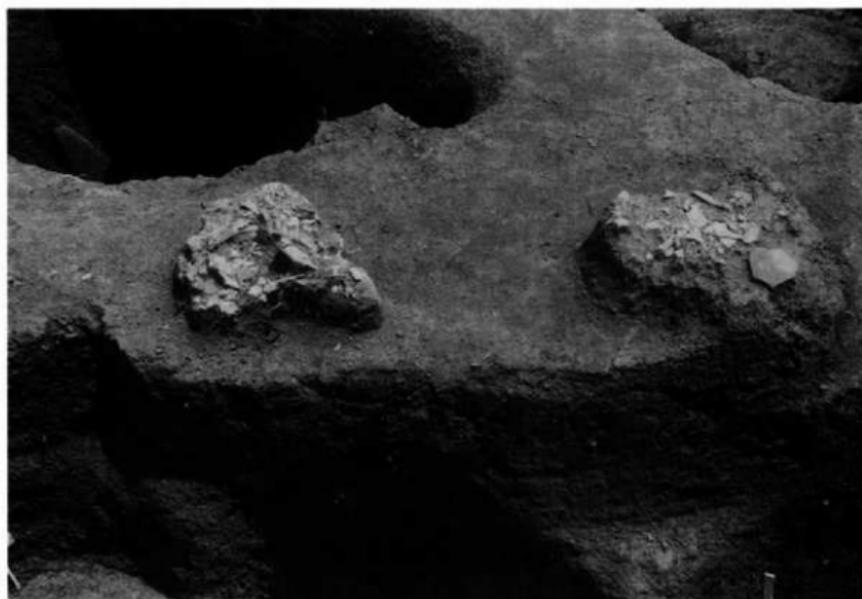
44号墓（西から）



52（右）・53号墓（南から）



54号墓（東から）



55（左）・56号墓（南西から）



57号墓



58号墓



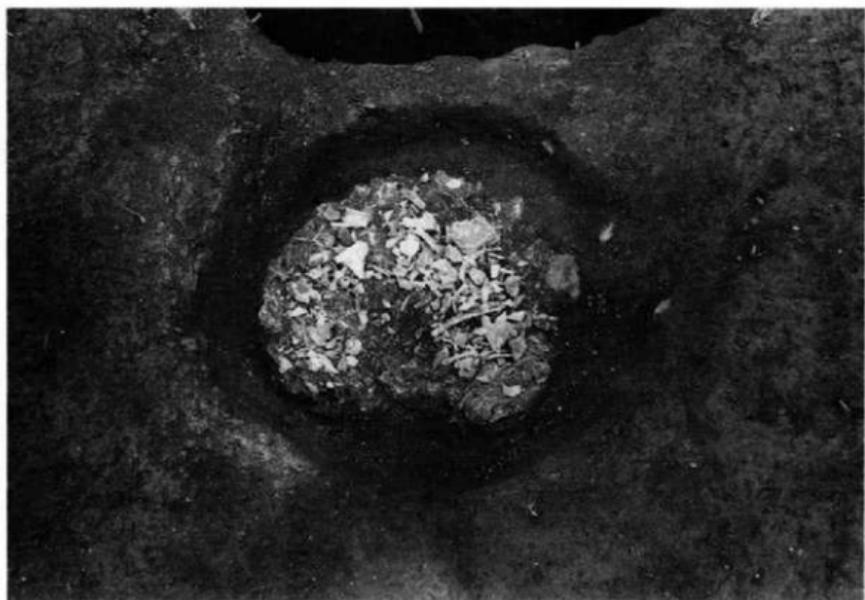
59号墓（北東から）



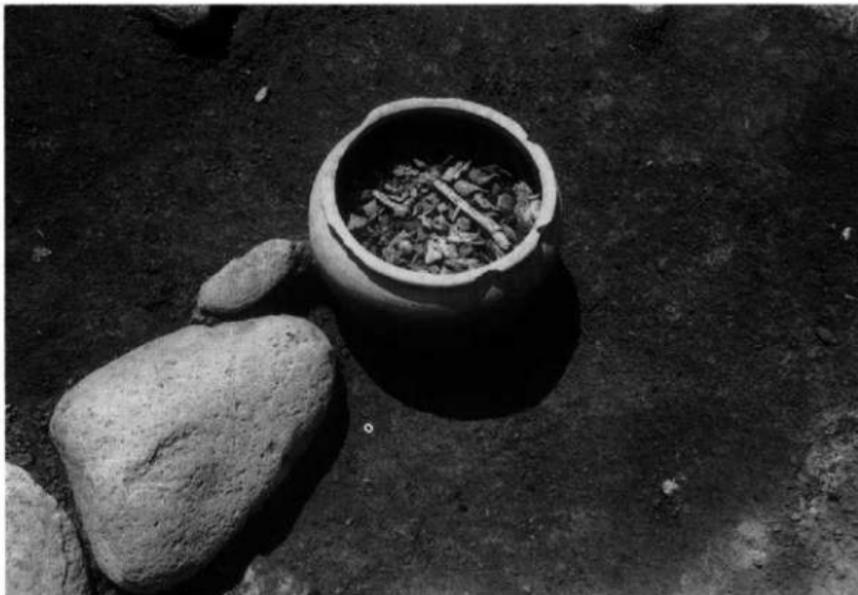
62号墓（西から）



85号墓（北東から）



85号墓



74号墓 (南東から)



91 (右)・92号墓 (南東から)



100号墓（北から）



105号墓（東から）



106号墓（南西から）



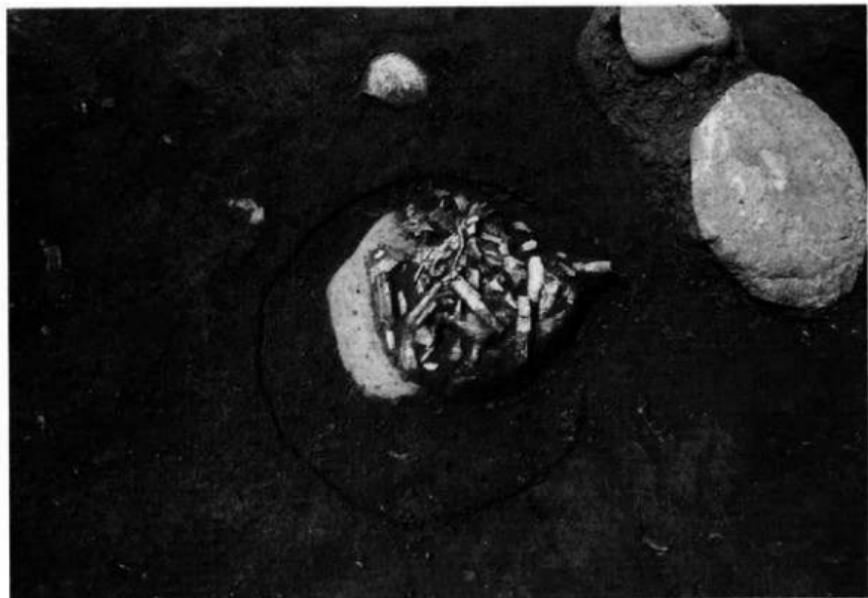
107号墓（南から）



111号墓（北東から）



111号墓（西から）



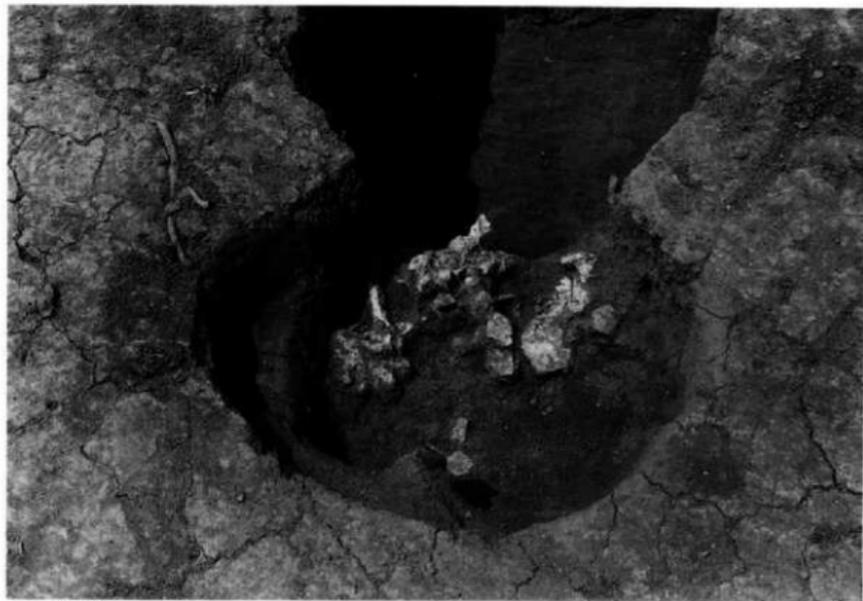
112号墓（北東から）



117号墓（東から）



143号墓（西から）



143号墓（南東から）



165号墓（南東から）



175号墓（東から）



180号墓（北西から）



181（右）・182号墓（南東から）



181号墓（南東から）



182号墓（南東から）



183号墓（西から）



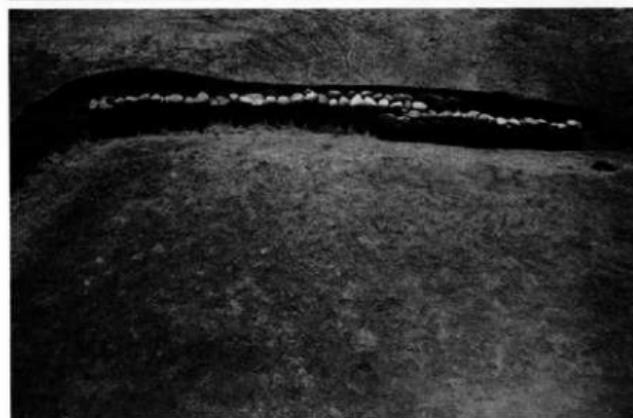
184号墓（東から）



I-3号溝状遺構（西から）



I-4号溝状遺構（北西から）



I-4号溝状遺構（北東から）



Ⅱ-1号溝状遺構（北から）



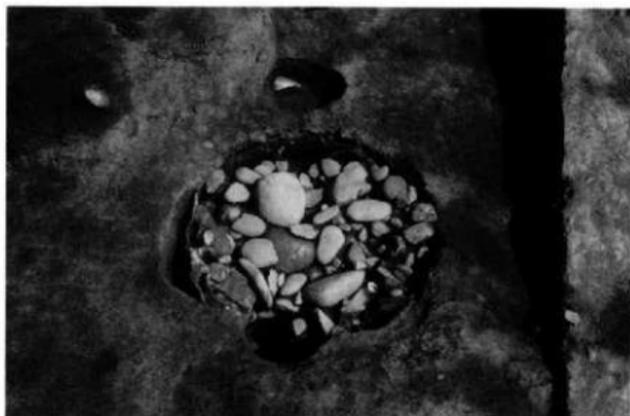
Ⅱ-1号溝状遺構（北西から）



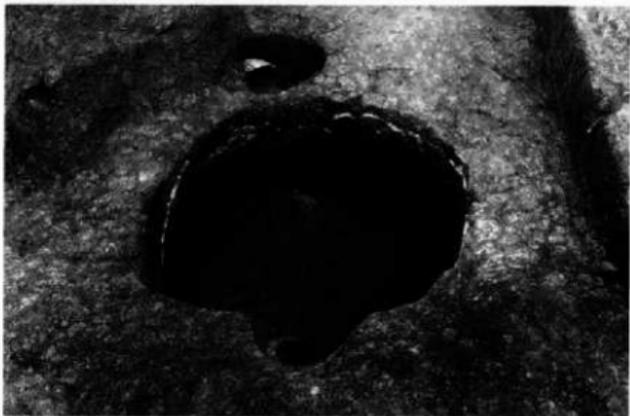
II-2・3号溝状遺構（北東から）



II-2号溝状遺構小塚出土状態（北東から）



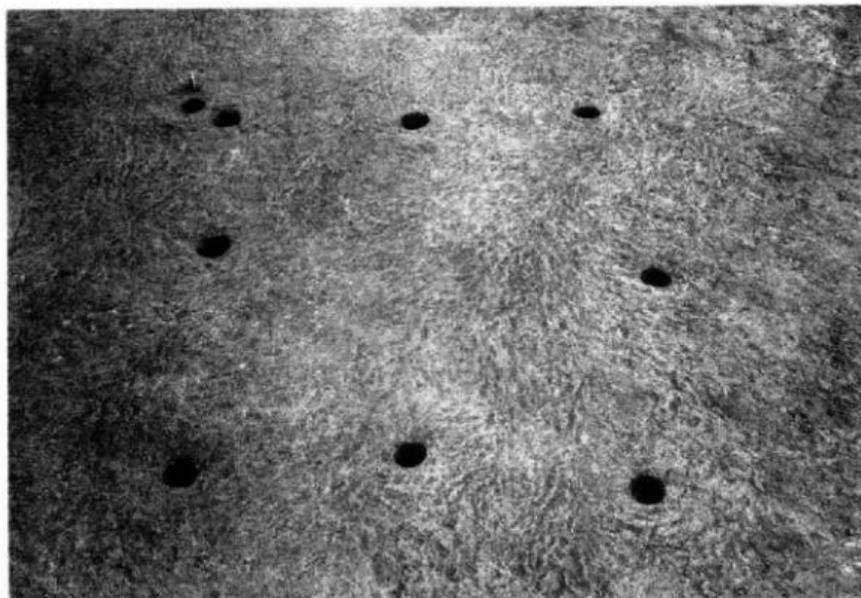
野壺（北西から）



野壺発掘後（北西から）



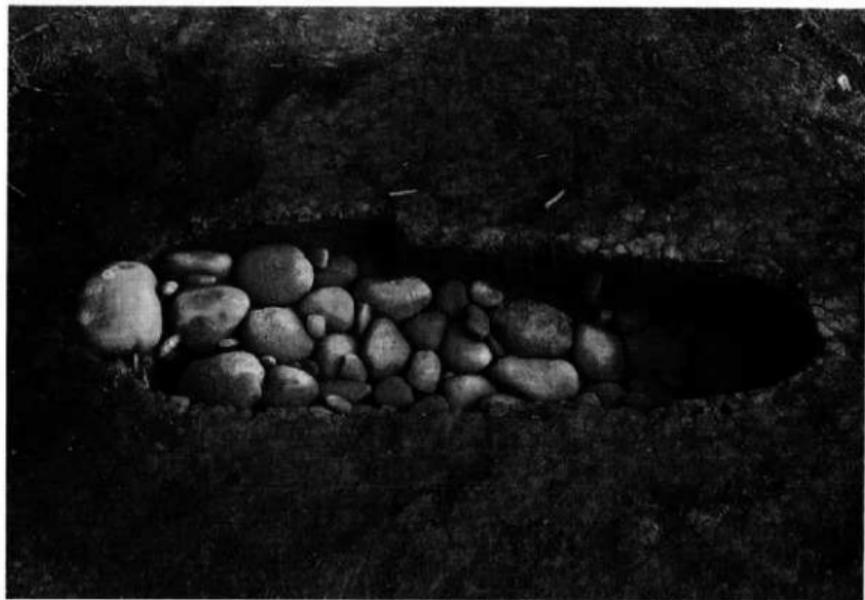
石材採取跡（南東から）



1号掘立柱建物跡（北西から）



2号掘立柱建物跡（西から）



1号土墳墓（北から）



2号土墳墓（北から）



I-1号土坑土層（北から）



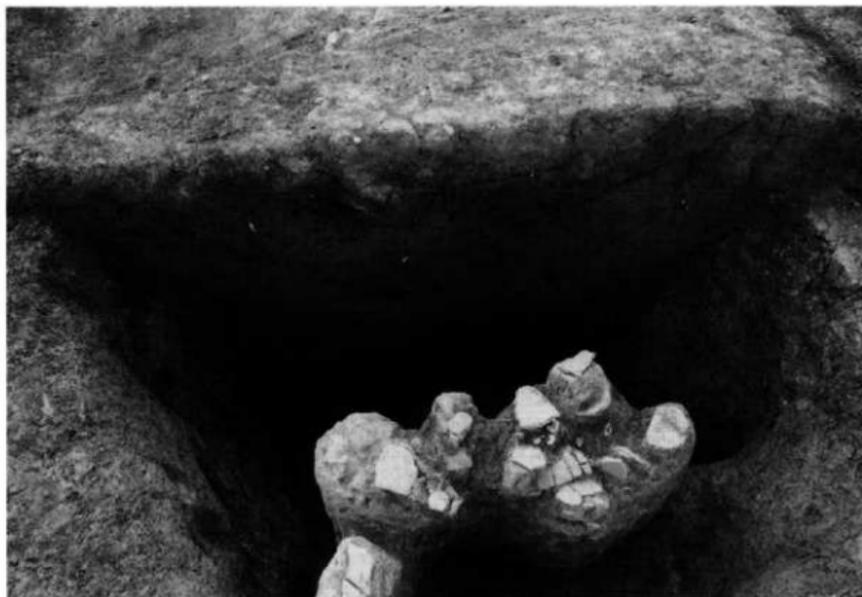
I-1号土坑（北から）



I-2号土坑土層(南西から)



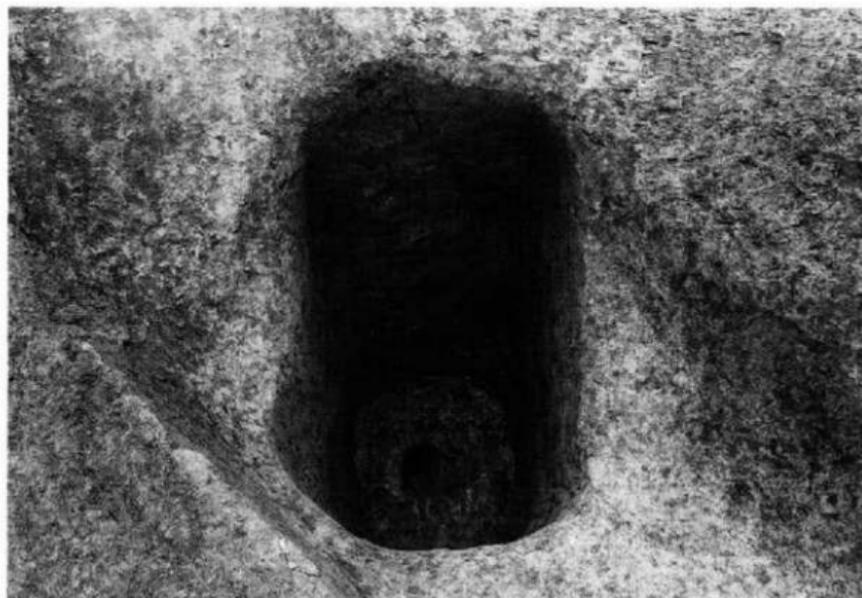
I-2号土坑(南西から)



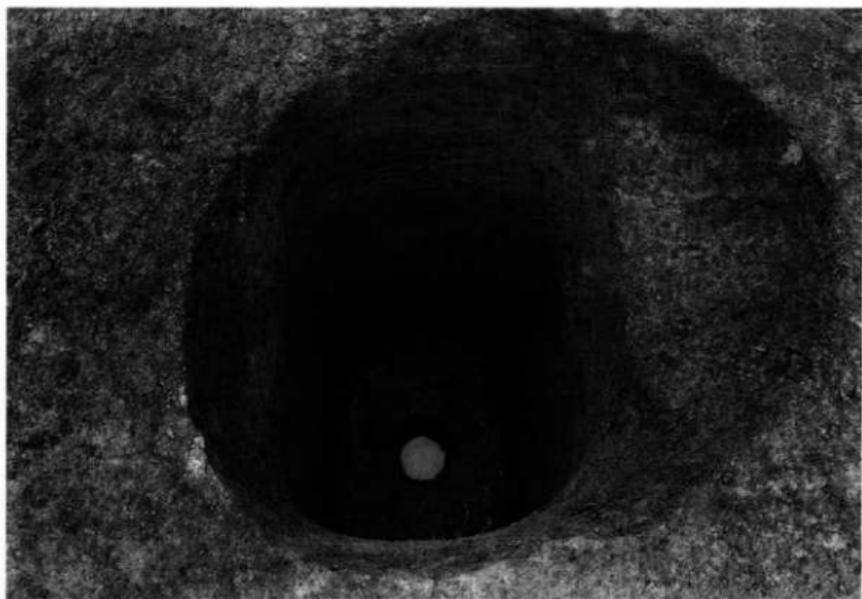
I-3号土坑土層 (西から)



I-3号土坑 (北から)



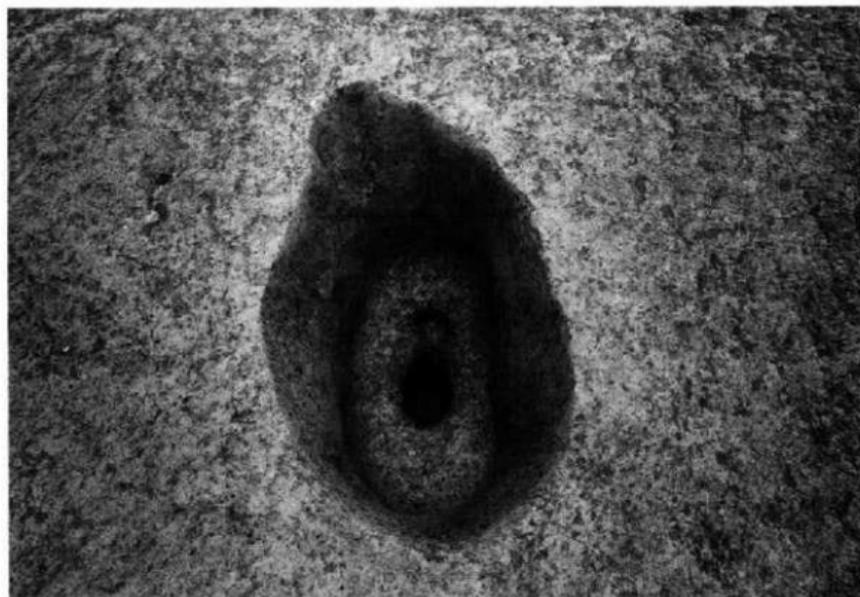
I-4号土坑（北東から）



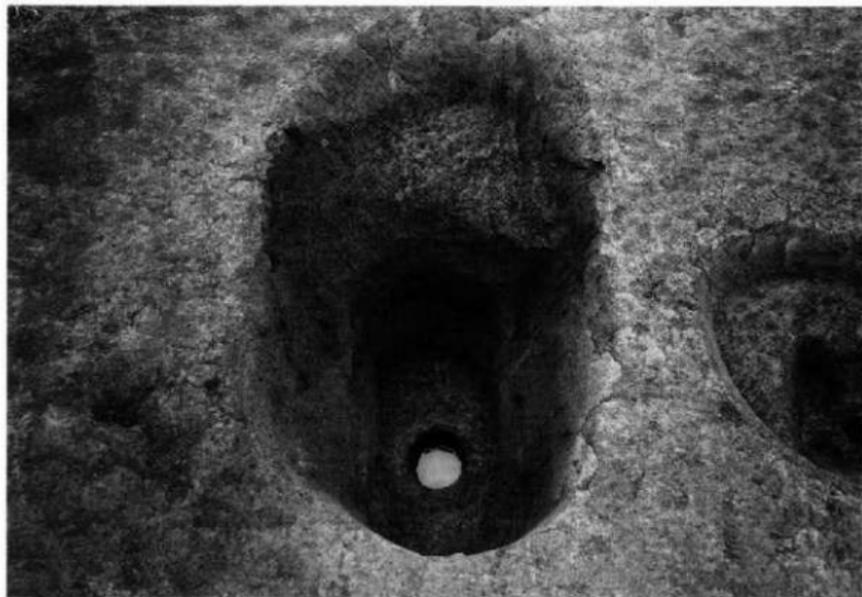
I-5号土坑（北西から）



I-6号土坑（北から）



I-7号土坑（南東から）



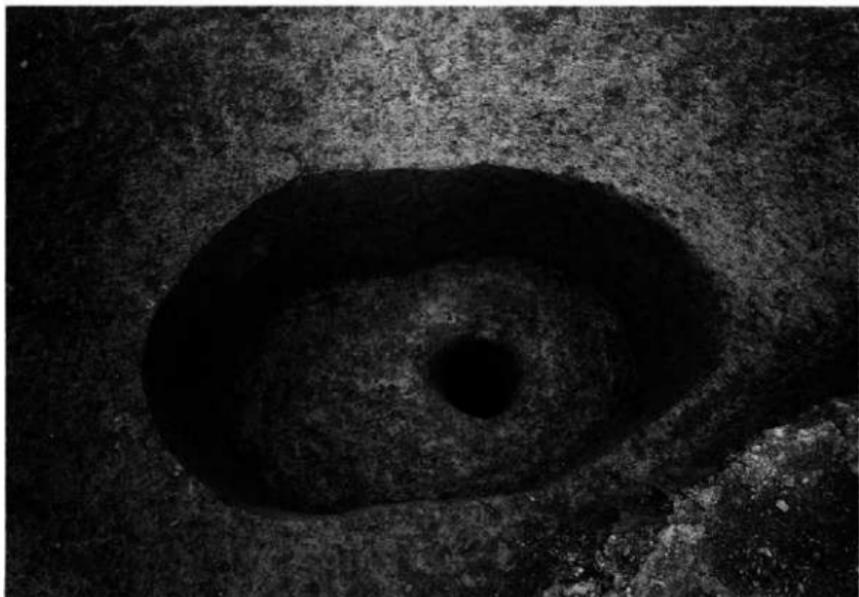
I-8号土坑（南東から）



I-9号土坑（東から）



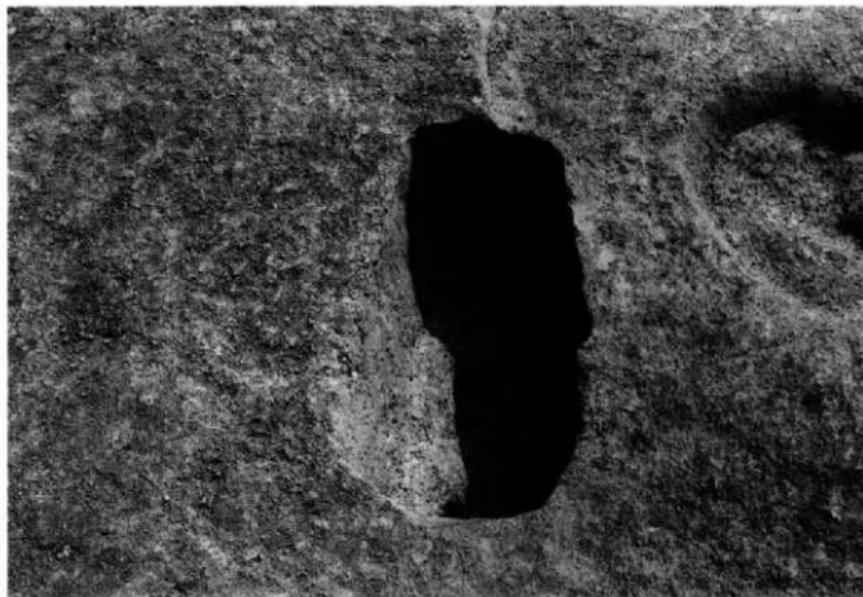
I-10号土坑（東から）



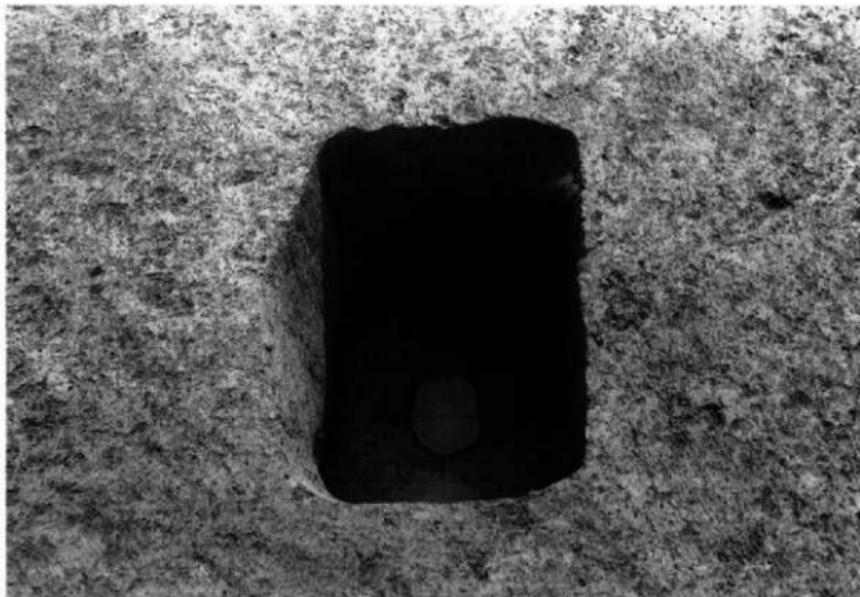
I-11号土坑（北西から）



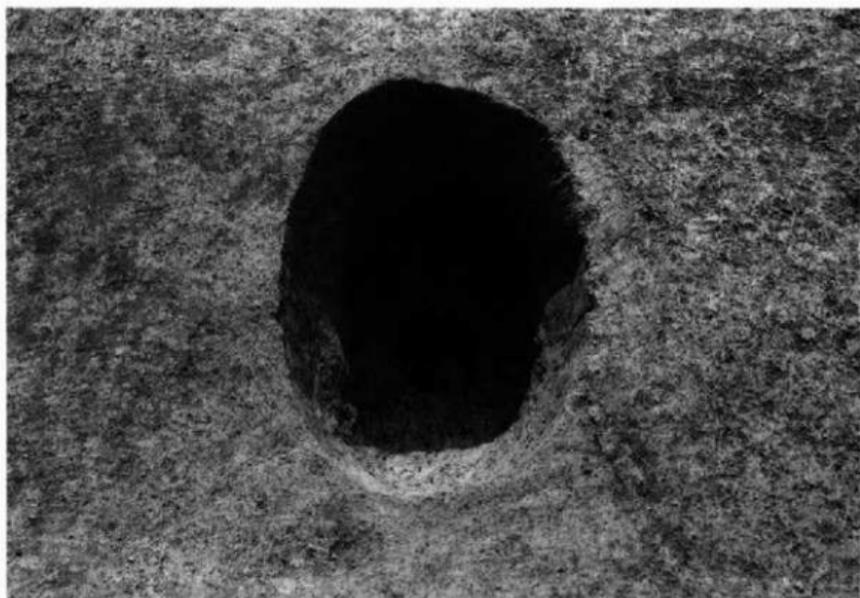
I-12号土坑（北東から）



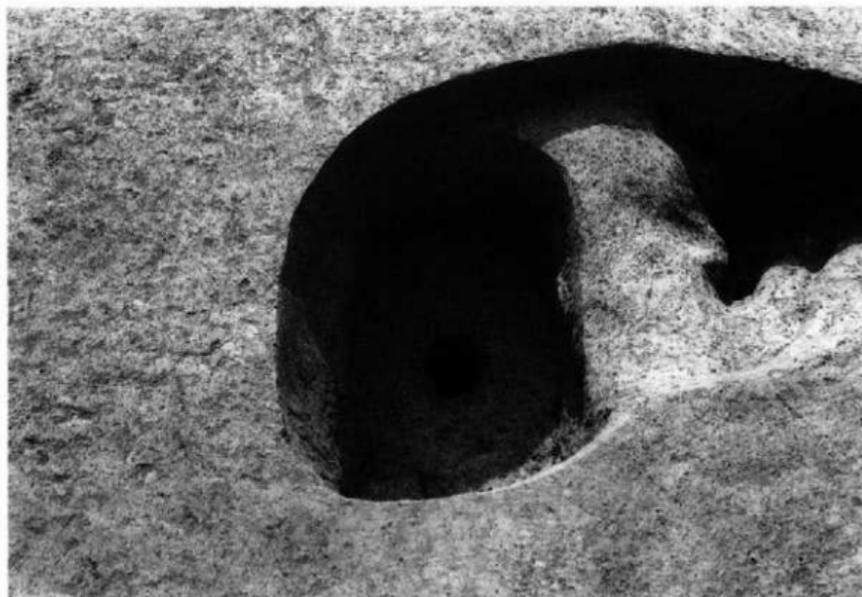
I-13号土坑（北東から）



I-14号土坑（北東から）



I-15号土坑（西から）



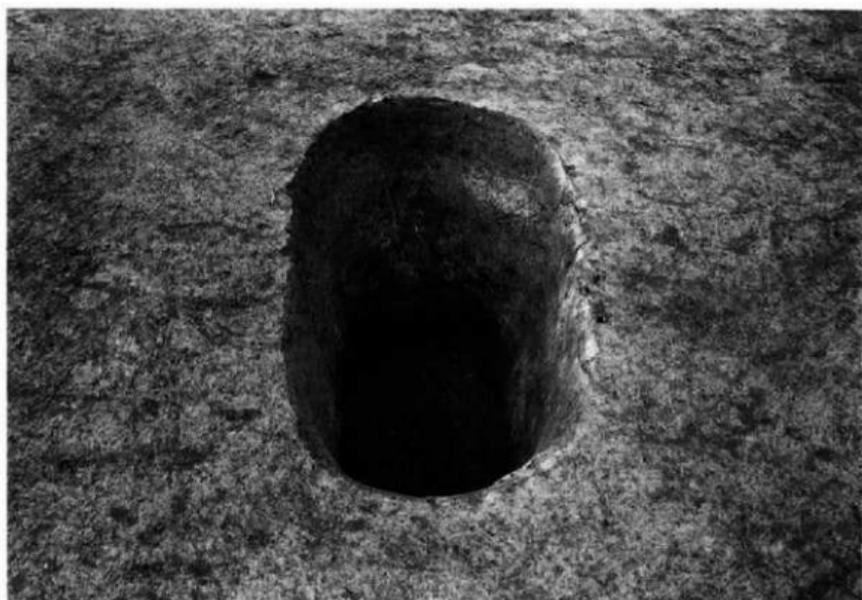
I-16号土坑（西から）



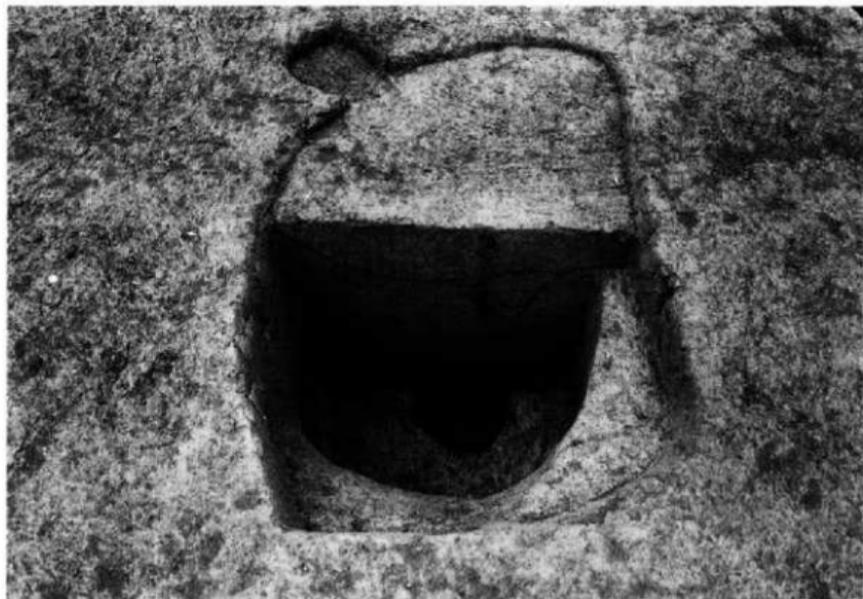
I-17号土坑（北から）



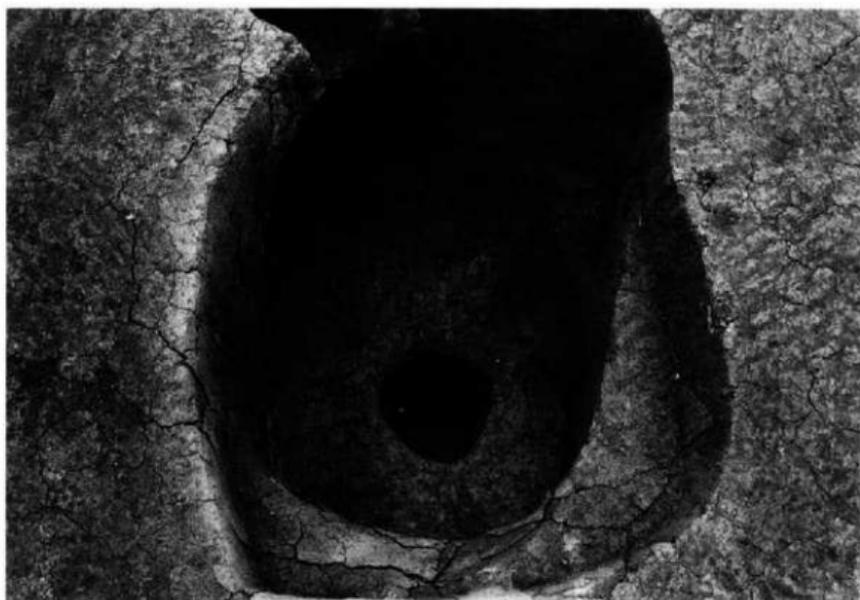
I-18号土坑（南西から）



II-1号土坑（西から）



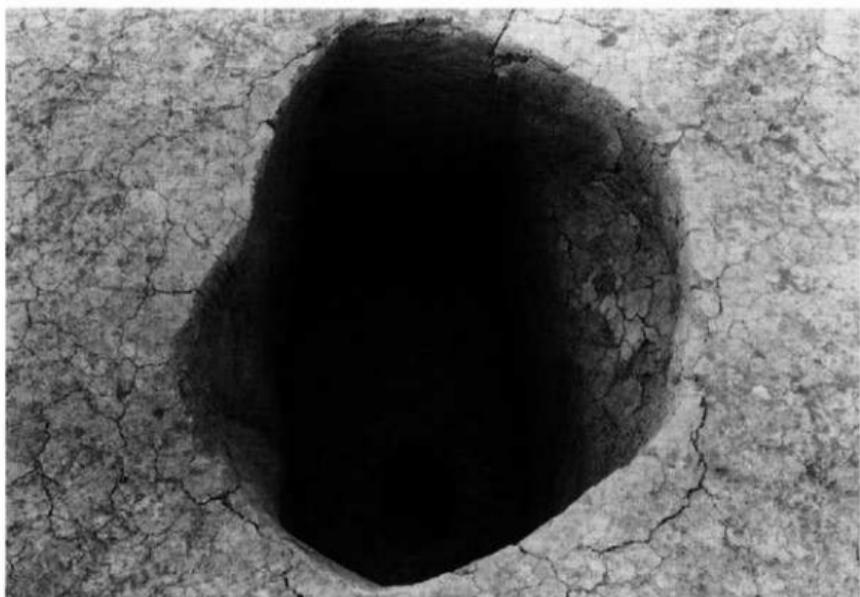
Ⅱ-2号土坑土層（北西から）



Ⅱ-2号土坑（北西から）



Ⅱ-3号土坑土層(北西から)



Ⅱ-4号土坑(東から)



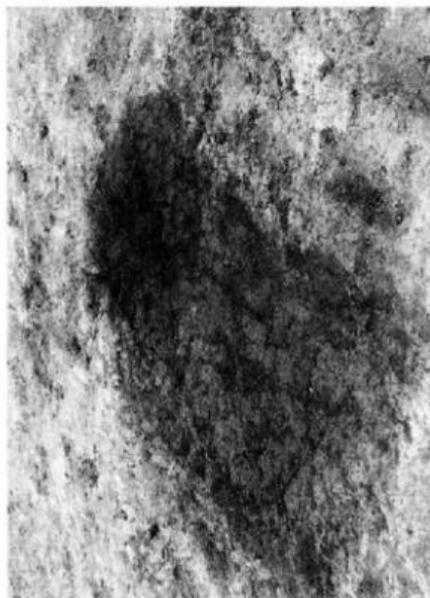
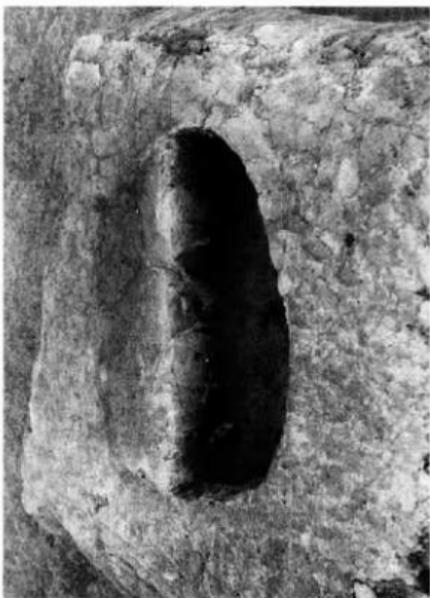
I-1号焼土坑（北西から）



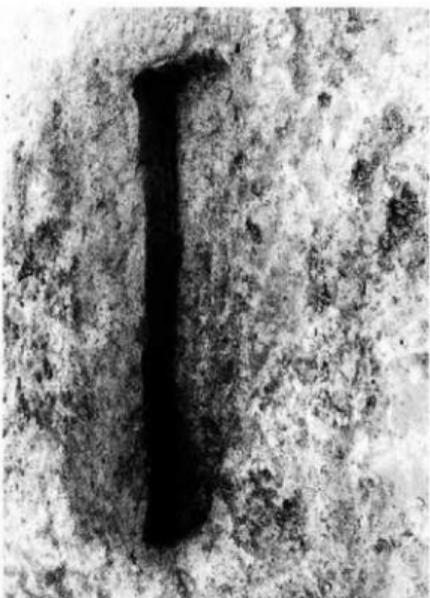
I-2号焼土坑（北西から）

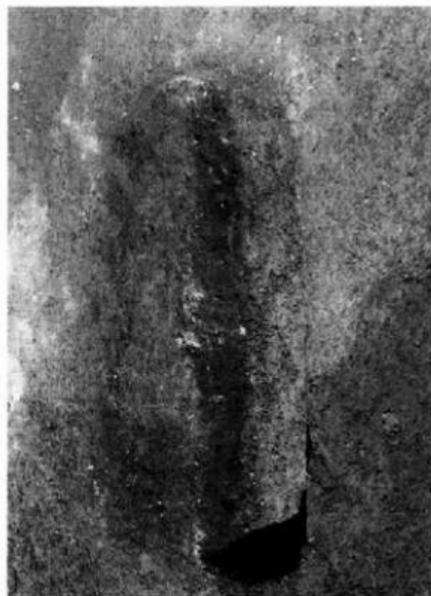


I-3号焼土坑 (南西から)



I-4号焼土坑 (北から)





I-5 (左)・6号焼土坑(南から)

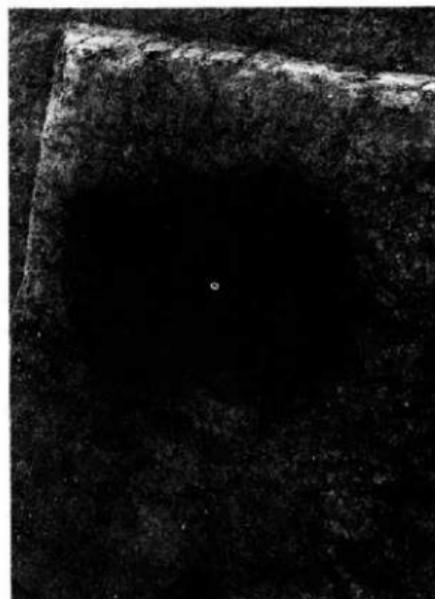
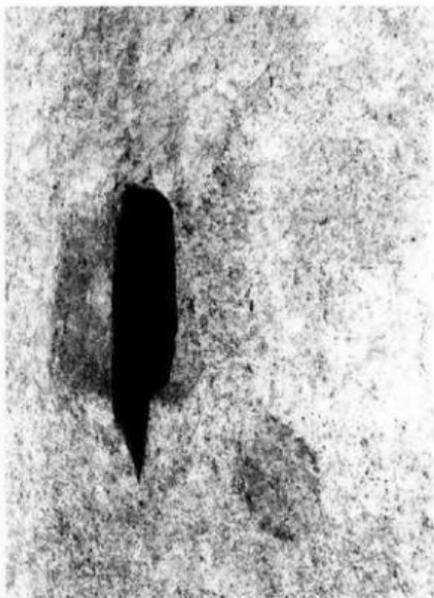


I-7号焼土坑(南東から)





I-11·12 (左) · 13号烧土坑



I-1号烧土坑





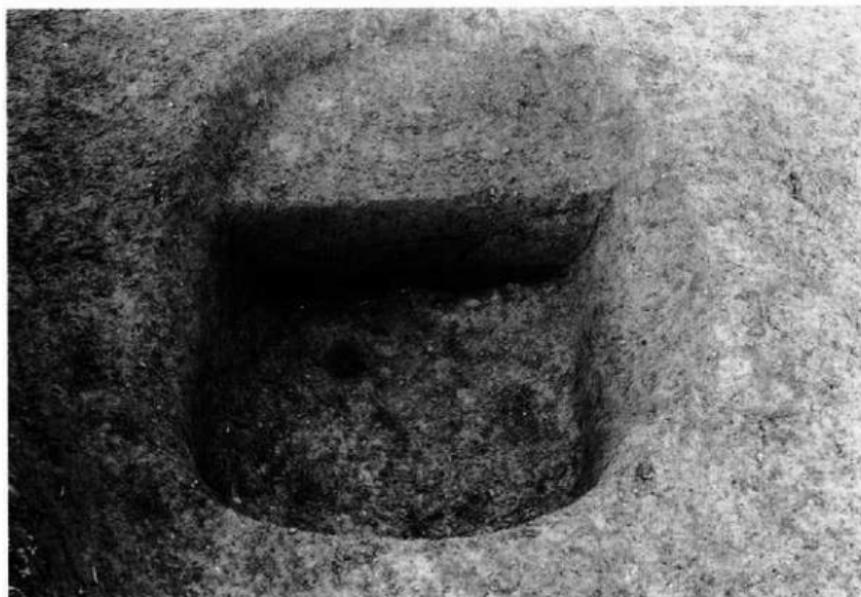
Ⅱ-2号焼土坑検出状態
(南から)



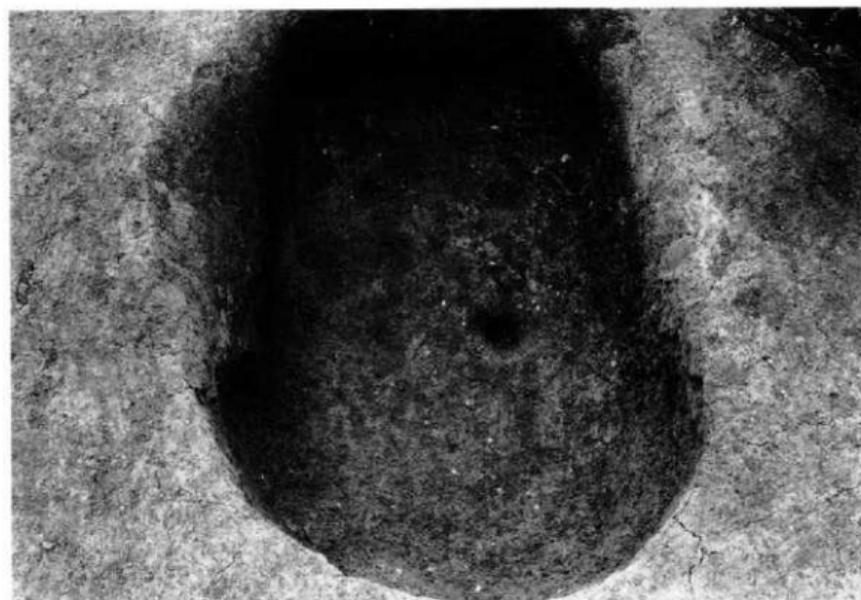
Ⅱ-2号焼土坑土層 (南から)



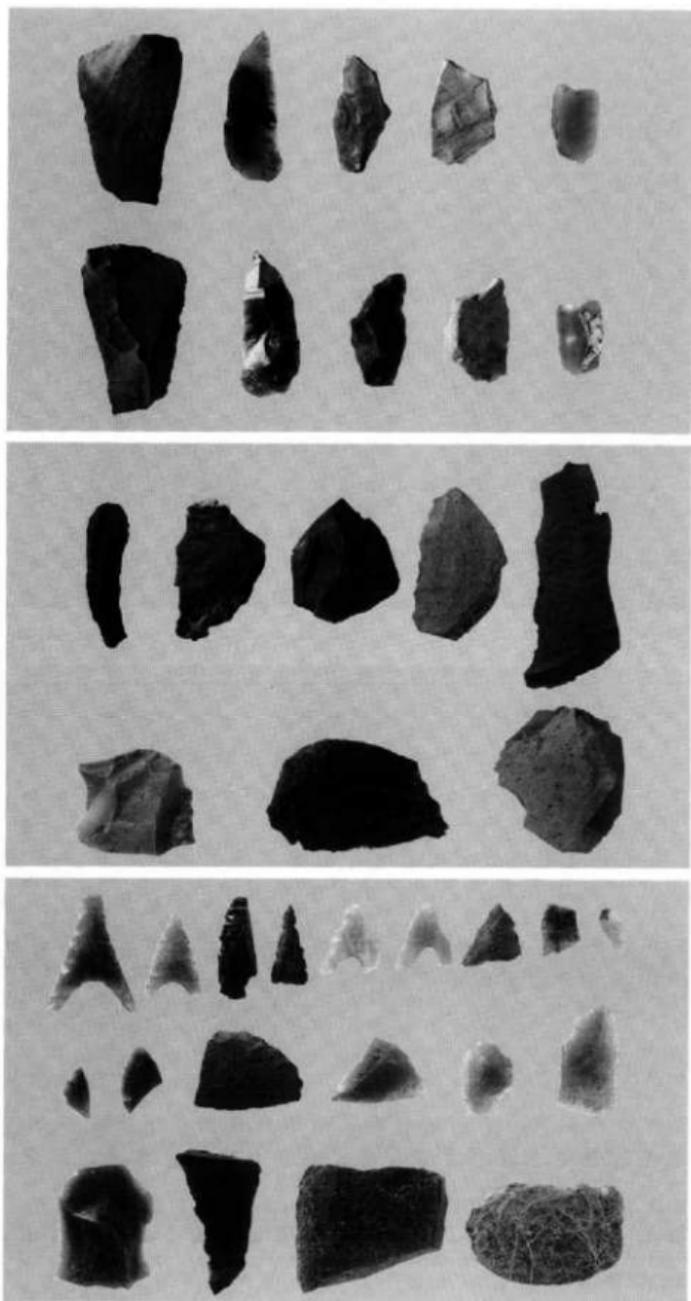
Ⅱ-2号焼土坑発掘後



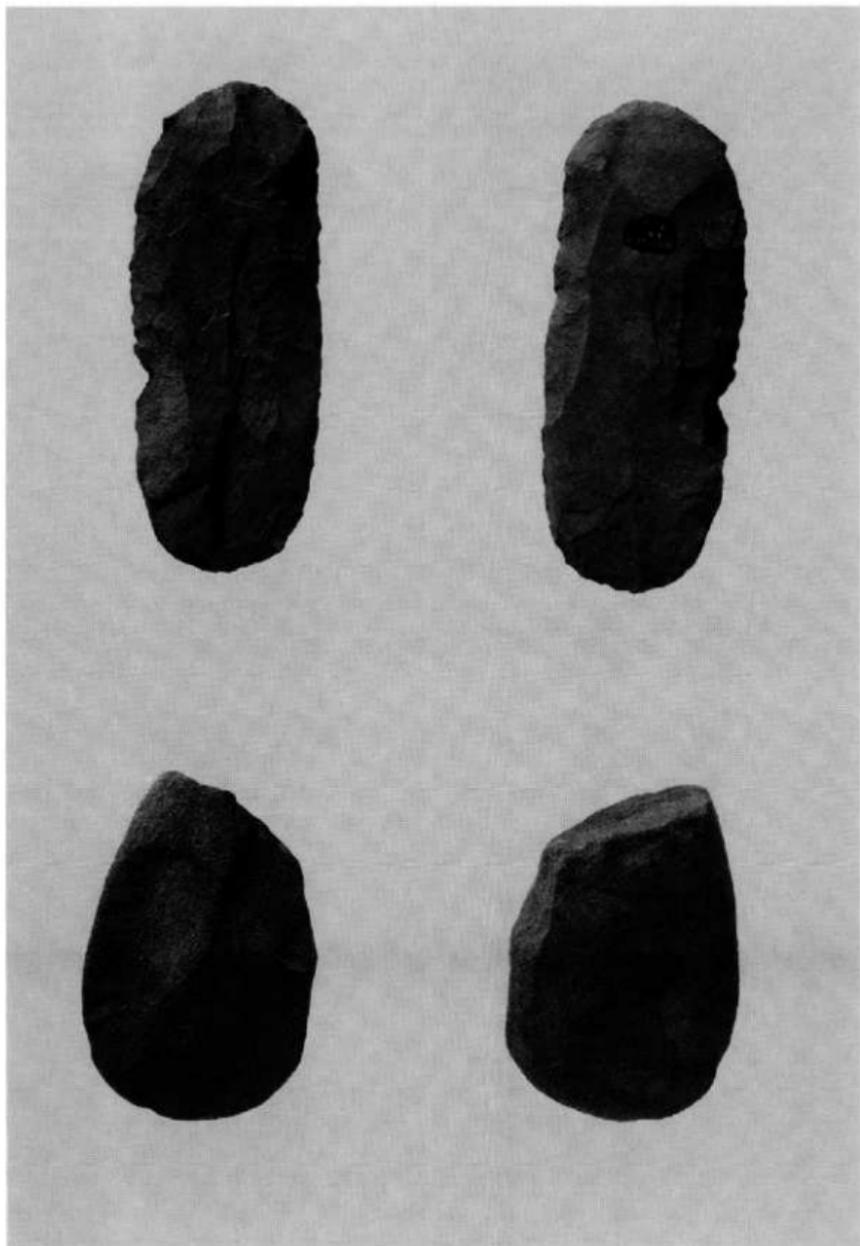
Ⅱ-3号焼土坑土層（南から）



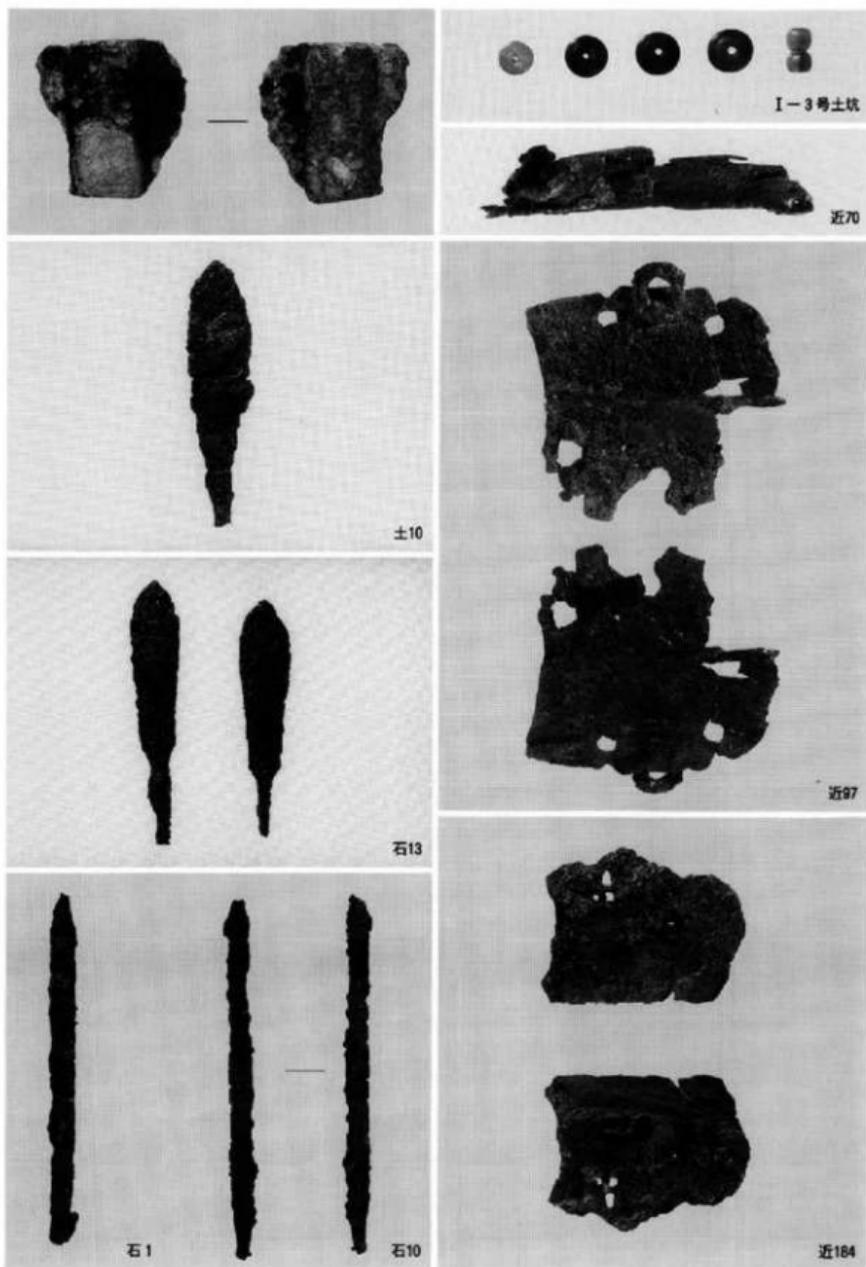
Ⅱ-2号焼土坑土層（南から）



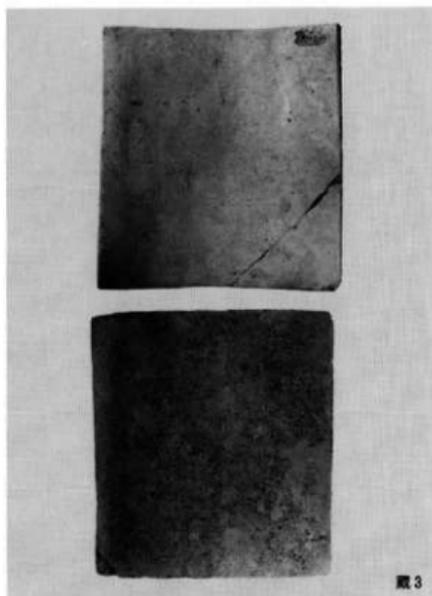
出土遺物 1：古墳下層出土石器



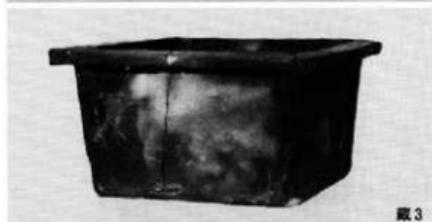
出土遺物 2 ; 表採および四連遺物



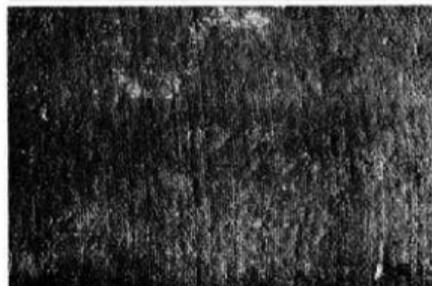
出土遺物3；弥生～近世の金属製品・ガラス玉



藏3



藏3



藏3



藏3



藏24



藏40



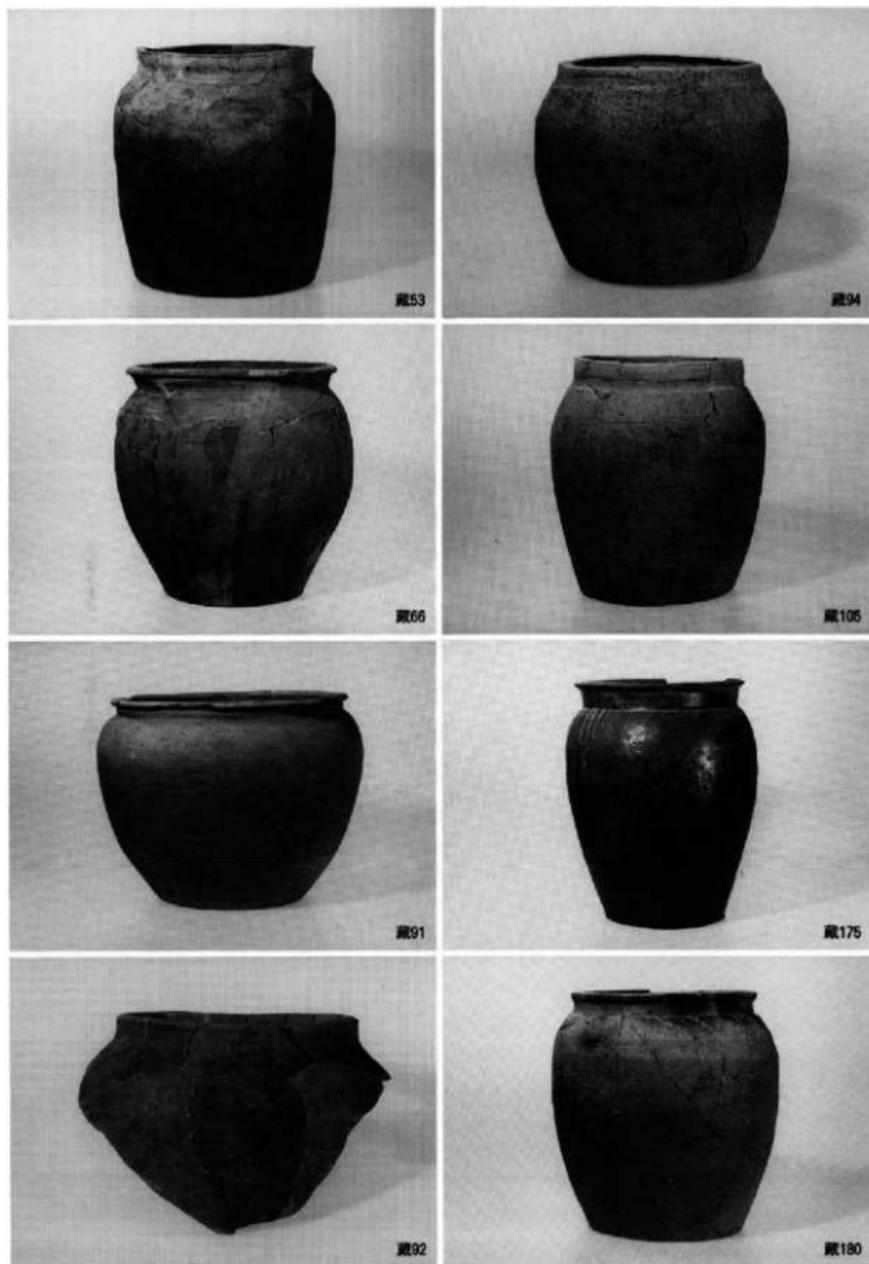
藏43

出土遺物4；藏骨器（3・24・40・43号）

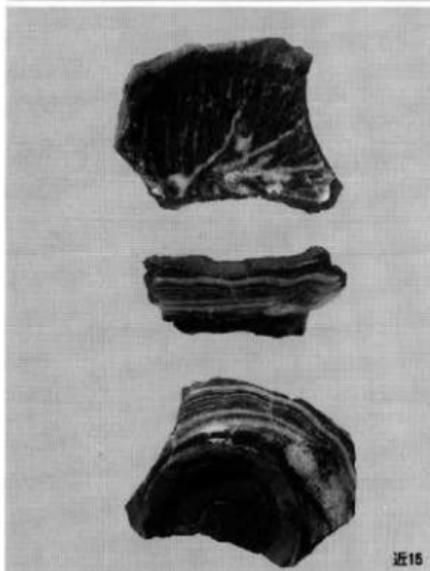


出土遺物 5 ; 藏骨器 (41・42・44・45・46・48・49号)



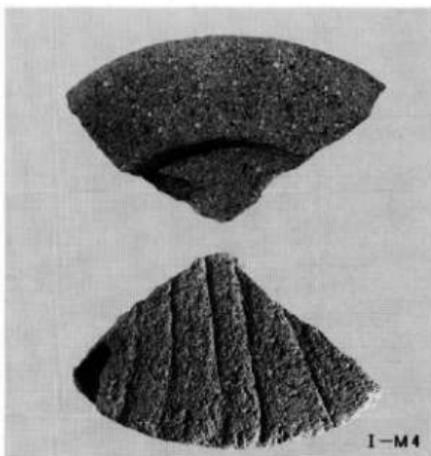


出土遺物 6 ; 藏骨器 (53・66・91・92・94・105・175・180号)





表土



I-M4



表土



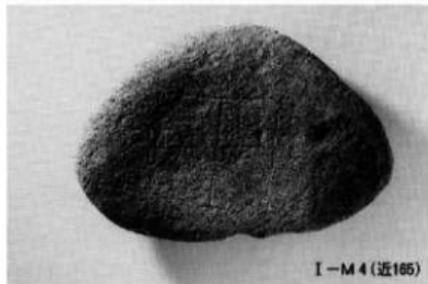
I-M4



近162



表土



I-M4 (近165)



表土

報告書抄録

書名	金居塚遺跡							
巻次	Ⅱ							
シリーズ名	一般国道10号並前バイパス関係歴史文化財調査報告							
シリーズ番号	第7集							
編集者名	飛野博文・横田義章・栗城憲児							
編集機関	福岡県教育委員会							
所在地	〒812 福岡県福岡市博多区東公園7-7 ☎092-651-1111							
発行年月日	西暦1997年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
金居塚	福岡県東上郡 大平村 大字下居原	40646	960087 ~960092	33度 33分 30秒	131度 10分 45秒	1990.05.14 ~1991.04.30	約13,000㎡	道路 (並前バイパス) 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡	主な遺物		特記事項		
金居塚遺跡	散布地 集落 墓地 墓地 墓地 集落 その他	縄文時代以前 弥生時代 弥生時代 古墳時代 近世 不明 近世か	石組炉、落とし穴状土坑 竪穴式住居跡1 (石蓋)土壇墓25 円墳5、横穴12 火葬墓・土壇墓200基弱 掘立柱建物跡2 焼土坑、溝	打製石斧、ナイフ形石器、 石鏃等 土器・銅剣 鉄鏃、ヤリガンナ、刀子 玉、銅鏃、鉄製品(太刀、鉄 鏃、鏝)、金銅製品(耳環、馬 具)、土器 鉄製品、土器		旧石器から 縄文時代 2群に分かれる 蔵骨器を含む		

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2133051
登録年度 8	登録番号 13

一般調査
10 号 豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第7集

金居塚遺跡

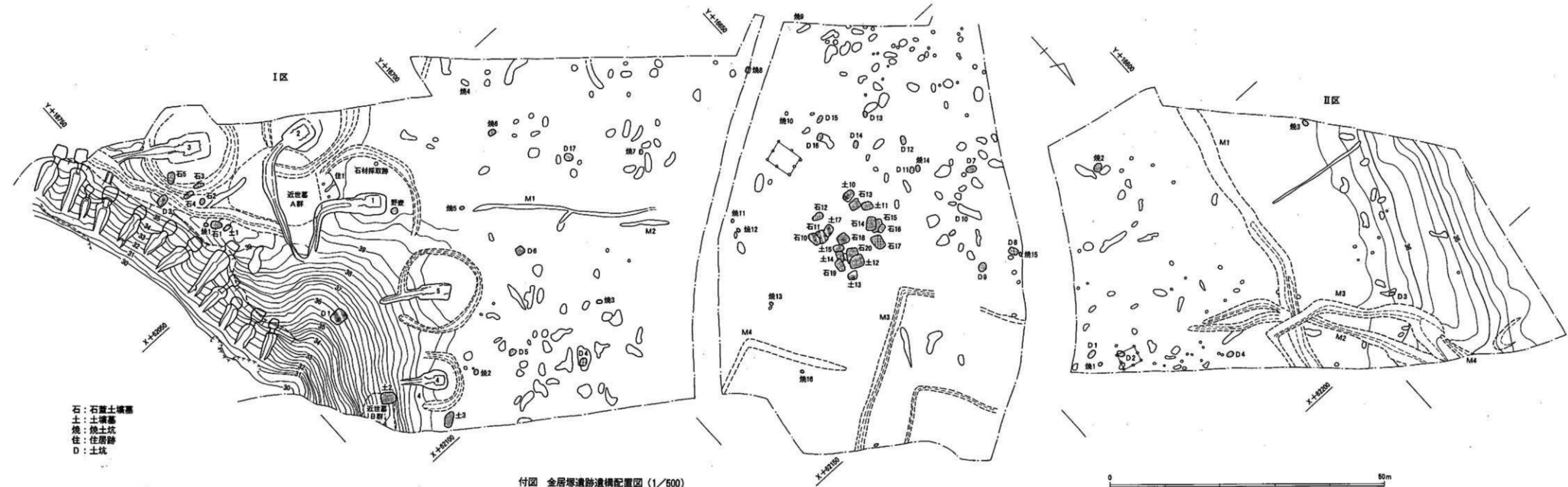
平成9年3月31日

編集 福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園7番7号

発行 福博総合印刷株式会社
福岡市博多区堅粕3丁目16番36号

金居塚遺跡 II

1997



付図 金居塚遺跡遺構配置圖 (1/500)